昭和八年十二月一日發行

東京市本鄉區森川町宮前

發行者　弘文莊　反町茂雄

電話小石川[illegible]六四一〇番

振替東京一一〇二番

MADE IN JAPAN

弘文荘待賈古書目・第二號、大尾

弘文莊の取扱ふ古書

は和漢洋・東西の比較的稀觀、貴重の圖書に限りたいと思ひます。從つて今迄の我が國に見られなかつた分化した純然たる專門書肆でございます。賣買共に御利用、御引立の程を御願ひ致します。

弘文莊の出版

は書誌學、國文學を中心とした價値ある名著の眞心的出版で地味に且堅實に營まれて居ります。本質的價値の豊富な著作は多少の犧牲を拂つても公にしたい希望でございます。どうか適當のものがございましたら御遠慮なく御照會下さい。

分化し專門化した古書肆

が特殊の圖書の出版業を兼ねる事は、進歩し合理化された一の營業形態でございまして、我が國では全く新しい試みでありますが、將來の大きな一の流れを暗示し先驅するものだと僭に確信し、ひたすらの精進を期して居ります。

誠實に！勤勉に！

それが弘文莊のこの仕事の中にも一貫して流れて居る不動の營業方針でございます。宜敷御指導御後援の程、幾重にも御願ひ申し上げます。

弘文莊在庫古書目錄 第二號

實價金壹圓

昭和八年十一月廿五日印刷
昭和八年十二月一日發行 限八百五十部印行

東京市本鄉區森川町百七番地
編輯兼發行人 反町茂雄

東京市神田區三崎町一丁目一番地
印刷者 新陽堂印刷所 相原太郎

發行所 東京市本鄉區森川町宮前 弘文莊
電話小石川(83)六四一〇番
振替東京一一〇二番

弘文莊待賈古書目

第二號　大尾

◉ 前號記事正誤

一、前號の記事で筆者が冒した最大の過誤は第四十號の易林本『節用集』の活字版說であります。右は「四周の輪廓は活字版で中の文字は整版である」と訂正させて頂きます。之れに就ては狩野亨吉博士及び川瀬一馬氏の御懇篤なる御敎示を受けました。

二、第七十號のパジエスの「日佛辭典」の記事中「初版は一八六二年刊、再版一八六八年刊」と云ふのを取り消します。右は一八六八年刊が初版なのであります。筆者の粗漏が此の誤りを惹き起しました。之れは土井忠生氏からの御叱正で氣がつきました。

三、第一號第二號の「古事記」「舊事本紀」の書寫年代につき筆者は「慶長以前の書寫たる事を信せんと欲す」と記しましたが之れは「慶長元和時の書寫」と改めさせて戴きます。四周の輪廓に活字の罫を用ひた點、及び靜嘉堂文庫に藏せらるゝ同種の他の寫本を考慮に入れて見て、しかく信せらるる由であります。尤も現存「古事記」の古寫本間に於て、本書の占むる順位、重要性等については前號の記述を飜すべき理由はない樣でございます。此の件については一に川瀨學士の御高敎に負ふものであります。

四、第十三號の「古今集聞書」の書寫の年代を「近世初期」と訂正致します。紙の質、形、書風等より見て奧書にある永正八年の書寫と思惟したのでありましたが、實は永正のものを八九十年後に忠實に寫したものであるらしい事が佐々木信綱博士の御敎示によつて略々明かになりました。

訂正致すべきは右の四點でございますが、外に林森太郎、森銑三、關場不二彥の諸先生から有益な御注意を頂きその他數多くの方々から懇篤の御書狀を頂戴しました。末尾乍ら記して深厚の謝意を表し、尙今後一層の御指導を御願ひ申し上げます。

本目錄所載の圖版第八十五號及び第九十八號は印刷の誤りにて上下轉倒致居候間御承知の上御覧被下度候

第百三圖　ブーウール　聖フランシスザビエル傳　タイトルページ

VIE

DE

S. FRANÇOIS XAVIER

APOTRE DES INDES ET DU JAPON.

PAR LE P. BOUHOURS.

Nouvelle Edition, augmentée de quelques Opuscules de Piété, par l'abbé F. X. de F.

Nec verò Alcides tantùm telluris obivit. Æn.

TOME PREMIER.

A LYON,
CHEZ PERISSE FRERES, LIBRAIRES,
rue Mercière, n.° 33.
A PARIS,
CHEZ PERISSE FRÈRES, LIBRAIRES,
place Saint-André-des-Arts, n.° 11.
1826.

(100)

聖フランシスザビエル傳　ブーウール著　一八二六年刊　全二冊　金三十圓

縦五寸七分、横三寸三分の小本、總革裝。パリー及びリオンのペルセ、フレール刊行。

ザビエルの傳記としては近時クローやシユールハンマーの好著が刊行されましたが、之れ等の刊行以前には、汗牛充棟も啻ならぬザビエル傳中ブーウールの此の著は最も廣く行はれ、一六八二年にパリーで初版を刊行して以來數十種の版が發行され、各國語に譯されたのを加へれば百種に近からうかと思はれる程多く流布しました。原語で刊行の諸版中でも、此處に擧げましたものは小型で便利な故か最も多く利用され、一八二六年に初版が出來てから、全四〇年、四二年、四四年、四五年、五二年、五五年と六回も刊行されて居るものです。ザビエル傳中の巨作の一として參看を怠るべからざる一本であります。

上卷々頭に銅版のザビエル像あり、上卷二九九頁下卷三〇五頁。

圖版第百三號參照

(99)

漢文詩解

J・F・デーヴィス著
一八七〇年改訂版

全一冊　金二十圓

一八二九年に初版を出し、一八七〇年に改修第二版を出した此の書は、青年時代から支那に渡つて東印度會社の在支社員を勤め、終には香港の太守兼軍司令官とまでなつたサー、ジョン、フランシス、デーヴィスの主著の一であります。元來漢詩をその味ひを減ずる事少くして英語に譯さんとしたもので、最初に翻譯の態度とか支那詩の特徴とか云つたものを總論的に數頁述べ、次に具體的に詩を一首づゝ擧げてその英譯をしるし、その種類、體様、作法、風味等を詳述して居ます。「漢文詩解」と申しても單なる漢文詩の英譯なのではなくて「漢詩とは何ぞや」と云ふ質問に應じて答へた様な性質の內容のもので、初版の刊行された一世記前は勿論今日も尙讀み行くに從つて興味津々たるを覺ゆるものであります。本文中の漢詩は支那より取り寄せた漢字の活字をそのまゝ組み入れて居ります。

四六倍版大形本クロース裝約九十頁。

圖版第百二號參照

漢文詩解

POESEOS SINICÆ COMMENTARII.

THE POETRY OF THE CHINESE

BY

SIR JOHN FRANCIS DAVIS, BART., K.C.B.

F.R.S., &c.

NEW AND AUGMENTED EDITION.

LONDON:

ASHER AND CO., BEDFORD STREET.

BERLIN: 11, UNTER DEN LINDEN

1870.

第百二圖　デーヴィス　漢文詩解　タイトルページ

第百一圖　ラングレー　滿洲字母論　タイトルページ

ALPHABET MANTCHOU,

RÉDIGÉ

D'après le Syllabaire et le Dictionnaire universel de cette langue;

PAR L. LANGLÈS,

Membre de l'Institut, Conservateur des manuscrits Orientaux de la Bibliothèque impériale, Professeur de Persan à l'École spéciale des Langues Orientales vivantes, de l'Académie Italienne, &c.

TROISIÈME ÉDITION,

AUGMENTÉE D'UNE NOTICE SUR L'ORIGINE, L'HISTOIRE ET LES TRAVAUX LITTÉRAIRES DES MANTCHOUX ACTUELLEMENT MAÎTRES DE LA CHINE.

A PARIS,

DE L'IMPRIMERIE IMPÉRIALE.

1807.

滿洲字母論

ラングレス著
一八〇七年刊

全一冊　金二十五圓

滿洲文字を活字にした世界最初の書籍として重要な文化史的意義を有する「滿洲字母論」一冊は大革命の直前一七八七年に佛都巴里で第一版を刊行し、ナポレオン全盛時の一八〇七年に第三版を同じ巴里の帝立印刷局で印行致しました。此處にかゝげるものは即ち此の第三版であります。

著者ラングレスは佛蘭西大革命の大動揺裡にあつて東洋研究の必要を力說し、遂に政府をして名高い「東洋現代語學校」を創立せしめて自らその校長となり、その經營發展に盡力し、佛蘭西をして東洋學の母國たらしむるに與つて力あつた支那學の大恩人の一人であります。此の書の成るは彼のアミオ師の不朽の名著「滿佛辭書」に負ふ所多しとは云へ、その持つ歷史的意義は容易に沒却すべからざるものある重要作であります。

縱七寸三分、橫四寸五分。全紙數二百二十頁、內序文十二頁、本文百九十六頁、索引十二頁、脊皮古雅裝。

圖版第百一號參照

滿洲文選

クラプロート著
一八二八年版　全一冊　金二十五圓

十九世紀初頭に佛都パリーで既に之れだけの滿洲語の印刷が出來た事は先づ第一の驚異でせう。

著者ユリウス、クラプロートは彼の大儒アベル、レミユザと共に歐洲に於ける近代支那學の父としてあまねくその學的功績を認められた前世紀初頭の輝ける東洋學者である事は申す迄もありません。

卷頭には學友サー、ジョージ、トーマス、ストーントンへの感謝に滿ちた獻辭があり、次に五頁の序文ありその後に內容目次一頁を掲げてから本文に入ります。「名賢集」「太上感應篇」「露淸平和條約文」と共に、アミオ師の譯で有名な乾隆大帝の「盛京賦」の滿文が本文として載せられて居ります。此の本文が一九二頁で終つて、一九三頁から二七三頁までは「滿洲文選中の數章の飜譯」としてクラプロートの自身の手になる佛譯を掲げて讀者閲讀の便に供し、卷末に正誤表一頁を附して居ります。

碩學のクラプロートの主著なる此の書は縱七寸一分、横四寸二分、總紙數三百頁に滿たぬ册子ではありますが、東洋學上著名な著述の一であり、歐洲人の滿洲研究史上最も注目すべき作品の一であります。

圖版第百號參照

第百圖　クラプロート滿洲古文選タイトルページ

CHRESTOMATHIE

MANDCHOU,

OU

RECUEIL DE TEXTES MANDCHOU,

DESTINÉ

AUX PERSONNES QUI VEULENT S'OCCUPER
DE L'ÉTUDE DE CETTE LANGUE,

PAR

J. KLAPROTH

IMPRIMÉ
PAR AUTORISATION DE M. LE GARDE DES SCEAUX,
A L'IMPRIMERIE ROYALE.

PARIS, 1828.

第九十九圖　アジエ　支那古代貨幣史考　タイトルページ

DESCRIPTION

DES

MÉDAILLES CHINOISES

DU

CABINET IMPÉRIAL DE FRANCE,

PRÉCÉDÉE

D'UN ESSAI

DE NUMISMATIQUE CHINOISE,

AVEC DES ÉCLAIRCISSEMENS SUR LE COMMERCE DES GRECS AVEC LA CHINE, ET SUR LES VASES PRÉCIEUX QU'ON Y TROUVE ENCORE.

PAR J HAGER.

A PARIS,
DE L'IMPRIMERIE IMPÉRIALE.
AN XIII. = 1805.

(96) 支那古代貨幣考

アジェー著
一八〇五年刊

全一冊　金二十五圓

支那學の祖國フランス刊行の恐らく最初の支那古代貨幣史につきて纒まりし著述なるべし。元來はフランス政府所藏の支那古錢六十四の解說的目錄として作成の豫定なりしものが、敍說が長くなりて云はゞ廂を貸して母屋を取られし形の書の樣なり。縱一尺、橫八寸の大形本、本文百八十八頁の內、序說が百六十八頁を占め事實上貨幣史としての一部の書と見るべきものなり。

序說の內容は古代支那市場、支那最古の貨幣、最古の金屬貨幣、支那貨幣の原始形態等より論じはじめて、貨幣面のの文字紀年を說き、その宗教、占星術、迷信等との關係を述べ又古代支那の紙幣を擧げ、轉じて支那とギリシヤと關係を述べて絹を求むる隊商の東方旅行經路より古代の歐支交通史に論及したり。圖版所々に挿入され隊商のギリシヤより支那に到る道を示せし地圖一葉を附し、又多く脚註を附したり。後年のユール、リヒトホーフエン、シユプランゲル等の歐亞交通史に關する諸著作の先驅とも云ふべし。

百七十頁より百八十六頁まではフランス政府所藏の支那貨幣目錄にて最後に附錄一葉あり。最初にナポレオン皇帝への獻辭を掲げたるも當時の產物らしく興ありと云ふべし。

圖版第九十九號參照

佛譯

日本王代一覽

チチング譯
クラプロート補

全一冊　金二十四

「弘文莊待賈古書目」第一號でクラプロートが伊勢の漂流民新藏の助力を得て佛譯した林子平の「三國通覽圖說」を紹介しました筆者が第二號でその翌々年に同じ The Oriental Translation Fund で刊行された「日本王代一覽」の佛譯を御紹介しますのも何かの緣でございませう。

此の度の譯者は長崎出島の有名な商館長で「日本圖說」「日本人の結婚及び葬儀」等の美しい繪入本で名を馳せたイサク、チチングであります。彼一人の手には負へなかつたと見えてタイトルページの中でも「多くの長崎蘭館付の通譯官の援助を得て」と斷り書きして居ります。

之れでも未だ不完全だつたと見えまして、既に一八三二年に「三國通覽圖說」の佛譯の刊行を了した大東洋學者クラプロートが之れを補訂し更に註を加へて居るのですから、仲々大袈裟です。今日の私達から見れば大して有用でもなく且古典としても重要でない「王代一覽」の飜譯に何故此の二大學者がかくまで力を入れたのかと不審にも思はれるのですが、それは今人の見方で當時としては相當な理由があつた事でせう。

四六倍版の大形本で、最初にクラプロートのヒツクラレンスへの獻辭が一頁あり、次に一八〇七年付のチチングの序八頁があり、次に一八三四年付のクラプロートの序文が約二頁あります。更にその後にある「日本神代史概要」約三十頁はクラプロートの記述であり、全卷中最も見るべき學問的論述として有名であります。譯文はそれから四百六頁まであり、所々にある脚註が學者の參稽を促します。最後に約五十頁のサプリメントをも附して居ります。勿體ない位に行届いた學術的飜譯で、流石クラプロート等の名に恥じぬものであります。

圖版第九十八號參照

第九十八圖　クラプロート　佛譯王代一覧　タイトルページ

NIPON O DAÏ ITSI RAN,

OU

ANNALES

DES

EMPEREURS DU JAPON

TRADUITES PAR

M. ISAAC TITSINGH,

AVEC L'AIDE DE PLUSIEURS INTERPRÈTES ATTACHÉS AU COMPTOIR HOLLANDAIS À NANGASAKI.

OUVRAGE REVU, COMPLÉTÉ ET CORRIGÉ SUR L'ORIGINAL JAPONAIS-CHINOIS, ACCOMPAGNÉ DE NOTES, ET PRÉCÉDÉ D'UN

APERÇU DE L'HISTOIRE MYTHOLOGIQUE DES JAPONAIS,

PAR

M. J. KLAPROTH.

PARIS:
PRINTED FOR THE ORIENTAL TRANSLATION FUND
OF GREAT BRITAIN AND IRELAND;
AT THE ROYAL PRINTING OFFICE.

LONDON:
SOLD BY
PARBURY, ALLEN, & Co., LEADENHALL STREET
M.DCCC.XXXIV.

第九十七圖 ゲール韓英辭典 タイトルページ

韓英字典

A KOREAN—ENGLISH DICTIONARY

BY

JAMES SCARTH GALE

SEOUL, KOREA

PRINTED

BY

THE FUKUIN PRINTING CO., LT.

YOKOHAMA

—

1911

(94)

韓英字典

J・S・ゲール著
一九一一年增訂版

全一冊　金十五圓

カナダ生まれの宣教師J・Sゲールはどなたも御承知の通り朝鮮語研究の最有力な先驅者で、數多くの著述があり、殊にその手になる朝鮮語譯聖書が著名です。韓英辭典も此の人の主著の一で、第一版は彼の朝鮮渡來後の十年目一八九七年に刊行され、增訂改版本が一九一一年に橫濱で刊行されましたが、此處に掲げましたものは即ち此の補訂本であります。

體裁は菊版脊革の上製本で、本文一一一三頁、附錄諸國年代表等約四十頁、外に序文、凡例等十一頁を前に附けて居ります。本文の組方は一頁を左右の二欄に分け、先づ朝鮮語を朝鮮文字で記して、次に之れに相當する漢字をあて更に之れを英譯したもので、韓英辭典とは云ひ條實は韓—漢—英辭典とも云へるものであります。此の事がはしなくも我々に彼のジョンバチエラー師の名著アイヌ—日—英辭書を思ひ出させます。大體に於て此の二著は大變似通つて居ります。否似通つて居るのは辭書だけでなくどうやら著者もよく似て居る樣です。共に宣教師なる點、共に數十年間異邦人の中にあつて敎を說くと共にその語學を研めたる點、共に辭書をあらはし又共に聖書（朝鮮語アイヌ語の）を譯したる點等類似の點少なからず、ゲールは朝鮮のバチエラーだとも云へませう。

圖版第九十七號參照

（63）

羅日辭典

プチヂャン著
一八七〇年刊

全一冊　金四十圓

此の書はボドレイ文庫●キングスカレッヂ●アンスチチユート、ド、フランスの三ケ所以外には世界に存在しないと云ふ一五九五年天草版の「羅葡日對譯辭書」の飜刻で、飜刻者は幕末から維新へかけての公教會の復活の大業をなしとげた司教プチヂャン師であります。慶長以來の切支丹教書に通曉した師が復活せんとする切支丹布教の便宜のために「サルワトールムンヂ」（とがのぞき規則）「コンチリサンの略」「ロザリヨ記錄」などと共に三百年前の切支丹版を飜刻したもので、云はゞ「切支丹版の復活」「新切支丹版」とも呼ばるべきものの一種でありますが、他のものと同じ様に嚴密なそのまゝの再刻ではなくて布教の實際的必要を充す樣に改められて刻されたものであります。即ち原本が三國語對譯であるのを羅日の二個國語對譯になつて居るのであります。師が明治二年四月に長崎を發して西洋へ歸る時既に用意して翌三年（一八七〇年）羅馬で印刷に附したものです。

圖版第九十六號に示した樣なタイトルの次に序文が二頁あり、次に凡例が二頁あつて本文に入ります。本文七四九頁、一頁二欄、左にラテン語をあげその右にローマ字で日本語をイタリック活字で誌して居ます。四六倍版の大本です。本書は見返し及び序文の上に「長崎浦上神學校長印」の朱印（約一寸四方）を捺して居ります。復活切支丹の巣窟浦上の地に、最後の迫害のたけなはだつた慶應元年に創立された此の有名な神學校の舊藏本である此の書は思ひ出深き復刻書中でも最も思ひ出深い記念物の一でありませう。

第九十六圖　天草版翻刻　羅日辭典　タイトルページ

LEXICON
LATINO-IAPONICUM

DEPROMPTUM EX OPERE

CUI TITULUS

Dictionarium Latino-Lusitanicum ac Iaponicum typis primum mandatum in Amacusa in Collegio Iaponico Societatis Iesu anno Domini M.D.XCV.

NUNC DENUO

EMENDATUM ATQUE AUCTUM

A

VICARIO APOSTOLICO IAPONIAE

ROMAE
TYPIS S. C. DE PROPAGANDA FIDE
SOCIO EQ. PETRO MARIETTI ADMIN.
MDCCCLXX.

第九十九圖　クルゼンシュテルン　日本紀行　タイトルページ

REISE UM DIE WELT

in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806

AUF BEFEHL

SEINER [illegible]LICHEN MAJESTÄT

ALEXAN[illegible] DE[illegible]STEN

auf den Schiffen Nadesh[illegible]wa

unter dem Comman[illegible]

des Capitains von der Kaiserlichen Marine

A. J. von Krusenstern.

ERSTER THEIL.

Les Marins écriv[illegible]

ST. P[illegible]SBURG,

GEDRUCKT IN DER [illegible] BUCHDRUCKEREY. 1810.

Auf [illegible] Verfassers.

(92)

クルゼンシュテルン　日本紀行

著者私刊　初版　三冊　金百三十圓

嘉永六年米使ペルリの來朝及びその遠征記三冊は知られる事多く名も高いが、それに先だち文化元年九月七日に、國家的に日本に開港を求むる最初の使節として露國より派遣された特使レザノフと、奥州の漂流民津太夫等を載せて長崎に來港し通商貿易を求めて滯留する事約半歳、此の間附近の探險測量に從事して翌二年四月十九日長崎を去つた露國最初の世界周航艦隊ナ、デジュダ號及びネヴァ號の司令官クルーゼンシュテルン及びその遠征記四冊の名は從來知らるゝ事餘りに少なかつたと云はねばならぬ。

しかし此の著述は、オルロフ群島の發見、南海洋の水路の確認、蝦夷、樺太及び北千島の沿革の測量調査、長崎の緯度の測定等につき輝しき業蹟を示し、又カムチヤツカ土人、アイヌ人の言語及び民族性について、及び日本支那印度の氣候、風習狀態等について重要にして價値ある記錄を、驚嘆すべき緻密さと生彩裡に於てなして居る點に於て寧ろペルリの紀行に優る點あるを覺えしめるものであり、夙く文化文政時に青地、高橋等の手になる飜譯が「奉使日本紀行」として公表され、近く羽仁氏の譯が「異國双書」中に收載されたものであるが、何れも抄譯に留つて此の大著の全貌を示すに足らぬを遺憾とする。

此處に掲ぐるものは一八一〇年より三年間に渉つて露都ペテルブルグにて公刊されし初版本であつて、著者自費出版のドイツ語本、流布極めて少く附圖一冊を附すれば時價千金を超ゆる稀覯貴重書である。本文全三冊揃、四六倍版、總紙數約千頁。

圖版第九十五號參照

(91)

日本使節古代訪伊記

ベルシエ著
一八七七年刊

全一册　金十五圓

明治の初年に西郷隆盛を中心に征韓論が盛んに行はれて居た時、岩倉具視公の一行が歐米を旅行しつゝあつた事はどなたも御承知でせう。彼の公の一行は此の時に伊太利をも訪れ、ヴェニスにも立ち寄つたのでありました。伊太利の人々は此の遠來の珍客の突然の來訪にビックリしたのでした。具視公等の服裝にも、行儀作法にも、言語にも本統のエトランゼ的な氣持を感じました。そしてその時に彼等の腦中にひとりでによみがへつて來た記憶はそれより約三百年前に全じ國から來た伊東・千々岩等の年少使節と約二百六七十年前に奧州王から派遣されて來た支倉と云ふ壯年の偉丈夫の姿でした。

伊太利人は慌てゝ之れ等二度の古代の遣歐使節の事蹟を調べたい感じを持つたのでした。一人の熱心な伊太利人は伊太利各地のアルチヰオ及び圖書館などを丹念に廻つて古記錄やら古書やらをひつぱり出してしらべて、千五百八十五年及び千六百十五年の日本使節の事を考證した一書をまとめあげたのでした。そして之れが伊東滿所の一行や支倉の訪伊の記事を持つ近年の文獻として最も信憑すべきものとなつて居ります。

此の人がベルシユです。そして此の本が「日本使節古代訪伊記」一册です。

大きさは菊版、頁數は百三十八、薄桃色の假裝ですが比較的稀覯ですから我が國には何部も來て居りますまい。神戸大倉山の圖書館に一本を藏せらる由です。

圖版第九十四號參照

第九十四圖　ベルシエ　日本使節古代訪伊記　タイトルページ

LE ANTICHE AMBASCIATE GIAPPONESI IN ITALIA

PER

GUGLIELMO DOTT. BERCHET

COMMENDATORE DELL'ORDINE DI FRANCESCO GIUSEPPE
UFFICIALE DELL'ORDINE DEI SANTI MAURIZIO E LAZZARO
CAVALIERE DELLA CORONA D'ITALIA E DEL LEONE E SOLE DI PERSIA
MEMBRO DELL'ISTITUTO STORICO DI FRANCIA
DELLA SOCIETÀ GEOGRAFICA ITALIANA ECC.

VENEZIA
TIP. DEL COMMERCIO DI MARCO VISENTINI
1877.

第九十三圖　アマチ　伊達政宗遣使考　タイトルページ

Englischen Liebbrinnendten
S. Francisci Ordens
Relations Continuation/ oder Volfüh-
rung angedeuter Excellentz / vnd Fürträffligkeit in
nechst außgefertigter Relation von deß Königreichs
Voxu in Japonischem Keyserthumb gott-
selige Bekehrung/ ꝛc.

Colligiert vnd zusammen getragen auß
dem grossen Chronico deß Durchleuchtigsten vnd
Hochwürdigsten Herrn/ Herrn Francisci Gonzagæ/ Her-
zogen vnd Ertzbischoffen zu Mantua/ deß gantz Heyl: Ordt.
General Ministri: vnd P. F. Francisco de S. Columbano
besagtes H. Ordens Familiæ Cismontanæ Wey-
landt General Vicario / vnd andern
bewehrten Authorn/

Auß Latein in vnser Teutsch verwendet

Durch

P. F. THOBIAM HENDSCHELIVM D.

obbesagten Franciscaner Ordens der strengern Ob-
servantz/ vnd dessen Convents S. Hieronymi zu
Wien in Oesterreich/ Gymnasij Sacræ Moralis
Theologiæ Professorem.

ANNO DOMINI M. DC. XVII.

Mit Röm. Keys. Mayest. Freyheit.

Getruckt zu Ingolstatt / in der Ederischen Trucke-
rey/ bey Elisabeth Angermayrin/ Wittib.

(90) アマチ伊達政宗遺使錄 一六一七年刊 インゴルシュタット版 全一冊 金百五十圓

「その名が忽ち燦然たる劇的空想を喚起する割合には、その史實の傳はる事甚だ稀薄」である我が支倉六右衛門、伴天連ルイス・ソテロに伴はれて「奥州王」伊達政宗の名に於て神都ローマに赴きパパ・パオロ五世の脚下に接吻した支倉常長、についての極端に稀少な我が古記錄の欠を補ふ最も有力な且詳細な記述はシピオネ・アマチの「伊達政宗遺使錄」に若くものはないでせう。何故なら彼は羅馬人にして六右衛門の通辨となり、且史職となつてマドリッドから羅馬に入る間行を共にした一人物であるからであります。

「遺使錄」の初版は支倉がローマへ入つた年即ち一六一五年に早速出版されましたが、翌々一六一七年にインゴルシュタットで獨譯が刊行されました。此處に掲げるものが此の獨譯本です、幸田博士に從へば此の書はドイツに今十七部現存する由で、三種の異版があるとの事であります。

小莊藏の一本は我が國の東洋文庫に藏せらるゝ一本と近似して居りますが幾分の差違を認められ、從來知られて居なかつたものゝ様に存じます。內容の順序は第一がタイトルは圖版第九十三號の如くであり第二に法王への獻辭十一頁あり第三に「よき讀者への辭」十二頁あり、第四に「親切なる讀者によする辭」が十四頁あり、第五に目次三頁を置いて本文に入ります。本文は第四十頁より第百六十三頁まで百二十四頁であり、次にフリシュースの譯した「全く新しい世界印度の宗教狀態」と云ふ附錄が百二十九頁あり、全體で二百九十二頁で終つて居ます。アマチの諸版に多く載せて居る支倉の肖像畫は此の書にはありませんので切り取つたものかと思ひましたが、その痕跡もありませぬので或ひはかゝる版も刊行されたのかと思はれます。とに角內容が史料として珍奇であり重要であるのみならず異版としても興味あるものです。古き白犢皮裝美本。

圖版第九十三號參照

(89)

日本アジア協會紀要

自一八七二年創刊
至一九二九年
(內欠十一册)

金六百圓

日本アジア協會紀要は、事新しく申し上げるまでもなく、外人の日本研究の發表機關として最高の權威を保持しつゝあるものであります。維新以來我が國に來朝して、數多くの優れた學問的業蹟を遺した諸學者例へば、アーネストサトーとかアストンとか、チャンバーレンとか、ゲールッとか、ガッビンスとか等の最もよき論文の大部分は最に初此の誌上で發表されましたものです。その內容の學術的貴重さの故に、同種の諸雜誌間にあつて卓然として數段高き地位を識者間に認められつゝあるものであります。創刊が一千八百七十二年十月ですから以來約六十年間連綿と續いてしかもその權威の衰へも見せぬ本誌は一面「歐人日本研究史」そのものであると云へませう。フランクホーレー氏は此の誌に對する多くの贊辭の後の次の樣に記して居られます。「此の亞細亞協會の學報が保存されてゐた倉庫は、一九二三年の關東大震災の折全部燒けて了つたので、全卷揃ひは極めて珍本として世界の學會では買入れる事を欲して居る」と。

從つて創刊號よりのバックナムバーの揃ひは市價は豫想外に高く、曾つて在英の一古書肆の目錄に百五十ポンドとあるのを見ました。小莊藏の分は創刊號より一九二九年までの中全體の九割まで揃つて居りますが、僅か十一册だけ不足のセットで、全部背皮の美事な製本をしてあるものであります。これ丈けの揃ひは外國でも稀有であり、殊に內地の市場では數年に一度も見受け難いものと思はれます。

圖版第九十二號參照

第九十二圖　日本アジア協會紀要　創刊號

TRANSACTIONS

OF

THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN.

(From 30th October, 1872, to 9th October, 1873.)

VOL. I.

REPRINT OF THE ORIGINAL EDITION, PUBLISHED IN 1874,
EDITED BY THE SECRETARIES.

YOKOHAMA:
LANE, CRAWFORD & Co.; KELLY & Co.
SHANGHAI: KELLY & WALSH.—LONDON: TRÜBNER & Co.
PARIS: ERNEST LEROUX.

1882.

第九十五圖 クルゼンシュテルン 日本紀行 タイトルページ

REISE UM DIE WELT

in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806

AUF BEFEHL

SEINER [illegible]LICHEN MAJESTÄT

ALEXAN[illegible] DE[illegible]STEN

auf den Schiffen NADESH[illegible]WA

unter dem Comm[illegible]

des Capitains von der Kaiserlichen Marine

A. J. VON KRUSENSTERN.

ERSTER THEIL.

Les Marins écriv[illegible] [illegible]

[illegible]

ST. [illegible]SBURG,

GEDRUCKT IN DER [illegible]N BUCHDRUCKEREY, [illegible]

Auf Kost[illegible] Verfassers.

クルゼンシュテルン　日本紀行

著者私刊　初版　三冊　金百三十圓

嘉永六年米使ペルリの來朝及びその遠征記三冊は知られる事多く名も高いが、それに先だち文化元年九月七日に、國家的に日本に開港を求むる最初の使節として露國より派遣された特使レザノフと、奥州の漂流民津太夫等を載せて長崎に來港し通商貿易を求めて滯留する事約半歳、此の間附近の探險測量に從事して翌二年四月十九日長崎を去つた露國最初の世界周航艦隊ナ、デジュダ號及びネヴァ號の司令官クルーゼンシュテルン及びその遠征記四冊の名は從來知らるゝ事餘りに少なかつたと云はねばならぬ。

しかし此の著述は、オルロフ群島の發見、南海洋の水路の確認、蝦夷、樺太及び北千島の沿革の測量調査、長崎の緯度の測定等につき輝しき業蹟を示し、又カムチヤツカ土人、アイヌ人の言語及び民族性について、及び日本支那印度の氣候、風習狀態等について重要にして價値ある記錄を、驚嘆すべき緻密さと生彩裡に於てなして居る點に於て寧ろペルリの紀行に優る點あるを覺えしめるものであり、夙く文化文政時に青地、高橋等の手になる飜譯が「奉使日本紀行」として公表され、近く羽仁氏の譯が「異國双書」中に收載されたものであるが、何れも抄譯に留つて此の大著の全貌を示すに足らぬを遺憾とする。

此處に掲ぐるものは一八一〇年より三年間に渉つて露都ペテルブルグにて公刊されし初版本であつて、著者自費出版のドイツ語本、流布極めて少く附圖一冊を附すれば時價千金を超ゆる稀覯貴重書である。本文全三冊揃、四六倍版、總紙數約千百頁。

圖版第九十五號參照

(91) 日本使節古代訪伊記

ベルシエ著
一八七七年刊

全一冊　金十五圓

明治の初年に西郷隆盛を中心に征韓論が盛んに行はれて居た時、岩倉具視公の一行が歐米を旅行しつゝあつた事はどなたも御承知でせう。彼の公の一行は此の時に伊太利をも訪れ、ヴェニスにも立ち寄つたのでありました。伊太利の人々は此の遠來の珍客の突然の來訪にビックリしたのでした。具視公等の服裝にも、行儀作法にも、言語にも本統のエトランゼ的な氣持を感じました。そしてその時に彼等の腦中にひとりでによみがへつて來た記憶はそれより約三百年前に仝じ國から來た伊東・千々岩等の年少使節と約二百六十年前に奥州王から派遣されて來た支倉と云ふ壯年の偉丈夫の姿でした。

伊太利人は慌てゝ之れ等二度の古代の遣歐使節の事蹟を調べたい感じを持つたのでした。一人の熱心な伊太利人は伊太利各地のアルチキオ及び圖書館などを丹念に廻つて古記錄やら古書やらをひつぱり出してしらべて、千五百八十五年及び千六百十五年の日本使節の事を考證した一書をまとめあげたのでした。そして之れが伊東滿所の一行や支倉の訪伊の記事を持つ近年の文獻として最も信憑すべきものとなつて居ります。

此の人がベルシユです。そして此の本が「日本使節古代訪伊記」一冊です。

大きさは菊版、頁數は百三十八、薄桃色の假裝ですが比較的稀覯ですから我が國には何部も來て居りますまい。神戸大倉山の圖書館に一本を藏せらる由です。

圖版第九十四號參照

第九十四圖　ベルシエ　日本使節古代訪伊記　タイトルページ

LE ANTICHE
AMBASCIATE GIAPPONESI
IN ITALIA

PER

GUGLIELMO DOTT BERCHET

COMMENDATORE DELL'ORDINE DI FRANCESCO GIUSEPPE
UFFICIALE DELL'ORDINE DEI SANTI MAURIZIO E LAZZARO
CAVALIERE DELLA CORONA D'ITALIA E DEL LEONE E SOLE DI PERSIA
MEMBRO DELL'ISTITUTO STORICO DI FRANCIA
DELLA SOCIETÀ GEOGRAFICA ITALIANA EC.

VENEZIA
TIP. DEL COMMERCIO DI MARCO VISENTINI
1877.

第九十三圖　アマチ　伊達政宗遣使考　タイトルページ

Englischen Liebbrinnendten
H. Francisci Ordens

Relations Continuation / oder Volführung angedeuter Excellentz / vnd Fürträffligkeit in nechst außgefertigter Relation von deß Königreichs Voxu in Japonischem Keyserthumb gottselige Bekehrung / ꝛc.

Colligiert vnd zusammen getragen auß dem grossen Chronico deß Durchleuchtigsten vnd Hochwürdigsten Herrn / Herrn Francisci Gonzagę / Hertzogen vnd Ertzbischoffen zu Mantua / deß gantz Heyl: Ord: General Ministri: vnd P. F. Francisco de S. Columbano besagtes H. Ordens Familiæ Cismontanæ Weylandt General Vicario / vnd andern bewehrten Authorn /

Auß Latein in vnser Teutsch verwendet

Durch

P. F. THOBIAM HENDSCHELIVM D.

obbesagten Franciscaner Ordens der strengern Obseruantz / vnd dessen Conuents S. Hieronymi zu Wien in Oesterreich / Gymnasij Sacræ Moralis Theologiæ Professorem.

ANNO DOMINI M. DC. XVII.

Mit Röm. Keys. Mayest. Freyheit.

Getruckt zu Ingolstatt / in der Ederischen Truckerey / bey Elisabeth Angermayrin / Wittib.

(90)

アマチ伊達政宗遺使錄　一六一七年刊 インゴルシュタット版　全一冊　金百五十圓

「その名が忽ち燦然たる劇的空想を喚起する割合には、その史實の傳はる事甚だ稀薄」である我が支倉六右衛門、伴天連ルイス・ソテロに伴はれて「奥州王」伊達政宗の名に於て神都ローマに赴きパパ・パオロ五世の脚下に接吻した支倉常長、についての極端に稀少な我が古記錄の欠を補ふ最も有力な且詳細な記述はシピオネ・アマチの「伊達政宗遺使錄」に若くものはないでせう。何故なら彼は羅馬人にして六右衛門の通辨となり、且史職となつてマドリッドから羅馬に入る間行を共にした一人物であるからであります。

「遺使錄」の初版は支倉がローマへ入つた年即ち一六一五年に早速出版されましたが、翌々一六一七年にインゴルシュタットで獨譯が刊行されました。此處に掲げるものが此の獨譯本です、幸田博士に從へば此の書はドイツに今十七部現存する由で、三種の異版があるとの事であります。

小莊藏の一本は我が國の東洋文庫に藏せらるゝ一本と近似して居りますが幾分の差違を認められ、從來知られて居なかつたものゝ様に存じます。內容の順序は第一がタイトルは圖版第九十三號の如くであり第二に法王への献辭十一頁あり第三に「よき讀者への辭」十二頁あり、第四に「親切なる讀者によする辭」が十四頁あり、第五に目次三頁を置いて本文に入ります。本文は第四十頁より第百六十三頁まで百二十四頁であり、次にフリシュースの譯した「全く新しい世界印度の宗敎狀態」と云ふ附錄が百二十九頁あり、全體で二百九十二頁で終つて居ます。アマチの諸版に多く載せて居る支倉の肖像畫は此の書にはありませんので切り取つたものかと思ひましたが、その痕跡もありませぬので或ひはかゝる版も刊行されたのかと思はれます。とに角內容が史料として珍奇であり重要であるのみならず異版としても興味あるものです。古き白犢皮裝美本。

圖版第九十三號參照

日本アジア協會紀要

自一八七二年創刊
至一九二九年
(内欠十一册)

金六百圓

日本アジア協會紀要は、事新しく申し上げるまでもなく、外人の日本研究の發表機關として最高の權威を保持しつゝあるものであります。維新以來我が國に來朝して、數多くの優れた學問的業蹟を遺した諸學者例へば、アーネストサトーとかアストンとか、チャンバーレンとか、ゲールッとか、ガッビンスとか等の最もよき論文の大部分は最に初此の誌上で發表されましたものです。その内容の學術的貴重さの故に、同種の諸雜誌間にあつて卓然として數段高き地位を識者間に認められつゝあるものであります。創刊が一千八百七十二年十月ですから以來約六十年間連綿と續いてしかもその權威の衰へも見せぬ本誌は一面「歐人日本研究史」そのものであると云へませう。フランクホーレー氏は此の誌に對する多くの贊辭の後の次の様に記して居られます。「此の亞細亞協會の學報が保存されてゐた倉庫は、一九二三年の關東大震災の折全部燒けて了つたので、全卷揃ひは極めて珍本として世界の學會では買入れる事を欲して居る」と。

從つて創刊號よりのバックナムバーの揃ひは市價は豫想外に高く、曾つて在英の一古書肆の目錄に百五十ポンドとあるのを見ました。小莊藏の分は創刊號より一九二九年までの中全體の九割まで揃つて居りますが、僅か十一册だけ不足のセットで、全部背皮の美事な製本をしてあるものであります。これ丈けの揃ひは外國でも稀有であり、殊に内地の市場では數年に一度も見受け難いものと思はれます。

圖版第九十二號參照

第九十二圖 日本アジア協會紀要 創刊號

TRANSACTIONS

OF

THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN.

(From 30th October, 1872, to 9th October, 1873.)

VOL. I.

REPRINT OF THE ORIGINAL EDITION, PUBLISHED IN 1874,
EDITED BY THE SECRETARIES.

YOKOHAMA:
LANE, CRAWFORD & Co.; KELLY & Co.
SHANGHAI: KELLY & WALSH.—LONDON: TRÜBNER & Co.
PARIS: ERNEST LEROUX.

1882.

AN

INQUIRY

INTO THE

Nature and Caufes

OF THE

WEALTH OF NATIONS.

By ADAM SMITH, LL. D. and F. R. S.

Formerly Profeffor of Moral Philofophy in the Univerfity of GLASGOW.

IN TWO VOLUMES.

VOL. I.

LONDON:

PRINTED FOR W. STRAHAN; AND T. CADELL, IN THE STRAND.

MDCCLXXVI.

第九十一圖　アダム、スミス　富國論　一七七六年初版　タイトルページ

(88)

アダムスミス富國論　一七七六年初版　全二册　金五百五十圓

くだ〳〵しい說明を申し上げる必要もございますまい。カントの純粹理性批判、ゲーテの「ファウスト」などゝのみ光を爭ふ世界的名著の眞の初版であり、苟も經濟界に身を置き又經濟學に興味を持たれる愛書家何人もの憧れの對象たる世界的稀覯書であります。

四六倍版よりも少し大きい大形本で上卷五百十頁下卷は五百八十七頁、裝釘は古い總革裝の立派なもので汚損の殆んどない美本、以つて書齋又は應接室の裝飾とするに足ります。

賣價は五百五十圓、今日の相場から見、又爲替關係から見て廉に失しても高きに過ぎるものではございません。

謹で愛書家の御需めを待ちます。

圖版第九十一號參照

沙翁=ベーコン論

ドンネリー著
一八八八年刊　全一冊　金十五圓

ハーバート、ローレンスが、その著 Life and Adventures of Common Sense の中で、はじめてシエークスピアの作品は同時代の大哲學者フランス、ベーコンの筆になるものだとの説を公にしてから既に百年近く經ちます。その間に數多くの勇敢な沙翁ベーコン論者が輩出して十九世紀後半の英米の文壇を賑はせましたが、その最も著名な代表的な作品は英國ではサー、エドウキン、ダーニング、ローレンスの「ベーコンは沙翁也」であり、米國では此處に擧げたミツタ州ヘースチングスの人イグナチウス、ドンネリーの此の著で、ある批評家によつて此の説の the-wildest Manifestation と呼ばれて居る位の特異な著述であります。

ドンネリーの議論は感情的な、無根據のものではありません。此の書は菊版約一千頁に細字でギツシリ組んだ大冊で、第一論據編　約五百頁、第二證明篇　約四百頁、第三結論編　約百頁の三部に分れ、各編それぞれ數章、各章が更に數節に岐れ各節毎に沙翁、ベーコンの諸著作及び右に關係した他の著作を豐富に引證して堂々たる論陣を張つた大作でありまして、決して輕々に看過さるべき非學術的小冊子ではありません。「シエクスピア復興」の聲の汪んなる時、卷首にベーコンの精緻な銅版畫を附した此の一大奇著の再吟味を待つ情や切です。

圖版第九十號參照

THE GREAT CRYPTOGRAM:
FRANCIS BACON'S CIPHER in The SO-CALLED SHAKESPEARE PLAYS.

By IGNATIUS DONNELLY, Author of "Atlantis: The Antediluvian World," and "Ragnarök: The Age of Fire and Gravel."

"And now I will vnclaspe a Secret booke
And to your quicke conceyuing Discontents
Ile reade you Matter, deepe and dangerous,
As full of perill and aduenturous Spirit,
As to o'er-walke a Current, roaring loud,
On the vnstedfast footing of a Speare."
1st Henry IV., Act I, Sc. 3.

·Chicago;
·New York and London·
R. S. Peale & Company.
1888.

第九十圖 ドンネリー 沙翁＝ベーコン論 タイトルページ

第八十九圖　ドウス沙翁挿繪の研究　タイトルページ

ILLUSTRATIONS

OF

SHAKSPEARE,

AND OF

ANCIENT MANNERS:

WITH

DISSERTATIONS

ON THE CLOWNS AND FOOLS OF SHAKSPEARE; ON THE COLLECTION OF POPULAR TALES ENTITLED GESTA ROMANORUM; AND ON THE ENGLISH MORRIS DANCE.

BY FRANCIS DOUCE

THE ENGRAVINGS ON WOOD BY J. BERRYMAN.

IN TWO VOLUMES.

VOL. I.

London:

PRINTED FOR LONGMAN, HURST, REES, AND ORME, PATERNOSTER ROW.

MDCCCVII.

(86)

沙翁及古代風習の挿繪

F・ドウス著
一八〇七年刊

全二冊　金十八圓

沙翁劇に現れた道化者及び物眞似師論及びジェスターローマノーラムなる中世物語論、モーリスダンス論等を附して居ります。四六版總革裝の古雅な裝釘で、上卷が五百二十六頁、下卷が五百頁、各卷に索引を附し、又ベリーマンの刻になる美事な木版挿繪を多く挿入して居ります。タイトルページの文字は朱字を多く使用して居りますため圖版第八十九號には鮮明に表れて居りませんが美本で初版でございます。

沙翁及び沙翁劇の研究家には必らずお役に立つ研究書でありませう。

(85)

プラトン全集　極大本　一六〇二年版　全一冊　金五十圓

伊太利フロレンスの學者マルシリオ・ヒシニがラテン譯をし、當時歐洲出版界の中心の一であつたドイツのフランクフルト市からギリシヤ、ラテン兩語對譯で出版した大プラントン全集であります。プラトンの飜譯はアルダス、マヌチウス等の手によつて既に百餘年前に刊行され數種のインキユナブラも存在して居る様ですが、本書は、美しい飾り頭文字などはソツクリ、インキユナブラのものをとり乍らしかもその量の豐富さに於て屈指のものであります。

大きさは縱一尺二寸五分、横八寸五分、厚さ三寸五分の極大冊で、裝釘は古く厚い褐色の總革のすぐれて美事なもので損じも殆んどない美本です。背には Platonis Opera Omnia の三語を赤い革の上に金で捺して張つて居ります。全體から受ける感じの極めてよい本です。

卷頭に譯者フィシニの自序があり次に仝じ人の筆になるプラトン傳があります。本文は二欄組みで左欄がラテン文右欄がギリシヤ文字ギリシヤ文の對譯になつて居り、一頁六十八行の細字づめ千三百五十五頁の尨大なもので「アポロギア」「クリトー」「フエドー」以下三十編を收めて居り、卷末に二十七頁にわたつて詳細な索引を附して居ります。恐らく此の大哲學者の全集としては最も行屆いた最古の刊行書の一でございませう。

圖版第八十八號參照

ΠΛΑΤΩΝΟΣ
ΑΠΑΝΤΑ ΤΑ
ΣΩΖΟΜΕΝΑ

DIVINI
PLATONIS
OPERA OMNIA
[illegible]

MARSILIO FICINO INTERPRETE

Graecus contextus quam diligentissime [illegible] *latus est: Latina interpretatio* [illegible] *mendis expurgata.*

Argumentis perpetuis & [illegible] nunc [illegible]

[illegible]



FRANCOFVRTI,
Apud Claudium Marnium, & He-
redes Ioannis Aubrii.

第八十八圖　一六〇二年版　極大本　プラトン全集　タイトルページ

PART I] **[Classes A—C**

THE BEST BOOKS

A READER'S GUIDE

To the choice of the best available Books (about 100,000) in every Department of Science, Art and Literature, with the Dates of the First and Last Editions, and the Price, Size and Publisher's Name (both English and American) of each Book

A Contribution towards Systematic Bibliography

By

WILLIAM SWAN SONNENSCHEIN

WITH COMPLETE AUTHORS AND SUBJECTS INDEX

THIRD EDITION (Entirely Rewritten)

IN THREE PARTS

PART I

PART II (Classes D—G): SOCIOLOGY (in 14 Sections: Law, Political Economy, Social Economy, Politics, Commerce, Education), GEOGRAPHY (in 9 Sections), HISTORY (in 9 Sections), and ANTIQUITIES (in 4 Sections). [*Shortly.*

PART III (Classes H—K): SCIENCE (in 12 Sections), MEDICINE (in 16 Sections), ARTS AND TRADES (in 13 Sections, including SPORTS in 3 Chapters), LITERATURE (in 13 Sections), and PHILOLOGY (in 31 Sections), with the PREFACES, INDEX OF AUTHORS AND OF SUBJECTS, etc. [*Shortly.*

LONDON
GEORGE ROUTLEDGE & SONS, LIMITED
SWAN SONNENSCHEIN & CO., LIMITED
1910

第八十七圖　ゾンネンシャイン　世界標準名著解題　表紙

(84)

世界標準名著解題

WSゾンネンシャイン著
一九一〇年増訂第三版

全四冊　金三十圓

「体系的書誌學への一寄與」と副題して居ります。此の標卷名著解題は科學・藝術・文學の諸分野に於ける代表的名著約十萬種を選擇してその初版と最新刊の刊行年月、價格、大きさ、發行所名を詳記しましたもので、圖書館、學校等で不可欠の參考書である事は勿論、一般研究者、愛書家にとつても甚だ有益な伴侶であります。田中敬氏等著の「内外參考圖書の知識」には圖書撰擇用の參考書として「標準的の多量な良書目録」と云つて擧げて居ります。大きさは約八寸四方の大形本で、細字に組んだ本文の一頁は普通書のそれの三倍にも當る事でせう。全四卷總紙數約二千五百頁、發行所はロンドンのルートリッヂ書肆であります。

圖版第八十七號參照

(88)

書肆及び愛書家提要

ブリュネ著
一八四二年初版　五冊　金六十五圓

J・C・ブリュネの此の有名な書誌學的著述について、嘗つて石田幹之助先生が「本屋の虎の卷、愛書家の閻魔帖」として敎へて下さつた事を記憶して居ります。

珍本・奇書・貴重書の系圖總覽とも云ふべき此の書は漁書に必要な書誌學的記述を細大漏らさず記するのみでなく、何年の何々氏の入札會には幾何で落札されたと云ふ價格の歴史まで併載して居る便利此の上ない參考書で、愛書家の座右にインディスペンサブルなものと知られて居ります。刊行以來度々版を重ね、屢々改修を加へられ、現在では補遺二冊を加へた第五版が多く行はれて居り、時價數百圓の相場を呼び、「珍書を記した珍書」として世界的に著名であります。此處に擧げましたものは一八四二年刊行の初版本、五冊もので、第一卷より第四卷までが「珍書辭典」とも云ふべき分で紙數約二千五百頁、第五卷分類表八百數十頁を加へると三千頁に餘る大著です、此の歴史的著作の第一版としては珍藏に値するものでありませう。

圖版第八十六號參照

MANUEL
DU LIBRAIRE
ET
DE L'AMATEUR DE LIVRES,

CONTENANT :

1° UN NOUVEAU DICTIONNAIRE BIBLIOGRAPHIQUE,

Dans lequel sont décrits les Livres rares, précieux, singuliers, et aussi les ouvrages les plus estimés en tout genre, qui ont paru tant dans les langues anciennes que dans les principales langues modernes, depuis l'origine de l'imprimerie jusqu'à nos jours ; avec l'histoire des différentes éditions qui en ont été faites ; des renseignements nécessaires pour reconnaître les contrefaçons, et collationner les anciens livres. On y a joint une concordance des prix auxquels une partie de ces objets ont été portés dans les ventes publiques faites en France, en Angleterre et ailleurs, depuis plus de soixante ans, ainsi que l'appréciation approximative des livres anciens qui se rencontrent fréquemment dans le commerce ;

2° UNE TABLE EN FORME DE CATALOGUE RAISONNÉ,

Où sont classés méthodiquement tous les Ouvrages portés dans le Dictionnaire, et un grand nombre d'autres Ouvrages utiles, mais d'un prix ordinaire, qui n'ont pas dû être placés au rang des livres ou rares ou précieux.

PAR JACQUES-CHARLES BRUNET.

QUATRIÈME ÉDITION ORIGINALE, ENTIÈREMENT REVUE PAR L'AUTEUR, QUI Y A REFONDU LES NOUVELLES RECHERCHES, DÉJÀ PUBLIÉES PAR LUI EN 1834, ET UN GRAND NOMBRE D'AUTRES RECHERCHES QU'IL A FAITES DEPUIS.

TOME PREMIER.

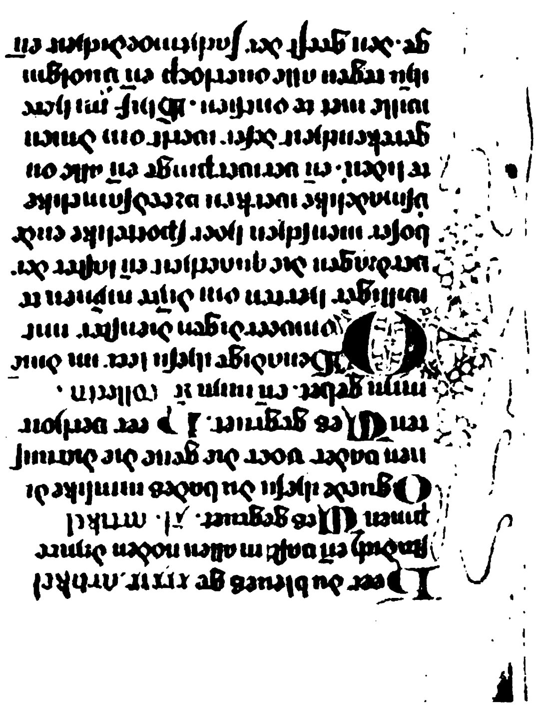


A PARIS,
CHEZ SILVESTRE, LIBRAIRE, RUE DES BONS-ENFANTS, N° 30.

1842

第八十六圖　ブリュネ　書肆及び愛書家提要　タイトルページ

第八十五圖　犢皮本マニュスクリプト内容の一部


Heer du bleves ge xxxix. artikel
stadich ende vast in allen noden dynre
pinen. Wes gegruet. xl. artikel
O guede ihesu du bades minlike di
nen vader voer die gene die dich cruus
ten. Wes gegruet. Heer verhoir
mijn gebet. ende mijn ic. collecta.
O Genadige ihesu leer mi dine
onweerdigen dienster mit
williger herten om dijne minnen te
verdragen die quaetheit ende laster der
boser menschen hoer spottelike ende
versmadelike werken vreedsamelike
te liden. ende verwerpinge ende alle on
gerekentheit deser werlt om dinen
wille niet te ontsien. Help mi here
ihesu tegen alle overloep ende vervolgin
ge. den geest der sachtmoedicheit ende

ベルジア國略記　彩色古寫本　全一冊　金百圓

イルミネーテツドマニユスクリプトは（西洋でもそうでせうが）我が國あたりでは殆んど見られません。殊に白く薄くなめされた犢皮を本文に使用し、その上に赤青色とり／＼に彩色した美しい文字を書いた古い西洋の古寫本などは、名を聞くのみで實物を見る事は甚だ困難で、事實著名な圖書館でも所藏するもの殆んどなく、個人の愛書家中の秘藏を全國に探つても恐らく幾冊も得られますまいと存じます。幸に此の種の稀覯本一種を在庫して居ります事は小莊のひそかに誇りとする所でございます。

圖版の第八十五號はその內容の一葉でありますから御覧を願ひます。現れて居ります字の大部分は元來は黑色インキで書かれたものなのでせう。今は數百年の年月を經たゝめ色褪せて少しく褐色を帶びて居ります。頭文字は青色と朱色インキの二色を使用して居り、圖の殆んど中央にあるOの字は青色で其の四周は朱色、左に髯の様に出て居ります飾りの線は褐色のインキで書き全部で四色を用ひて居るわけであります。純白に美しくなめされた子牛の皮を使用して居りますが、四周は光線に燒けて、こげた様になつて居ますのが、全體の古色を一入に深めて、掬すべき味ひをたゝへさせて居ります。約四五百年前いものでせう。

犢皮の分が約百八十葉あり終りに略々同時代の紙の寫本六七十葉を加へて居ります。大きさは縱四寸七分、横三寸五分の小形本で表紙はビロードにしめ金のついた古い裝釘です。

內容はベルジヤ國（今の略々白耳義地方）の歴史地理の様なものらしうございますが、古いラテン語だものですから讀めません。どなたも見てお樂しみたる本でお讀みになる本ではございますまい、假令西洋でも。丁度我が國の古寫經などの様に。

圖版第八十五號參照

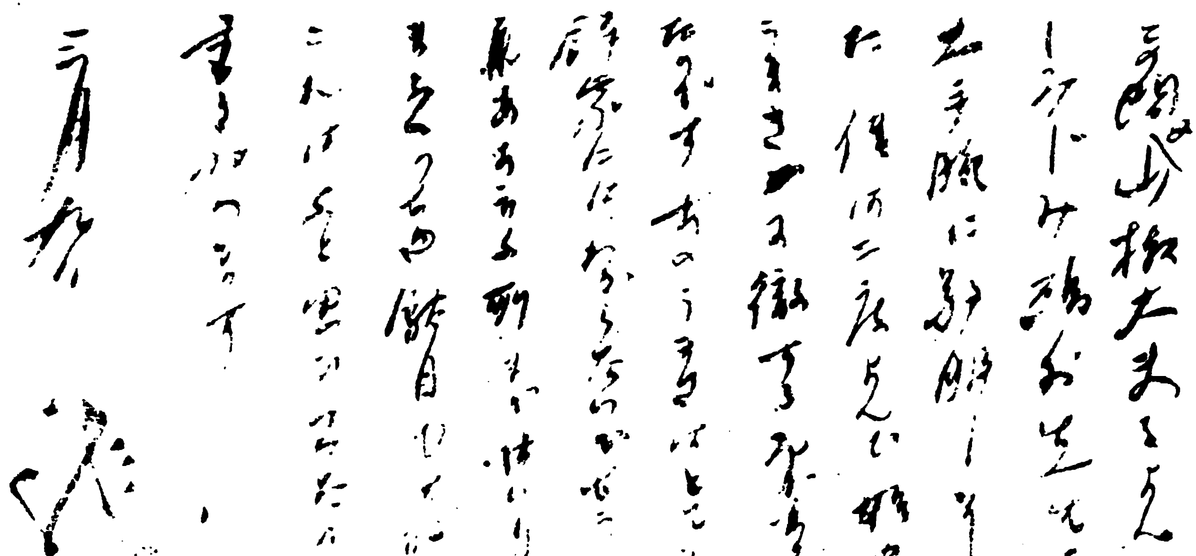
(81) 芥川龍之介書翰　八通　全三巻　金五十圓

和紙の用箋に書いた書翰八通を表裝して三巻の卷物として桐箱に入れてある。宛名は全部文壇の某名士あてのもので發信の日付及び書翰の長さは

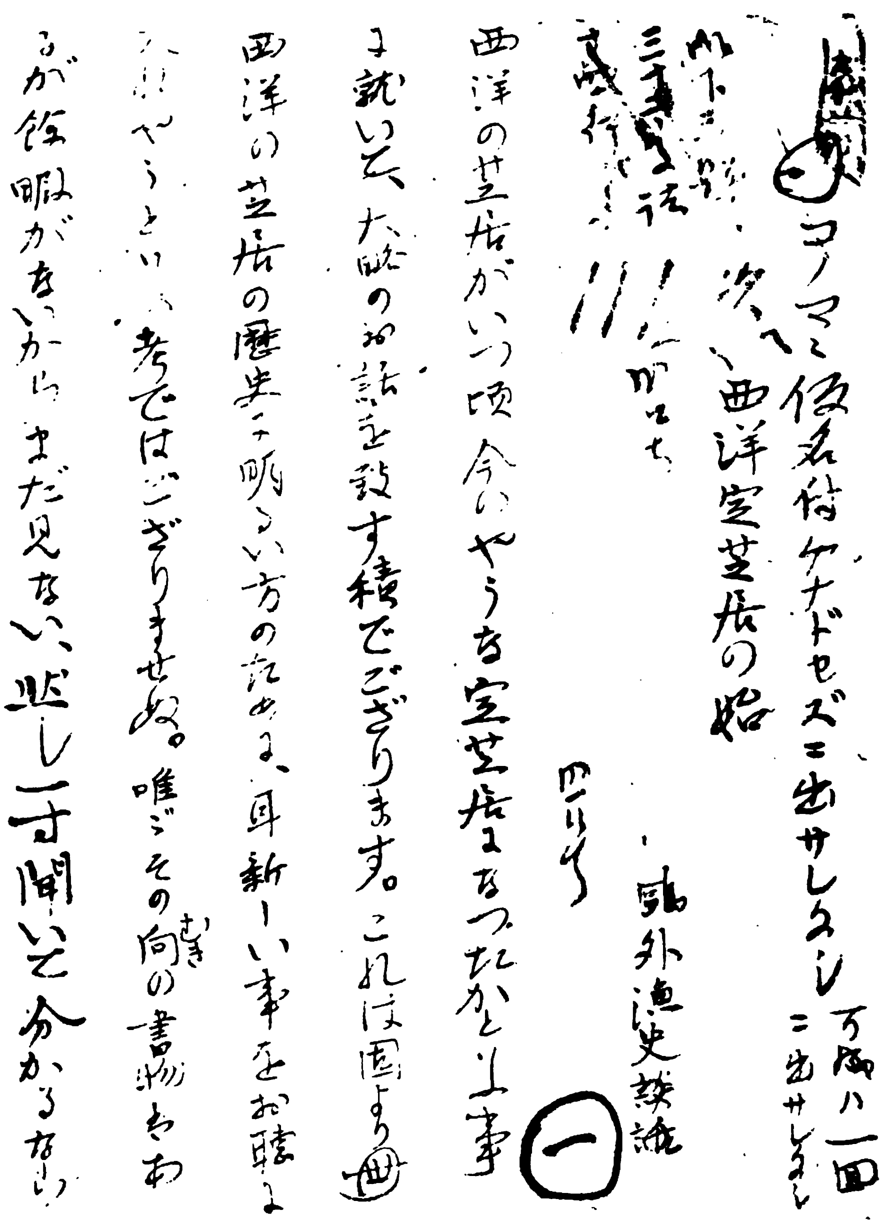
大正六年一月二日付　長さ約五尺
仝　三月九日付　仝　約一間
仝　六月十日付　仝約五尺五寸
仝　六月十五日付　仝　約三尺
仝　七月廿五日付　仝　約三尺
仝　四月十五日付　仝約三尺五寸
仝　六月三十日付　仝　約一間
大正九年一月十九日付　仝　約三尺

彼の作家として既に大成した頃のもので、長さも皆相當に長く、例の書風で、大きな字で、發信の所は大部分田端である。內容は文壇人への手紙の事として自他の作品の批評やら、校正の事、出版祝賀會の事など主として文壇的內容のもの。全部「芥川龍之介全集」第七卷に收錄されてある定評あるもののみである。

圖版第八十四號參照



第八十四圖　芥川龍之介書翰　內容の一部


コノママ仮名付ケナドセズニ出サレタシ　万朝ハ一回ニ出サレタシ

次ヘ、西洋定芝居の始

鷗外漁史談話

（一）

西洋の芝居がいつ頃今のやうな定芝居となつたかと云ふ事に就いて、大略のお話を致す積でございます。これは固より西洋の芝居の歴史に明るい方のために、目新しい事をお聴に入れやうといふ考ではございませぬ。唯だその向（むき）の書物をあるが餘暇がないから、まだ見ない、然し一寸聞いて分かるなら

第八十三圖　森鷗外草稿「西洋定芝居の始」巻頭

西洋定芝居の始

森鷗外自筆草稿　全一冊　金五拾圓

明治三十年六月「新作文庫」の第一號に載せられた短篇の原稿です。草稿には　鷗外漁史談話　と書して「談話」の二字が消してありますが、「鷗外全集」第三卷には此の篇を收めて「談話」としてありますから「新作文庫」に最初發表された時も「談話」として掲げられたものなのでせう。しかし實際は談話ではなく先生が談話體に執筆されたものを、談話筆記なるかに裝つて發表したものである事が、此の自筆草稿によつて知る事が出來ます。

先生は同じ「新作文庫」の第二號第三號に「西洋劇場の火さ」と云ふ談話を掲載されましたが、之れも談話ではなく起稿されたものである事はその原稿の現存で證明されますが、正確を尊ばれる先生の氣質として談話を求められた場合にも談話速記の誤り多きを厭はれて、かゝるやり方を採られたのかとも思はれます。

元來縱の長い卷紙に書かれたものらしいですが、それが幾つかに截つて綴じられて居ましたものを今改めて帖裝にして保存と閲讀に便して居ります。

卷頭に挿繪第八十三號でもわかります通り、朱で「コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ、可成ハ一回ニ出サレタシ」との註文書がついて居ますが、活字に組んで發表されたものは此の指定通りになつて居る樣です。

末尾が鷗外全集の行數にしまして約八行ばかり切れてなくなつて居ります。

西鶴

當世女客氣

幸田露伴自筆　全二冊　金四十圓

明治廿年代の文學復興の大きな動機の一は西鶴の再認識からはじまるとされて居ります。紅葉や露伴やの天才達があの元祿期の大文豪の作品を埋れた過去の死灰の中から拾ひ出して、自らの眼で見、自らの心で味つて、比類なき文學的價値と、くめども盡きぬ暗示とをあの簡潔鋭利な文章の中に見出し、西鶴の價値、元祿文學の尊さを宣揚し、自らの作品の中にも强いその影響を示した事は明治文學史上隱れもない事實であります。

露伴等は西鶴物を淡島寒月の藏本によつて讀んだと聞いて居ります。こゝにかゝげましたのは露伴が自ら寫した「當世女客氣」でありますが、それも仝じ人の藏本を借讀し感嘆のあまり之れを筆寫したものなのでせう。扉には

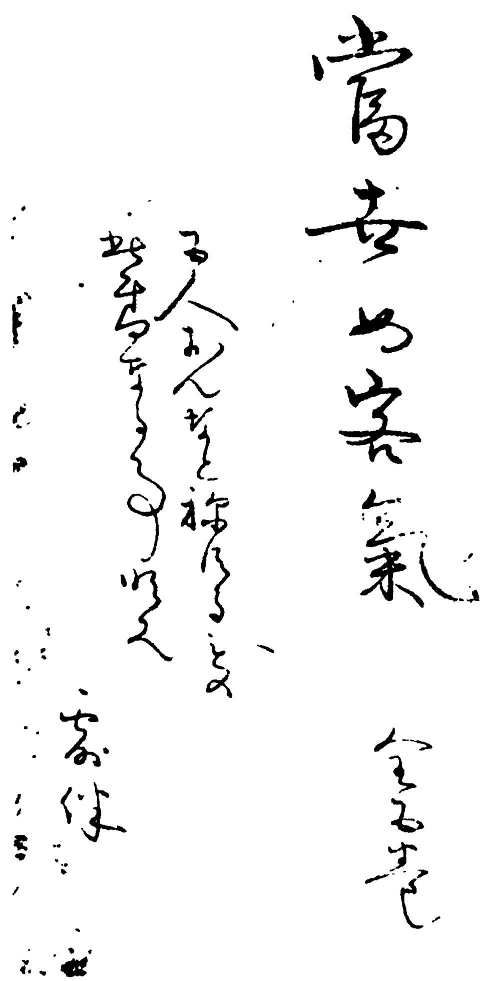
井原西鶴著

當世女客氣　全五卷

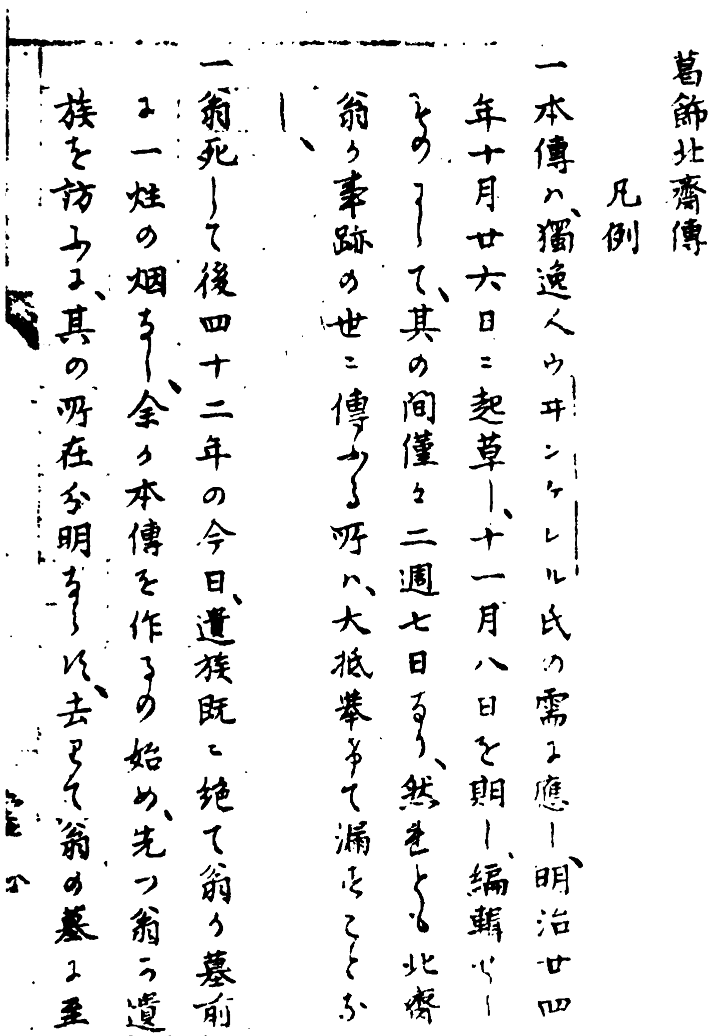
と書きそのわきに『五人おんなと稱するもの此書なる事明也　露伴」と書いて居ります。申すまでもなく「當世女客氣」は即ち「好色五人女」の後摺の改題です。本文全部を收めて居ますが、挿繪を寫して居ないのは、もと〱內容本位の露伴氏の意圖に基くものでせう。半葉十二行に細い字でキレイにうつして居ります。

色々な意味で面白いものだと思ひます。

縱八寸一分、横五寸五分。墨附五十四枚。　圖版第八十二號參照



第八十二圖　寺田蠶作自筆　當世女客氣　卷頭


葛飾北齋傳

凡例

一本傳ハ、獨逸人ウヰンケレル氏の需に應し、明治廿四年十月廿六日ニ起草し、十一月八日を期し編輯ゝしをはりして、其の間僅々二週七日なり、然れとも北齋翁ガ事跡の世ニ傳ふる所ハ、大抵擧けて漏らすことなし、

一翁死して後四十二年の今日、遺族既ニ絶て翁ガ墓前に一炷の烟なし、余ガ本傳を作るの始め、先つ翁ニ遺族を訪ふに、其の所在分明ならされハ、去りて翁の墓に至

第八十一圖　飯島虛心　北齋傳草稿　序文の一部

(78)

北齋傳　飯島虚心自筆稿本　全一冊　金二十五圓

飯島氏の著「北齋傳」二卷は小島烏水氏の所謂「日本浮世繪研究史上の神代」に於ける代表作で、歐西の地に渡つては彼のゴンクールの名著「北齋」の種本となつた雄作であります。此の書は奇しくもその成立のはじめから歐人との因緣淺からぬもので、最初ドイツ人ウインケレル氏の囑託によつて起草せられたものなる事は明治廿六年小林文七氏刋の版本下卷第二葉裏の記事によつて知られ、現行の版本は再稿本である事は明かでありますがウインケレルに與へた初稿本が如何なるものであつたかは知られて居りません。此處に掲げる所のものは即ち虚心自筆の初稿本で此の疑問をとくに役立つものであります。

原稿は十行二十三字づめの柱に虚心堂と印刷した用紙に書かれ、總紙數五十七葉。內容の分量は版本の約半分であります。調査の結果、版本中の注と目すべき一行下げの「按ずるに云々」と記した所は殆んど全部略してあつて主文は略々一致して居りますが、それも大體に留つて小異は數へ切れません。序文も文章は異りますが要旨は大略同じで、只最初にウインケレル氏の囑によつて執筆せしものなるを明かにして居ます。挿繪は薄樣紙の別紙に書いて本文中に貼り込み、又欄外には補足注意書を多く書き入れてあります。表紙綴じ等皆元のまゝで重要な個所に［虚心堂］の朱印を押して居ります。

圖版第八十一號參照

(11)

夢幻日記

山田美妙
自筆草稿

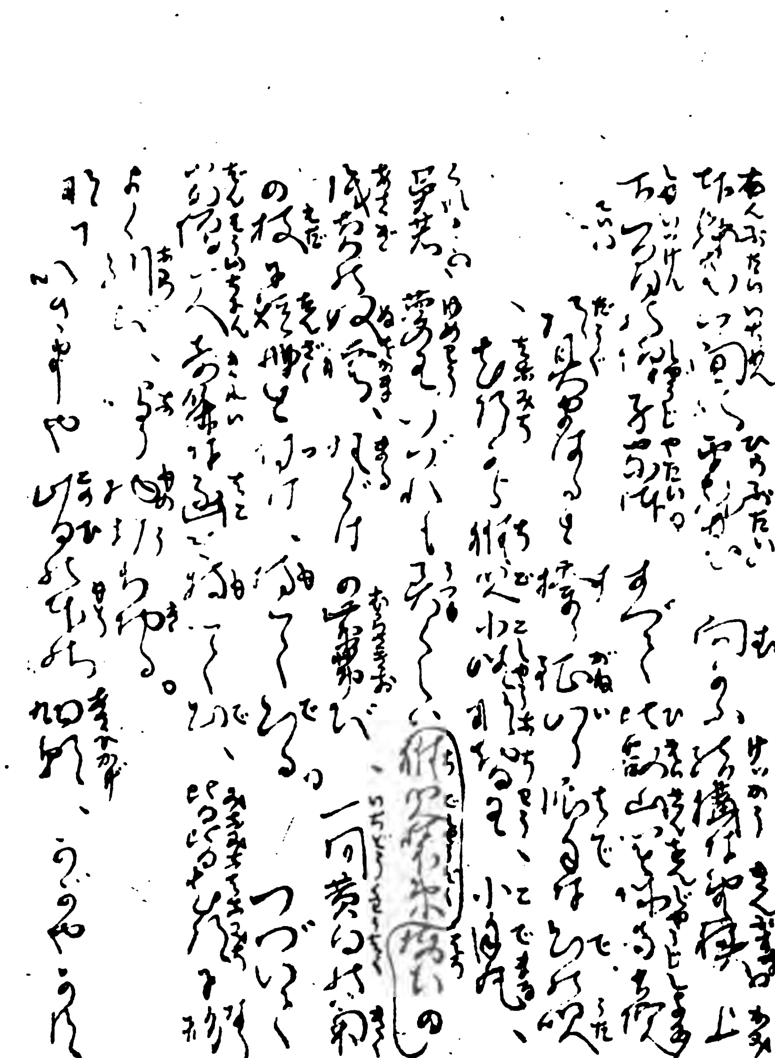
全一冊　金二十圓

明治元年に孤々の聲をあげた美妙齊山田美妙は飽くまで維新の兒であり風雲の子であつたのでした。「國民の友」に問題作「胡蝶」を掲げて一擧大名を博した時は漸く丁年に達するか達せぬかの時で、年少既に居然たる大家で、長い明治文壇を通じて最も早熟の天才でした。日本文章史上永久に記憶さるべき業蹟たる言文一致の新文體を創始したのも此の頃です。壯年以後は多く歷史小說に轉向致しましたが、歷史小說家としても塚原澁柿園と光を爭ふべき大家として永く記憶される事でせう。

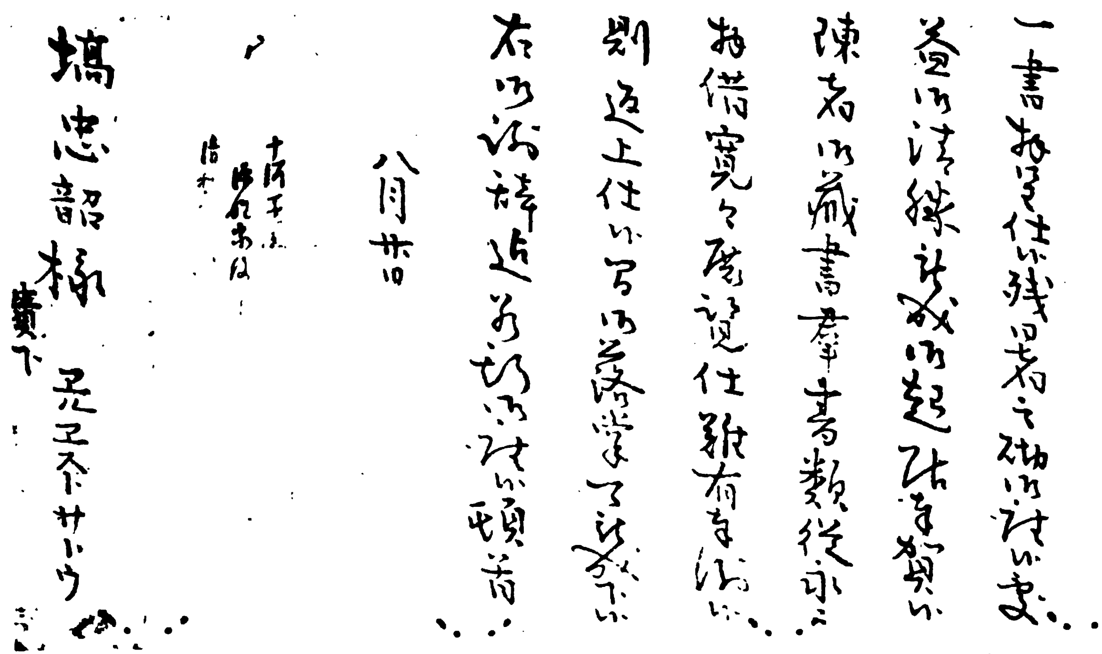
「夢幻日記」は美妙の脚本の草稿であります。それが彼の作品として文學史上如何たる地位を占むるものであるかは、遺憾乍ら詳らかに致しませぬが例の定家風と御家流をまぜた樣な、宛轉曲折を極むる美しくなだらかな手で書き流した此の草稿には殆んど筆削訂正の痕を示して居りません。之れは一面美妙の才子らしさを善惡ともに示すものとして、又他面彼が若年よく大名を馳せ晩年多く振はなかつ理由を暗示する樣にも思はれて感興を湧かせます。

半紙判、紙數五十三葉、內はじめ十六葉他筆。

圖版第八十號參照



第八十圖　山田美妙　夢幻日記草稿　内容の一部



一書拝呈仕候残暑之砌御清穆被為在恐賀候
陳者御蔵書群書類従永々
御借覧仕難有奉存候
則返上仕候間御落掌可被下候
右御礼旁如此御座候頓首
八月廿日

塙忠韶様
貴下　アヱネサトウ

第七十九圖　サトー卿許翰

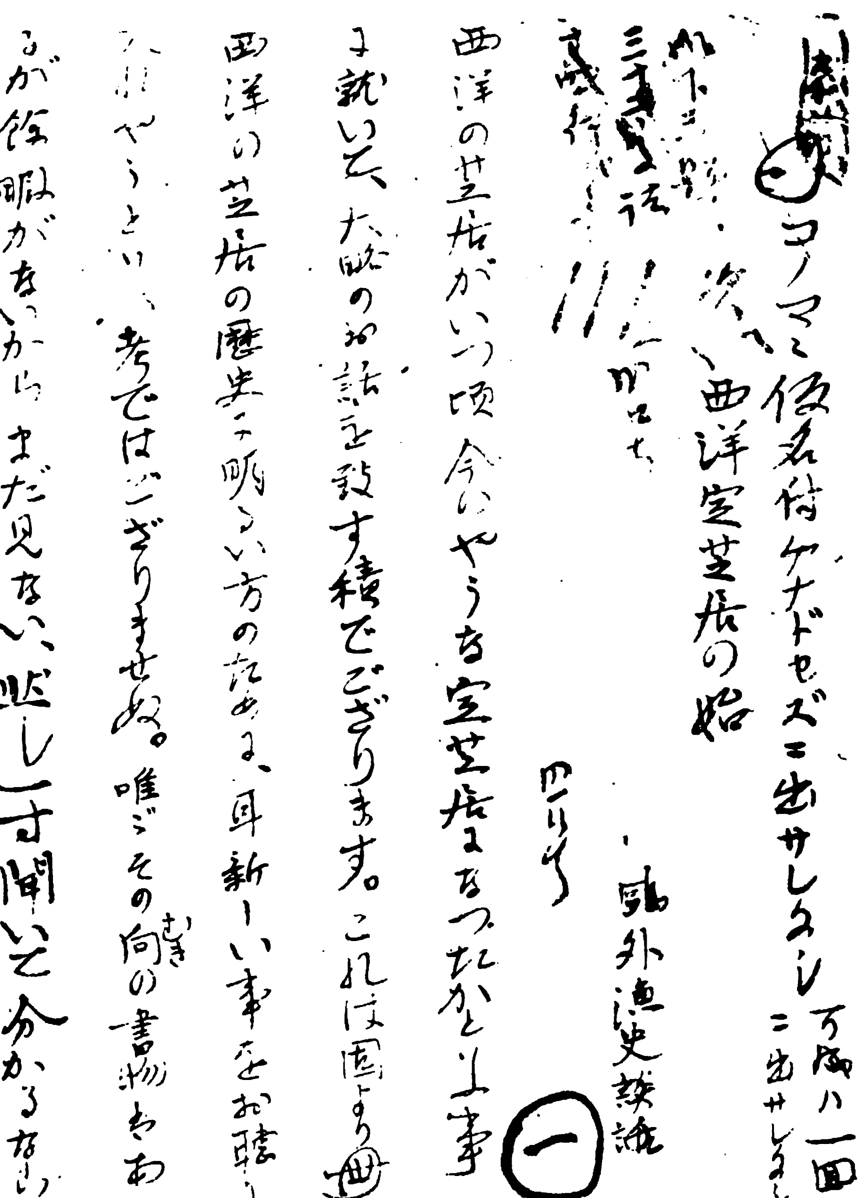
(16) サトー卿書翰　塙忠韶宛　一通　金三十圓

初期の最も優れた日本研究者であり、「日本耶蘇會刊行書誌」その他の有益なる著述の作家なる故サー、アーネスト、サトーの塙忠韶（和學講談所の創始者塙保巳一の子次郎忠寶の長子）宛の自筆の手紙で、かも保己一編の群書類從借覽の禮狀を各位の御高覽に供し得る事を喜びます。

筆蹟は海舟文庫藏の勝海舟宛の書翰及び內野氏皎亭文庫秘藏の切支丹版「太平記抜書」に附した田中光顯氏宛のサトーの書翰と一致し、自筆と信ぜられます。サトーは文久二年にはじめて來朝し（此の年は忠韶の父忠寶が廢帝の故事を調べたと云ふ嫌疑で伊藤博文等に暗殺された年にあたるのも奇緣です）早速熱心に習字の練習をした事はその自記によつて明かであり、又慶應元年には「日本書風の各種」と云ふ論文まで書いて居る事ですし書翰の往復にペンを用ひぬ時代に前後三十年も日本に居たのですから、字も外人のものとは見えず巧みであり文章に至つては更に手に入つたもので日本人でも仲々之れだけ要領よく簡潔に、しかも敬意を失せずには書き難いと思はれます。日付は唯八月廿日とのみなつて居て何年の事か不明ですが明治の初年の事でせうか。「群書類從」などを盛んに讀んで勉强して居たものと見えます。

此の書翰は元來和學講談所舊藏の「難波後記」の中で發見されたものです。忠韶が披見して此の書の中へ挿し入れてそのまゝ忘れられたものらしいのがほゝえましい傳來です。

圖版第七十九號參照



一幕物
コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ　右ハ一回ニ出サレタシ
以下二號　次ヘ西洋定芝居の始
三号活字　鷗外漁史談話
一

西洋の芝居がいつ頃今のやうな定芝居になつたかと云ふ事に就いて、大略のお話を致す積でございます。これは固より西洋の芝居の歴史を明るい方の話で、耳新しい事をお聴に入れやうといふ考ではございません。唯ゞその向（むき）の書物をあるが餘暇がなかつたから、まだ見ない、些し一寸聞いて分かるならば

第八十三圖　森鷗外草稿「西洋定芝居の始」卷頭

西洋定芝居の始

森鷗外自筆草稿　全一冊　金五拾圓

明治三十年六月「新作文庫」の第一號に載せられた短篇の原稿です。草稿には 鷗外漁史談話 と書して「談話」の二字が消してありますが、「鷗外全集」第三卷には此の篇を收めて「談話」としてありますから「新作文庫」に最初發表された時も「談話」として掲げられたものなのでせう。しかし實際は談話ではなく先生が談話體に執筆されたものを、談話筆記なるかに裝つて發表したものである事が、此の自筆草稿によつて知る事が出來ます。

先生は同じ「新作文庫」の第二號第三號に「西洋劇場の大さ」と云ふ談話を掲載されましたが、之れも談話ではなく起稿されたものである事はその原稿の現存で證明されますが、正確を尊ばれる先生の氣質として談話を求められた場合にも談話速記の誤り多きを厭はれて、かゝるやり方を採られたのかとも思はれます。

元來縱の長い卷紙に書かれたものらしいですが、それが幾つかに截つて綴じられて居ましたものを今改めて帖裝にして保存と閲讀に便して居ります。

卷頭に挿繪第八十三號でもわかります通り、朱で「コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ、可成ハ一回ニ出サレタシ」との註文書がついて居ますが、活字に組んで發表されたものは此の指定通りになつて居る樣です。

末尾が鷗外全集の行數にしまして約八行ばかり切れてなくなつて居ります。

コノマヽ仮名付ケナドセズニ出サレタシ 可成ハ一回ニ出サレタシ

次ヘ西洋定芝居の始

鷗外漁史談話

（一）

西洋の芝居がいつ頃今のやうな定芝居となつたかと云ふ事に就いて、大略のお話を致す積でござります。これは固より西洋の芝居の歴史に明るい方のお話ならば、目新しい事をお聴に入れやうといふ考ではござりませぬ。唯その向（むき）の書物をあるが余暇がないから、まだ見ない、然し一寸聞いて分かるならう

第八十三圖　森鷗外草稿「西洋定芝居の始」卷頭

(80)

西洋定芝居の始

森鷗外自筆草稿　全一冊　金五拾圓

明治三十年六月「新作文庫」の第一號に載せられた短篇の原稿です。草稿には　鷗外漁史談話　と書して「談話」の二字が消してありますが、「鷗外全集」第三卷には此の篇を收めて「談話」としてありますから「新作文庫」に最初發表された時も「談話」として揭げられたものなのでせう。しかし實際は談話ではなく先生が談話體に執筆されたものを、談話筆記なるかに裝つて發表したものである事が、此の自筆草稿によつて知る事が出來ます。

先生は同じ「新作文庫」の第二號第三號に「西洋劇場の大さ」と云ふ談話を揭載されましたが、之れも談話ではなく起稿されたものである事はその原稿の現存で證明されますが、正確を尊ばれる先生の氣質として談話を求められた場合にも談話速記の誤り多きを厭はれて、かゝるやり方を採られたのかとも思はれます。

元來縱の長い卷紙に書かれたものらしいですが、それが幾つかに截つて綴じられて居ましたものを今改めて帖裝にして保存と閱讀に便して居ります。

卷頭に插繪第八十三號でもわかります通り、朱で「コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ、可成ハ一回ニ出サレタシ」との註文書がついて居ますが、活字に組んで發表されたものは此の指定通りになつて居る樣です。

末尾が鷗外全集の行數にしまして約八行ばかり切れてなくなつて居ります。

西鶴 當世女客氣　幸田露伴自筆　全二冊　金四十圓

明治廿年代の文學復興の大きな動機の一は西鶴の再認識からはじまるとされて居ります。紅葉や露伴やの天才達があの元祿期の大文豪の作品を埋れた過去の死灰の中から拾ひ出して、自らの眼で見、自らの心で味つて、比類なき文學的價値と、くめども盡きぬ暗示とをあの簡潔穎利な文章の中に見出し、西鶴の價値、元祿文學の尊さを宣揚し、自らの作品の中にも強いその影響を示した事は明治文學史上隱れもない事實であります。

露伴等は西鶴物を淡島寒月の藏本によつて讀んだと聞いて居ります。こゝにかゝげましたのは露伴が自ら寫した「當世女客氣」でありますが、それも仝じ人の藏本を借讀し感嘆のあまり之れを筆寫したものなのでせう。扉には

井原西鶴著

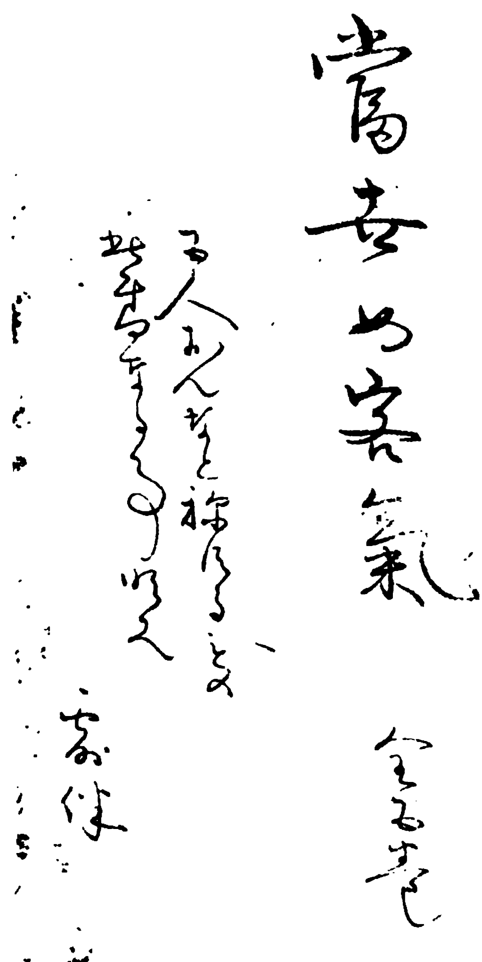
當世女客氣　全五卷

と書きそのわきに『五人おんなと稱するもの此書なる事明也　露伴』と書いて居ります。申すまでもなく「當世女客氣」は即ち「好色五人女」の後摺の改題です。本文全部を收めて居ますが、挿繪を寫して居ないのは、もと〳〵内容本位の露伴氏の意圖に基くものでせう。半葉十二行に細い字でキレイにうつして居ります。

色々な意味で面白いものだと思ひます。

縱八寸一分、横五寸五分。墨附五十四枚。　圖版第八十二號參照

第八十二圖　幸田露伴自筆　當世女客氣　卷頭



葛飾北齋傳

凡例

一本傳ハ獨逸人ウヰンケレル氏の需に應し明治廿四年十月廿六日に起草し十一月八日を期し編輯せしものにして其の間僅々二週七日なり然れとも北齋翁か事跡の世に傳はる所ハ大抵擧けて漏すことなし

一翁死して後四十二年の今日遺族既に絶て翁か墓前に一炷の烟なし余か本傳を作るの始め先つ翁の遺族を訪ふに其の所在分明ならす依て去りて翁の墓に至

第八十一圖　飯島虛心　北齋傳草稿　序文の一部

北齋傳

飯島虚心自筆稿本　全一冊　金二十五圓

飯島氏の著「北齋傳」二卷は小島烏水氏の所謂「日本浮世繪研究史上の神代」に於ける代表作で、歐西の地に渡つては彼のゴンクールの名著「北齋」の種本となつた雄作であります。此の書は奇しくもその成立のはじめから歐人との因緣淺からぬもので、最初ドイツ人ウインケレル氏の囑託によつて起草せられたものなる事は明治廿六年小林文七氏刊の版本下卷第二葉裏の記事によつて知られ、現行の版本は再稿本である事は明かでありますがウインケレルに與へた初稿本が如何なるものであつたかは知られて居りません。此處に揭げる所のものは即ち虚心自筆の初稿本で此の疑問をとくに役立つものであります。

原稿は十行二十三字づめの柱に虚心堂と印刷した用紙に書かれ、總紙數五十七葉。內容の分量は版本の約半分であります。調査の結果、版本中の注と目すべき一行下げの「按ずるに云々」と記した所は殆んど全部略してあつて主文は略々一致して居りますが、それも大體に留つて小異は數へ切れません。序文も文章は異りますが要旨は大略同じで、只最初にウインケレル氏の囑によつて執筆せしものなるを明かにして居ます。挿繪は薄樣紙の別紙に書いて本文中に貼り込み、又欄外には補足注意書を多く書き入れてあります。表紙綴じ等皆元のまゝで重要な個所に虚心堂の朱印を押して居ります。

圖版第八十一號參照

(11)

夢幻日記

山田美妙
自筆草稿

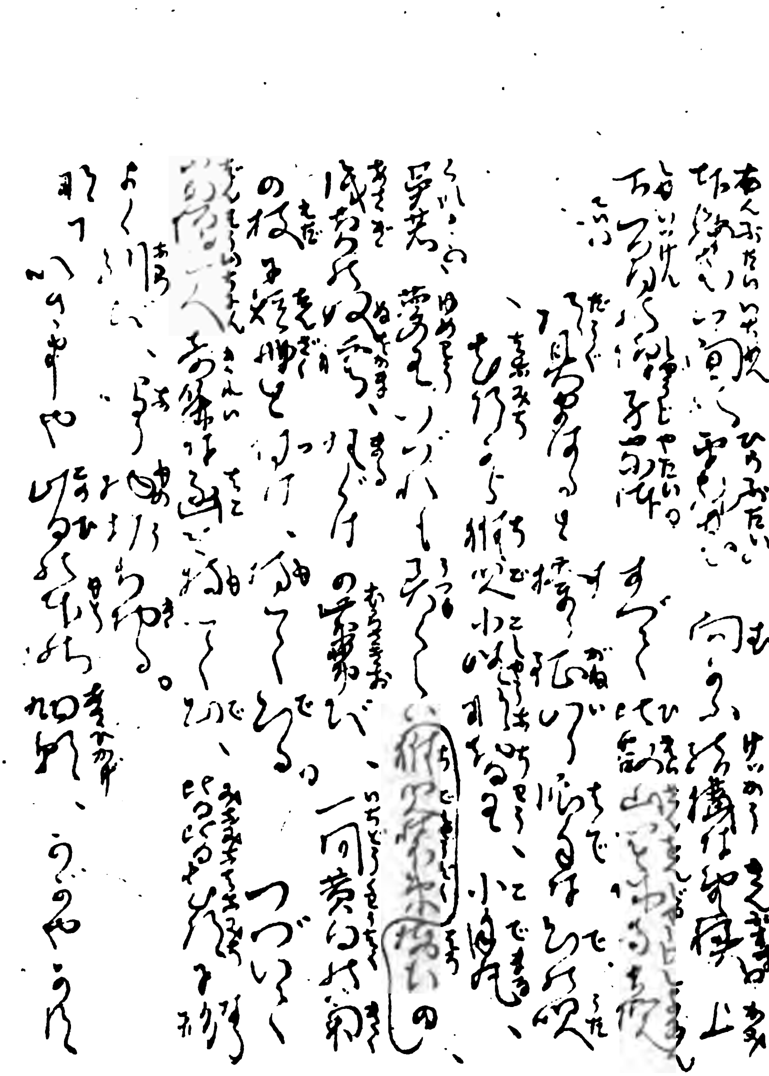
全一冊　金二十圓

明治元年に孤々の聲をあげた美妙齊山田美妙は飽くまで維新の兒であり風雲の子であつたのでした。「國民の友」に問題作「胡蝶」を掲げて一擧大名を博した時は漸く丁年に達するか達せぬかの時で、年少既に居然たる大家で、長い明治文壇を通じて最も早熟の天才でした。日本文章史上永久に記憶さるべき業蹟たる言文一致の新文體を創始したのも此の頃です。壯年以後は多く歷史小說に轉向致しましたが、歷史小說家としても塚原澁柿園と光を爭ふべき大家として永く記憶される事でせう。

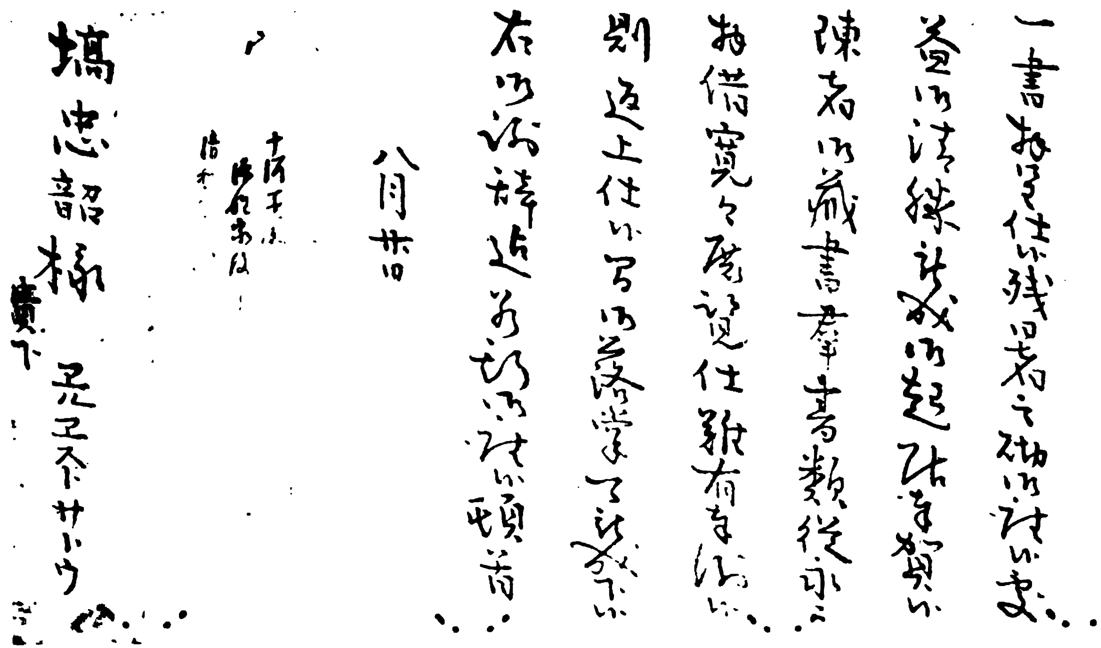
「夢幻日記」は美妙の脚本の草稿であります。それが彼の作品として文學史上如何たる地位を占むるものであるかは、遺憾乍ら詳らかに致しませぬが例の定家風と御家流をまぜた樣な、宛轉曲折を極むる美しくなだらかな手で書き流した此の草稿には殆んど筆削訂正の痕を示して居りません。之れは一面美妙の才子らしさを善惡ともに示すものとして、又他面彼が若年よく大名を馳せ晩年多く振はなかつた理由を暗示する樣にも思はれて感興を湧かせます。

半紙判、紙數五十三葉、內はじめ十六葉他筆。

圖版第八十號參照



第八十圖　山田美妙　夢幻日記草稿　内容の一部



一書啓上仕候残暑之砌御座候處
益御清祥被成御起居奉賀候
陳者御蔵書群書類従永々
御借覧被仰付難有奉存候
則返上仕候間御落掌可被下候
右御請旁御礼迄如此御座候頓首
八月廿日
塙忠韶様 貴下 アーネストサトウ

第七十九圖　サトー卿書翰

(76)

サトー卿書翰

塙忠韶宛　一通　金三十圓

初期の最も優れた日本研究者であり、「日本耶蘇會刊行書誌」その他の有益なる著述の作家なる故サー、アーネスト、サトーの塙忠韶（和學講談所の創始者塙保巳一の子次郎忠寶の長子）宛の自筆の手紙で、かも保巳一編の群書類從借覽の禮狀を各位の御高覽に供し得る事を喜びます。

筆蹟は海舟文庫藏の勝海舟宛の書翰及び內野氏皎亭文庫秘藏の切支丹版「太平記拔書」に附した田中光顯氏宛のサトーの書翰と一致し、自筆と信ぜられます。サトーは文久二年にはじめて來朝し（此の年は忠韶の父忠寶が廢帝の故事を調べたと云ふ嫌疑で伊藤博文等に暗殺された年にあたるのも奇緣です）早速熱心に習字の練習をした事はその自記によつて明かであり、又慶應元年には「日本書風の各種」と云ふ論文まで書いて居る事ですし書翰の往復にペンを用ひぬ時代に前後三十年も日本に居たのですから、字も外人のものとは見えず巧みであり文章に至つては更に手に入つたもので日本人でも仲々之れだけ要領よく簡潔に、しかも敬意を失せずには書き難いと思はれます。日付は唯八月廿日とのみなつて居て何年の事か不明ですが明治の初年の事でせうか。「群書類從」などを盛んに讀んで勉强して居たものと見えます。

此の書翰は元來和學講談所舊藏の「難波後記」の中で發見されたものです。忠韶が披見して此の書の中へ挿し入れてそのまゝ忘れられたものらしいのがほゝえましい傳來です。

圖版第七十九號參照

劇談

コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ　下欄ハ一回ニ出サレタシ

以下ニ小活字　次へ、西洋定芝居の始

三号活字　鷗外漁史談話

五號活字　一

西洋の芝居がいつ頃今のやうな定芝居となつたかと云ふ事
に就いて、大略のお話を致す積でございます。これは固より
西洋の芝居の歴史に明るい方のためで、耳新しい事をお聴に
入れやうといふ考ではございませぬ。唯ごその向(むき)の書物をお
るが餘暇がないから、まだ見ない、然し一寸聞いて分かるなら

卷頭「西洋定芝居の始」森鷗外草稿　第八十三圖

(80)

西洋定芝居の始

森鷗外自筆草稿　全一冊　金五拾圓

明治三十年六月「新作文庫」の第一號に載せられた短篇の原稿です。草稿には　鷗外漁史談話　と書して「談話」の二字が消してありますが、「鷗外全集」第三卷には此の篇を收めて「談話」としてありますから「新作文庫」に最初發表された時も「談話」として掲げられたものなのでせう。しかし實際は談話ではなく先生が談話體に執筆されたものを、談話筆記なるかに裝つて發表したものである事が、此の自筆草稿によつて知る事が出來ます。

先生は同じ「新作文庫」の第二號第三號に「西洋劇場の大さ」と云ふ談話を掲載されましたが、之れも談話ではなく起稿されたものである事はその原稿の現存で證明されますが、正確を尊ばれる先生の氣質として談話を求められた場合にも談話速記の誤り多きを厭はれて、かゝるやり方を採られたのかとも思はれます。

元來縱の長い卷紙に書かれたものらしいですが、それが幾つかに截つて綴じられて居ましたものを今改めて帖裝にして保存と閲讀に便して居ります。

卷頭に挿繪第八十三號でもわかります通り、朱で「コノマヽ假名付ケナドセズニ出サレタシ、可成ハ一回ニ出サレタシ」との註文書がついて居ますが、活字に組んで發表されたものは此の指定通りになつて居る樣です。末尾が鷗外全集の行數にしまして約八行ばかり切れてなくなつて居ります。

西鶴 當世女客氣　幸田露伴自筆　全二冊　金四十圓

明治廿年代の文學復興の大きな動機の一は西鶴の再認識からはじまるとされて居ります。紅葉や露伴やの天才達があの元祿期の大文豪の作品を埋れた過去の死灰の中から拾ひ出して、自らの眼で見、自らの心で味つて、比類なき文學的價値と、くめども盡きぬ暗示とをあの簡潔截利な文章の中に見出し、西鶴の價値、元祿文學の尊さを宣揚し、自らの作品の中にも強いその影響を示した事は明治文學史上隱れもない事實であります。

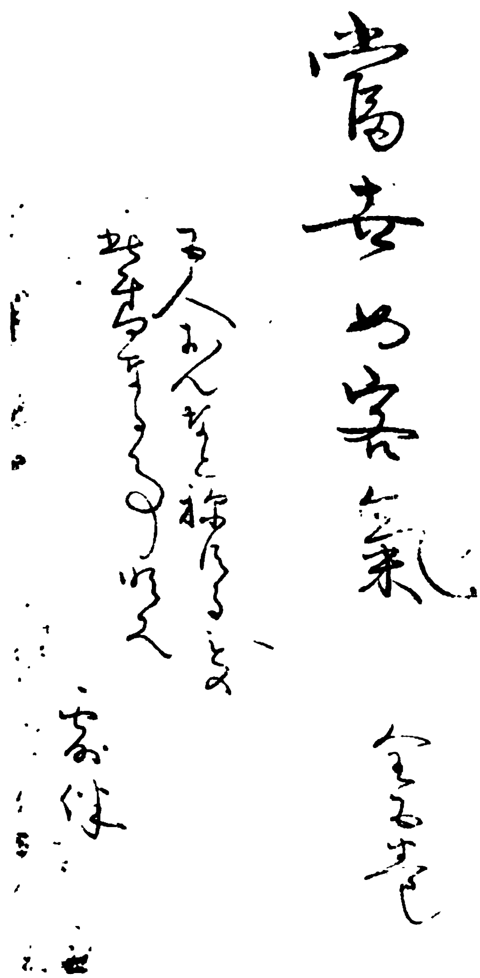
露伴等は西鶴物を淡島寒月の藏本によつて讀んだと聞いて居ります。こゝにかゝげましたのは露伴が自ら寫した「當世女客氣」でありますが、それも仝じ人の藏本を借讀し感嘆のあまり之れを筆寫したものなのでせう。扉には

井原西鶴著
當世女客氣　全五卷

と書きそのわきに『五人おんなと稱するもの此書なる事明也　露伴』と書いて居ります。申すまでもなく「當世女客氣」は即ち「好色五人女」の後摺の改題です。本文全部を收めて居ますが、挿繪を寫して居ないのは、もとく内容本位の露伴氏の意圖に基くものでせう。半葉十二行に細い字でキレイにうつして居ります。色々な意味で面白いものだと思ひます。

縱八寸一分、橫五寸五分。墨附五十四枚。　圖版第八十二號參照

第八十二圖　寺田藕作自筆　當世女客氣　卷頭


井原西鶴翁著
當世女客氣

葛飾北齋傳

凡例

一本傳ハ、獨逸人ウ井ンケレル氏の需ニ應し、明治廿四年十月廿六日ニ起草し、十一月八日を期し編輯せしものにして、其の間僅々二週七日なり、然れとも北齋翁の事跡の世ニ傳はる所ハ、大抵擧けて漏らすことなし、

一翁死して後四十二年の今日、遺族既ニ絶て翁の墓前ニ一炷の烟なし、余か本傳を作るの始め、先つ翁の遺族を訪ふニ、其の所在分明ならされハ、去りて翁の墓ニ至り

第八十一圖　飯島虛心　北齋傳草稿　序文の一部

(78)

北齊傳

飯島虛心自筆稿本

全一冊　金二十五圓

飯島氏の著「北齊傳」二卷は小島烏水氏の所謂「日本浮世繪研究史上の神代」に於ける代表作で、歐西の地に渡つては彼のゴンクールの名著「北齋」の種本となつた雄作であります。此の書は奇しくもその成立のはじめから歐人との因緣淺からぬもので、最初ドイツ人ウインケレル氏の囑託によつて起草せられたものなる事は明治廿六年小林文七氏刊の版本下卷第二葉裏の記事によつて知られ、現行の版本は再稿本である事は明かでありますがウインケレルに與へた初稿本が如何なるものであつたかは知られて居りません。此處に揭げる所のものは即ち虛心自筆の初稿本で此の疑問をとくに役立つものであります。

原稿は十行二十三字づめの柱に虛心堂と印刷した用紙に書かれ、總紙數五十七葉。內容の分量は版本の約半分であります。調査の結果、版本中の注と目すべき一行下げの「按ずるに云々」と記した所は殆んど全部略してあつて主文は略々一致して居りますが、それも大體に留つて小異は數へ切れません。序文も文章は異りますが要旨は大略同じで、只最初にウインケレル氏の囑によつて執筆せしものなるを明かにして居ます。挿繪は薄樣紙の別紙に書いて本文中に貼り込み、又欄外には補足注意書を多く書き入れてあります。表紙綴じ等皆元のまゝで重要な個所に［虛心堂］の朱印を押して居ります。

圖版第八十一號參照

(11)

夢幻日記

山田美妙
自筆草稿

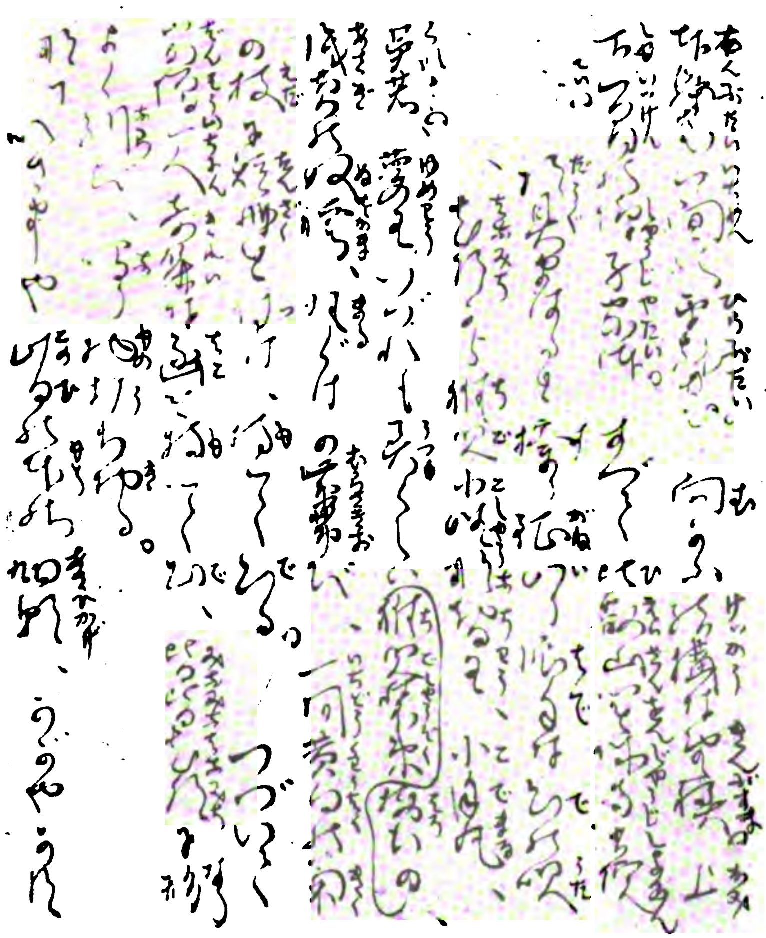
全一冊　金二十圓

明治元年に呱々の聲をあげた美妙齋山田美妙は飽くまで維新の兒であり風雲の子であつたのでした。「國民の友」に問題作「胡蝶」を掲げて一擧大名を博した時は漸く丁年に達するか達せぬかの時で、年少既に居然たる大家で、長い明治文壇を通じて最も早熟の天才でした。日本文章史上永久に記憶さるべき業蹟たる言文一致の新文體を創始したのも此の頃です。壯年以後は多く歴史小説に轉向致しましたが、歴史小説家としても塚原澁柿園と光を爭ふべき大家として永く記憶される事でせう。

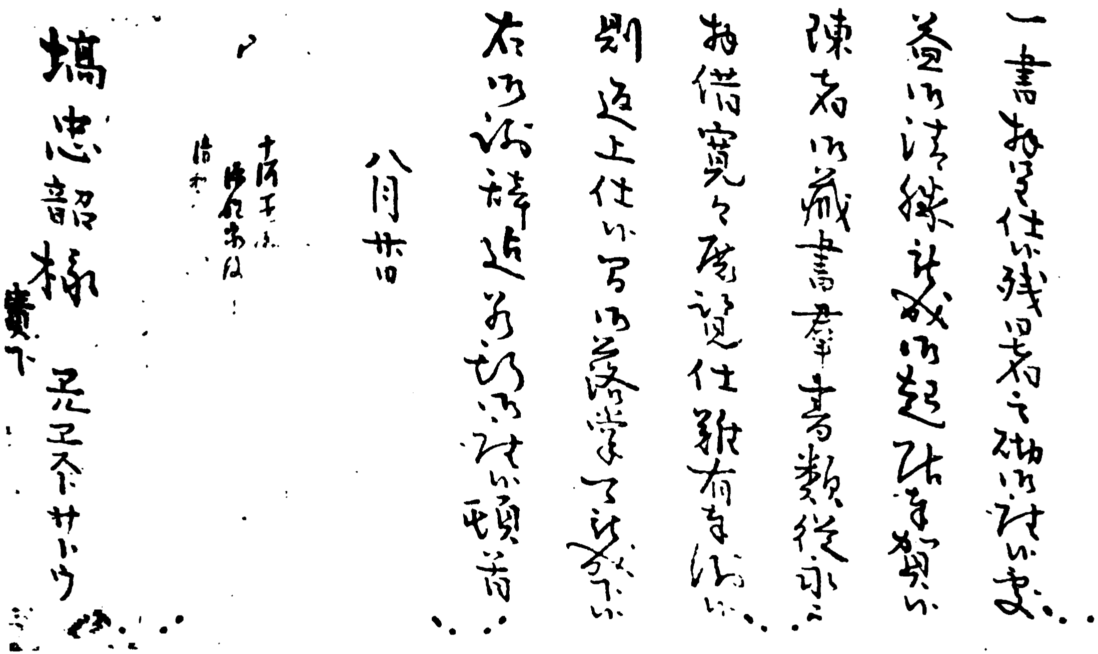
「夢幻日記」は美妙の脚本の草稿であります。それが彼の作品として文學史上如何たる地位を占むるものであるかは、遺憾乍ら詳らかに致しませぬが例の定家風と御家流をまぜた樣な、宛轉曲折を極むる美しくなだらかな手で書き流した此の草稿には殆んど筆削訂正の痕を示して居りません。之れは一面美妙の才子らしさを善惡ともに示すものとして、又他面彼が若年よく大名を馳せ晩年多く振はなかつ理由を暗示する樣にも思はれて感興を湧かせます。

半紙判、紙數五十三葉、内はじめ十六葉他筆。

圖版第八十號參照



第八十圖　山田美妙　夢幻日記草稿　内容の一部


一書拝呈仕候残暑尚ホ御坐候處
益御清穆被成御起居奉賀候
陳者御蔵書群書類従永ゝ
御借寛々展覧仕難有奉存候
則返上仕候間御落掌可被下候
右御礼旁如此御座候頓首
八月廿日
塙忠韶様
貴下
アーネストサトウ

第七十九圖　サトー卿書翰

(16) サトー卿書翰　塙忠韶宛　一通　金三十圓

初期の最も優れた日本研究者であり、「日本耶蘇會刊行書誌」その他の有益なる著述の作家なる故サー、アーネスト、サトーの塙忠韶（和學講談所の創始者塙保已一の子次郎忠寶の長子）宛の自筆の手紙で、かも保己一編の群書類從借覽の禮狀を各位の御高覽に供し得る事を喜びます。

筆蹟は海舟文庫藏の勝海舟宛の書翰及び内野氏皎亭文庫秘藏の切支丹版「太平記抜書」に附した田中光顯氏宛のサトーの書翰と一致し、自筆と信ぜられます。サトーは文久二年にはじめて來朝し（此の年は忠韶の父忠寶が廢帝の故事を調べたと云ふ嫌疑で伊藤博文等に暗殺された年にあたるのも奇緣です）早速熱心に習字の練習をした事はその自記によつて明かであり、又慶應元年には「日本書風の各種」と云ふ論文まで書いて居る事ですし書翰の往復にペンを用ひぬ時代に前後三十年も日本に居たのですから、字も外人のものとは見えず巧みであり文章に至つては更に手に入つたもので日本人でも仲々之れだけ要領よく簡潔に、しかも敬意を失せずには書き難いと思はれます。日付は唯八月廿日とのみなつて居て何年の事か不明ですが明治の初年の事でせうか。「群書類從」などを盛んに讀んで勉强して居たものと見えます。

此の書翰は元來和學講談所舊藏の「難波後記」の中で發見されたものです。忠韶が披見して此の書の中へ挿し入れてそのまゝ忘れられたものらしいのがほゝえましい傳來です。

圖版第七十九號參照

(82)

大槻叢書　　全三十六冊　　金百三十圓

「大槻叢書」は「安雜異事記」の著者大槻清慶の手抄する所の古書及び大槻平泉、大槻西磐、大槻清廉等の諸家の稿本を集めて一部とし、假に名付けて叢書とせしものなり、その大略種目左の如し。

一、政事錄　厚冊二冊　大槻清慶自筆　清慶が領せし陸中西磐井郡の一萬五千石の地の寛文六年よりの記錄なり。

二、安雜集　六冊　大槻清慶自筆、清慶の文集詩集詠草なり。

三、松の落葉　四冊　大槻清慶自筆、その和歌俳諧をしるせるもの。

四、清慶雜抄　十八冊　大槻清慶自筆、諸書を抄寫せるもの。神道書あり、國文書あり、刀劍書あり、天文書あり。

六、一枕亭藏石譜　一冊　大槻西磐自筆稿本、清慶の愛藏せし珍石をその沒後、子西磐が寫して自らの序と松島鶯湖の跋を附せる稿本。

七、仙臺府學釋菜儀　一冊　大槻平泉自筆、伊達藩の藩校賢養堂の學頭たりし平泉の自筆。

八、大槻日記　四冊　大槻清廉の自筆日記　一冊、知還堂日記　一冊、大槻家詩集(清廉筆)　一冊、自身薄　一冊、

東北の名門として、又學者輩出の名家として聞えたる大槻家の文書として、史的價値少なからざるべし。

圖版第七十八號參照

第七十八圖　大槻家文書　内容の一部

朱注

官吏役

安政四丁巳年

正月十七日鈴木三良エ門江戸ヘ發足大槻恒輔清

複病還ニテ申来ル故ニ去年八月ヨリ腫瘍ヲ患ル

十月頃ヨリ腳痛ニテ臥ル十二月ニ病大漸ハ専左エ門ヘ

書ヲ寄テ告ケ来ル故ニ三良エ門ヲツカワシ看護セシ

ムニ

二月三日大槻玄梁殿ニ[illegible]蝦夷地警衛御用

仰付ラルクナシリナリ

二月廿四日恒輔物故セシヨシ訃音三良エ門ヨリ

推遷紀事　文久二壬戌年

上冊　磐井大槻清崇編集

一　正月二日南都春日社四ノ宮
御神鏡無之落割ニ出同三月四日三ノ宮
御神鏡品々同然之事

一　五月閣老久世大和守殿上京ニ付　御借金五千両拝借五千両ニ而ト

一　薩州ヨリ嶋津和泉上京浪人共鎮静ニ付　御ト々ヨリ公邊ニ而在府

一　家中ニ而出奔致シ候ニ付中川修理大夫殿ニ而召捕西国筋ノ諸家ヘ
無行諸書付

一　正月十五日閣老安藤對馬守殿登　城之節山下御門ニ而浪人共ヨリ被相
疵之書付

一　公邊ヨリ九條殿下公卿方十六人ヘ被加増有之候書付

一　井伊掃部頭殿京都ニ而使者叙爵之御事始末

一　薩州侯御家中ヘ一ニ中途書付嶋津和泉品々同断

一　京都催之義ニ付留守中ニ達之書付

一　五月三日松平肥後守殿御用番之入ニ付　御供ニ尾張前中納言殿被仰付

(74)

推遷紀事（幕末維新史料）　大槻磐井編 自筆原本　全三十冊　金百二十圓

推遷紀事は大槻宗家の主淸廉號磐井の編纂になる幕末に於ける政治的勢力推遷の記錄にして三十冊よりなる。內容は全部淸廉磐井翁の自筆にしてその篇目左の如し。

安政五戊午年	一冊
安政七年改元萬延元庚申年之條	一冊
文久元辛酉年	一冊
文久二壬戌年	三冊
文久三癸亥年	三冊
元治元甲子年	九冊
慶應元乙丑年	二冊
慶應二丙寅年	二冊
慶應三丁卯年	一冊
親政事略、白川戰爭略記	各一冊
大政復古始末	三冊
復古雜話	二冊

各冊紙數凡五十枚の袋綴じにて、本文所々に朱にて見出しを附し、又批評を加ふ。幕末史研究の一重要新資料と云ふべし。東奧の避地にありて此の大冊を編纂せし淸廉翁の勞苦思ふべし。

圖版第七十七號參照

安雜異事記　大槻清慶自筆本　全四冊　金五十圓

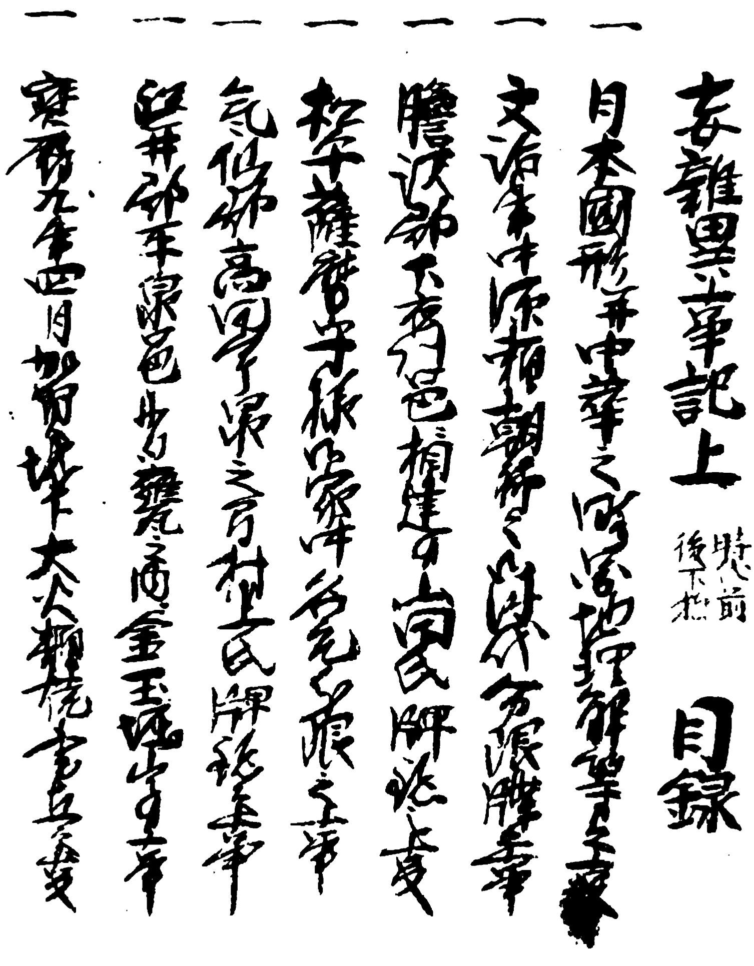
大槻清慶名は安左衛門又丈吉と云ひ茂根と號し、陸中西磐井郡の大肝煎にして一萬五千石を管し、玄澤・磐溪・平泉・西磐・如電・文彦等、大槻の姓を稱する諸名家の宗家たり、玄澤には伯父に當り磐溪には伯祖父に當る。如電翁のものせられし玄澤先生の傳記の中に

「伯父安左衛門即ち清慶は博聞强記にして安雜異事記等の手記十數卷あり。磐水（即ち玄澤）常に其傍に坐して舊事古傳を聞く事を此上もなく樂みとし、毎事必其の本末を慥めて深く記憶に留め置きしとぞ。されば伯父も此兒は後來必大槻の家名を揚げん者ぞと誇顔に人々に語りしと云ふ」云々

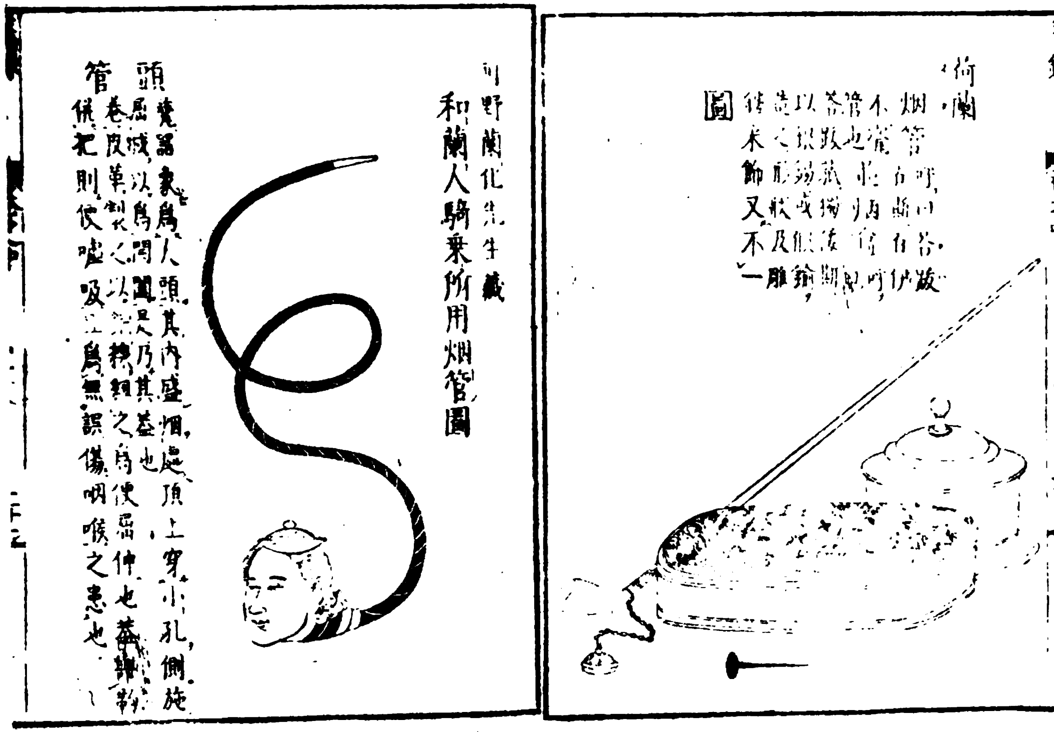
とあり。文中の「安雜異事記」は即ち此處にかゝげたるものにして全部清慶の自筆にかゝる隨筆として珍重すべきものなり。

全四冊、半紙に書寫し、上中下三卷に後集一冊、各卷に目錄あり、その下に「時代前後不拘」と朱書せり。内容は身邊の雜事より附近の天變地異、全國の大地震、大火災、奇事異聞、百性一揆、浪人の蜂起、諸大名家中の騷動、朝鮮使・琉球使の來朝、異人漂着の記事、歷史上の興味ある事の拔書等聞見に入るものを漏らさず筆錄せり。記事は磐井郡を中心として仙臺藩・南部藩、奥州に關するもの多きは勿論にて此の方面の史料として價値あるものと信ず。總紙數約二百二十枚。

圖版第七十六號參照



第七十六圖　大槻清崇自筆　妄雜異事記　目次の一部



第七十五圖　蔫錄　内容の一部

蔫録

大槻玄澤著
文化六年刊

全二冊　金二十八圓

蔫録は煙草の文献です。煙草好きの書いた煙草の書物です。「少時より吃煙を好み都下に居る事五十年なれども常に郷里所産の煙草を用ひ」云々と孫如電氏が錄した大槻玄澤の筆のすさみです。煙草に關する文献としては既に寛永の雜山文集からを數へ得るのでありますが、寛政末年に此の書の成る以前のものは、極めて斷片的のものでたければ何れも主として「煙草の文學」でありまして「煙草の科學」ではありません。槃水先生の此の著は本を和蘭のシヨイメイル、ドドニュース、ヒブネル等の諸學者の所説に置き、第一卷には原始、別名、土宜、煙品、修造をのせ第二卷に主治、禁忌、解毒、什器を、第三卷に雅賞附考・餘考・追譯・增補あり、各卷に挿繪多くその研究法の精緻と内容の豐富とは當時の諸學者を驚嘆せしめたものであります。起草は天明七年で上梓は文化六年、此の間卅二年の長歳月を閲して居る勞作です。

杉田玄白が著者の性行を評して「此男の天性を見るに凡そ物を學ぶこと實地を踏まざれば爲す事なく心に徹底せざる事は筆舌に上せず。一體に豪氣は薄けれども總て浮きたる事を好まず。和蘭の窮理學には生れ得たる才ある人なり」と記しましたが、此のジミにコツ〳〵と勉强する玄澤が夜半聊か讀書に倦んで疲勞を催した時、煙草の力で睡魔を拂つた事も一再でなかつた事でせう。

芝蘭堂印行、上下で紙數約百廿枚、挿繪の多い盡きぬ感興を催さしむる本です。元表紙元題簽汚損全くなき極上本。

圖版第七十五號參照

和蘭辭彙　　桂川甫周刊　　全十三冊　　金二十五圓

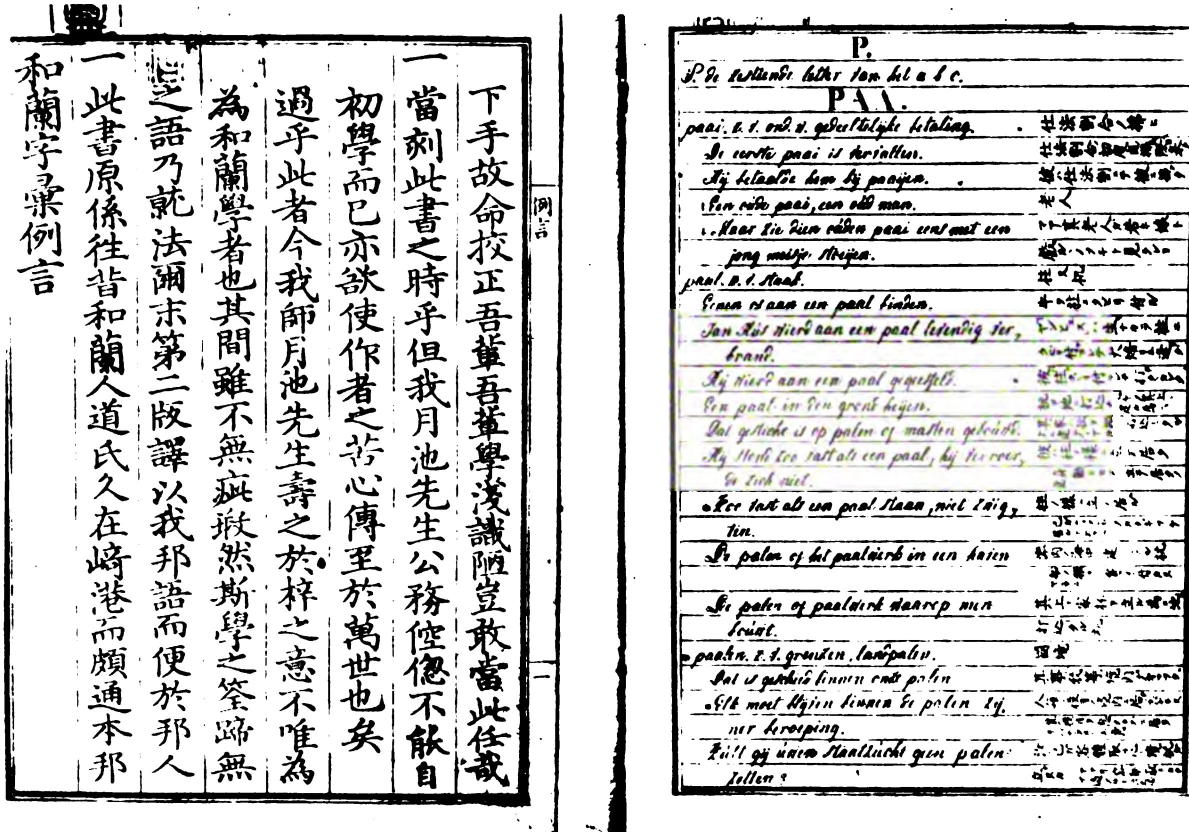
刊行者桂川甫周は彼の「和蘭藥選」「北槎聞略」等の著者なる幕府御典醫桂川甫周の曾孫で、その主著は此の「和蘭辭書」全十三冊紙數約千五百枚三千頁、收容語數八萬、日本開闢以來最大の歐和大辭書であります。之れだけのものの刊行ですから安政二年に第一卷を上梓してから最終卷の刊行を終るまで足掛四年の歲月を閲し、安政五年になつたのも無理からぬ事でせう。此の刊行の事務を督した甫周の弟國幹が跋文の內で

「是は於てか家兄の喜び知るべき也、而して吾が喜び更に甚しきものあり、橘堂(國幹の弟)も亦喜ぶ。友人皆な喜ぶ。蓋し海內の學者亦吾輩に喜びを同じくするあらん(原漢文)」

と誌したのを見ても彼等の喜びが察せられます。

此の大辭書が粉本なしに一朝にして出來上つた筈はありません。その原本と云ふべきものは彼のドウフが吉雄權之助等と共に文化年間に譯出した所謂「長崎ハルマ辭書」であります。當時此の唯一の辭書が長崎譯官と天文臺と桂川家に一部づゝのみ藏され、其の少數の謄寫が至寶視されて居たのを一般化せんとする學者的良心から公刊に着手したのです。出版に際しては幕府當局の許可が容易に得られず、甫周は屢々當時の老中遠藤但馬守の面を犯して反覆辨難して漸く允可を得たと云ふ事は有名な事實です。單に日本最初の大辭書としてのみならず、先覺者の勞苦を偲ぶべき資料として永く保存せらるべきものでせう。

組版の體裁は略々挿繪の如くですが第一卷々頭に桂川氏學生謹識として三頁にわたる例言を附し第十二卷末に國幹の跋四頁を附して居ります。江戸日本橋山城屋佐兵衞發行。美本。



和蘭字彙例言

一此書原係往昔和蘭人道氏久在崎港而頗通本邦之語乃就法爾末第二版譯以我邦語而便於邦人為和蘭學者也其間雖不無疵瑕然斯學之筌蹄無過乎此者今我師月池先生壽之於梓之意不唯為初學而已亦欲使作者之苦心傳至於萬世也矣

一當刻此書之時乎但我月池先生公務倥偬不能自下手故命校正吾輩吾輩學淺識陋豈敢當此任哉

P.

P. De zestiende letter van het a b c.

PAA.

paai. z. v. ond. v. gedeeltelijke betaling.
De eerste paai is vervallen.
Hij betaalde hem bij paaijen.
Een oude paai, een oud man.
Maar die dien ouden paai eens met een jong meisje streijen.
paal. z. v. staak.
Iemand aan een paal binden.
Jan Hus werd aan een paal levendig verbrand.
Hij werd aan een paal gesteld.
Een paal in den grond heijen.
Dat gestichte is op palen of masten gebouwd.
Hij staat zoo vast als een paal, hij [illegible] roert zich niet.
Het staat als een paal staan, niet twijfelen.
De palen of het paalwerk in een haven
De palen of paalwerk daarop men bouwt.
paalen. z. v. grenzen, landpalen.
Dat is geheel binnen onze palen
Gij moet blijven binnen de palen uwer beroeping.
Zult gij uwen staatsdienst geen palen stellen?

第七十四圖　和蘭辭彙　例言及び内容の一部

武藏 三芳野名勝圖會 上之巻

燦齋 小島孝昌撰

河越 入間郡

河越の文字ハ古へ多く河越或ハ河肥と書く今ぞ多く川越と作る何比より川越と書来るや未詳

字義ハ 河 寒哥切音何 水出積石山自乾位東千里一曲九曲而入海 川 枢縁切音釧 水名釧同

大河小河の差別ありといへども我日の本ハ名を分たず文字ハ後に當てたるなればいづれハ河越なりとも川越なりとも時の書ならはしきに随ひて出へきにや然らん

第七十三圖 川越名所記 巻頭

(70) 川越名所記　中島孝昌著　寫本　全三冊　金二十圓

外題は川越名所記とあり、內題は「三芳野名勝圖會」とあります。凡例には

一、三芳野ハ河越舊號ナレバ河肥市中ノ神社佛閣等之事ヲ成載（中略）市中ノ神社佛刹モ脫漏異說多シ因玆今數個ノ舊記ニモトツキ社人寺僧ニ問ヒ或ハ里老ノ口稱ヲ見聞シ誤ヲ勘ヘ正シテ錄ス

と記して居ります。川越の名稱の起源から說き起して河越城の沿革、寺社の故事、祭禮街衢の由來、山川名勝等可成廣範圍に說いて居りますが、敍述の態度は極めて眞面目で綿密です。上卷々頭に享和元年十一月付の海保靑陵の手になる序を載せ、下卷々末に享和二年十一月の日付の菅點山の筆になる跋文を附して居ります。中島孝昌が稿を了つたのは享和元年中だつたと思はれますが、序跋を附し、圖を描かせて成書としたのは享和二三年の交なのだと見えます。

此處にかゝげました寫本は頗る上寫本で、あるひは著者の稿本でないかと思はれるものです。附圖を附して居りません。內容も故高木利太氏藏本とも多少差違がありますから或ひは著者の初稿本かとも想像されます。

美濃判總紙數百二十餘葉。各卷々末に仙波貫道及び亮阿の二大印（各約二寸四方）を押して居ります。

圖版第七十三號參照

(69)

下野名勝誌

熊倉義察自筆稿本

全二冊 金三十圓

著者の自筆稿本であり未刊のものであります。

宇都宮の人手塚官住の「新撰風土記」鹿沼の人山口安良の「押原推移錄」及び石崎守弘の「下野國誌」十二卷を參考とし、その他神代より慶長までの諸書を引用して、古書にあらはれたる下野國の沿革を記し又地名の起源を考證した學問的な著述でありまして、名は名勝志と云つても名勝案内記又は名所圖會類とは凡ぞ緣遠い著述でありま す。紙數約百三十葉、内挿繪は一葉もありません。

著者熊倉義察氏の經歷は明かでありませんが壬生の人とありますからその地の篤學者でせう。卷頭には嘉永中に稿なり明治三年に淨書すとあります。

下卷々末に

賣渡證

下野名勝志草稿上下二冊今般貴殿へ金壹圓にて御賣渡候處實證也

明治廿六年五月十一日

故熊倉義察妻

熊倉國印

殿

此の篤學で不幸な著者の唯一の原稿が、未亡人によつて僅かの金で賣り拂はれ上梓を見ずに終つたらしいのは氣の毒な感じが致します。

圖版第七十二號參照

下野名勝志上之巻

壬生　熊倉義齋編輯

國は乾を首とし巽を尾とす凡日縦一百二十里日横一百八十里東ハ常陸北ハ陸奥西ハ上野につゝな山岳峨危にて南ハ武蔵下總大河を境として郡郷其間にあり五穀金石草木禽獸蟲魚を産せすとよし草木繁茂とすれハ毛野の國といひし成り毛作物をいふ古事記神代紀一書に出たる職役令に土地之所生皆為毛と見ゆ今も猶税と計るに何合毛といふし其を據ぬるとも見えかたし　仁徳天皇の御世上[illegible]によるる説ハうけかたし
[illegible]也給ひ（國造本紀云難波高津朝世元毛野國分上下）聖武天

顕幽　春之部一

諏訪　松澤義章謹選

掛まくもあやに恐き　健御名方大御神と称奉るハ出雲國にます坐て天の下知し食しまへる　大国主大御神の御子にましまし　御兄八重事代主大御神と相並てともに　大御父の大[illegible]神の御謀を受まゐ天の下ハ　大君となるましく千萬の國に残れる地なく知し食しまひき　此條の故由并三條にいへり　天照皇大御神高御産巣日大御神の御意

第七十一圖　松澤義章　顯幽本紀草稿　卷頭

(68)

顯幽本紀　松澤義章自筆稿本　全十一册　金五十圓

「顯幽本紀」は「八夷我末」と仝じ著者の筆になりし稿本にして、成立の年代はその卷一、卷二の末に

嘉永と云ふ年の元年正月これを書

同五年と云年の五月少しはかり書更めつる也

とあれば此の頃のものなるべし。

内容は諏訪大社に關する神事を蒐めたるもの、事神事に涉るを以て「顯幽」の文字をあてたるなるべし。諏訪神社の起原よりその沿革、神事祭禮儀式の模様、神殿造營の次第、神領、神器、神火、靈水、神木、神璽、巫女、供物神樂、占卜、諏訪暦、諏訪歌、諏訪度量衡等を古書を引きて考證し、又神社の制度、神官の制等も記したり。又諏訪大社を中心とする附近の神社の重なるもの、例へば木蘇御嶽神社、伊那郡小野神社、安曇郡保高宮等と諏訪社等の關係等の記述もあり、之れ等には記紀をはじめとする純古典を多く引用すると共に諏訪神社緣起祭詞を引證する事多し。兎に角内容は必らずしも組織的系統的ならざるが如く見ゆれど、皆諏訪大社に關せる記事のみにして、何時かは板行せんとする意志の下にしるされしものなるべく、美濃判の用紙に半葉十行に正しく記され、所々訂正の個所は貼紙をなしたり。仝二十卷ほどのものなりしなるべけれど、今は春夏の卷各五冊秋の卷一冊計十一冊を留むるのみなるを惜むべし。

圖版第七十一號參照

(67)

八夷我末

松澤義章自筆稿本　全二冊　金二十圓

卷頭の著者の自序の中に

「皇大御國は准ふべき地もなく、並に勝て尊くめでたき御國なるを、他國書に染み習ひてより以降反りて內外の別ため本末の理を思ひ誤り、外國の卑國柄をさへ萬代の準となむ惑ひ溺るゝ徒出きにける。しかはあれど今將た萬道の古に復るべき時にしあれば公ならぬ文辭など眼をとむる人あらじ。されどはじめて學びの道に入なむ人は、そのよさ惡さも辨難くて小徑を廣路の如く思ひ誤り日を經て行かむも徒事とならむを慨たみ、路のへを支ふる棘を伐り拂ひ本大道を行かしめむと此處彼處より道標の如き文を抄書し集めて此の一卷となす」

と雄辨に本書の著述の動機を語つて居ります。內容は太古には邦人は支那人を卑しみ、支那人は邦人を尊敬したのを、中古になつて逆に支那崇拜となつたが、今後再び皇國崇拜漢土卑下の時代となるべきを主張したもので、古事記、日本書紀、萬葉集、三代實錄、延喜式は勿論數多くの國典、及び書經、詩經、易經、左傳、孟子、山海經、准南子、周禮、尙書大傳、國語、史記、文選等數多の漢籍から徵證たるべき章句を引用して居ります。萬の道の復古の時代なるを唱へた點、又皇國崇拜漢土卑下の時代の來るべき豫言の偶々適中した點等思ひ合はされて興味深く覺えます。美濃判、紙數七十餘葉、各卷々頭に 穗高藏書 及び「はるあきはなの翁」の二藏印あり。

圖版第七十號參照

八夷我末

信濃國　松澤義章著

此書ヲ著ス大意

熟按ルニ遠キ上ツ代ヨリ以降我カ皇國モ漢土モ國風ノ移來シ形勢ハ一端ナラス大古ノ人ハ眞情ニテ故尊ムヘキ理ノマニマニ皇國ヲ尊メルハ我モ彼モ同カリキ中古ヨリ彼ハ漸々本ツ理ヲ蔑ニシテ皇國ヲ尊マス后ノ世ノ書ニハ反テ皇國ヲ蔑ニシ毀ムル辞多カリキ又中古モ我ハ尚眞情ナリシ故皇國ヲ尊ミテ彼ヲ輕シメ賤メ玉ヒ爾シテ御代々々ヲ經ルニミ

國訓字辨

嵐山先生口授　門人　三河　朴根校

中嶋元寛　同校

平安　男馬達義

天林

天

凡ソ詩書ニ天ト称スルヿ七ツアリ八一ツハタヾ天ト云二ツニハ上天ト云三ツニハ皇天ト云四ニハ昊天ト云五ツニハ旻天ト云六ツニハ蒼天ト云七ニハ穹蒼ト云八ニハ有昊ト云曰ク均ク是天ナリ何ユヘニ八名ニ分ルヤ辨ゼザルベカラズ

第六十九圖　三材明辨草稿　第一卷々頭

三材名辨　馬淵嵐山稿本　全十六冊　金二十五圓

馬淵嵐山名は會通字は仲觀、舍人と稱し後小助と改名した京師の儒者であります。齊大禮の弟子で一生仕官せず帷を京師に垂れて諸生に敎授し、著はす所三百餘卷、その內馬氏九詁、論語微言、大學微言、神道解、嵐山文集等が著名であり、大學微言、神道解の二種は上梓されました。「三材名辨」は嵐山の著述中最も浩瀚なもので全十五卷、未た梓に上せられたる事なき秘稿であります。もと鈴木眞年の舊藏で卷首にその藏印があります。半紙本共表紙で表紙の上に押紙して「第七號　三材名辨　全十六　合十五　馬子眞筆」としてありますが、恐らくは嵐山の自筆ではなく、その子馬淵遜義の筆寫したものであらうと思はれます。各冊裏表紙には「立城舍藏」の墨書と三朱印を捺して居ります。

內容は一種の漢語辭典であります。第一卷は內題が「同訓字辨」となつて居りますが、その通りで、天地人三才に關する主要語中訓讀同じい語を摘出して、その意を漢籍に基いて註解したもので、例へば天材の部では天、上天、皇天、旻天、昊天、蒼天、蒼穹、有旻等を擧げ皆「ソラ」と訓ずるものとして各語につき數十行を費してその出所、字義、故實等を明かにして居ります。第十六卷々末に嵐山及びその師齊大禮の傳が附してあります。總紙數約四百枚。

圖版第六十九號參照

(65) 烽山日記　亀井昭陽稿本　全三冊　金三十五圓

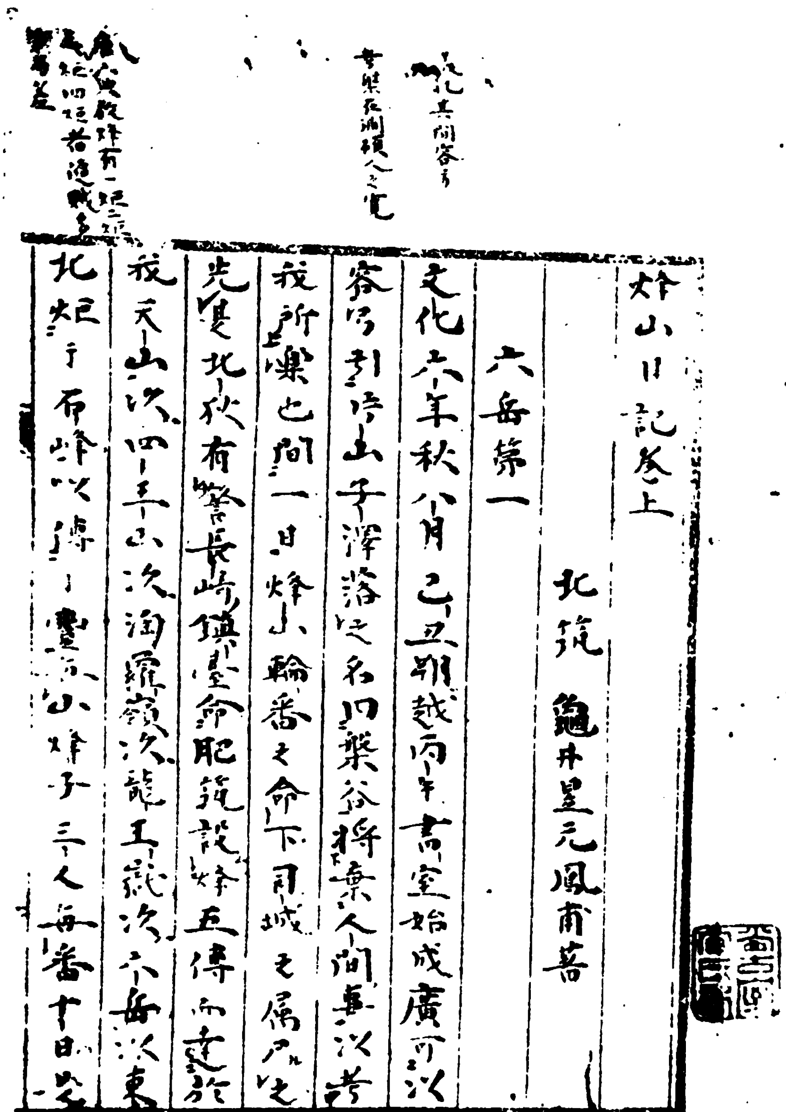
烽山日記全九卷三冊は筑前の淳儒龜井元鳳の著はす所、文化六年八月より仝七年十一月まで福岡藩の烽吏となつて諸山に戍役せし時の日記なり。總紙數百五十葉、大美濃判半葉九行の罫紙に楷書を以て記し、朱にて旁訓を施す、上欄には文中の語句の出典を朱書す、孟子、莊子、孫子、孔子家語、儀禮、孔叢子、左傳、漢書、唐書、爾雅柳文、杜詩、李詩等經史子集各般に渉り元鳳の蘊蓄を窺ふに足る。記述の體は、時として連日、時とし數日を隔てゝ、先づ四時の變遷氣温の高低等を叙して、次に日常周圍の人事を記し、時に時務に及び或は歷史に及ぶ。例へば文化七年正月の記に左の如し。

正月上日昧爽起。天氣姸々。即ニ山上井一汲ニ井華水一洗漱。新曦出ニ古處山之右一霞文淸鮮覺レ有ニ赤帝騎レ龍來一改レ服陟レ岾遙拜ニ庭園一作レ詩書レ景。峰巒雲靄曉蒼々。攀ニ幕山嶺一觀ニ萬方一日本初陽升ニ若木一。餘香遙照ニ禹封疆一と。文藻知るべし。

上卷は大岳第一、淘籮嶺第二、天山第三の三卷を、中卷は四王山第四、石峰第五、龍王岳第六の三卷を、下卷は淘籮嶺後記、石峰後記、天山後記の三卷を收む。此の諸山は何れも黑田藩の烽山名なり。

此の書は昭陽の遺文中未だ上梓せられず流布最も少きものの一に屬す。卷頭に「尙古室」の印記を捺す。著者自筆にあらざるもその近親の筆寫にかゝり書體整然、最も信憑すべし。

圖版第六十八號參照


烽山日記卷之上

北筑　龜井昱元鳳甫著

六岳第一

文化六年秋八月乙丑朔越丙午書室始成廣可以
容膝引待山子澤游之名曰樂谷將棄人間事以昔
於所樂也間一日烽山輪番之命下因城之属人也
先是北狄有警長崎鎮臺命肥筑設烽五傳而達於
於天山次四王山次海羅嶺次龍王嶽次六岳次東
北炬于而烽以傳之豐前小烽子三人每番十日以

第六十八圖　亀井昭陽　烽山日記　卷頭

孟子古注考

越後 藍澤祗子敬 甫

公孫丑章句

夫子當路於齊管仲晏子之功可復許乎【注】當仕路於齊許猶興也

當路當涂主事國時持政矣云言居要地也許自許也

曾西【注】曾子之孫

考凡曰經典序錄云曾申字子西曾參之子子夏以詩傳曾申左丘明作傳以授曾申曾西之字於是可考

第六十七圖　孟子古註考草稿　卷頭

(64)

孟子古註考　藍澤南城自筆稿本　全六卷五冊　金三十五圓

藍澤子敬、名は祗、南城と號す。越後刈羽郡の人。片山兼山に從學し、學成りて後故郷に歸り、文政三年より家塾三餘堂を設けて子弟に敎ふる事四十餘年、弟子二千人と號し北越第一の教育者として儒名一時に振ふ。三禮・孝經・論・孟等につき皆一家の定說あり。本書は即ち南城自筆の稿本にして、趙岐註する所の孟子古註の考證なり。

自序の一節に

「岐在二患難顚沛中一而執レ志不撓、首尊二信孟子一爲二之訓解一、其勤苦使二人起敬一實孟子之忠臣、學者模範也。故後世註家如二程朱諸先生一亦其初不レ得レ弗三以レ此爲二梯筏一也。而今人多忽略不治、好古之士蓋慨焉。余今作二古註考一考二正得失是非一加二以二異聞一而一二悉得附焉。非三敢妄疵二般之一亦聊寓二儀正之意一云。

とあるによりて、述作の意明かなり。未だ上梓せられたる事なき稿本なり。

縱九寸、横六寸四分。總紙數二百七十餘葉。

圖版第六十七號參照

塙保己一年譜

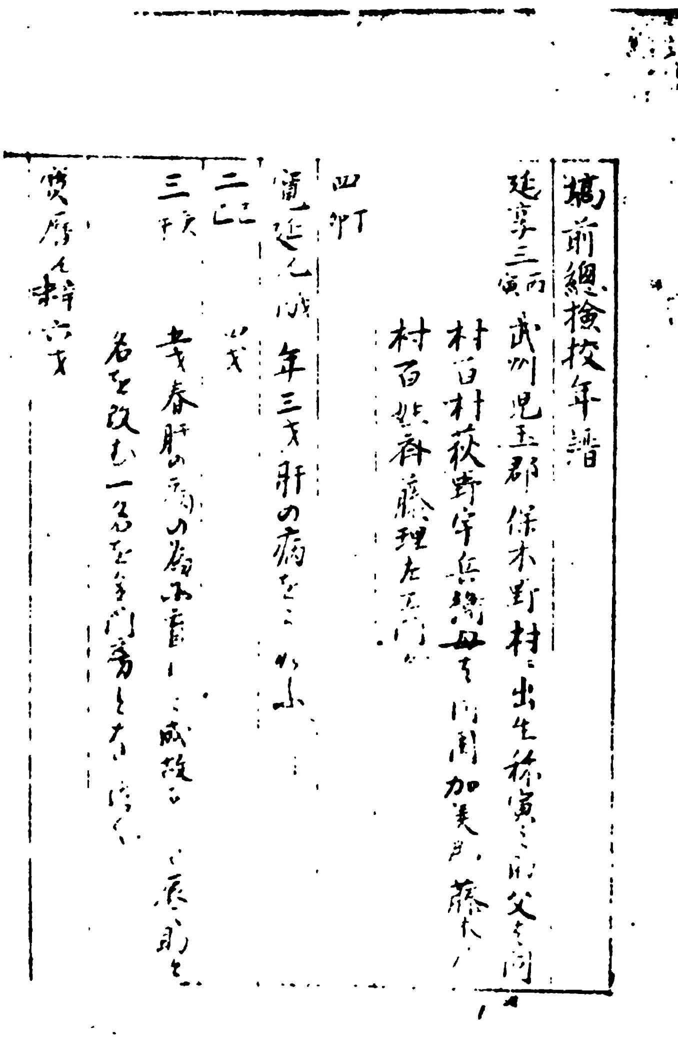
塙忠寶自筆　全一冊　金二十五圓

群書類從の編纂者として我が文敎史上不朽の名を垂れ、又盲人の學者としては單に我が國のみならず全世界の盲人のために一大氣焔を吐いた塙保己一の一代の經歷を年表風にその實子忠寶の記したものであります。塙保己一は晩年には總檢校として盲人最高の職に居り、又昌平坂學問所に對して半官立の國文學國史學大學とも云ふべき和學講談所の總長に當る地位に座し文政四年九月を以て死去致しましたが、喪を發したのは翌五年七月九日でありました此の年譜の起草せられたのは發喪後間もなくであつたらうと察せられます。世間流布の版本「前總檢校年譜」は皆此の忠寶自筆本半紙十六葉袋綴じ本の流れをくむものであります。

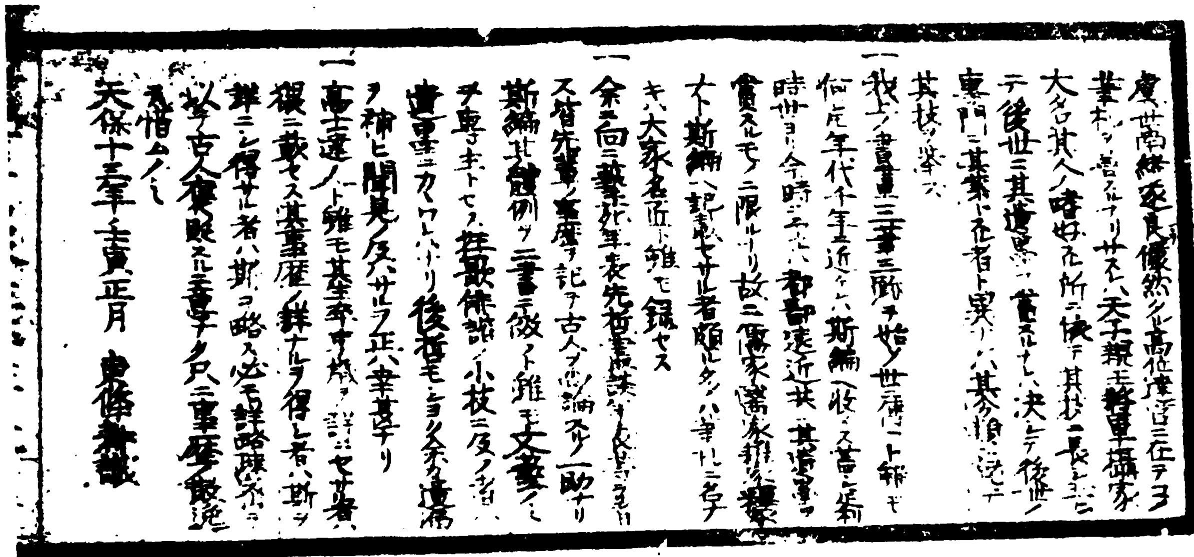
忠寶は塙保己一の子名は次郎、父の死後家を繼ぎ和學講談所御用掛を命ぜられ「南朝編年稿」「近世花押分類」「集古文書」等の著述多く、父の年譜の著者としての資格に於て欠くる所なき人物でありましたが、後、幕末の騷擾裡に誤解せられて浪士の暗殺する所となつて横死した氣の毒な人であります。

圖版第六十六號參照

第六十六圖　塙忠寶筆　塙検校年譜　巻頭



塙前總検校年譜
延享三丙寅　武州児玉郡保木野村ニ出生称寅之助父ハ同
村百姓荻野宇兵衛母ハ同国加美郡藤木
村百姓斎藤理左衛門か
四丁卯
寛延元戊辰　年三才肝の病なとわつらふ
二己巳
三庚午
七才春肝の病ゟ目不自由ニ成故ニ　辰之助と
名を改む一名を多門房となつく
宝暦元辛未　六才



慶世南緑逐良儼然タル高位ニ在テヨ
筆ヲ善クスルアリサスレハ天子親王縉紳書畫家
大名其人ノ嗜好アル所ニ依テ其技ニ長スルニ
テ後世ニ其遺墨ヲ賞スルナレハ決シテ後世ノ
專門ニ其業トナス者ト異リハ其分類ヲ説テ
其技ヲ察スヘシ
一 我上ノ書畫ニ三筆三蹟ヲ始メ世傳ニ一ト称セ
何ソ年代千年ニ近キハ斯編ニ收メス蓋シ綿
時世ヨリ今時ニ至テハ都鄙遠近其ノ其遺墨ヲ
賞スルモノニ限ルナリ故ニ儒家醫家緇流ノ輩モ
文ト斯編ニハ記載セサル者頗ル多シハ筆ナルニ名ア
キハ大家名匠ト雖モ錄セス
一 余ニ向ニ藝苑年表先哲叢談ヲ
ス皆先輩ノ事歴ヲ記ス古人ノ所論ス少ノ一助ナリ
斯編其體例ヲ二書ニ倣フト雖モ文章ノ
ヲ專ラ主トセス拾遺備話ノ小枝ニ及ノ
書畫ニカヽワレハナリ後世モ自ラ余カ遺漏
ヲ補ヒ聞見ノ及ハサルヲ正スハ幸甚ナリ
一 高士逸人ト雖モ其生卒ヲ詳ニセサル者
從ニ載セス其事歴ノ詳ナルヲ得ル者ハ斯ヲ
詳ニシ得サル者ハ斯ヲ略ス必モ詳略次ニ
以テ古人ヲ貶スルニ非ス只ニ事歴ノ徵證
ヲ惜ムノミ
天保十三年壬寅正月　東條耕識

第六十五圖　東條琴台　書畫名家年表草稿　凡例の一部

(62)

書畫名家年表　東條琴臺自筆稿本　全一冊　金五十圓

「藝苑年表」「先哲叢談續編」「經籍通志」「閑散餘筆」等の著者として知らるゝ越後高田の學者琴臺東條耕の自筆稿本。未だ上梓せられざる草稿であります。

縱三寸二分、横六寸四分の横長本で「書畫名家生卒年表」と柱書を印刷した用紙に階書で正確に書いて居り、書き誤りの所は上に貼紙にしてその上に改めて正しく記してあり、謹直精勵な琴臺の學風が思ひやられます。卷頭の凡例の中に

「斯編ハ四百年來ノ書畫ヲ弄玩スルニ其遺墨ヲ知レドモ其人ノ生卒ヲ知ズシテ時代懸隔ノ說ヲ成ス事マヽ有故ニ卒年享歲ヲ記シテ事ニ一代事歷ヲ示ス。サレト人人ニシテ是ヲ擧レバ斯小冊ノ盡ス所ニ有ザレバ尤モ名家大家ノミヲ記シテ其餘ハ卒年享歲ノミヲ記ス。一紙二十年ヅヽ有レバ卒年ヨリシテ當時ニ至ル間迄ヲ數ヘテ幾年以前ノ人ト云ヲ認得テ卒年ヨリ今ニテ何程ト云年月ヲ知ルヲ要トスルナリ………高士達人ト雖モ其生卒享歲ヲ詳ニセザル者ハ猥ニ載セズ。其事歷ノ詳ナルヲ得シ者ハ斯ヲ詳ニシ、得ザル者ハ斯ヲ略ス。必詳略疎密ヲ以テ古人ヲ褒貶スル意ナシ。只ニ事歷ノ逸散ヲ惜ムノミ」

とあります。本書内容の一端及び著者の態度を察知するに足りませう。此の凡例は「天保十三年壬寅正月　東條耕識」で書き綴つて居りますから、琴臺四十八才の時の作であり、その著「初學詩韻」が出版せられた年に當ります

本文三十六葉、索引十三葉、外に凡例と總目を附す。

圖版第六十五號參照

(61) 菊壽童霞盃　山本京山自筆草稿　四冊　金五十圓

縦五寸七分。横三寸八分。第四編第七編各上下二冊づゝ計四冊、齋藤雀志及び大野洒竹の舊藏書にして二印あり。題簽も原題簽にして、淡紅色の地紙に

菊童四編盃　京山作
(上)　山本版

としるせり、筆は種彦と異り、挿繪中の人物の描線も粗末なり。序文の末に

「天保七丙申仲冬脱稿全八丁酉秋上梓發兌」

と記せりと雖も、實際本編の刻成り賣り出されしは天保九年なり。何かの事情にて遲延せしものと見えたり。挿繪の畫工は當時大人氣の全盛をうたはれし國貞なり。著者京山が第七編の上卷の表紙裏に

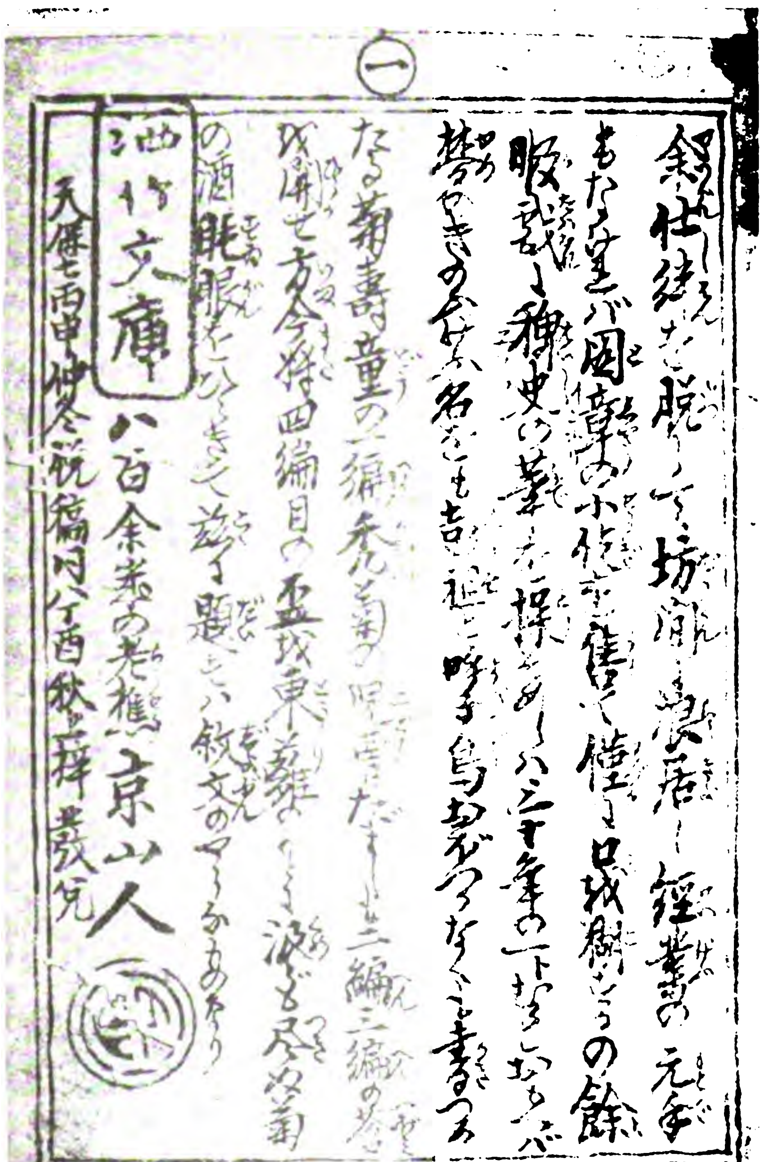
一、筆耕先生へ申上候、かなづかい、おをゑえいゐ　のるゐすべて下書の如くねがひ上候

二、國貞先生へ申上候、やくしやのやくわりよろしく御見立可被下候

と書きたるは筆耕に對する京山の自信と、一方國貞に對する遠慮氣象と兩つを示すものなるべし。

圖版第六十四號參照

第六十四圖　山東京山　菊壽童霞盃草稿　序文



釼仕緒を脱して坊間に浪居し經業の元手もたなき身は國字の小説を作て僅に口を餬するの餘暇戲に稗史の草を操ることハ二十年の下にあらねども八埜やきの名さへも古に[illegible]し呼子鳥おぼつかなくも書つゞるなる菊壽童の一編を[illegible]菊の[illegible]たゞましに二編三編の巻を追附せて方今将に四編目の盃を東雅に渡せども尽ぬ菊の酒眺眼をひらきて題とハ敍文のまゝなあるなり

八百余年の老樵　京山人

天保七丙申仲冬稿同八丁酉秋梓成



第六十三圖　十返舍一九　寓談小夜時雨草稿　内容の一部

（60）

寓談小夜時雨　十返舎一九自筆稿本　全一冊　金七十圓

縦五寸七分、横四寸の原稿紙に纖紙して縦六寸六分、横四寸一分。澁表紙に仕立てたり。舊藏者朝倉無聲の手になりし改裝なり。

一九は京傳などゝ共に繪に巧みなる作家にして自作の小說は多く自ら挿繪も描きたれど、此の篇の挿繪は畫工に囑したるものと見えたり。見返しに

「〇〇(二字不明)御方江御頼申上候、巻中の武者たてものの分は常の武者の如くまじめの人物におかき下され度候
ちやり顔あしく候、たゞし雑兵はちやり顔にても何でもよろしく候」

等の注意書をしるしたり。挿繪の略畫は勿論此の原稿中に各頁毎に在り、素人離れのせし彼の畫技を見るに足るべし。

巻頭の序文の末に、「文政亥孟陽日」とあれば仝十年の脱稿と見えたり。既に大作「膝栗毛」を完成し、大好評を博せし後の事なり。

梗概は檀の浦にて討死の平家の一門地獄に落ちたるが、清盛の連累として修羅餓鬼道の呵責を焔魔へ王より命ぜられ、却つて大王に謀反を起し、能登守教經を先頭として安德帝をもりたてゝ地獄の王城へ攻め寄せしかば、焔魔大王はじめ冥官、羅刹も色を失ひ魂を消して防備をはかるてう朗らかなユーモア多き軍物語なり。

此の作何等かの事情にて上梓を見ずしてやみたるか、「小說年表」「一九著作書目」類の流布のものには未收なり。此の一九らしき面白き短篇或ひは佚文なるべし。

圖版第六十三號參照

邯鄲諸國物語 播磨の卷

柳亭種彥
自筆草稿

二冊　金九十圓

「邯鄲諸國物語」は、全部で六七十種にも及ぶ種彥の創作中有名な「田舍源氏」と共に筆頭に位する代表作で、一部の文學史家（例へば高須梅溪氏の如き）は「田舍源氏」よりも遙かに上位にある作品となして居ります。結構に無理なく、筋の搬び老巧に、描寫も手馴れた名作であります。

縱五寸七分、橫三寸九分。表紙に〔[illegible]〕序文に［酒竹文庫］の二藏印があります。明治の二大藏書家齋藤雀志、大野酒竹のそれ〲舊藏だつたものです。

本文も挿繪も申すまでもなく種彥の自筆。はじめに序文が一頁あり、本文は第二頁からはじまります。挿繪の人の姿を細い描線で畫いて、その中へ朱で人物の衣服の模樣年輩格好等を詳しく註記し畫工に指圖して居ります。たとへば本草稿の本文第一頁に僧體の人物の繪を描きその中に

「さいみやうじ、かぶきいしやうでよかるべし。時賴年は四十にならぬで死んだ人也、老人にかゝばあやまり、三十少しうへぐらゐの人」

などと書いて居りますのは種彥の草稿に獨特の事で、彼の考證癖を窺ふに足る面白い所で、自筆本のみにしか見られぬ大きな興味です。繪も本文も貼り紙をして直した所の多いのは文豪苦心のあとがしのばれます。

圖版第六十二號參照



第六十二圖　柳亭種彦　邯鄲諸國物語草稿　內容の一部



第六十一圖　師宣畫美人づくし　内容の一部

(58)

美人盡

菱川師宣畫　天和二年刊　下巻一冊　金二十五圓

浮世繪の大成者であり浮世繪版書の開祖でもある菱川師宣の筆になつた百種に餘る版本の中でも、最も著名な代表作の一として喧傳さるゝ「美人盡」であります。惜むらくは上中の二冊を欠き下巻一冊を存するのみです。第廿七丁より第四十丁までを存し四十丁裏に刊記があります。

右此美人繪本つくし菱川氏之繪師書れたるを此集三冊
にして頃は彌生中旬さくらの木にちりはめて板行者也。
大和繪師菱川吉兵衛筆
天和三年亥五月吉日
江戸大傳馬三町目
鱗形屋板行

となつて居ります。萬治寛文の頃から挿繪に筆を執りはじめた此の日本最古最大の挿繪家の聲望が、天和に入つて全く確立された獨歩の地位を占め、其の名を冠した繪本が争つて世に迎へられた状況が此の短い刊記の中でもよく窺はれる様な氣が致します。繪は例の簡素にして勁い描線、他に比類なき筆致で、永く師宣風の範を垂れたものです。美濃判大本。

挿繪第六十一號參照

(57) 難　波　鶴　延寶七年刊　全一冊　金百二十圓

「難波鶴」は「難波雀」と略々同樣の小形横本、縱二寸九分、横六寸四分のものでありますが、その稀覯性に於て遙かに之れに勝り、「古版地誌解題」には未收であり、高木利太氏の「家藏地誌目錄」正編にも未載であり、今續編の成るに至つて漸く一本を載錄されたものであります。

刊年は仝じ延寶七年ですが「雀」より四ヶ月遲れの七月刊行で版元は大阪の京はん木屋伊右衞門とあります。當時は出版商を版木屋とも云つたものと見えます。著者は　難波隱士友竹翁　とあり、見返しに鶴の繪、序文の次に大阪惣圖あり、その裏に大阪城の繪を掲げて居り、卷中にも十ヶ所に渉つて挿繪を入れ、之れにやゝ滑稽味を帶びた繪詞を付して居ります。

「『鶴』は同じ年七月に開板され、內容ほゞ同一なるに拘はらず板木は全く別に刻まれてある」と「家藏地誌目錄」續編にしるしてありますが、內容が三百年前の大阪商工業案內である點は「雀」と一致しますが、挿繪の多い事も前述の如くであり、記事は著るしく增補されて居て「雀」の紙數八十九葉なるに對し、鶴は百三十葉であり、目次の項數も百五十項から二百四十三項に殖えて居りますから、一概に「ほゞ同一」で片附けるのも如何かと思はれます。

卷頭及び卷末に　福田文庫　及び達摩屋五一の舊藏印を留めて居ります。

圖版第六十號參照



第六十圖　延寶七年刊　難波鶴　内容の一部



第五十九圖　延寶七年刊　難　波　雀　內容の一部

難波雀　延寶七年刊　全一冊　金四十五圓

此の種案內本中最古のものとして知られ、又三百年前の大阪の商工業を知る好個の資料とさるゝ「難波雀」については、暫く和田萬吉博士の「古版地誌解題」よりの引用によつて說明に代へさせて戴きませう。

「水雲子撰、延寶七年刊、揷圖、製本小形橫本、竪二寸七分、橫六寸四分。每頁行數字數不定、紙數八十八葉。大阪商工業界の案內なり。延寶七年己未陽月下旬吉備國水雲子の序あり。卷首に大阪城圖一頁あり、次に目次百五十項を擧けたり。

書中收むる所は、城代、城番、町奉行、其の他諸奉行の人名、諸國邸第の所在、留守居、名代、藏元、用聞の人名を記し、次に諸侯船印、諸國船の居場、大阪總船數…(一行略)…京佐物買問屋、長崎問屋、江戸買物問屋其の他紙木棉、布、きわた、煙草、塩、煎茶、木蠟、薪炭、疊表、藍玉、材木、燒物、ほしか、生魚、塩、魚、鳥、鰹節、八百屋物等の諸問屋の名を列ね、次に凡百の商品を伊呂波別にして主たる商店を擧げ…(二行略)…次に醫師、歌學者、連歌師、俳諧點者、講釋師、手跡家、其他諸藝家、次に町瑠璃、能役者、檢校、句當、風呂屋等より遊廓人員、芝居主等を擧けたり。當時の大阪市制及び經濟狀態を概見するに最も簡捷なるものなり。

現本卷末一二張缺脫し奧付の有無を知る能はず。」

その通りであります。只異る所は此の書は卷末に欠落なき完本で、卷末に　延寶七己未歲三月吉日　京堀川　小島屋長右衛門　大阪しんさい橋筋　古本屋淸右衛門　の刊記ある一葉を存するため總紙數が四十九葉に殖えて居る點と、卷頭の大阪城がなく、その代りに松竹梅に鶴龜の賀圖と大阪惣圖一葉を附して居る點であります。高木文庫藏の一本も大阪惣圖を附して居りますから、之れが正しい形ではないかと思はれます。兎に角大阪古地誌中でも尤品の一であります。裏打本。

圖版第五十九號參照



第六十三圖　十返舍一九　寓談小夜時雨草稿　内容の一部

（60）

寓談小夜時雨　十返舍一九自筆稿本　全一册　金七十圓

縱五寸七分、横四寸の原稿紙に繼紙して縱六寸六分、横四寸一分。澁表紙に仕立てたり。舊藏者朝倉無聲の手になりし改裝なり。

一九は京傳などゝ共に繪に巧みなる作家にして自作の小說は多く自ら挿繪も描きたれど、此の篇の挿繪は畫工に囑したるものと見えたり。見返しに

「〇〇(二字不明)御方江御頼申上候、卷中の武者たてものの分は常の武者の如くまじめの人物におかき下され度候ちやり顔あしく候、たゞし雜兵はちやり顔にても何でもよろしく候」

等の注意書をしるしたり。挿繪の略畫は勿論此の原稿中に各頁每に在り、素人離れのせし彼の畫技を見るに足るべし。

卷頭の序文の末に、「文政亥孟陽日」とあれば仝十年の脫稿と見えたり。既に大作「膝栗毛」を完成し、大好評を博せし後の事なり。

梗概は檀の浦にて討死の平家の一門地獄に落ちたるが、淸盛の連累として修羅餓鬼道の呵責を焔魔大王より命ぜられ、却つて大王に謀反を起し、能登守教經を先頭として安徳帝をもりたてゝ地獄の王城へ攻め寄せしかば、焔魔大王はじめ冥官、羅刹も色を失ひ魂を消して防備をはかるてう朗らかなユーモア多き軍物語なり。

此の作何等かの事情にて上梓を見ずしてやみたるか、「小說年表」「一九著作書目」類の流布のものには未收なり。此の一九らしき面白き短篇或ひは佚文なるべし。

圖版第六十三號參照

邯鄲諸國物語 播磨の巻

柳亭種彦
自筆草稿

二冊　金九十圓

「邯鄲諸國物語」は、全部で六七十種にも及ぶ種彦の創作中有名な「田舍源氏」と共に筆頭に位する代表作で、一部の文學史家（例へば高須梅溪氏の如き）は「田舍源氏」よりも遙かに上位にある作品となして居ります。結構に無理なく、筋の搬び老巧に、描寫も手馴れた名作であります。

縱五寸七分、横三寸九分。表紙に[illegible]序文に［酒竹文庫］の二藏印があります。明治の二大藏書家齋藤雀志、大野酒竹のそれ／＼舊藏だつたものです。

本文も挿繪も申すまでもなく種彦の自筆。はじめに序文が一頁あり、本文は第二頁からはじまります。挿繪の人の姿を細い描線で書いて、その中へ朱で人物の衣服の模樣年輩格好等を詳しく註記し畫工に指圖して居ります。たとへば本草稿の本文第一頁に僧體の人物の繪を描きその中に

「さいみやうじ、かぶきいしやうでよかるべし。時賴年は四十にならぬで死んだ人也、老人にかゝばあやまり、三十少しうへぐらゐの人」

などと書いて居りますのは種彦の草稿に獨特の事で、彼の考證癖を窺ふに足る面白い所で、自筆本のみにしか見られぬ大きな興味です。繪も本文も貼り紙をして直した所の多いのは文豪苦心のあとがしのばれます。

圖版第六十二號參照



第六十二圖　柳亭種彦　邯鄲諸國物語草稿　內容の一部



第六十一圖　師宣畫美人づくし　内容の一部

(58) 美人盡

菱川師宣畫
天和二年刊

下巻一册　金二十五圓

浮世繪の大成者であり浮世繪版畫の開祖でもある菱川師宣の筆になつた百種に餘る版本の中でも、最も著名な代表作の一として喧傳さるゝ「美人盡」であります。惜むらくは上中の二册を欠き下巻一册を存するのみです。第廿七丁より第四十丁までを存し四十丁裏に刊記があります。

右此美人繪本つくし菱川氏之繪師書れたるを此集三册にして頃は彌生中旬さくらの木にちりはめて板行者也。
大和繪師菱川吉兵衛筆
天和三年亥五月吉日
江戸大傳馬三町目
鱗形屋板行

となつて居ります。萬治寛文の頃から挿繪に筆を執りはじめた此の日本最古最大の挿繪家の聲望が、天和に入つて全く確立された獨歩の地位を占め、其の名を冠した繪本が爭つて世に迎へられた状況が此の短い刊記の中でもよく窺はれる様な氣が致します。繪は例の簡素にして勁い描線、他に比類なき筆致で、永く師宣風の範を垂れたものです。美濃判大本。

挿繪第六十一號參照

(57) 難波鶴　延寶七年刊　全一冊　金百二十圓

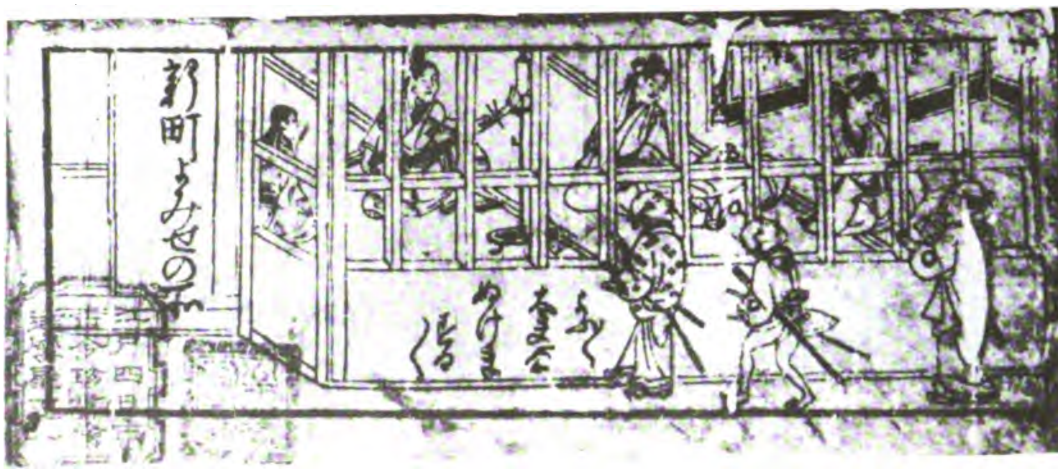
「難波鶴」は「難波雀」と略々同様の小形横本、縦二寸九分、横六寸四分のものでありますが、その稀覯性に於て遙かに之れに勝り、「古版地誌解題」には未收であり、高木利太氏の「家藏地誌目錄」正編にも未載であり、今續篇の成るに至つて漸く一本を載錄されたものであります。

刊年は全じ延寶七年ですが「雀」より四ヶ月遲れの七月刊行で版元は大阪の京はん木屋伊右衛門とあります。當時は出版商を版木屋とも云つたものと見えます。著者は　難波隱士友竹翁　とあり、見返しに鶴の繪、序文の次に大阪惣圖あり、その裏に大阪城の繪を揭げて居り、卷中にも十ヶ所に涉つて挿繪を入れ、之れにやゝ滑稽味を帶びた繪詞を付して居ります。

「『鶴』は同じ年七月に開板され、內容ほゞ同一なるに拘はらず板木は全く別に刻まれてある」と「家藏地誌目錄」續編にしるしてありますが、內容が三百年前の大阪商工業案內である點は「雀」と一致しますが、挿繪の多い事も前述の如くであり、記事は著るしく增補されて居て「雀」の紙數八十九葉なるに對し、鶴は百三十葉であり、目次の項數も百五十項から二百四十三項に殖えて居りますから、一概に「ほゞ同一」で片附けるのも如何かと思はれます。

卷頭及び卷末に　福田文庫　及び達摩屋五一　の舊藏印を留めて居ります。

圖版第六十號參照



第六十圖　延寶七年刊　難波鶴　内容の一部



第五十九圖　延寶七年刊　難　波　雀　內容の一部

難　波　雀　　延寶七年刊　全一冊　金四十五圓

此の種案内本中最古のものとして知られ、又三百年前の大阪の商工業を知る好個の資料とさるゝ「難波雀」については、暫く和田萬吉博士の「古版地誌解題」よりの引用によつて説明に代へさせて戴きませう。

「水雲子撰、延寶七年刊、挿圖、製本小形横本、竪二寸七分、横六寸四分。毎頁行數字數不定、紙數八十八葉。大阪商工業界の案内なり。延寶七年己未陽月下旬吉備國水雲子の序あり。卷首に大阪城圖一頁あり、次に目次百五十項を擧げたり。

書中收むる所は、城代、城番、町奉行、其の他諸奉行の人名、諸國邸第の所在、留守居、名代、藏元、用聞の人名を記し、次に諸侯船印、諸國船の居場、大阪總船數…(一行略)…京俵物買問屋、長崎問屋、江戸買物問屋其の他紙木棉、布、きわた、煙草、塩、煎茶、木蠟、薪炭、疊表、藍玉、材木、燒物、ほしか、生魚、塩、魚、鳥、鰹節、八百屋物等の諸問屋の名を列ね、次に凡百の商品を伊呂波別にして主なる商店を擧げ…(二行略)…次に醫師、歌學者、連歌師、俳諧點者、講釋師、手跡家、其他諸藝家、次に町瑠璃、能役者、檢校、句當、風呂屋等より遊廓人員、芝居主等を擧げたり。當時の大阪市制及び經濟狀態を概見するに最も簡捷なるものなり。

現本卷末一二張缺脱し奧付の有無を知る能はず。」

その通りであります。只異る所は此の書は卷末に欠落なき完本で、卷末に　延寶七己未歳三月吉日　京堀川　小島屋長右衛門　大阪しんさい橋筋　古本屋淸右衛門　の刊記ある一葉を存するため總紙數が四十九葉に殖えて居る點と、卷頭の大阪城がなく、その代りに松竹梅に鶴龜の賀圖と大阪惣圖一葉を附して居る點であります。

高木文庫藏の一本も大阪惣圖を附して居りますから、之れが正しい形ではないかと思はれます。兎に角大阪古地誌中でも尤品の一であります。裏打本。

圖版第五十九號參照

（前頁よりつゞく）

延寶六年午正月吉辰　　　通油町有之

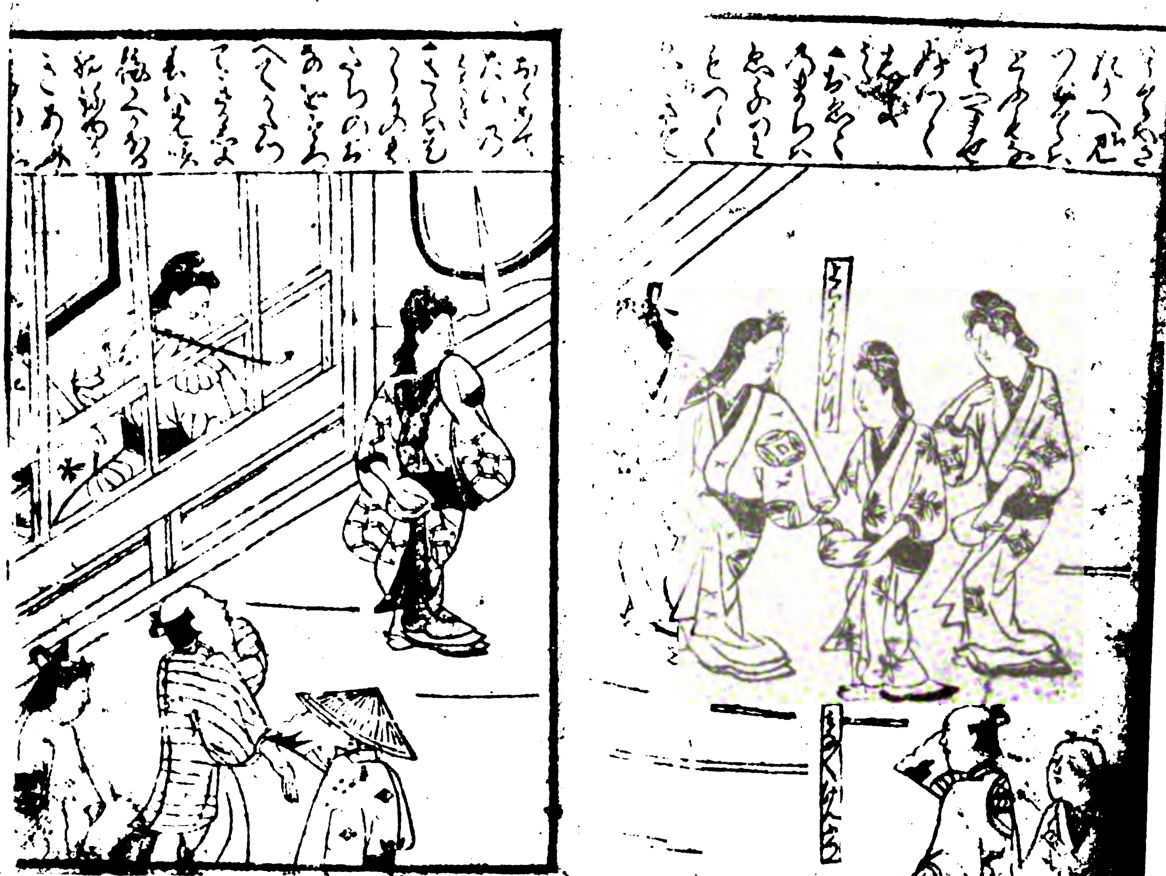
とあります。書肆名は記して居りませんが「江戸雀」「さん茶評判胡椒頭巾」等を刊行して居る鶴屋喜右衛門の板だらうと想像致します。丁數は全部で三十七丁、第一丁に［津國四大山房］の黒印［本小西圖書］の朱印を捺して居ります。挿繪は見通しの大繪六葉あり、筆者は菱川師宣だと信じられますが署名はありません。繪の上段にはそれ〴〵吉原の小唄をしるして居りますのは珍とするに足りませう。本文の內容ははじめに

「それぬれ道のおもき事は今いふもさらなれど、ちはやふるちはの初は神代のむかし二柱の御神」

云々にはじまる序文三頁を卷頭にし、次に目錄一頁あり、第三丁表より本文に入り、筆頭は二丁目俵屋內常世の評にはじまり、第卅三丁表井筒屋內染川の事で筆を納めて居ります。すぐその後に續いて「吉原戀の長歌」として一頁を上下四段に仕切つて、古今和歌集などの長歌の體裁にならつたふざけた長歌を書きしるす事約四頁、最後に「作者立波書」と署名して居ります。「戀の長歌」の次に正月、盆、節句などの際の廓中の心附の仕方を三頁にわたつて記し、その間に見通しの繪一葉を入れて居ます。作者が立波である事は明かですが、立波が何人であるか明かでありません。雛屋立甫など多少關係のある人物かも知れません。

「鏡ヶ池」については他書に記載なしとは云へ種彥の書目には書名だけは記して居ますが、本書へ到つては完全に佚書だつたもので、その發見は、江戸文藝資料として、又日本挿繪史上の一資料として幾多の波紋を起すべき重要作であり、その稀覯なる點に於て「鏡ヶ池」と共に全く天下一品であります。

圖版第五十七號は卷頭を、仝第五十八號は挿繪の一部を御眼にかけて居ります。



第五十八圖　延寶六年刊　山茶よし垣　挿繪の一部



第五十七圖　延寶七年刊　山茶よし垣　卷頭

（55）
山茶よし垣　延寶六年刊　全一冊　金三百圓

「吉原鏡ヶ池」の收載によつて多年名のみ知られて實在を知られなかつた稀本の、まぎれもない完本の實在を皆様に御報告をし、新資料の提供にひそかな喜びとさゝやかな誇りを持つ事が出來ました筆者は、此處に「山茶よし垣」と云ふ大珍本、柳亭種彦も知らず、此の斯學の研究者の何人もが書名だも知らず、見もせず、刊行以來三百年近くの間殆んど全く世に埋められて來た稀代の珍本「山茶よし垣」を御紹介致します事を此の上ない名譽とし光榮と存じて居ります。

吉原傾城の一種である山茶（又は散茶）女郎の評判記としては延寶三年刊の「山茶やぶれ笠」があり、仝八年刊の「さんちや評判胡椒頭巾」があり、仝九年刊の「三茶三幅一對」があります。「よし垣」はその刊年の古さに於て「やぶれ笠」につぎ「胡椒頭巾」に先立ち「吉原書籍目録」に新しい數十行を加ふべきものであります。

體裁は縱六寸五分、横四寸五分。前掲の「吉原鏡ヶ池」と共に中本の部類に入りますが、精密に云へば縱は四分だけ長く、横は全く同じであります。

原題簽を有せず、古い丹表紙の上の左肩に［山茶よし垣］と云ふ書き題簽を留めて居ります。四周單邊、邊内は縱五寸五分強、横四寸弱。半葉十四行、一行二十三四字、柱書は丁數を記して居るだけです。内題は「山茶よし垣」とハッキリと記し、刊記は

（次頁へつゞく）

（前頁よりつゞく）

とあります。挿繪は菱川師宣風の見通しの大繪が五ヶ所にあります。

此の書を古佚書「鏡ヶ池」なりとする根據は序文の中に

「いかにもほの菊の淵深き事はしらねども、淺草川の流れの君を某も筆にすみだ川を染て鏡ヶ池と名付て先書を二丁立のはしり書にしるし置きぬ。たよりあらば見せしめて板にをこしたや………（中略）………法師に見せしめしに女郎のよしあしを書きうつす水ぐきの淺きふかきをよつくしろみのかゝみが池とはけにさる事」

云々とあるによつて知られます。又種彥の擧げた「五十四君」（即ち「吉原源氏五十四君」）の記事と符合する點としては、本書十一丁表から裏にかけて薄雲のあらそひの件をしるし、又第三十一丁裏に「つねよ」の事を「面體よけれども、あばたのおはします事きのどく」と書いて居る事によつて完全に一致する事が知られます。

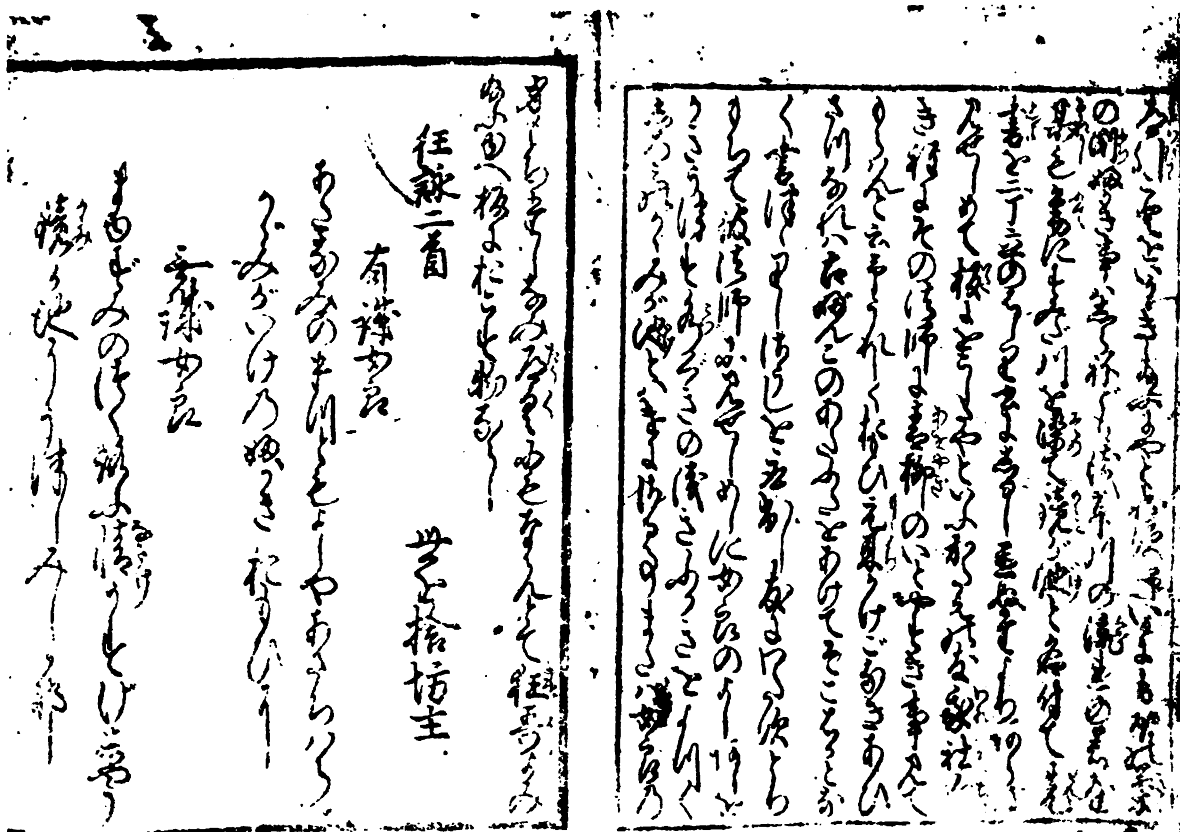
著者は、多くの此の種の本と共に明かでありませんが、序文の末に「世を捨坊主」と署名し、又跋文の最後に、

「流石筆者商人のそだちなれば、こゝに日本提をさす長刀しやんとしたるぶしの道はしらずしたの長袖なる評判貴賤女郎をしなべてこれ勘忍して下されと拔に筆を添え申す、干時天和第三の年今月今日むかしはまつわう猿のいたづらひつかきちらす物ならし」

とありますから、賣文者流の筆でなく所謂「お町知り」なる通人の筆のすさびでせう。

本は少しつかれて居りまして、つまみの所は字の少し讀みとれぬ所が一個所あります。しかし外にはない貴重な資料として内容も挿繪も共に愼重な研究に値するものですから少しの缺點は御我慢願はねばなりません。

圖版第五十五號は挿繪の一部を、仝第五十六號は本文の一部を示して居ります。



第五十六圖　天和三年刊　吉原鏡ケ池　本文の一部



第五十五圖　天和三年刊　吉原鑑ヶ池　挿繪の一部

(54) **吉原鏡ヶ池** 天和三年刊 全一冊 金三百圓

古吉原評判記の一なる此の書は未だ曾つてその存在を知られたる事なき稀覯書であり、筆者の信ずる所によれば天下一本の珍書であります。

此の方面での權威者たる柳亭種彦の「吉原書籍目錄」には此の書について次の如く記載して居ります。

「鏡ヶ池
　未見。『五十四君』の引書に見えたれば貞享のはじめの印本なるべし。また寶永の初めの印本に『鏡ヶ池』と云ふ讀本あり」

即ち考證好きで且博覧を以つて鳴る種彦も此の書は見て居ないのであります。その後今日までのどの書目にも、又どの學者の記述にも嘗つて此の書に言及したものはなく、况んや複製、飜刻せられた事もなく完全に佚書として取り扱はれて來たものであります。

大さは縦六寸一分强、横四寸五分。四周單邊。印面縦五寸强、横三寸九分弱の中本で、毎半葉十五行、各行二十三四字から五六字詰。總紙數三十三葉の完本であります。表紙は丹色の美事なものでその上に巾三寸長さ五寸にも餘る大きな原題簽の半ばを留めて居ります。內題はありません。中味は最初序文が一丁半あり、第二丁裏から本文がはじまり、第三十二丁の表までつゞき、第三十二丁の裏と第三十三丁の表に、二頁にわたつて跋文があり最後に、

霜月吉祥日　堺町正本屋
十右衛門板行

（次頁へつゞく）

（53）

火浣布略說

平賀源內著
明和二年刊

全一册　金四十五圓

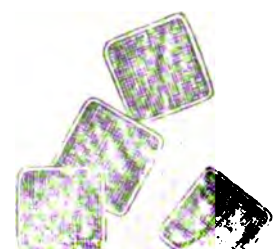
奇才平賀源內は戲作家として、又物產家として特筆さるべきのみならず、發明家として日本發明史上特異の地步を占むべき天才であります。此の書は此の天才が、古來名のみ傳へて實物を傳へぬので、「竹取物語」の中でも得難きものの例として擧げられた火鼠の裘即ち火浣布を發明した記錄でありまして、明和二年に刻なり、彼自身の記する所によれば翌三年來朝のオランダの甲比丹ヤンガランス及び書記ヘンデレキ、デュルコヲフを驚嘆せしめたものであります。

此の書は半紙判十七葉の小册子ではありますが此の火浣布即ちアスベストスの性質と製法と、之れに關する古來の文獻とは漏らす所なく擧げて解說され、發明文獻史上沒却すべからざる重要著作であります。何の故か古來流布甚だ少く、同じ人の筆になる「物類名呼」などゝ趣きを殊にし曾つては百數十金の高値を唱へました。幸に保存よき一本を手に入れて比較的廉價に御提供出來ます事を喜びと致します。

圖版第五十四號參照

火浣布略說

火浣布隔火乃圖



火浣布隔火包紙の圖

火浣之布。自古有名。彼妄造説。臆度意量
木皮斯謂。鼠毛南荒。或果誣理。謂婦者妄
滓漠造物。寧可推窮。陽中有陰。陰中有陽
入火不化。桑能制剛。昔彼西戎。今我
東方。織成素穀。遡以銀鍊。一片隔火。百往
衛香。詩堂清供。繡房風情。
明和甲申秋八月
大日本讃岐　鳩溪平賀國倫創製

白隔火五枚。公に奉る。十月中旬　官より清人へ
長崎へ贈り給ける。十一月下旬長崎より
呈し来るよし。　官より寫賜る。

第五十四圖　火浣布略說　內容の一部



第五十七圖　延寶七年刊　山茶よし垣　巻頭

(55)

山茶よし垣　延寶六年刊　全一冊　金三百圓

「吉原鏡ヶ池」の收載によつて多年名のみ知られて實在を知られなかつた稀本の、まぎれもない完本の實在を皆様に御報告をし、新資料の提供にひそかな喜びとさゝやかな誇りを持つ事が出來ました筆者は、此處に「山茶よし垣」と云ふ大珍本、柳亭種彦も知らず、此の斯學の研究者の何人もが書名だも知らず、見もせず、刊行以來三百年近くの間殆んど全く世に埋められて來た稀代の珍本「山茶よし垣」を御紹介致します事を此の上ない名譽とし光榮と存じて居ります。

吉原傾城の一種である山茶（又は散茶）女郎の評判記としては延寶三年刊の「山茶やぶれ笠」があり、仝八年刊の「さんちや評判胡椒頭巾」があり、仝九年刊の「三茶三幅一對」があります。「よし垣」はその刊年の古さに於て「やぶれ笠」につぎ「胡椒頭巾」に先立ち「吉原書籍目錄」に新しい數十行を加ふべきものであります。

體裁は縦六寸五分、横四寸五分。前掲の「吉原鏡ヶ池」と共に中本の部類に入りますが、精密に云へば縦は四分だけ長く、横は全く同じであります。

原題簽を有せず、古い丹表紙の上の左肩に[山茶よし垣]と云ふ書き題簽が留めて居ります。四周單邊、邊內は縦五寸五分强、横四寸弱。半葉十四行、一行二十三四字、柱書は丁數を記して居るだけです。內題は「山茶よし垣」とハツキリと記し、刊記は

（次頁へつゞく）

（前頁よりつゞく）

とあります。挿繪は菱川師宣風の見通しの大繪が五ヶ所にあります。

此の書を古佚書「鏡ヶ池」なりとする根據は序文の中に

「いかにもほの菊の淵深き事はしらねども、淺草川の流れの君を某も筆にすみだ川を染て鏡ヶ池と名付て先書を二丁立のはしり書にしるし置きぬ。たよりあらば見せしめて板にをこしたや………(中略)………法師に見せしめしに女郎のよしあしを書きうつす水ぐきの淺きふかきをよつくしろみのかゝみが池とはけにさる事」

云々とあるによつて知られます。又種彦の擧げた「五十四君」（即ち「吉原源氏五十四君」）の記事と符合する點としては、本書十一丁表から裏にかけて薄雲のあらそひの件をしるし、又第三十一丁裏に「つねよ」の事を「面體よけれども、あばたのおはします事きのどく」と書いて居る事によつて完全に一致する事が知られます。

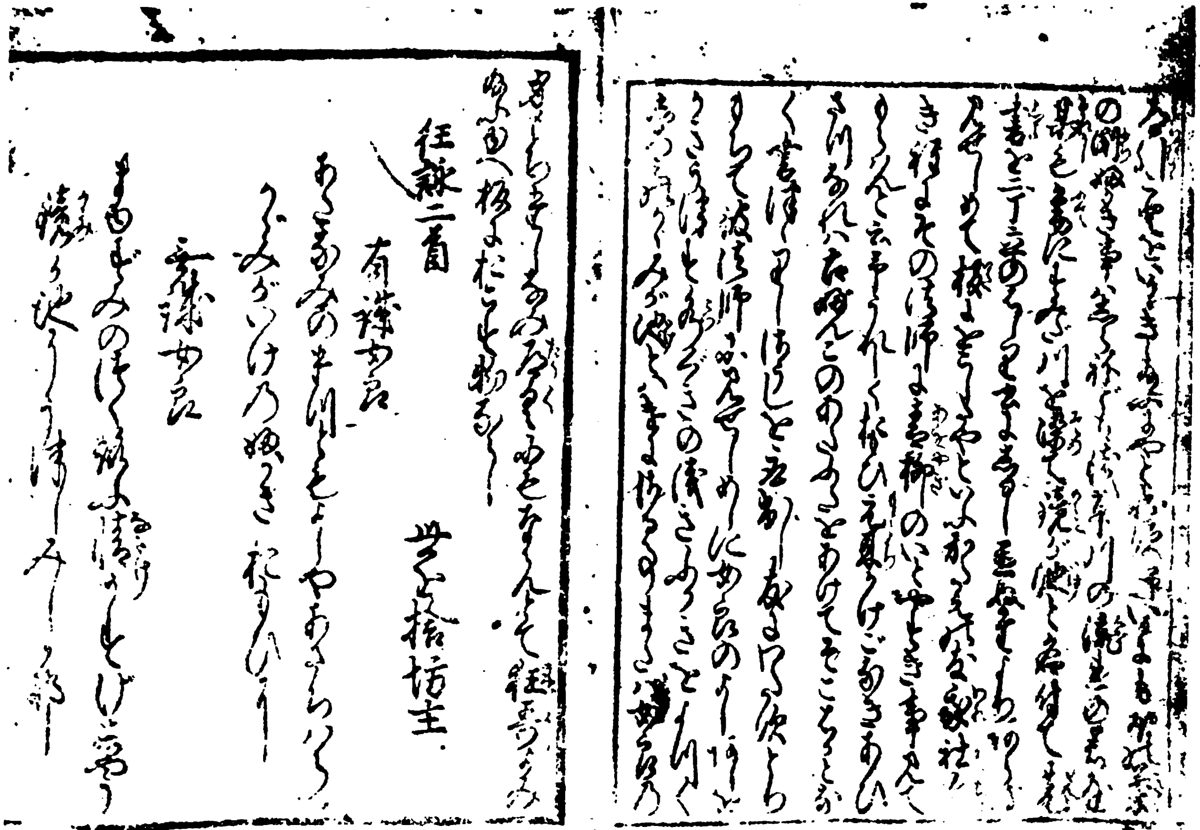
著者は、多くの此の種の本と共に明かでありませんが、序文の末に「世を捨坊主」と署名し、又跋文の最後に、

「流石筆者商人のそだちなれば、こゝに日本提をさす長刀しやんとしたるぶしの道はしらずしたの長袖なる評判貸賤女郎をしなべてこれ勘忍して下されと拔に筆を添え申す、干時天和第三の年今月今日むかしはまつわう猿のいたづらひつかきちらす物ならし」

とありますから、賣文者流の筆でなく所謂「お町知り」なる通人の筆のすさびでせう。

本は少しつかれて居りまして、つまみの所は字の少し讀みとれぬ所が一個所あります。しかし外にはない貴重な資料として內容も挿繪も共に愼重な研究に値するものですから少しの缺點は御我慢願はねばなりません。

圖版第五十五號は挿繪の一部を、全第五十六號は本文の一部を示して居ります。



第五十六圖　天和三年刊　吉原鏡ヶ池　本文の一部



第五十五圖　天和三年刊　吉原鏡ヶ池　挿絵の一部

吉原鏡ヶ池　天和三年刊　全一冊　金三百圓

古吉原評判記の一なる此の書は未だ曾つてその存在を知られたる事なき稀覯書であり、筆者の信ずる所によれば天下一本の珍書であります。

此の方面での權威者たる柳亭種彦の「吉原書籍目錄」には此の書について次の如く記載して居ります。

「鏡ヶ池
未見。『五十四君』の引書に見えたれば貞享のはじめの印本なるべし。また寶永の初めの印本に『鏡ヶ池』と云ふ讀本あり」

即ち考證好きで且博覽を以つて鳴る種彦も此の書は見て居ないのであります。その後今日までのどの書目にも、又どの學者の記述にも嘗つて此の書に言及したものはなく、況んや複製、飜刻せられた事もなく完全に佚書として取り扱はれて來たものであります。

大さは縱六寸一分强、横四寸五分。四周單邊。印面縱五寸强、横三寸九分弱の中本で、毎半葉十五行、各行二十三四字から五六字詰。總紙數三十三葉の完本であります。表紙は丹色の美事なものでその上に巾三寸長さ五寸にも餘る大きな原題簽の半ばを留めて居ります。內題はありません。中味は最初序文が一丁半あり、第二丁裏から本文がはじまり、第三十二丁の表までつゞき、第三十二丁の裏と第三十三丁の表に、二頁にわたつて跋文があり最後に、

霜月吉祥日　　堺町正本屋
　　　　　　　十右衛門板行

（次頁へつゞく）

(53)

火浣布略説

平賀源内著
明和二年刊

全一册

金四十五圓

奇才平賀源内は戯作家として、又物産家として特筆さるべきのみならず、發明家として日本發明史上特異の地步を占むべき天才であります。此の書は此の天才が、古來名のみ傳へて實物を傳へぬので、「竹取物語」の中でも得難きものの例として擧げられた火鼠の裘即ち火浣布を發明した記錄でありまして、明和二年に刻なり、彼自身の記する所によれば翌三年來朝のオランダの甲比丹ヤンガランス及び書記ヘンデレキ、デユルコヲフを驚嘆せしめたものであります。

此の書は半紙判十七葉の小册子ではありますが此の火浣布即ちアスベストスの性質と製法と、之れに關する古來の文獻とは漏らす所なく擧げて解說され、發明文獻史上沒却すべからざる重要著作であります。何の故か古來流布甚だ少く、同じ人の筆になる「物類名呼」など〻趣きを殊にし曾つては百數十金の高値を唱へました。幸に保存よき一本を手に入れて比較的廉價に御提供出來ます事を喜びと致します。

圖版第五十四號參照

火浣布略說

火浣布隔火乃圖

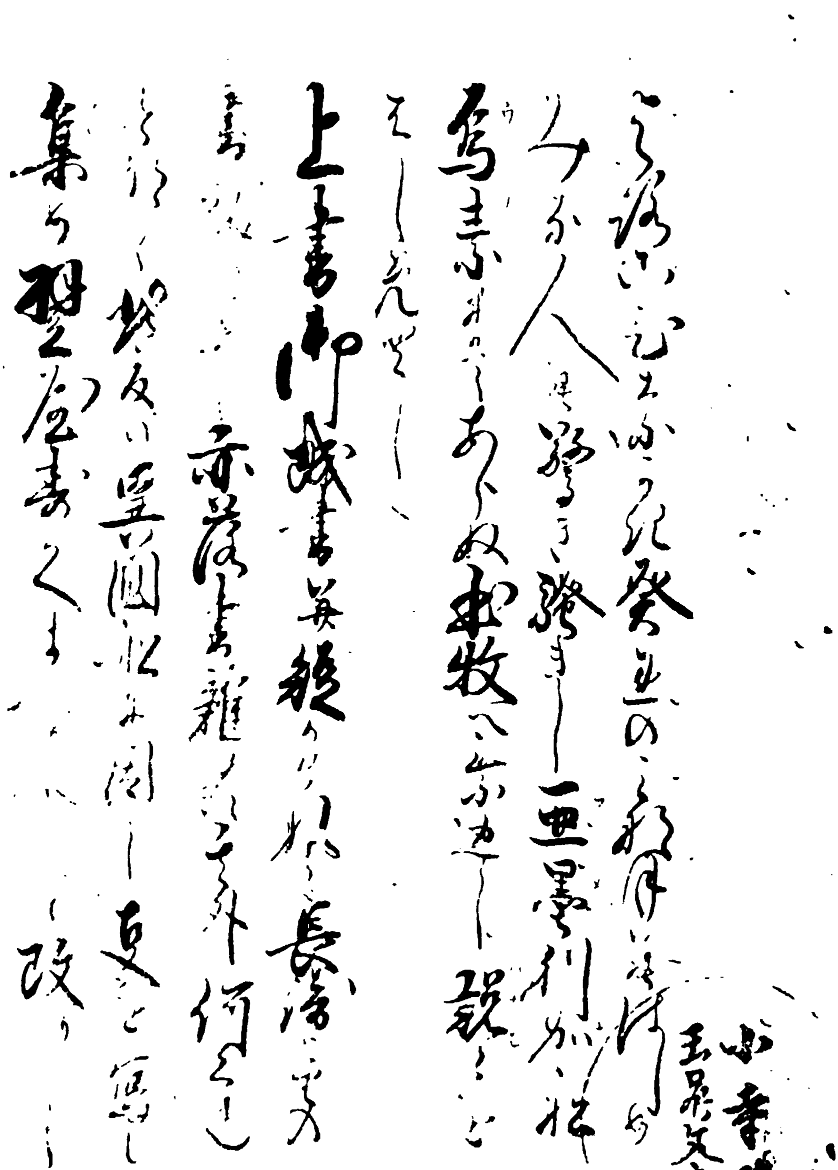


火浣布隔火包紙の圖

火浣之布。自古有名。彼妄造說。臆度意見
木皮斯謂。鼠毛南荒。或果誣理。謂博者妄
摩湛造物。寧可推窮。陽中有陰。陰中有陽
入火不化。柔能制剛。昔彼西戎。今我
東方。織成素縷。週以銀鑲。一片隔火。百炷
御香。消堂清供。繡房風情。
明和甲申秋八月
大日本讚岐　鳩溪平賀國倫創製

右隔火五枚。公に奉る。十月中旬　官より
長崎へ照會給けり。十一月下旬長崎より清人へ
呈状来るよし。　官より寫賜る。

第五十四圖　火浣布略說　內容の一部



第五十三圖　小寺玉晁自筆　異船雜說集　卷頭

(52) 丑寅 **異船雜說集**　小寺玉晁自筆　全一冊　金十五圓

名古屋の大藏書家として知られた小寺玉晁の自輯自筆の幕末擾亂時の聞書であります。數枚の挿繪が入つて居ります。流石に玉晁は畫家だけに生彩ある描寫です。卷頭に序文あり

「よろこひなかき癸丑のみた月のはしめみな人の驚き騒きし亞墨利加船烏素(ウソ)にあらぬ本牧へ乘り込し說(ハナシ)をはしめとし上書御城書幷短かければ長崎よりの書翰の寫し亦落書雜談其外何くれとなく此度の異國船に因し事を寫し集め、翌やすくまつりこと改りしきのえとらの二年のあひの事をしるし置ぬれば、寅丑異國雜說集となつけしなり。

干時安政ふたつきのとの卯一月のなかは　珍文館誌

即ちペルリの初度來朝の嘉永六年丑年から翌安政元年寅年の異國船關係の記事をあつめたから寅丑異船雜說集と云ふのだと云ふ說明であります。誌しましたのが翌安政二年の事ですから生々しい印象をそのまゝ書いたものとして興あるものです。

卷頭に　小寺姓玉晁文庫　の黑の藏印があります。全紙數八十四葉。

圖版第五十三號參照

査祆記錄

切支丹組屋敷役所日記　　寫本全一冊　　金百圓

シヽリヤ生れの轉び切支丹、岡本三右衛門ことジヨセフキアラ等の伴天連五人は寛永二十年に殉教の堅き決心の下にマニラから日本に潜入しましたが直ちに捕へられ、果敢なくも皆轉宗して日本切支丹史上「未曾有の背教」たる記錄(レコード)をつくりました。彼等は棄教後小石川小日向町の切支丹屋敷に住はせられ、あるものは日本人の妻を娶り、皆何程かの扶持を給せられて天命を終りましたが、その內でも切支丹宗門改役の御用を勤めて四十二年間も生きのび八十四才で沒した岡本三右衛門の名は最も著名で日本歴史上でも特異の存在であります、切支丹屋敷住中の此の三右衛門等の事を記した根本的の殆んど唯一の史料は「査祆記錄」一冊で、夙にその完本一冊殘欠一冊の存在が黑川家の書庫に知られ「續々群書類從」第十二卷宗敎部に收載されて學界を裨益して居りますが、此處に掲げましたものは、即ち此の「續々群書類從」本の原本たる黑川氏舊藏本の完本の方でありまして、現在知られたる範圍に於ては、寛文十二年乃至元祿四年の二十年間の切支丹屋敷の唯一の貴重記錄の原本であります。

縱八寸五分、横五寸七分。總紙數四十六枚。卷首に黑川眞頼、仝眞道兩氏の朱の藏印があり、見返しには眞道氏の筆になる本書の略考證を附し、本文中にも上欄に仝じく眞道氏の朱筆を以て見出しを附けて居ります。表紙は

査　祆　記　錄　　從寛文十二年至元祿四年

としるしその下に　珍本　と朱書したのも眞道氏の筆であります。珍本奇籍の豐富を以て知られた舊黑川文庫中でも最も珍奇なものゝ一であつた狀察すべしでありませう。

圖版第五十二號參照

査祅餘録

寛文十二年壬子

廿八拾人枝持　三右衛門、七人枝持ニて卜意、壽庵、南甫、二官、

閏六月十七日遠江守へ出ス覚

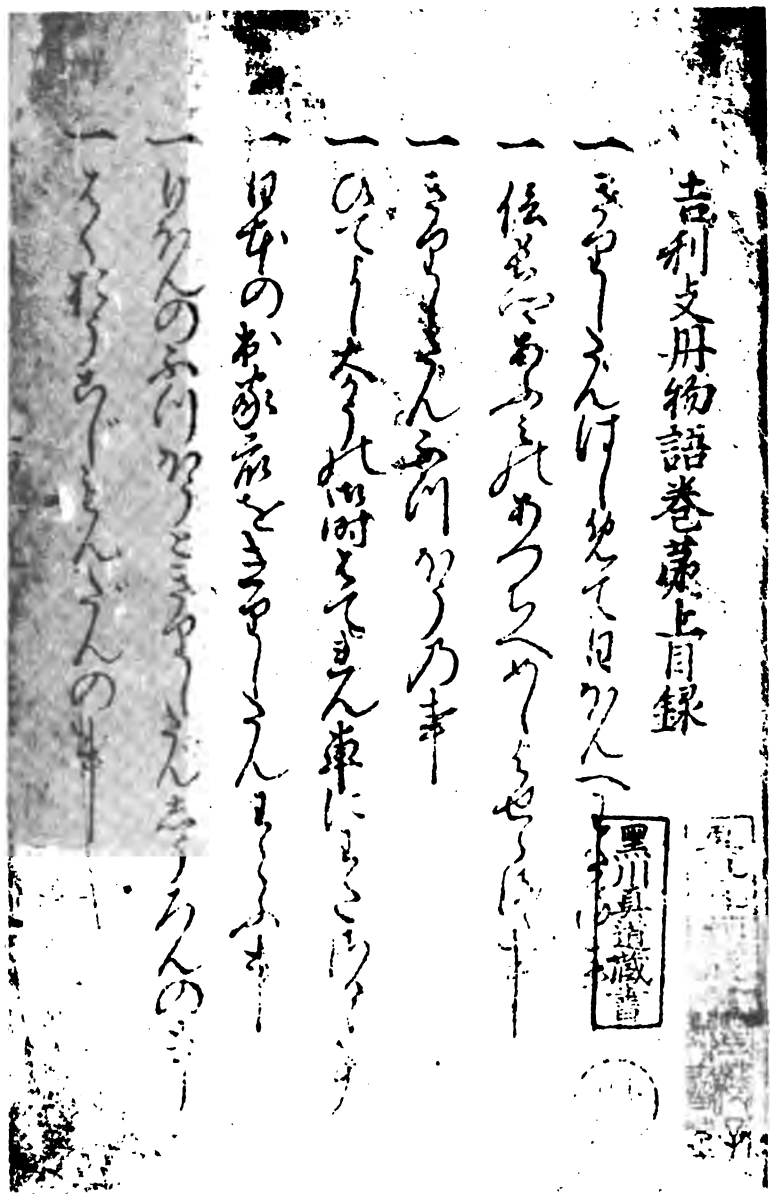
一　三右衛門女房後家　深川舟大工　清左衛門　六十

一　同人後家　古井大炊殿小者ニ居　源右衛門　六十五

一　同人甥　清左衛門一所　三之丞

一　同人甥　麹町職人　庄九郎　三十

一　足立権三郎　井上筑後守支配ニ而卜意細工ニ而弟子ニ而



第五十一圖　寛永十六版　切支丹物語　卷頭

(50)

吉利支丹物語

寛永十六年版　全二巻 一冊　金二百五十圓

日本耶蘇會の巡察使ワリニャーニによつて西歐から輸入された活字印刷機で印刷した所謂切支丹版の世界的稀覯書なる事は論のない所でありますが、切支丹關係の圖書として二百餘年の激しい禁教政策の中に生き永らへて今日僅々數部の殘存を傳へられて居る元和六年のハビアンの跋ある「破提宇子」と此の「吉利支丹物語」などはその稀覯性に於てその若干に比敵し得るものでありませう。

此の書は嘗つて幕末の大藏書家石塚豊芥子の藏であり、その後黑川眞頼先生の手に移り更に黑川眞道氏に傳はつたもので各藏印を留めて居ります。表紙には　珍本　寛永版　豊芥子舊藏と眞道氏の筆で朱書して居ります。刊記は

寛永十六己卯稔八月吉祥日

とあり、此の年は彼の二年越しの天草の亂の平いだ翌年に當り、あたかも鎖國令の發せられた年に相當しますのも暗示的です。「伊曾保物語」の寛永版の上梓せられたのも此の年でございます。

稀書復製會で復製致しました寛文五年刊行の「切支丹退治物語」は此の書の飜刻で、多くの改惡を行つて居ります。

本書の價値としては新村先生が

「吉利支丹史實を含む割合も多く、又轉訛せる度合も少く、此の種の書物類の中では拔群の價値を有し、世間に流布せる南蠻寺興廢記の如き惡本とは選を異にする」

と書かれたので略々明かでありませう。但し先生が更につゞいて「上卷二十七葉、下卷二十三葉、每頁八行」と書かれました中、下卷二十三葉は廿四葉の誤りで、下卷には第廿一丁が二枚あつて內容が讀みつゞき、從つて丁附は廿三で終つて居りますが、實は廿四葉なのであります。

朝倉氏の「新修日本小說年表」山崎氏の「日本小說書目年表」等に共に未載でありますのは偶々亦本書の稀覯性を裏書するものです。刊行早々幕府當局から絕版を命ぜられて摺り本は燒棄された故でせうか。

圖版第五十一號參照。原本大きさ縱八寸六分、橫五寸八分。

(49)

丹綠本 保元平治物語　寛永三年刊　全六冊　金百八十圓

黒刷りの挿繪の上に、筆を以て丹と綠を主とした古拙な彩色を施した所謂丹綠本は、彩色印刷術の發明せられなかつた德川初期の特産物で、我が國の印刷史上、又書物の發達史上から見て極めて興味あるものの一であり又古雅愛すべきを覺えしむるものであります。

丹綠本の起源は元和の末年まで遡るであらうと云ふ事は論ぜられて居りますが明證はない樣です。明證の存します最も古いものは寛永初年のもので、以後元祿頃まで半世紀余に行はれその後印刷術の進歩と共に後を斷ちました。

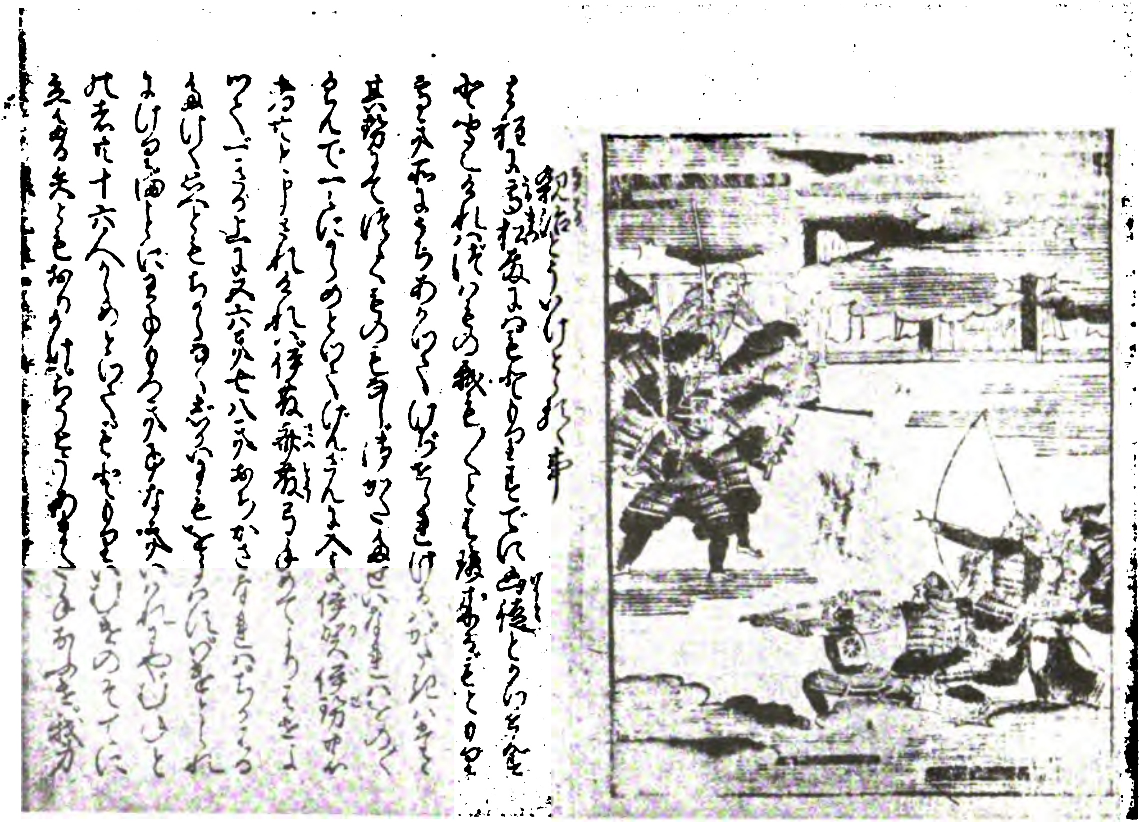
此處に收載しました一本は「平治物語」で、第三卷末に

干時寛永三丙寅年長月吉辰

の刊記のありますもの、大本、半葉十二行、行二十五六字、平假名交りの刻本です。「保元」も全く版式を一にして居りますから當時の習慣に從つて同時に印刷され、合して一部として發兌せられたものと察せられます。之れは此の著名な軍記物の繪入の版本としては最古のものであり、又丹綠本として最も初期のものの一に屬します。水谷不倒氏の說によれば寛永三年版の「保元平治」の丹綠本は殊に稀有であるらしいですが、嘗つて「書物の趣味」誌上で山鹿誠之助氏の報告せられた所によりますと京大圖書館にも一本を藏せらるゝとの事です。

着色は丹綠の二主色の外に黃・藍を加へた四色で、彩色は少し若い樣に思はれますが美しうございます。表紙は古い丹表紙、虫入の少い美本です。

圖版第五十號參照



第五十圖　丹鶴本保元平治物語　内容の一部

本邦古版目録

西村兼文 編

抑日本國ニ於テ刻版ノ初マリシハ最モ古キ事ニテ確ト其正シキ濫觴ハ知ラレサルモ大和國平群郡法隆寺ニ傳フル宝亀敕願ノ陀羅尼ヨリ古キハナシ續日本紀曰宝亀元年四月戊午初天皇八年乱平之後弘願令造三重小塔一百萬基高各四寸五分基径三寸五分露盤之下各置根本慈心相輪六度等陀羅尼至是功畢分置諸寺云云此陀羅尼ハ紙質ニ黄麻紙穀紙黄紙ノ三種アリ竪一寸八分ニテ第一根本陀羅尼ハ四十行第二自心印陀羅尼ハ三十一行第三相輪陀羅尼ハ

第四十九圖　本朝古板目録巻頭

(48)

本邦古板目録

西村兼文編
寫本

全一冊　金十五圓

西村兼文は色々な欠點を持つて居たにも拘はらず明治前半期の最も優れた書誌學者とまで云へぬにしても、當時の比類少い研究的な古書通として可成高く評價せねばならぬ人物だと信じます。當時にあつて古寫經、古板籍を手にして調査する機會最も多く惠まれた一人として、其の論述には尙傾聽すべき多くのものを持つて居ります。

本書は序文で明かなるが如く西村氏が「多年閲る所に田中光顯君の增補せられしを加へ年序を追ふて其の跋語を錄し印行の記月を分明に」したもので、一種の「古刻書跋集」と見るべきものであります。田中光顯氏は「古芸餘香」の編者として秀でたる古書鑑賞眼の所有者であり、明治前半期の最有力な蒐書家ですから其の手になる增補の價値あるは縷言を要せぬ所でせう。內に安和元年十一月十一日加點の興福寺沙門眞興の墨記ある「成唯識論」の摺本を擧げて居りますのは前年國寶に指定せられたる內野氏藏の「妙法蓮華經」より遙かに古い刻本としてその存在は注目すべきでありませう。

縱八寸一分、橫五寸八分の紙に半葉十一行に楷書で寫して居ります。紙數六十葉百二十頁、收載の範圍は本邦鏤刻のはじめより慶長末年までに及び各跋語及び刊記を擧げて居ります。

圖版第四十九號參照

（47）

平家物語　元和九年刊　全十二冊　金六十圓

縦八寸六分、横六寸三分、匡郭内縦七寸五分強、横五寸六分強。四周双邊、十二行、廿一字乃至廿五字不等。片假名交り整版本。柱書は

平　家　　（卷数）

とのみあり。第十二卷末に左の刊記あり

此平家物語一方検校衆以數人之吟味改字證加點爻句讀元和七孟夏下旬令開板早或人曰
庶幾記其姓名云々故今凖之而已
干時元和九初秋吉旦
洛陽三條東洞院諏訪町
杉田良庵玄與
玄與

と。丹表紙の原装を留め、又原題簽の多くを存す。

各冊はじめにその卷の目録を掲げ、第十二卷の女院御出家以下御往生までを灌頂の卷として別に之れ立て、一方検校本なり。之れ等は諸點寛永三年刊平假名一方本及び仝年刊片假名一方本と仝じく、恐らくの之れ等の原本たりしものにて徳川時代以來流布本平家物語の祖本と云ひつべきものなるべし。

古活字版全盛期の元和中期に奇しくも整版にて印刷せられし此の書は當時多く流行せざりしものか現存本極めて稀覯なるが如し。山田孝雄氏「平家物語考」未收なる事はその稀覯性を裏書するものなり。

圖版第四十八號參照

此平家物語一方檢校衆以數
人之吟味改字濁加點及句讀
元和七辛酉夏下旬令開板畢
或人曰應求記其姓名之故
上梓之而已
于時元和九祀秋吉旦

第四十八圖　元和九年版　平家物語　刊記の一部

格致餘論

飲食色欲箴序

金華 朱震亨 撰

傳曰飲食男女人之大欲存焉予每思之男女之欲所關甚大飲食之欲於身尤切世之淪胥陷溺於其中者不少矣苟志於道必先於此究心焉因作飲食色欲箴以示弟姪并告諸同志云

飲食箴

人身之貴父母遺體為口傷身滔滔皆是人不見身飢渴洊興乃作飲食以遂其生眺彼昧者因縱口味五味之過疾病蜂起病之生

第四十七圖　古活字版　格致餘論　卷頭

(46) 格致餘論　古活字版　全一冊　金二十圓

縱九寸五分、横六寸五分。四周双邊、無界。印面縱五寸九分、横五寸八分。即ち大本の中に小さくワクを取り四周の餘白を廣くしたる版なり。十二行、十八字、柱書は

格　致　（丁　數）

とありて刊記なし。

卷頭に「格致餘論序」一葉半あり次に「格致餘論目錄」として二葉あり、以下本文に入る。本文五十三葉。

「格致餘論」は既に慶長二年小瀬甫庵刊する所の活字版ありて、古活字版中最古のものゝ一にかゝる。此の書は右に繼ぎて出でたるものなるべく、慶長中の上梓にかゝるべきか。古活字版「格致餘論」に右の外更に一本あり。そは印面縱横共に少しく本書よりつまり四周双邊の所と無邊の所とありて一定せず。摺刷亦蕪雜なるが如し。思ふに本書の模刻にして元和中寛永の刊行にかゝるべきものなるべし。

圖版第四十七號參照

(45)
大原談義聞書

古活字版　全一冊　金二十五圓

縱八寸七分、橫五寸九分。印面縱六寸八分、橫四寸七分。半葉七行、行十七字詰。四周無邊柱書はやゝ廣くとりて

大　一（丁數）

とのみ記したるが古拙の趣きを示したり。刊記なきを以つて明證を欠くと雖も元和寬永間の京洛の寺院版の一なるべきか。

「大原談義聞書」は既に永正十七年に知恩院にて刊行せし一本あり。此の書も或ひは之れを模せるものなるべし。

澁色の紙裝原裝を留む。總紙數二十一葉。

圖版第四十六號參照

大原談義聞書抄

上人曰予自遁世之當初至衰老之中比窺
披一代教文倩案出離之要義付顯付密開
悟不容易云事云理修行難成就一實圓頓
窓内多年疲即是妙觀三密同體床上于今
失現世證入然間量涯分願淨土憑他力稱
名號識性生極樂教行者皆至道場目是也

三國佛法傳通緣起卷上

東大寺沙門　凝然　述

夫毗盧遮那釋迦世尊本則非古非今離待對於以[illegible]議之門迹則能今能久開救攝於機感之路迦毗[illegible]城示降誕之迹摩訶陀國顯果極之德消樹[illegible]七處九會之嘉運仙苑提河播三衍一貫之[illegible]門八萬隨根宜緣教迹十二契會體義畢[illegible]藏分路鐵圍之洞二諦異衢衆聖應時[illegible]緣出現西天弘太小之法東土敷權實之[illegible]之殊送四百五十之年[illegible]

第四十五圖　古活字版　三國佛法傳通記　卷頭

(44) 三國佛法傳通緣起　　古活字版　　全一冊　　金二十五圓

縱九寸一分、横六寸五分。印面縱六寸七分、横五寸三分。四周双邊、十行二十字。柱書は

三國緣起　　上（中、下）　　丁數

とあり、奥書末に

……所利不廣仍命工鏝板云爾

應永巳卯正月　日

とあり、即ち　應永六年𠊳捴深謚書　の奥書ある春日版三卷三帖の奥書をそのまゝ襲へるものなるべし。本書の刊行は元和寛永の交なるべきか。原題簽

佛法　三國傳通記　全

を存す。

三卷を一冊に合綴す，表紙裏に　延壽院藏書　の墨書あり。慶元の頃多く活字版によりて醫書を刊行して功ありし曲直瀬元朔の舊藏にかゝるべし。

圖版第四十五號參照

(43)

類字名所和歌集　古活字版　全七冊　金五十圓

縱九寸一分、橫六寸九分。印面縱八寸、橫五寸七分、大本。半葉十一行、歌一首を一行に印刷せり。柱書はなし。
每卷々首に　平家文庫　の藏印を捺す。古き澁表紙は元のものなるべけれど原題簽を留めず、打ちつけに

名所和歌集　一（卷數）

と筆にて記せり。第七卷々末に左の記あり

此一部者平見二十一代集數多之本而抄出名所和歌者也唯愚昧所撰恐有舛謬猶後見之輩勿憚改而已

元和三曆仲秋下旬　　法橋昌琢判

此の記は類字名所和歌集撰著の奥書にして、此の古活字版の刋記と目すべからざるものなるべく、從つて本書を以て元和三年刋本となすは恐らく早斷なるべけれど、活字版式より察して元和末或ひは寬永初期を下るものならざるべし。
多く原裝を存し、紙魚の痕等汚損少き上本。
圖版第四十四號參照

類字名所和歌集第一

廿一代集抜書

伊行

平安文庫

山城

石蔵 山　野

拾遺神楽
うこきなき石蔵山に君か代をはこひおきつゝ千代をこそつめ　読人不知

同
君か代ハ石蔵山に万代をうこきなくのミまもらんとそ思ふ　大中臣能宣

新勅撰賀
北門の石蔵山に日のもとの葉のしけきや神のみことなるらん　権中納言頼資

新後拾遺秋上
花薄まねくとみれは石蔵のをのゝあさちに人まちくらす　民部卿為教

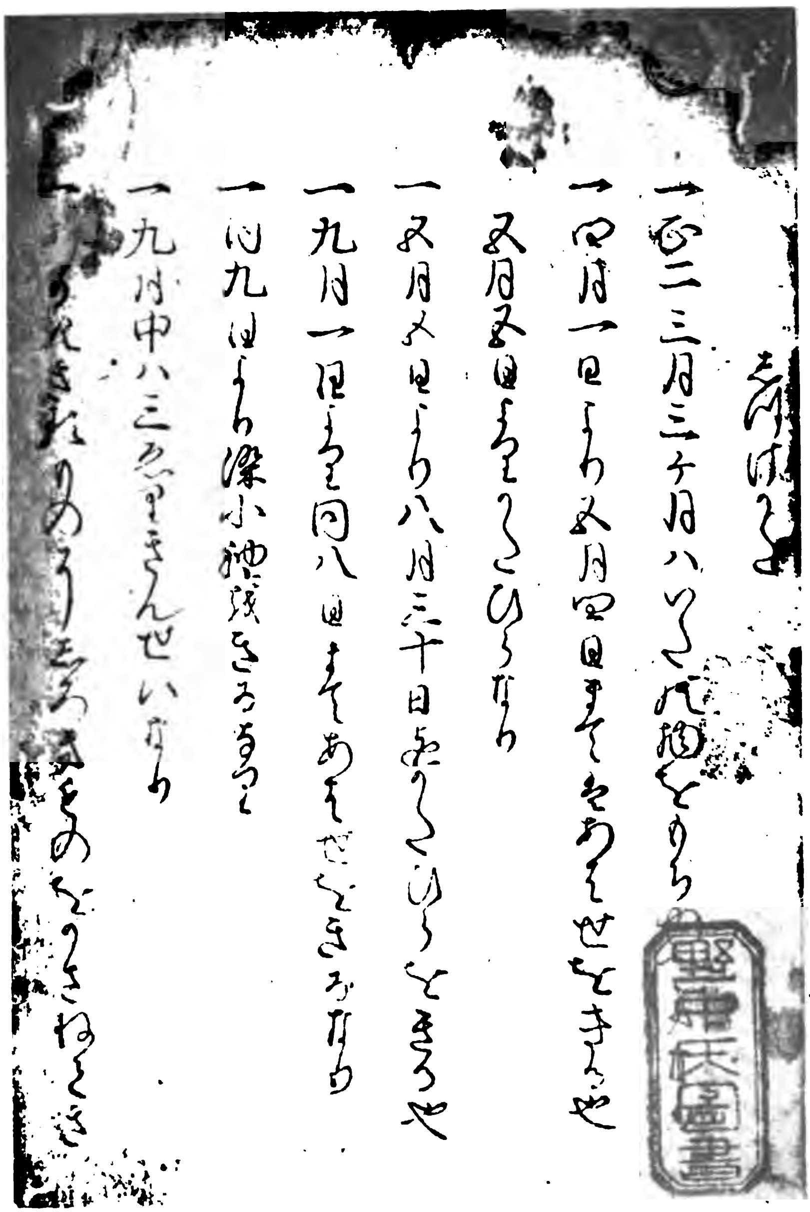
稲荷 山　社　神楽　同

拾遺雑恋
伊なり山社の数を人とはゝつれなき人をミつと答へん　平定文

同
祈るとハ稲荷の神もつらきかな人のためとハおもはさりしを　藤原長能

同
瀧の水かへりてすまは稲荷山七日のほれるしるしとおもはん　読人不知

後拾遺神祇
伊なり山ミつの玉垣うちたゝきわかねきことを神もこたへよ　恵慶法師



第四十三圖　古活字版　しつけかた　巻頭

しつけかた　　古活字本　　全一册　　金五十圓

縦七寸六分强。横五寸二分强。字面縦五寸八分、横四寸六分。四周無邊、柱書、丁附共になし。半葉九行、行廿字詰乃至廿二字詰。平假名交り古活字版、刊記なし。丹表紙に書き題簽を附す。

活字は光悦の書風の影響を可成に多く示せる字體にして書體美し。彼の元和寛永間の刊行と認めらる「花傳書」に使用せられたる活字と酷似せるが如し。

但し摩滅度少きを以て或ひは元和中の摺刷にかゝるべきか。

卷頭に及び

の二藏印を押す。中川德基氏舊藏。丹表紙、上本。

總紙數二十葉。假名交り古活字版中、傳本最も稀少なるものゝ一に屬す。禮儀作法を記せる書の中最古版の一たり。

圖版第四十三號參照

(41) **仙　傳　書**　古活字版　全一册　金百圓

本邦最古の生花の印刷傳書たる「仙傳書」は縦八寸九分、横六寸。印面縦七寸二分、横四寸九分の古活字印本にして半葉十一行、行二十一二字（不等）平假名交りの刻本なり。柱書は丁數のみを記し、刊記なし。活字書體は後揭の「しつけかた」のそれに似てや丶太く「花傳書」の一本の活字に似たり。或ひは同一人の印刻にか丶るべきか。紙數三十九葉、内數面の挿繪を交ふる事「花傳書」と仝じく、古活字版中類例多からぬ所なり。最初目次三葉ありて第四葉より本文に入る。その卷頭の標題「仙傳書」とあるべきが「傳仙書」と誤植せるは古活字版に遇々見る所、古拙愛すべきが如し。寛永十七年の刊記ある本書の古活字版は「仙傳」と正しく改めたり。奥には

此仙傳書者三條殿御秘本賴政公依御所望

文安二年三月廿五日　　富阿彌相傳

とし、以下天文五年正月十七日池房專慈に至るまで八代相傳の次第を記したり。刊記なけれども慶元中の刊行なるべし。黒紙の原裝を留め、汚損なき上本なり。

傳本稀少なるが如し。

圖版第四十二號參照

一元服の花乃事　其主人のとし三四十ばかりならば
あかふに枝葉をすくなくしてたて候へし
わかうハえだ葉をしげふに立そのおもしろかりかたちなり
ほそき本とりそへて立也下草ハ何にてもと
当季のうつりんなる物をとりくりゆへてた
とひ当季の花なりともさうふ草木をば立へし
を又下草より作花をかりそへて立也
世代つくといふ心なり
一法師出仕の花の事一向にみのなる物はならず
をつみて葉落といふみやうせん時のつはけ其外

列子鬳齋口義卷上

鬳齋 林 希逸

列子序

右新書定著八章護左都水使者光禄大夫臣向言所校中書列子五篇臣向謹與長社尉臣參校讎太常書三篇太史書四篇臣向書六篇臣參書二篇內外書凡二十篇以校除復重十二篇定著八篇中書多外書少章亂布在諸篇中或字誤以盡為進以賢為形如此者衆及在新書有棧校

(40) 列子鬳齋口義　古活字版　全二册　金八十圓

美事な丹表紙を付けて居りますが、題簽は印刷したものが夙く剝落したと見えまして、筆寫のものを以て代へて居ります。大本で上下二册、縱九寸、橫六寸一分。印面縱七寸强、橫五寸强、四周双邊、行間有罫、半葉九行、行十九字、註は一行下げで、多く當時の古活字版の漢籍類と軌を同うして居ります。柱背は

列　子　　上(下)　　丁數

となつて居り、内題は　列子鬳齋口義　であります。

刊記がありませぬので刊年は明かでありませんが、活字の摩滅の程度が可成に認められる事及び二種の活字を混用して居る點から見て元和中或ひは寛永中の上梓にかゝるものでございませう。尤も成簣堂の藏書目に同じ版式のものを擧げて「慶元中の刊本」としてありますから或ひはその期に遡るものなのかも知れません。

津藩有造館の舊藏と覺しく卷頭に仝館の藏印を捺して居ります。

圖版第四十一號參照

三國佛法傳通緣起卷上

東大寺沙門　凝然　述

夫毘盧遮那釋迦世尊本則非古非今離待對於[illegible]
議之門迹則能今能久開救攝於機感之路迦毘羅
城示降誕之迹摩訶陀國顯果極之德道樹[illegible]
七處九會之嘉運仙苑提河攝三祇一實之教[illegible]
門八萬隨根宜緣教迹十二契會體義畢[illegible]
藏分路鐵圍之洞二諦異衢聖應時[illegible]
緣出現西天弘大小之法東土敷權實之教[illegible]
又殊送四百五十之年[illegible]

第四十五函　古活字版　三國佛法傳通記　卷頭

(44) 三國佛法傳通縁起　古活字版　全一冊　金二十五圓

縦九寸一分、横六寸五分。印面縦六寸七分、横五寸三分。四周双邊、十行二十字。柱書は

三國縁起　上(中、下)　丁數

とあり、奥書末に

……所利不廣仍命工鋟板云爾

應永己卯正月　日

とあり、即ち　應永六年僧捲深謹書　の奥書ある春日版三卷三帖の奥書をそのまゝ襲へるものなるべし。本書の刊行は元和寛永の交なるべきか。原題簽

佛法三國傳通記　全

を存す。

三卷を一冊に合綴す、表紙裏に　延壽院藏書　の墨書あり。慶元の頃多く活字版によりて醫書を刊行して功ありし曲直瀬元朔の舊藏にかゝるべし。

圖版第四十五號參照

(43)

類字名所和歌集

古活字版　全七冊　金五十圓

縦九寸一分、横六寸九分。印面縦八寸、横五寸七分、大本。半葉十一行、歌一首を一行に印刷せり。柱書はなし。毎巻々首に　平冢文庫　の藏印を捺す。古き澁表紙は元のものなるべけれど原題簽を留めず、打ちつけに

名所和歌集　一（巻數）

と筆にて記せり。第七巻々末に左の記あり

此一部者平見二十一代集數多之本而抄出名所和歌者也唯愚晴所撰恐有舛謬猶後見之輩勿憚改而已

元和三孱仲秋下旬　法橋昌琢判

此の記は類字名所和歌集撰者の奥書にして、此の古活字版の刊記と目すべからざるものなるべく、從つて本書を以て元和三年刊本となすは恐らく早斷なるべけれど、活字版式より察して元和末或ひは寛永初期を下るものならざるべし。

多く原裝を存し、紙魚の痕等汚損少き上本。

圖版第四十四號參照

類字名所和歌集第一

廿一代作者　伊行　〔平紋之座〕

山城

石藏（いはくら）　山　野

拾遺神楽
うごきなき石藏山に君か代をはこびおきつる千世のかず〳〵　讀人不知

同
きみか代は石藏山にあか代をとうごきなくのミ流れまんと思ふ　大中臣能宣

新勅撰賀
呉竹の石藏山に代日のきを葉のらや神の見しるしとなるらん　権中納言頼資

新後拾遺秋上
花薄なびきとまれと石藏のをのゝあきつ人まつ小くら哉　民部卿為家

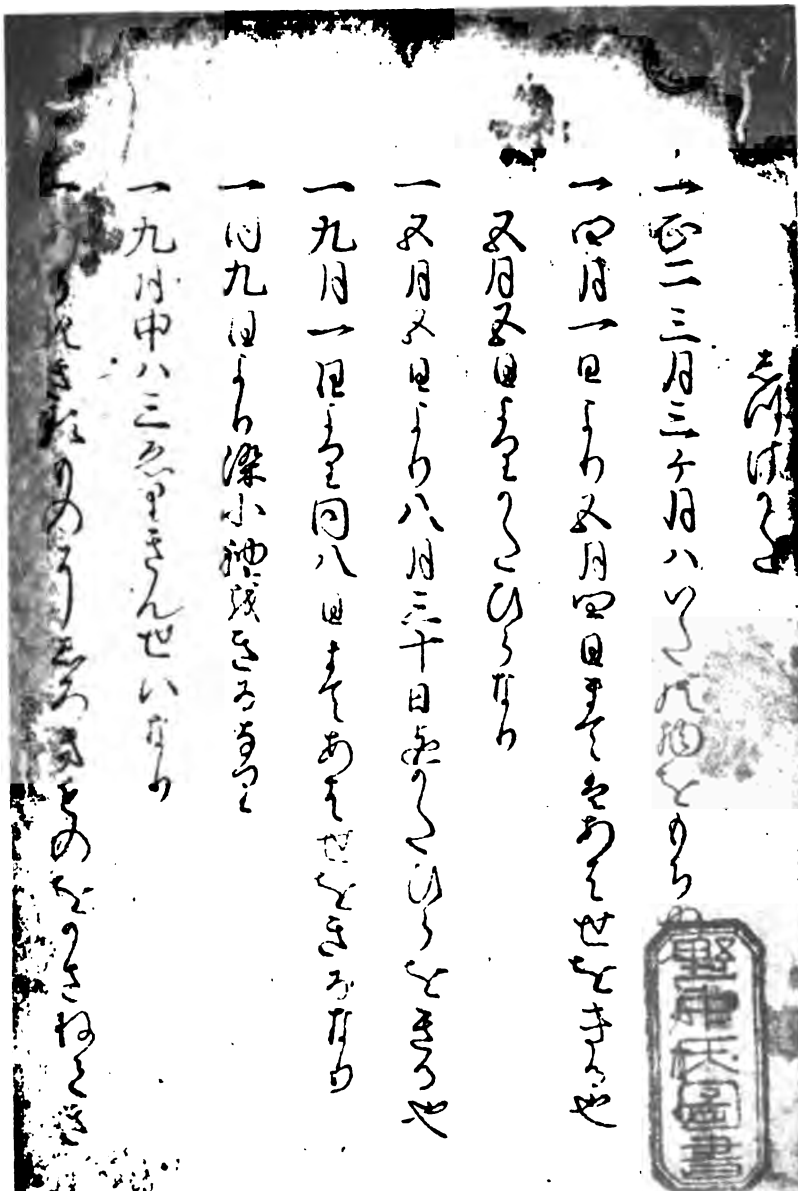
稲荷（いなり）　山　社　神　瀟　同

拾遺雑恋
伊なり山社のかずを人とはゞつれなき人を三つとこたへん　平定文

同
祇とりへハ伊なりの神もつらき人のためとぞきゝしきさ　藤原長能

同
滝の水かへりてすまば稲荷山七日のぼれるしるしと思はん　讀人不知

後拾遺神祇
伊なり山みつの玉かきうちたゝきわかねきことを神もこたへよ　恵慶法師



[illegible]
一 正二三月三ケ月八[illegible]
一 四月一日より五月四日まてあはせをきるへし
五月五日よりかたひらなり
一 五月五日より八月三十日まてかたひらをきるへし
一 九月一日より同八日まてあはせをきるなり
一 同九日より[illegible]小袖[illegible]
一 九月中八三[illegible]せいなり
[illegible]

第四十三圖　古活字版しつけかた巻頭

(42)

しつけかた　　古活字本　　全一冊　　金五十圓

縱七寸六分强。横五寸二分强。字面縱五寸八分、横四寸六分。四周無邊、柱書、丁附共になし。半葉九行、行廿字詰乃至廿二字詰。平假名交り古活字版、刊記なし。丹表紙に書き題簽を附す。

活字は光悦の書風の影響を可成に多く示せる字體にして書體美し。彼の元和寛永間の刊行と認めらる「花傳書」に使用せられたる活字と酷似せるが如し。

但し摩滅度少きを以て或ひは元和中の摺刷にかゝるべきか。

卷頭に及び

の二藏印を押す。中川德基氏舊藏。丹表紙、上本。

總紙數二十葉。假名交り古活字版中、傳本最も稀少なるものゝ一に屬す。禮儀作法を記せる書の中最古版の一たり。

圖版第四十三號参照

(41) 仙傳書　古活字版　全一冊　金百圓

本邦最古の生花の印刷傳書たる「仙傳書」は縦八寸九分、横六寸。印面縦七寸二分、横四寸九分の古活字印本にして半葉十一行、行二十一二字（不等）平假名交りの刻本なり。柱書は丁數のみを記し、刊記なし。活字書體は後掲の「しつけかた」のそれに似てやゝ太く「花傳書」の一本の活字に似たり。或ひは同一人の印刻にかゝるべきか。紙數三十九葉、內數面の挿繪を交ふる事「花傳書」と仝じく、古活字版中類例多からぬ所なり。最初目次三葉ありて第四葉より本文に入る。その卷頭の標題「仙傳書」とあるべきが「傳仙書」と誤植せるは古活字版に遇々見る所、古拙愛すべきが如し。寛永十七年の刊記ある本書の古活字版は「仙傳」と正しく改めたり。奥には

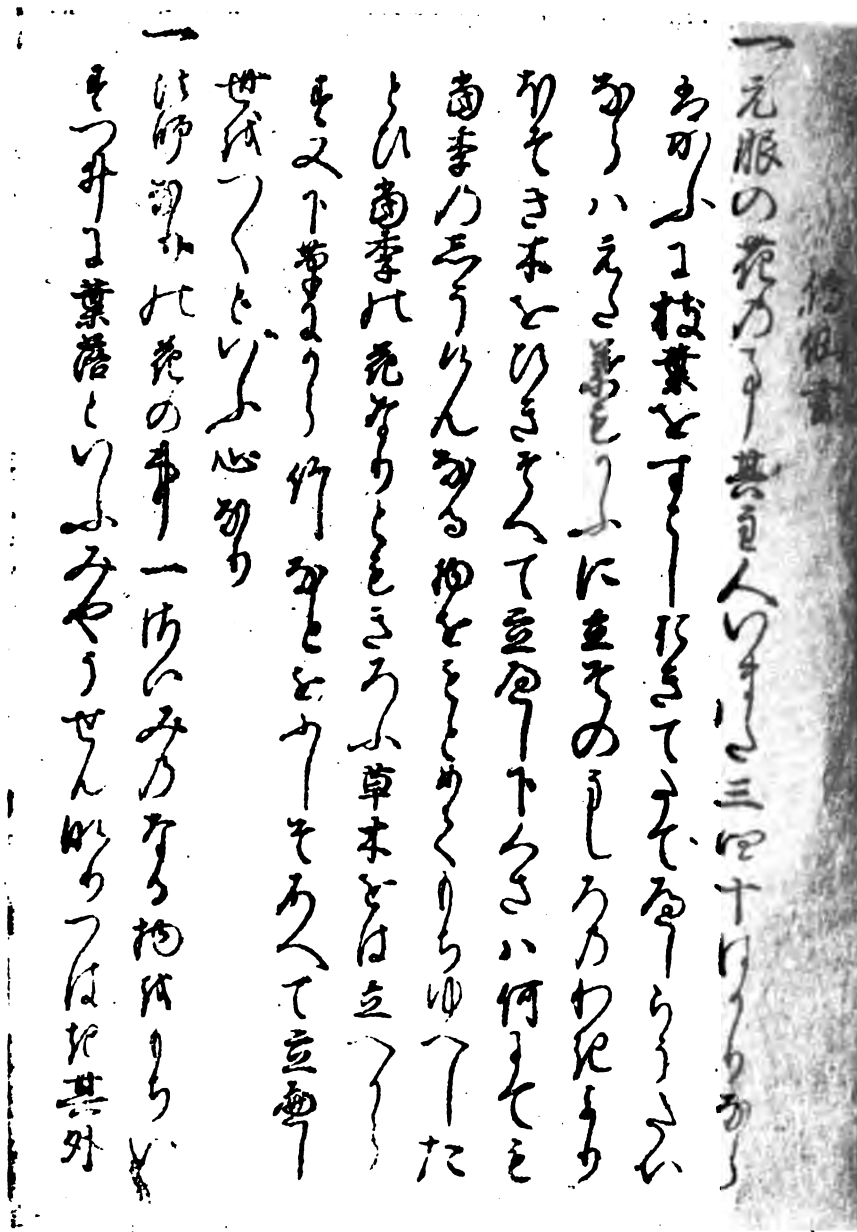
此仙傳書者三條殿御秘本賴政公依御所望

文安二年三月廿五日　　富阿彌相傳

とし、以下天文五年正月十七日池房專慈に至るまで八代相傳の次第を記したり。刊記なけれども慶元中の刊行なるべし。黒紙の原裝を留め、汚損なき上本なり。

傳本稀少なるが如し。

圖版第四十二號參照


仙傳書
一 元服の花の事 其人いまた三四十はかりならは
ならふ口枝葉をすこしいきてそでやうらふべし
なるハえた葉もゝふに立そのうしろかわにあり
わそき木とりきそへて立花下ろさハ何にてもを
四季のちうりんなる物をとゝめくりちゆへした
とひ四季ハ花なりともきろふ草木とは立てし
をゑ下草まうし竹なとをかしそへて立申し
世代つくといふ心なり
一 法師祝ハ花の事 一筋にみのかなる物ハちりぬ
そつみ口葉落といふみやうせんハつはた其外

第四十二圖　古活字版　仙傳書　卷頭

列子鬳齋口義卷上

鬳齋 林 希逸

列子序

右新書定著八章護左都水使者光祿大夫臣向言新所校中書列子五篇臣向謹與長社尉臣參校讎太常書三篇太史書四篇臣向書六篇臣參書二十篇內外書凡二十篇以校除復重十二篇定著八篇中書多外書少章亂布在諸篇中或字誤以盡為進以賢為形如此者衆及在新書有棧校

(40) 列子鬳齋口義　古活字版　全二冊　金八十圓

美事な丹表紙を付けて居りますが、題簽は印刷したものが夙く剝落したと見えまして、筆寫のものを以て代へて居ります。大本で上下二冊、縱九寸、橫六寸一分。印面縱七寸强、橫五寸强、四周双邊、行間有罫、半葉九行、行十九字、註は一行下げで、多く當時の古活字版の漢籍類と軌を同うして居ります。柱背は

列　子　上(下)　丁數

となつて居り、内題は　列子鬳齋口義　であります。刊記がありませぬので刊年は明かでありませんが、活字の摩滅の程度が可成に認められる事及び二種の活字を混用して居る點から見て元和中或ひは寛永中の上梓にかゝるものでございませう。尤も成簣堂の藏書目に同じ版式のものを擧げて「慶元中の刊本」としてありますから或ひはその期に遡るものたのかも知れません。津藩有造館の舊藏と覺しく卷頭に全館の藏印を捺して居ります。

圖版第四十一號参照

第四十五圖　古活字版　三國佛法傳通記　卷頭

三國佛法傳通緣起卷上

東大寺沙門　凝然　述

夫毗盧遮那釋迦世尊本則非古非今離待對於[illegible]
議之門迹則能今能久開救攝於機感之路迦毗[illegible]
城示降誕之迹摩訶陀國顯果極之德道樹[illegible]
七處九會之嘉運仙苑提河攝三衍一實之教[illegible]
門八萬隨機宜緣教迹十二契會體義畢[illegible]
藏分路鐵圍之洞二諦異衢衆聖應時[illegible]
緣出現西天弘太小之法濟大數雄賢之[illegible]
文殊送四百五十之年[illegible]

(44) 三國佛法傳通緣起　古活字版　全一冊　金二十五圓

縦九寸一分、横六寸五分。印面縦六寸七分、横五寸三分。四周双邊、十行二十字。柱書は

三國緣起　上（中、下）　丁數

とあり、奥書末に

………所利不廣仍命工鋟板云爾

應永己卯正月　日

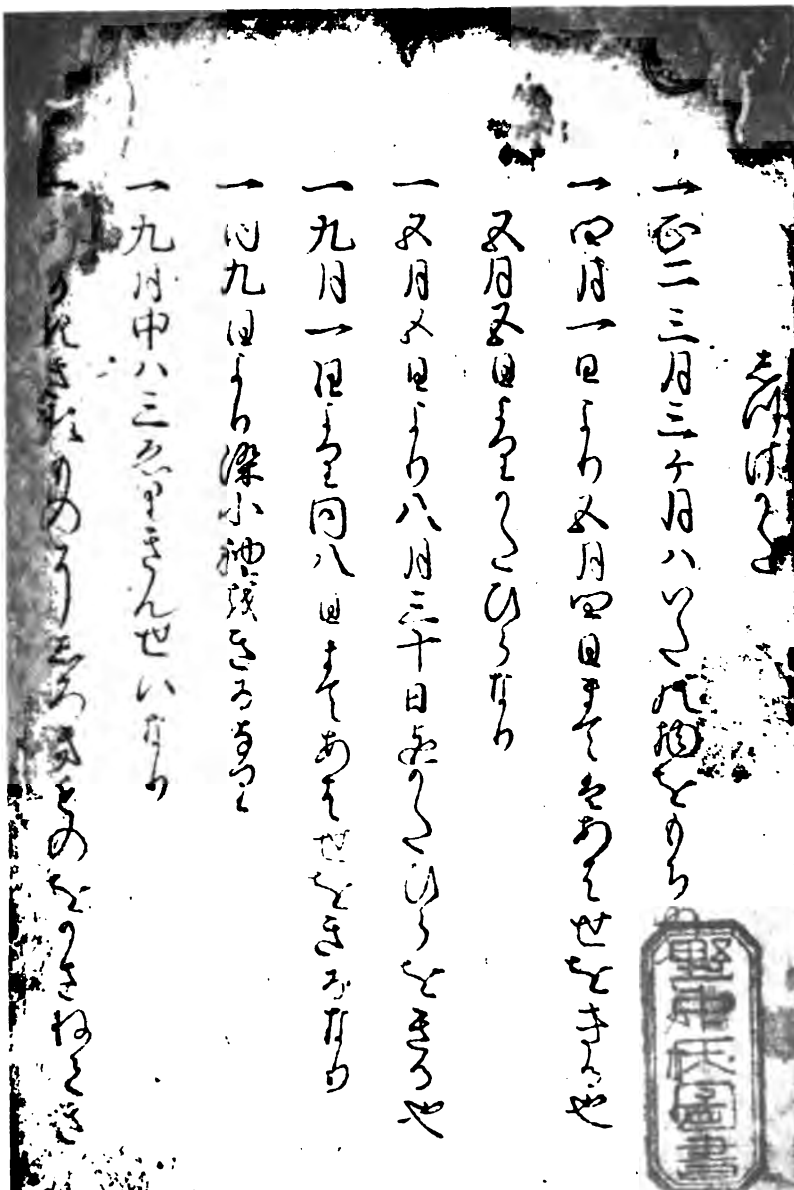
とあり、即ち應永六年佾捴深謹書　の奥書ある春日版三卷三帖の奥書をそのまゝ襲へるものなるべし。本書の刊行は元和寛永の交なるべきか。原題簽

佛法三國傳通記　全

を存す。

三卷を一冊に合綴す。表紙裏に　延壽院藏書　の墨書あり。慶元の頃多く活字版によりて醫書を刊行して功ありし曲直瀬元朔の舊藏にかゝるべし。

圖版第四十五號參照



第四十三圖　古活字版しつけかた卷頭

しつけかた　古活字本　全一冊　金五十圓

縦七寸六分強。横五寸二分強。字面縦五寸八分、横四寸六分。四周無邊、柱書、丁附共になし。半葉九行、行廿字詰乃至廿二字詰。平假名交り古活字版、刊記なし。丹表紙に書き題簽を附す。

活字は光悦の書風の影響を可成に多く示せる字體にして書體美し。彼の元和寛永間の刊行と認めらる「花傳書」に使用せられたる活字と酷似せるが如し。

但し摩滅度少きを以て或ひは元和中の摺刷にかゝるべきか。

卷頭に及びの二藏印を押す。中川德基氏舊藏。丹表紙、上本。

總紙數二十葉。假名交り古活字版中、傳本最も稀少なるものゝ一に屬す。禮儀作法を記せる書の中最古版の一たり。

圖版第四十三號參照

(41)

仙傳書　古活字版　全一冊　金百圓

本邦最古の生花の印刷傳書たる「仙傳書」は縱八寸九分、横六寸。印面縱七寸二分、横四寸九分の古活字印本にして半葉十一行、行二十一二字（不等）平假名交りの刻本なり。柱書は丁數のみを記し、刊記なし。活字書體は後揭の「しつけかた」のそれに似てやゝ太く「花傳書」の一本の活字に似たり。或ひは同一人の印刻にかゝるべきか。紙數三十九葉、内數面の挿繪を交ふる事「花傳書」と全じく、古活字版中類例多からぬ所なり。最初目次三葉ありて第四葉より本文に入る。その卷頭の標題「仙傳書」とあるべきが「傳仙書」と誤植せるは古活字版に遇々見る所、古拙愛すべきが如し。寛永十七年の刊記ある本書の古活字版は「仙傳」と正しく改めたり。

奥には

此仙傳書者三條殿御秘本賴政公依御所望

文安二年三月廿五日　富阿彌相傳

とし、以下天文五年正月十七日池房專慈に至るまで八代相傳の次第を記したり。刊記なけれども慶元中の刊行なるべし。黑紙の原裝を留め、汚損なき上本なり。

傳本稀少なるが如し。

圖版第四十二號參照

一花瓶の花の事其上人いけ候は三四十計の花あり
あかふさ枝葉をすこしおきてそでをとらさる
なりハえだ葉をこふにたてそのうしろかはなれ
ぬそき本をひきそへて立申候下くさハ何にてもと
當季のものりんなる物をとりあはせくりちゆへた
とへは當季は花なりともきるふ草木をは立まし
き又下草まじり竹なとを一そへて立申候
此ごくといふ心なり
一法師羽仲は花の事一つはみかなる物体ならぬ
をつけて葉落といふみやうせんゆつはた其外

(45)

大原談義聞書

古活字版　全一冊　金二十五圓

縱八寸七分、橫五寸九分。印面縱六寸八分、橫四寸七分。半葉七行、行十七字詰。四周無邊柱書はやゝ廣くとりて

大　　一(丁數)

とのみ記したるが古拙の趣きを示したり。刊記なきを以つて明證を欠くと雖も元和寬永間の京洛の寺院版の一なるべきか。

「大原談義聞書」は既に永正十七年に知恩院にて刊行せし一本あり。此の書も或ひは之れを模せるものなるべし。

澁色の紙裝原裝を留む。總紙數二十一葉。

圖版第四十六號參照

第四十六圖　古活字版　大原談義聞書　卷頭

大原談義聞書抄

上人曰予自遁世之當初至衰老之中比竊披一代教文倩案出離之要義付顯付密開悟不容易云事云理修行難成就一實圓融窓内多年疲即是妙觀三密同體床上千今失現世證入然間量涯分願淨土憑他力稱名号識性生極樂教行者直至道場目足也

三國佛法傳通緣起卷上

東大寺沙門　凝然　述

夫毗盧遮那釋迦世尊本則非古非今離待對於八議之門迹則能今能久開救攝於機感之路迦毗羅城示降誕之迹摩訶陀國顯果極之德消樹訖[illegible][illegible]七處九會之嘉運仙苑挺河播三衎一貫之[illegible][illegible][illegible]門八萬隨根宜緣教迹十二契會體義畢[illegible][illegible][illegible]藏分路鐵圍之洞二諦異衢衆聖應時[illegible][illegible][illegible][illegible]緣出現西天弘太小之法東一數補饗之[illegible][illegible][illegible][illegible]殊送四百五十之年[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

第四十五圖　古活字版　三國佛法傳通記　卷頭

(44)

三國佛法傳通緣起　古活字版　全一冊　金二十五圓

縱九寸一分、横六寸五分。印面縱六寸七分、横五寸三分。四周双邊、十行二十字。柱書は

三國緣起　上(中、下)　丁數

とあり、奥書末に

……所利不廣仍命工鋟板云爾

應永己卯正月　日

とあり、即ち應永六年佾捴深謹書の奥書ある春日版三卷三帖の奥書をそのまゝ襲へるものなるべし。本書の刊行は元和寛永の交なるべきか。原題簽

佛法　三國傳通記　全

を存す。

三卷を一冊に合綴す、表紙裏に延壽院藏書の墨書あり。慶元の頃多く活字版によりて醫書を刊行して功ありし曲直瀨元朔の舊藏にかゝるべし。

圖版第四十五號參照

(43)

類字名所和歌集　古活字版　全七冊　金五十圓

縦九寸一分、横六寸九分。印面縦八寸、横五寸七分、大本。半葉十一行、歌一首を一行に印刷せり。柱書はなし。毎巻々首に　平家文庫　の藏印を捺す。古き澁表紙は元のものなるべけれど原題簽を留めず、打ちつけに

　名所和歌集　一（巻數）

と筆にて記せり。第七巻々末に左の記あり

　此一部者平見二十一代集數多之本而抄出名所和歌者也唯愚昧所撰恐有舛謬猶後見之輩勿憚改而已

　元和三暦仲秋下旬　　法橋昌琢判

此の記は類字名所和歌集撰者の奥書にして、此の古活字版の刊記と目すべからざるものなるべく、従つて本書を以て元和三年刊本となすは恐らく早斷なるべけれど、活字版式より察して元和末或ひは寛永初期を下るものならざるべし。

多く原裝を存し、紙魚の痕等汚損少き上本。

圖版第四十四號參照

第四十四圖　古活字版　類字名所和歌集　卷頭

類字名所和歌集第一　廿一代集校書　伊行

（平安文庫）

山城

石蔵（いはくら）　山野

拾遺神楽
うこきなき石蔵山に君か代をはこひおきつゝ千世をこそつめ　読人不知

同
きみかよは石蔵山にちよ代をとふことたえなくのこれまんるさへ　大中臣能宣

新勅撰賀
足引の石蔵山の日かけ草あらしや神乃心なるらん　権中納言頼資

新後拾遺秋上
紅葉たにとゝむれと石蔵のをのゝあきつは人まつくら森　民部卿為家

稲荷（いなり）　山　社　神祇　同

拾遺雑恋
伊なり山社乃かすを人とはゝつれなき人をみつと答へん　平定文

同
我といへは伊なりの神もつらきかな人のためとは祈らさりしを　藤原長能

同
滝の水かへりてすまは稲荷山七日のほれるしるしと思はん　読人不知

後拾遺神祇
伊なり山みつの玉かきうちたゝき我ねきことを神もこたへよ　恵慶法師

第四十三圖　古活字版　しつけかた　巻頭

[illegible]

一　正二三月三十日ハつゞれ(?)を[illegible]

一　四月一日より五月四日まではあはせをきる也

五月五日よりかたびらなり

一　五月五日より八月三十日まではかたびらをきる也

一　九月一日より同八日まではあはせをきるなり

一　同九日より練小袖をきるべし

一　九月中ハ三ヶ日[illegible]せいなり

[illegible]

(42) しつけかた　古活字本　全一冊　金五十圓

縦七寸六分强。横五寸二分强。字面縦五寸八分、横四寸六分。四周無邊、柱書、丁附共になし。半葉九行、行廿字詰乃至廿二字詰。平假名交り古活字版、刊記なし。丹表紙に書き題簽を附す。

活字は光悦の書風の影響を可成に多く示せる字體にして書體美し。彼の元和寛永間の刊行と認めらる「花傳書」に使用せられたる活字と酷似せるが如し。

但し摩滅度少きを以て或ひは元和中の摺刷にかゝるべきか。

巻頭に及びの二藏印を押す。中川徳基氏舊藏。丹表紙、上本。

總紙數二十葉。假名交り古活字版中、傳本最も稀少なるものゝ一に屬す。禮儀作法を記せる書の中最古版の一たり。

圖版第四十三號參照

(41)

仙傳書　古活字版　全一冊　金百圓

本邦最古の生花の印刷傳書たる「仙傳書」は縦八寸九分、横六寸。印面縦七寸二分、横四寸九分の古活字印本にして半葉十一行、行二十一二字（不等）平假名交りの刻本なり。柱書は丁數のみを記し、刊記なし。活字書體は後掲の「しつけかた」のそれに似てやゝ太く「花傳書」の一本の活字に似たり。或ひは同一人の印刻にかゝるべきか。紙數三十九葉、內數面の挿繪を交ふる事「花傳書」と仝じく、古活字版中類例多からぬ所なり。最初目次三葉ありて第四葉より本文に入る。その卷頭の標題「仙傳書」とあるべきが「傳仙書」と誤植せるは古活字版に遇々見る所、古拙愛すべきが如し。寛永十七年の刊記ある本書の古活字版は「仙傳」と正しく改めたり。

奥には

此仙傳書者三條殿御秘本賴政公依御所望

文安二年三月廿五日　富阿彌相傳

とし、以下天文五年正月十七日池房專慈に至るまで八代相傳の次第を記したり。刊記なけれども慶元中の刊行なるべし。黑紙の原裝を留め、汚損なき上本なり。

傳本稀少なるが如し。

圖版第四十二號參照

一 花瓶の花乃事其直人のすかた三四十はかりなか
るやうに枝葉をすかしてたて〻そへらるへし
なつハえだ葉をすくに立そへのはしらかわすり
かそき本をひろくして直仏下くさハ何にてもあ
南まのたうりんなる物をもとめくりちゆへてた
とひ南季は花なりともよろしき草木をハ立へし
を又下草はこの何なりとかりそめにて立へし
世代つくといふ心なり
一 はすの花は花の中の一ぶんのみかたなる物ゆへ也ちゝ
をつけて葉落しといふみやうせん時ハ其外

列子鬳齋口義卷上

鬳齋　林　希逸

列子序

右新書定著八章護左都水使者光祿大夫臣向言所校中書列子五篇臣向謹與長社尉臣參校讎太常書三篇太史書四篇臣向書六篇臣參書二十篇内外書九二十篇以校除複重十二篇定著八篇中書多外書少章亂布在諸篇中或字誤以盡為進以賢為形如此者衆及在新書有棧校

第四十一圖　古活字版　列子卷頭

(40) 列子鬳齊口義　　古活字版　　全二冊　　金八十圓

美事な丹表紙を付けて居りますが、題簽は印刷したものが夙く剝落したと見えまして、筆寫のものを以て代へて居ります。大本で上下二冊、縱九寸、橫六寸一分。印面縱七寸强、橫五寸强、四周双邊、行間有罫、半葉九行、行十九字、註は一行下げで、多く當時の古活字版の漢籍類と軌を同うして居ります。柱書は

列　子　　上(下)　　丁數

となつて居り、內題は　列子鬳齊口義　であります。

刊記がありませぬので刊年は明かでありませんが、活字の摩滅の程度が可成に認められる事及び二種の活字を混用して居る點から見て元和中或ひは寬永中の上梓にかゝるものでございませう。尤も成簣堂の藏書目に同じ版式のものを擧げて「慶元中の刊本」としてありますから或ひはその期に遡るものなのかも知れません。

津藩有造館の舊藏と覺しく卷頭に仝館の藏印を捺して居ります。

圖版第四十一號參照

遍照發揮性靈集

古活字版　全十卷 四冊　金百八十圓

「性靈集」十卷は弘法大師の詩文集にして、氣宇宏壯文魄光燄、容易に及ぶべからざる彼の不世出の傑僧の博識と文藻とを窺知すべき雄篇にして、又日本漢文學史上稀有の巨作なり。

此處に掲ぐる古活字版の一本は縱九寸一分、横六寸四分。印面縱七寸六分、横五寸四分。四周双邊、行間有界、九行十八字、註双行のものにして刊記なきを以て刊年明確を欠くと雖も、「成簣堂善本書目」第二百頁に全じ書を擧げて慶元中の刊本となせり。各冊卷頭に 隆賢藏 その他の古藏印あり。

全卷を通じて朱を以てオコト點を附し、又送假名を傍書す。此の傍書中には數種の古體の片假名を書したり。又本文を御筆本なる古寫本と校合し朱を以て差違を記せり。

第一卷末に承安二年の奥書あり、第六卷にも「御本云」として承安五年の墨書奥書あり。第十卷末には

干時承曆三年玄冬之上旬集之

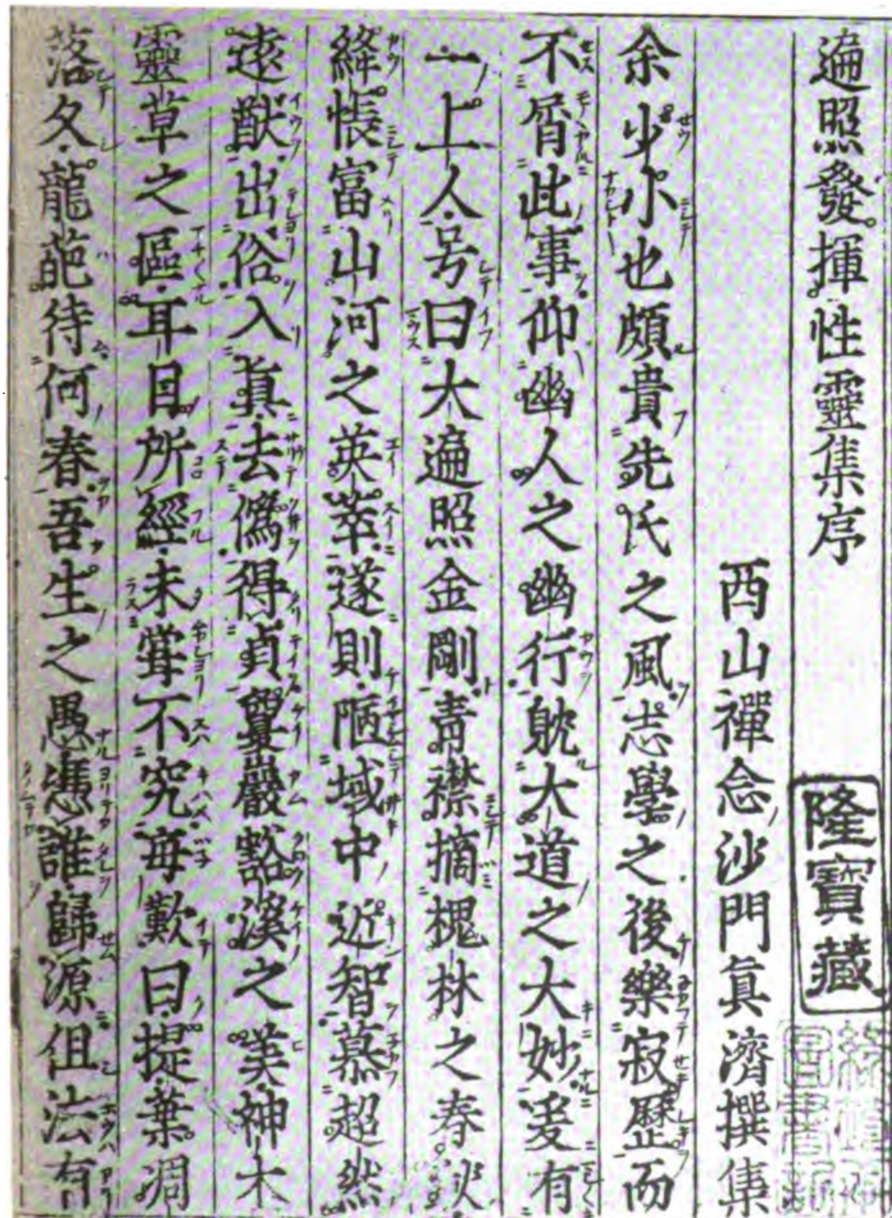
愚昧○菖濟遍集

とあり、その次に貞應三年•寶治元年の二度の讀合校合の記あり、寶治のは文章博士敦周の點本による旨記載あり、又その次に爲長卿點本による校合の記ありて、最後に

一部十帖隆澄僧正持本也、先年頃付屬于予了可秘々々　法助記之

とあり。之れ等諸本を以て直接或ひは間接に校合せるもの、平安朝末期より鎌倉中期までの古點を知るべき一資料なり。

圖版第四十號參照

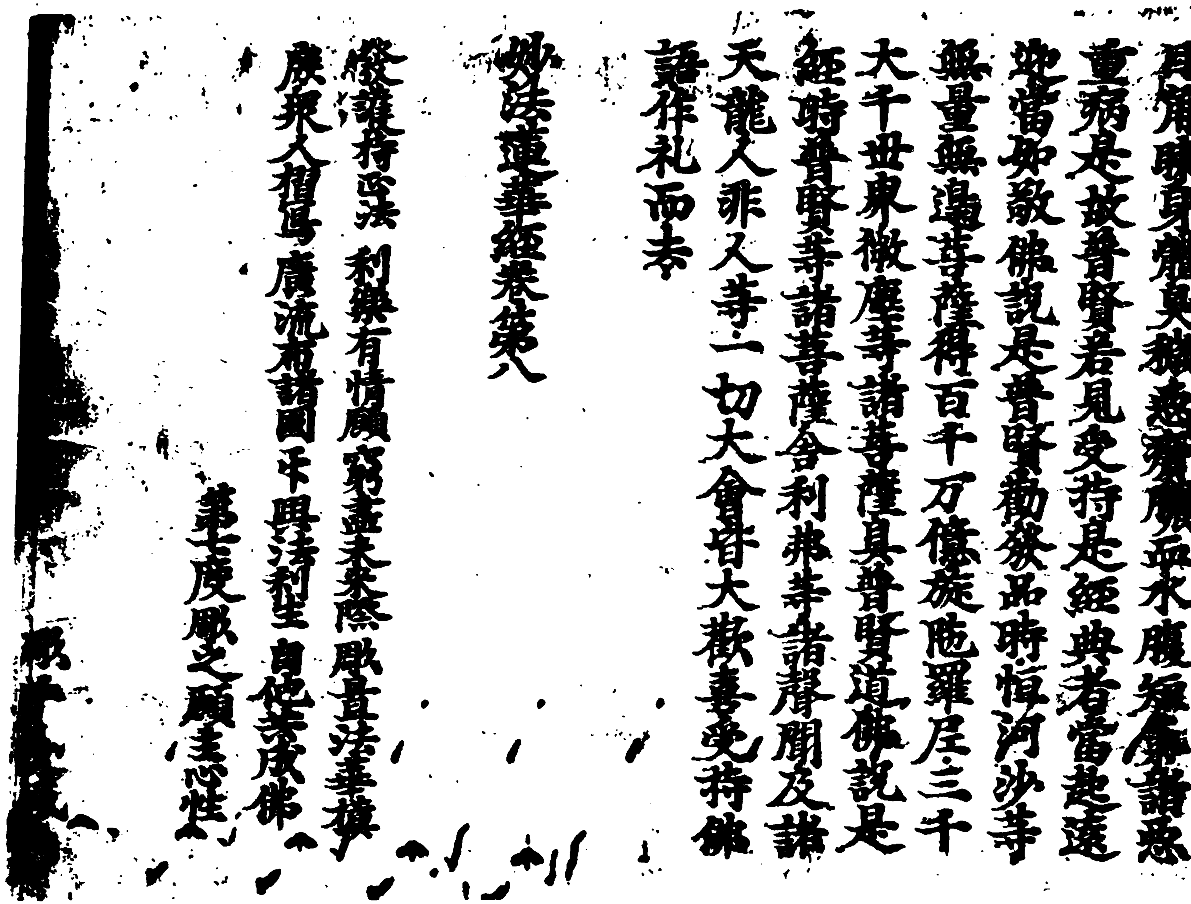


遍照發揮性靈集序

西山禪念沙門眞濟撰集

余少也頗貴老氏之風志學之後樂寂歷而不屑此事仰幽人之幽行耽大道之大妙爰有一上人號曰大遍照金剛青襟摘槐林之春秋絳帳富山河之英萃遂則陋域中之智慕超然遠猷出俗入眞去僞得貞簣巖藪之美神木靈草之區耳目所經未嘗不究毎歎曰提葉凋落久龍花待何春吾生之愚憑誰歸源但有

第四十圖　古活字版　遍照發揮性靈集　卷頭


耳角眼身體臭穢惡瘡膿血水腹短氣諸惡
重病是故普賢若見受持是經典者當起遠
迎當如敬佛說是普賢勸發品時恒河沙等
無量無邊菩薩得百千万億旋陀羅尼三千
大千世界微塵等諸菩薩具普賢道佛說是
經時普賢等諸菩薩舍利弗等諸聲聞及諸
天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛
語作礼而去

妙法蓮華經卷第八

發護持正法　利樂有情願　窮盡未來際　敬冒法華摸
廣衆人摺寫　廣流布諸國　千興法利生　自他共成佛
第七度敬之　願主心性

第三十九圖　春日版　妙法蓮華經　第八卷々末刊記

妙法蓮華經

春日版
鎌倉期刊

全八卷　金四百五十圓

高八寸八分、字面高約七寸五分每行十七字、卷子本、用紙楮紙。卷八末刊記は

發護持正法　利樂有情願　窮盡未來際　彫置法華模　庶衆人摺寫　廣流布諸國　互興法利生　自他共成佛
第七度彫之　願主心性
彫手長盛

とあり。刷印の年代を按ずるに、心性刊行の「妙法蓮華經」の現存最古のものは弘長三年の刻記ある卷子本にて第四度の彫板なる旨を記し、最後出のものは文和四年の刊記ある折帖にして第十四度の刻板なる意を記し、共に奈良唐招提寺に存す。而して此の間に第五度のは文永八年に、第六度のは同じく文永年間に彫造せられ、共に現存するを以て第七度の彫刻になる本書も恐らくは建治弘安の交になり正安を下るべからざるべし。

思ふに法華の妙軸八卷は、彼の金光明經と共に、鎭護國家の經典として王朝以來歷代の尊崇をあつめし所、時あたかも文永弘安の蒙古の襲來に遭遇し擧國々家の安泰を祈願せし際なれば、此の經の摺刷屢々行はれしは最も然るべき所なりとす。謂んや立正大師日蓮の「法華第一」を唱へしが建長五年にて、その勢猖獗を極めしも此の時に當るをや。心性の發願になりて十數度の板を重ねし此の經は一は以て安國の祈禱に供せられ一は以て法敵折伏の具に供せられたるべし。稿字蒼古、撫刻佳良、用紙精選、虫損少く全卷朱點を加ふる事精細に、南都刊行丼中の一尤品なり。

圖版第三十九號參照

(37) 大日本法華經驗記　橘守部本 古寫本　二冊　金三十五圓

遠く弘仁時代の「日本國現報善惡靈異記」の流れを引いた佛敎的な說話集中、鎭源の「大日本法華驗記」は長久二年に成り彼の「三寶繪詞」「日本極樂往生記」などゝ倂稱される古說話集であり、その成立年代の古さは略々「今昔物語集」と比敵する。內容は法華經の威德靈驗に關する說話のみを集めたる點に於て異色ある作であるが、刊本としては享保二年京都刊のものがあるのみである。

此處に揭ぐる一傳本は縱一尺、橫七寸の極大形の袋綴じ寫本、半葉九行、行十六字に楷書にて記し、書寫年代は近世初期を少しく下るものであらう。下卷々首に此の書の內容につき扶桑略記第廿一を引用して欠卷あるべきかを考證したる後に

貞享乙丑冬十一月十三日　彰考館識

とあるのが書寫年代と見なすべきであらうか。下卷末には

于時正和第五執徐歲林鐘中旬々
於奥州桃生郡河俣宿所書寫畢

とあるのは原本の書寫年代であつて、本寫本が鎌倉末期の古鈔本の忠實な臨寫本なる事を證するものであり、從つて此の重要な古說話集の傳本として尊ぶべき一本なる事を示すものであらう。彰考館文庫に一本を藏せられたるべく想像さるゝが現在はその書目中に見當ら無い。或ひは本書が彰考館舊藏のものかも知れない。

惜むらくは上中下三卷の中、中卷一冊を脫して居る。小口書きに「乾坤」としるしたるは此の欠脫の新しきものならざるを思はせる。

橘守部及び澁江抽齋の二名家舊藏。各藏書印あり。

圖版第三十八號參照

大日本國法華經驗記上

首楞嚴院沙門鎮源撰

竊以法花經者久遠本地之實證皆成佛道之正軌搜其樞鍵則普括一代五時之始末尋其根元亦包百界千如之權實神德峨々兮一天之下高仰影曜靈運浩々[illegible]四瀛之中深潤渥澤故什公譯東之後上宮請西以降若受持讀誦之伴若聽聞

歴代鎮西要略巻第一上

和學講談所

神代之略

日本開闢之初太元尊神七代之後伊弉諾尊伊弉冊尊二神立天浮橋生大八洲筑紫洲其一也二神生國土而后乃誓所生之元子即曰大日女尊光彩照六合仍授天事次兒曰月弓尊光彩亞日即立天而与日尊交領晝夜二尊神御天鎮地太陽太陰之象本朝人君本祖一切萬民之太君也次兒曰蛭兒亦次兒曰素戔嗚尊一女三男是也而天二神以皇孫天津

第二十七圖　和學講談所本　歴代鎮西要略　第一卷々頭

歴代鎭西要略

和學講談所本　全十四冊　金三十圓

歴代鎭西要略十三卷十四冊は神代以來文祿二年に至る千數百年間の九州史なり。古文献に載する所の九州に關するものゝみを記す。原漢文にして一名「西鎭要覽」と呼ぶと雖、その著者明かならず恐らくは近世初期の撰にかゝるべきか。此處に掲ぐる所の一本は塙保巳一の舊藏にして「和學講談所」「温故堂文庫」の二朱印が捺す。表紙に東四十二、第卅三、共十四本の貼紙は共に舊のものにして講談所の舊制を偲ぶに足る。書寫の年代は徳川中期以後と覺しく、恐らくは塙氏が新に書寫せしめしものにかゝるべし。

由來塙氏の藏本はその獲る所のものも又新寫せしめしものも、多く本文優れて正しきを常とするを以て此の書も亦「歴代鎭西要略」の寫本として最も信憑するに足るものゝ一ならんか。

美濃判。紙數約七百枚。

圖版第三十七號參照

(35)

類聚符宣抄　　和學講談所本　全四冊　金三十圓

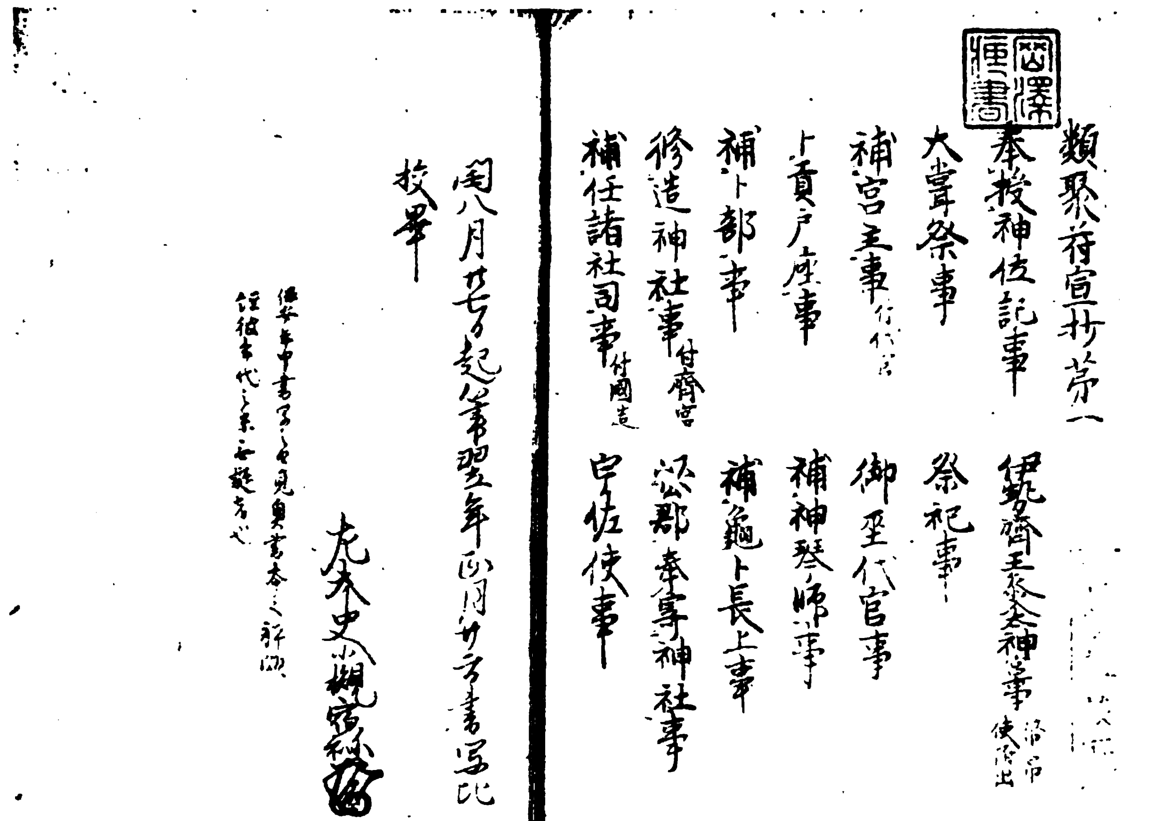
縱九寸、橫六寸五分。「左丞抄」と外題あり。內題を「類聚符宣抄」となす。各卷々頭に「和學講談所」の朱印あり。講談所の舊藏本にして、保巳一の文政刊本の原本として尊重すべき寫本なり。

卷第二第五の二卷は古來逸して傳らざる所、本寫本にも之れを欠くは論勿き所、第十卷末に左大史小槻宿禰季連の奧書あり、家傳の保安の奧書ある古鈔本を元祿四年に寫す旨を記す。その次に朱を以て

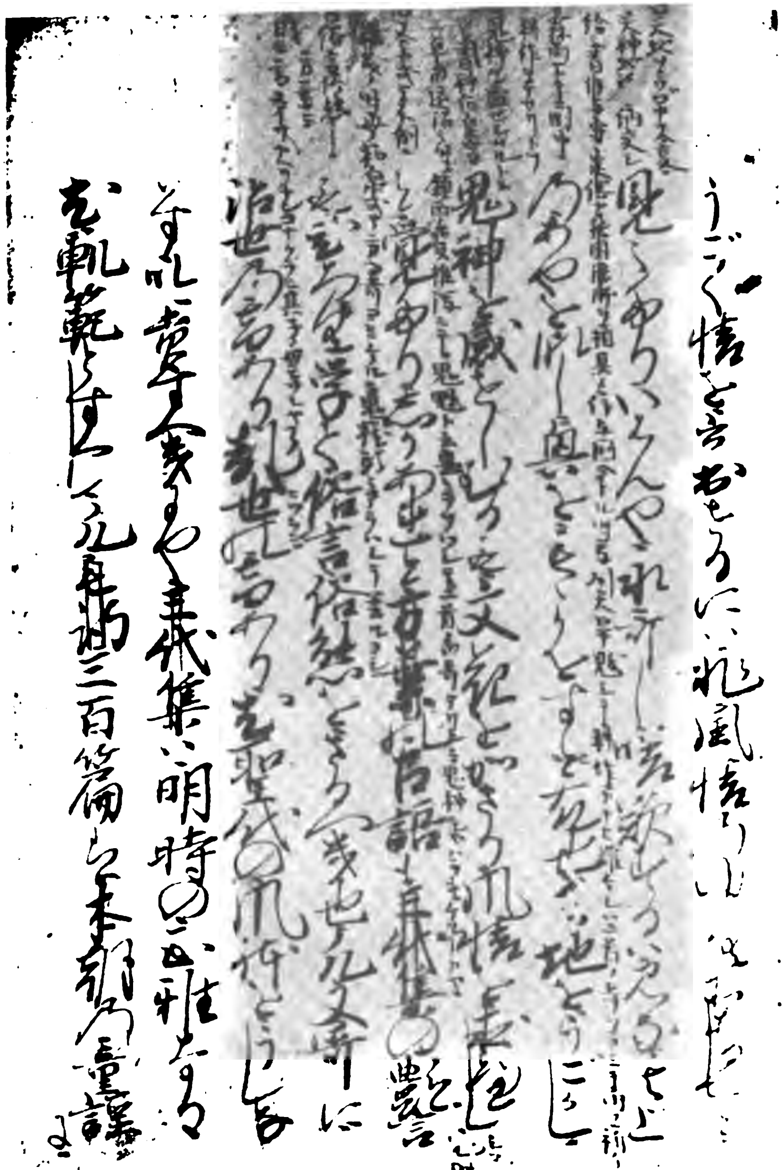
保安年中書寫之由見奧書本之體頗經彼年代之條無疑者也

とあり、筆者明かならざれども塙門の何人かゞ壬生官務家舊儲の保安本を見るを得て誌せしものなるべし。此の寫本は保安本を臨寫又は模寫せるものか、書體雄健多く古風を存す。塙檢校の文政刊本に魯魚の誤り多きは本寫本の故にもよるべけれど、又此の書を以て文政本を改むべき個所少しとなさゞるが如し。總紙數約三百八十葉。

圖版第三十六號參照



第三十六圖　和學講談所本　類聚符宣抄　第一卷々頭



第三十五圖　古寫本愚問賢註　内容の一部

(34)

愚問賢註　古寫本　全一冊　金三十五圓

縦七寸七分、横五寸四分、袋綴じの楮紙に半葉九行に書す。書寫年代は足利末期なるべし。本文は平假名交りに書き、故事成語等の註を朱を以て頭書す。此の頭註は片假名交りなり。引く所の書名の上には朱の單線をひき人名には朱の復線をひき區別する事多し。頭註の書寫時代は略々本文と同時なるべし。本文の註（即ち頓阿の答へ）は一二字下げて書したり。

テキストは續群書類從本と差違ありて寧ろその校合に用ひたる圖書寮本に近き様なり。卷末に

貞治第二之暦姑洗………銘愚問賢註而已　五湖釣翁御判

とある次に

寫本云

此一冊以正本令書寫者也、端一兩牧染筆奥記釋圓雅　新續古今隱名作者　終功早

文安四年四月廿五日　和歌所老拙法印判

とあるは、類從本、秘閣古寫本等と異りて記事より多く具體的なり。二條派歌學の翹楚たる頓阿の此の主著の現存傳本中書寫年代最も古きものゝ一として本文比校上も須要なるべし。古き紺表紙の左に朱にて打ちつけに「愚問賢註」とのみ書す、總紙數三十五葉。下田義照氏舊藏。

圖版第三十五號參照

つれ〳〵草　古寫本　全二冊　金三十五圓

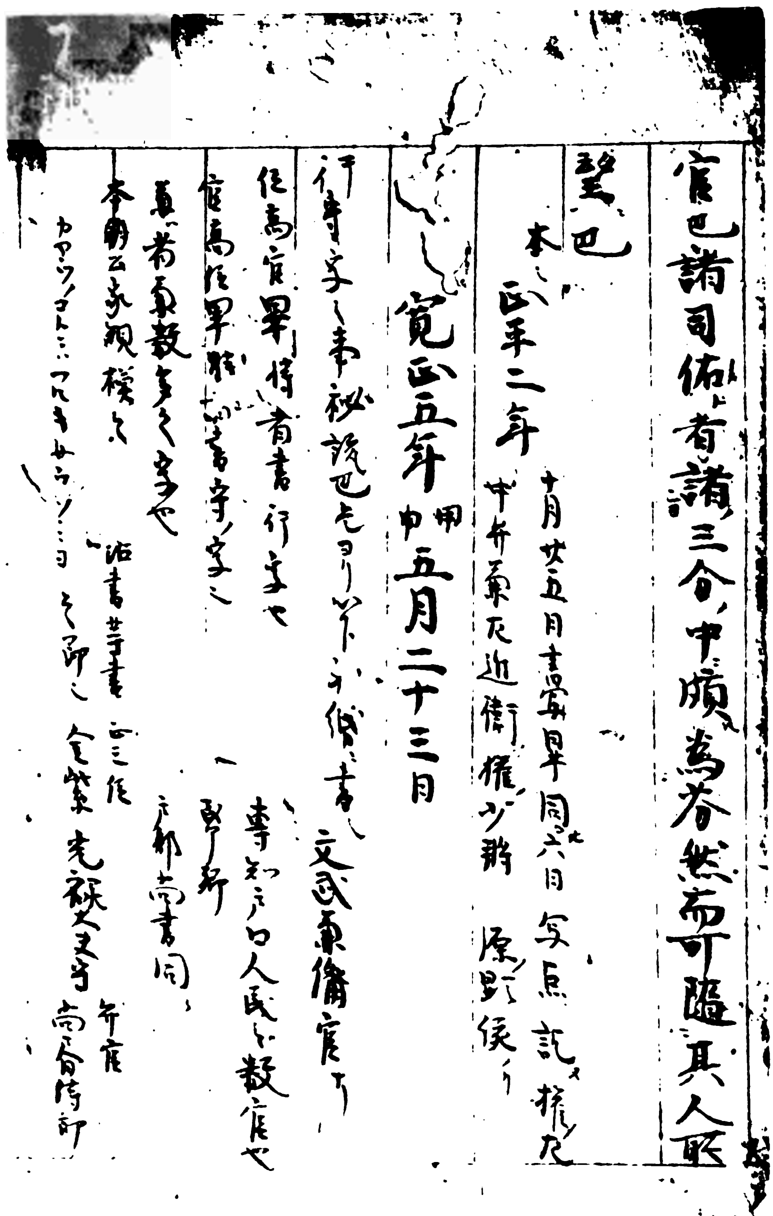
吉田の兼好の此の隨筆は昔から誰もが好んで讀んだものと見えまして、江戸時代になつて數種の古活字版の外版本も多種多様に出るのと並行して寫本も比較的永く行はれました樣です。世界有數の寫本國である日本の數多い寫本の中でも之は古今集、伊勢物語、源氏物語などゝ共に流布の廣いものの一に數へられませう。そして之れ等の中で「つれ〳〵」の特徴は異本が非常に少い事と慶長以前の書寫本の稀覯な事でせう。此處に擧げました寫本も御多分に漏れず慶長以後の寫本、寛文前後と思はれるもので、内容も、章段の數が少しく異る（上卷百卌八段、下卷百九段、合計二百四十七段）外大體流布本と大差ない樣です。只他と異る點は全體の感じのよさです。その蓋の上に「つれ〳〵草」と金で行書に書いた溜塗の古い箱に入つた此の寫本は、網目のある鳥の子紙の上に、青と金の模樣を捺した表紙をつけ、胡蝶裝です。本文の用紙は橡色の楮紙一枚の裏表に十行づゝに書いて居ります。下卷末に「居初氏女書」と墨書がありますから居初氏の性を名乘る女性の筆寫になるものでせうが、筆致は必らずしも女性的のみではなく、ユッタリとした穩かな美しさです。いやユッタリした穩かな美しさは書風のみではなく此の本全體にどことなくニジミ出て居る風致で、云はゞ兼好の「つれ〳〵草らしさ」に滿ちて居ると申せます。この「らしさ」が此の書の大きな特徴でせう。縱七寸九分、横五寸八分。ごく尋常の大さです。「徒然草はこんな本で讀みたい」と思ひますのは私一人ではございますまい。

圖版第三十四號參照

第三十四圖　古寫本つれ〴〵草卷頭

一段

徒然なるまゝに日くらし硯にむかひて心
にうつりゆくよしなしことをそこはかとなくかきつ
くれはあやしうこそものくるほしけれ
いてやこの世に生れてはねかはしかるへきことこそ
おほかめれみかとの御位はいともかしこし竹
のそのふの末葉まて人間の種ならぬそ
やんことなき一の人の御ありさまはさらなり
たゝ人もとねりなと給はるきはゝゆゝしと見ゆ
其子むまこまてははふれにたれと猶なま
めかしそれより下つかたはほとにつけつゝ時にあひて



第三十二圖　寛正本聯原抄　上卷々末

(32)

職原抄　古寫本 寛正五年本　全二冊　金八十圓

南朝随一の重臣、博覽宏才にして忠誠無二、國體學史上空前の境地を開拓せりとせらるゝ准后北畠親房の諸著述中彼の「神皇正統記」と共に双璧と稱せらるゝ「職原抄」二巻は「正統記」成るの後約半年、興國元年二月に成稿せしもの、今に傳はる所は三系統に岐る。顯統本・教具本・材親本之れなり。而して流布の木版本は後人の筆削挿入多く信ずるに足らず。此處に掲ぐる足利中期寛正五年の奥書ある古寫一本の如きは、多く此の重要なる古典の眞面目を見取るべく、益あるものたるべし。

寛正本職原抄は上下二冊、内上冊は寛正五年の書寫にかゝり下一冊は少しく後の補寫にかゝるべし。共に橘守部の舊藏にかゝり巻頭に唐獅子の藏印を捺す。上冊は縦七寸六分、横五寸五分、袋綴じの冊子にして、用紙の四周及び行間に墨罫をひき半葉八行に書す。所々朱線及び朱點を加ふ。巻尾は圖版第三十三號に示すが如く

本云
　　十月廿五日書寫畢同廿六日寫點訖權左
正平二年　中　辨　兼　左　近　衞　權　少　將　源　顯　統
寛正五年甲申五月廿三日

とあり。書體紙質等より見て寛正のものたるべし。下冊は縦七寸九分、横五寸五分、袋綴じの無界の用紙に半葉九行に書したり。上冊の夙く逸失したるがために補ひたるものなるべく、書寫年代は慶長前後のものなるべきか、奥書はその顯統本なる事を示したり。朱線朱點は上冊に同じ。内容は共に古本の正しき姿を多く留め、刊本の准大臣の條、桃花老人の補遺、清原秀堅の後付等は盡く之れを附せず。

圖版第三十三號參照

異賊御祈禱記　明應二年釋實朝寫　全一卷　金七十五圓

內題は「異國襲來祈禱註錄」とあり、文永弘安の交、蒙賊來寇に際し、龜山院の四天王寺、教興寺及び男山八幡宮にて仁王節會及び、八百座仁王講を行はせられたる轉末及びその節に起りたる種々の奇端をしるしたるものたり。縱九寸餘の紙に白界を引き全長六尺、靑風莊重なり。文中の一節に

七箇日滿スル夜(戌刻)大菩薩ノ玉殿大ニ振動シ拔キ二御殿之戸一自レ內出二微妙ノ御音一曰呂スニ新羅ト一歟仍ト答フ大菩薩重テ仰曰ク思圓房數百人僧侶與共致スニ異賊調伏祈禱一今夜既滿足ス、爲ニ異賊降伏一可レ放ニ鏑矢一云々即御前（不明）弓弦 音大ニ響ク鏑ノ目ヨリ出レ光如ニ雷響一指レ西飛行ク次自ニ社壇中一白色瑞光幡三流飛ヒ出テ向レ西去ルコト如レ燃三流之幡皆文字云々

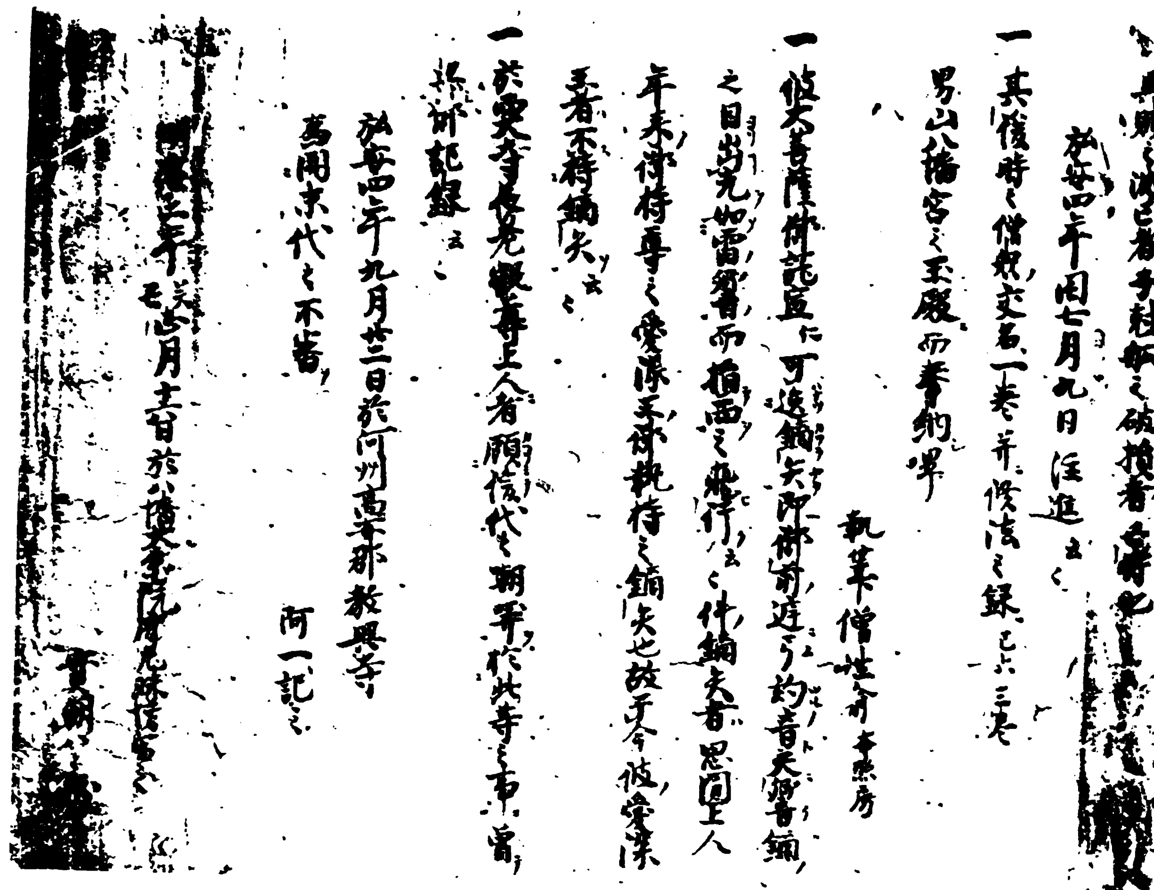
とあり。卷末に

一、於ニ西大寺長老叡尊上人ニ一者顧ミテ二後代之嘲弄ヲ一於ニ此等之事ニ一當テ無ニ御記錄一云々

弘安四年九月廿二日於阿州高安郡教興寺爲開末代之不審　阿一記之

明應二年(癸丑)正月十六日於八幡大乘院摩尼昧坊寫之　實朝八八歲

とあり。即ち弘安四年中に阿一なるもの聞記して後代に遺せしものを明應中に僧實朝の書寫せしものにかゝる。紙質書體共此の時代のものたる事疑ふべからず。文永蒙古入寇時の一側面史料として尊ぶべし。上野竹次郎氏舊藏。續群書類從第七百四十卷所收の「弘安四年異國御祈禱記」は本書とは全く別本なり。圖版第三十二號參照


一 異賊之滅亡者今社家之破損者云寺……
弘安四年閏七月九日 注進之
一 其後時々御祈文書一巻并御注之録已上二巻
男山八幡宮之宝殿而奉納畢
執筆僧惟寛 本照房
一 彼大菩薩御託宣仁可造鏑矢御前進之 約音天響鏑
之日出光明雷鳴而指西之飛行之 件鏑矢者思円上人
年来所持尊之愛染王御執持之鏑矢也 故于今彼愛染
王者不持鏑矢云々
一 於寂光寺長老覚尊上人者 願主代之 朝平於此寺之令書
所所記録云々
弘安四年九月廿二日於河州高安郡教興寺
為同末代之不忘 阿一記之
正應五年……月十二日於八幡大菩薩御宝殿……

第三十二圖 異賊御祈禱註錄奥書

曽我物語巻之第壹

本朝報恩合戦謝徳闘諍集

夫日域秋津嶋と申ハ國常立尊よりこのかた天神七代地神五代すへて十二代ハ神代として相置は地神五代の末の御神をハ早日日居尊と申御代に出御ありて　本朝を治めさせたまふこと七十五万二十七年　其次の御代に出させ給ふ御神をハ大和日高見尊と申　本紀おさめさせたまふこと　十二万八千七百八十五年　其次をハ早膚大足尊と申　本朝を治めさせたまふ事　七千五百十二年　そのつきの御代に出させ給ふをハ鵜羽葺不合尊と申　本朝をおさめさせたまふ事　十二万三十七百四十二年也　其のち神代絶えて七千年の間をハ暗し

異本 曾我物語　大石寺本　全十卷五冊　金三十圓

副題を「本朝報恩合戰謝德闘諍集」とあり。半紙本五冊、半葉十二行に平假名交りに書寫す、奥書は

「某年客某相州湯泉歸路枉レ駕遊ニ富士大石寺一（中略）牀上看ニ冊子一葉々爲ニ蟲蛀一隨レ手脱落不レ可ニ急翻一眞古物也。客歎ニ其不レ久而散逸ニ亟請得レ之裝レ楮成ニ完本一。凡十卷具錄ニ曾我復讐之始末一（中略）今此本某亦轉寫者也（中略）伊庭小太郎書ニ於御厨巷茅屋一

とあり。即ち全十二卷の流布本に對し十卷よりなつて、その成立流布本より更に古く、記事簡潔にして古體を存し、又數ある曾我物語の異本中内容も最も史實に近しとして著名なる大石寺本の一傳寫本にして、東京帝大、靜嘉堂文庫等の藏本と類を同うするものなり。前記奥書は大石寺本の傳來を探る上に於て興多き一文なりとす。

筆者伊庭小太郎は既掲橘守部舊藏の「纂本日本後記」の筆者なり。御厨巷茅屋に於て書すと記したれば陸中一の關附近の學者なるべきか、書寫の年代は近世中期たるべし。各冊卷頭に 千葉文庫 の藏印を押す。千葉氏は即ち一の關の豪族なり。

圖版第三十一號參照

寶物集　古寫本　全三冊　金三十五圓

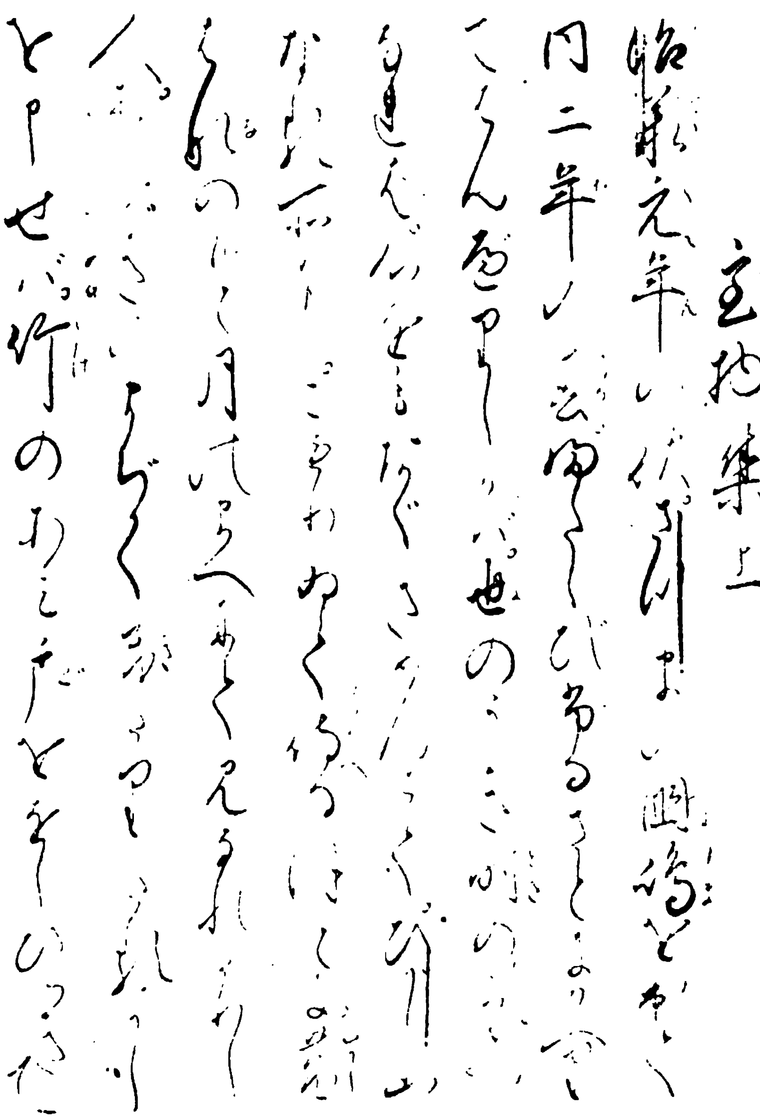
鎌倉期の説話文學中の尤品の一である「寶物集」の三卷本の古寫本で、縦九寸一分、横六寸五分の大形寫本袋綴じであります。表紙は古い蠟箋様の濃藍色の紙の上に中央に　寶物集　上(中下)　の美しい題簽を置いて居り、頗る感じのよいものです。書寫の年代は近世初期を少しく下つた頃と覺しく、平假名交り半葉九行に、少し大きめの字をなだらかに書き流して居ります。漢字を交ふる事少く、多く假名なあてゝ居り、名詞の中央又は左傍に朱線を引いてあり、所々に朱で解釋を加へて居ります。

本文は同じ三卷本でも續群書類從第九五二卷に收めたものと甚だしく相違して居ります。個々の語句の相違などはとても數へ切れず擧げ切れませぬが、所によつては數十行脱落し或ひは前後して居り、全體の分量としては續群書類從本より約四分の一程少いですが、中の讀みつゞきは此の寫本の方が確かによいですから、前者には後人の挿入附加が甚だ多いものと思はれ、「寶物集」の古い姿には此の寫本の方が遙かに近いと信ぜられます。同續群書類從に所收の一卷本と比較しますと、此の三卷本は同じ三卷の類從本よりは寧ろ一卷本の方により近いと思はれる變つた系統のものであります。

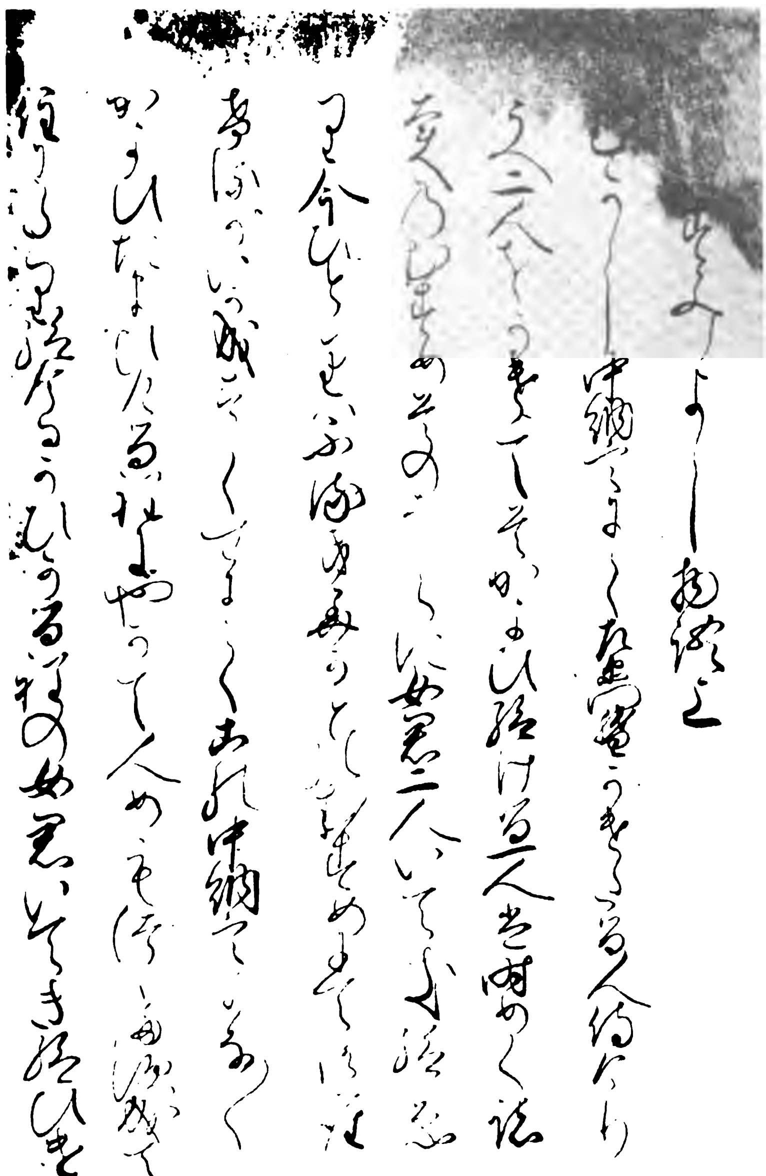
兎に角異本の多い「寶物集」中でも興味ある一傳本たるを失ひません。

各卷々末に印文不明の古黒印を捺して居ります。

圖版第三十號參照



第三十圖　古寫本寶物集第一卷々頭



第二十九圖　古寫本住吉物語　上卷々頭

(28)

住吉物語

古寫本　全二冊　金三十五圓

縦八寸、横五寸七分。中本。袋綴じ。半葉九行。書寫の年代は近世初期なるべし。奥書なし。表紙は絹地に銀泥を以て草花を畫き、中央に光悦本の影響を受けたりと覺しき雲母摺りの題簽「すみよし物語上(下)」をつけたり。裝潢雅致多し。

本文は復雜にして異本多き住吉物語中の所謂廣本の部類に屬し、記述詳細なり。群書類從本及びその原本とも云ふべき古活字本に近き本文を有するが如しと雖も、まゝ差違あり。例へば卷頭の

「いま一人はふるき宮腹の御女にておはしけるが、いかなる宿世にて　云々」

と群書類從本等にある所は此の寫本には

「いま一人はふるきみかどのむすめにてお座けるが、いかなる宿世にて」

とあり又そのしばらく後の

「おほしかしづき給ふこと限なし」と切れたるは「おほしかしづき給ふことかぎりなければ」と續きたるが如し。

此の外新校群書類從の校合に使用したる宮内省圖書寮藏の古寫本と一致せる點多し。

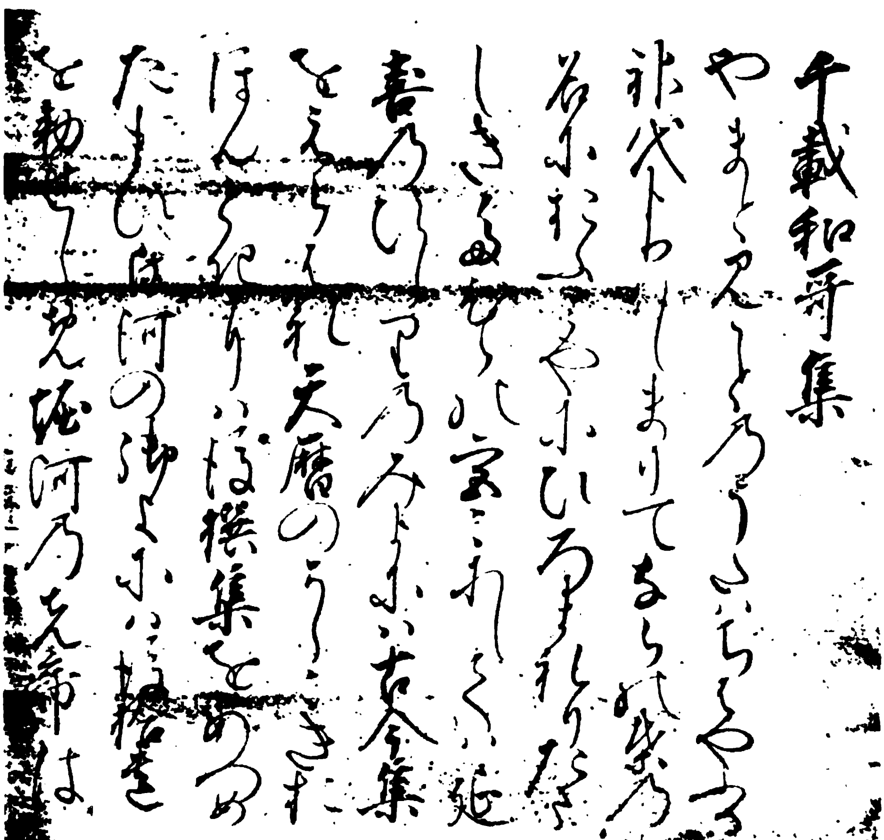
圖版第二十九號參照

(27)

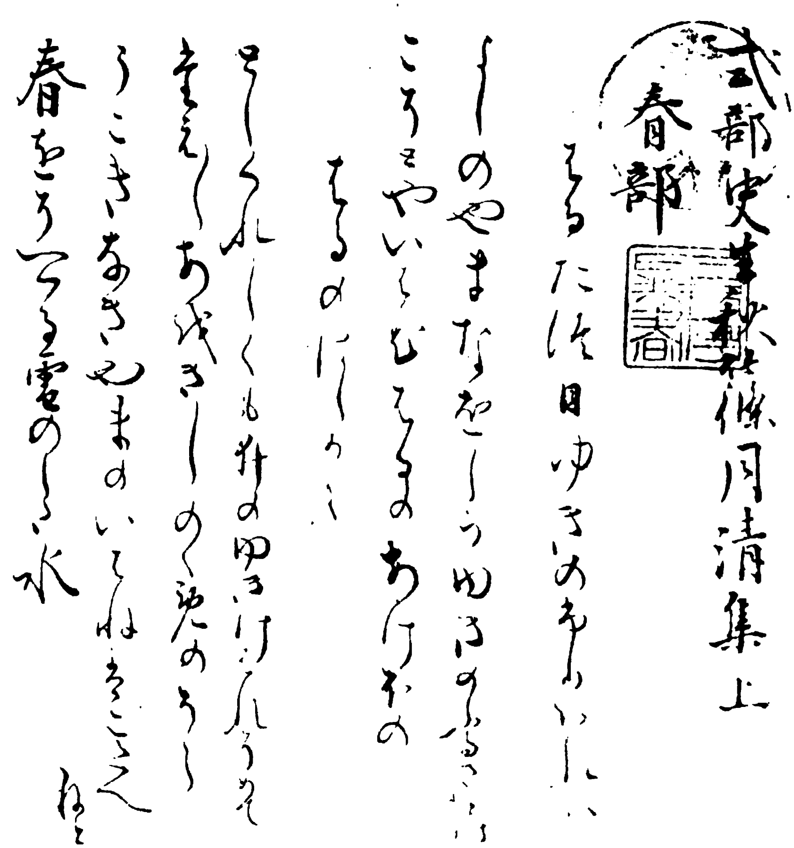
千載和歌集　古寫本　全二冊　金二十圓

白、黄、青、綠、褐の諸色の濃淡交々の料紙に雲形、雪形、網形、格子形、等種々の文樣を金銀藍等で捺し出した上に假名美しく書寫してあります。奥書はありませんので書寫の年代は不明ですが、德川の初期より少しく下つた頃京都邊の公卿の寫されたものでせう。筆者は明かでありません。用紙は楮紙裏表に各十一行に文字はなごやかに麗はしく歌一首を二行に書いて居ります。縱横各五寸二三分の桝形本、表紙は濃い藍色の絹地に糸で模樣を織り出した古いものを附けて居ります。本文は八代集本と大差ない樣に思はれます。古雅な美しさを採つて戴く本です。桝形の樣子のよさも買つて戴けませう。

圖版第二十八號參照



第二十八圖　古寫本千載和歌集　上卷々頭



第二十七圖　樂翁公本　秋篠月清集　卷頭

(26) 吏部史生秋篠月清集 定家本 樂翁公奥書 全二冊 金五十圓

新古今時代の俊秀、「天性不思議の堪能」、高雅清新の歌風の人後京極良經の家集は流布本は元祿版の六家集本にて四卷に分れたるも、此處に擧げたる一本は流布本とはその組織を異にし、所謂定家本なる系統に屬するものたり。一冊は內題を「吏部史生秋篠月清集」とあつて流布本卷三四を收め、他の一冊は「百首愚草」として流布本卷一二に當る。月清集と內題ある冊の奥書には

「是御平生之時所被註置之本也夢後書留之粗一見了御本總返上之間不見中書之草字誤無極本不暗覽事不能直付」

安貞二年五月二日

と書きたるは流布本になき所、此の家集の成立を考ふる上に於て重要なる意義を有す。

「定家卿の書給うなるが淀大官の家藏なりしをかりものしうつさせしなりよくみたるが定家卿の書しをうつせしものとみゆ

文化七年庚午夏月 樂翁」

とあり、白河樂翁公自筆なり。即ち定家がその友にして弟子ある此の名門の歌人の歌を自筆にて寫せしものゝ傳寫本にて、本文にも流布本との差違あり、彼の靜嘉堂文庫所藏の傳飛鳥井賴孝筆本と系統を一にする重要なる一證本と云ふべし。

奥書のみは原本を臨寫せしと見え定家風の蒼勁さを示せり。彼の國歌八論の著者が「每首皆錦繡、句々悉く金玉、意情を述ぶればたゞちに感慨を生じ景色を言へばまのあたり見るが如し」と激賞せし後京極攝政の歌集を此の好傳本によりて吟誦し給へ。

約五寸五分四方の桝形本。卷首に樂翁公の「桑名」「樂亭文庫」及び渡邊氏の「霞亭圖書」の三藏印あり。

圖版第二十七號參照

(25)

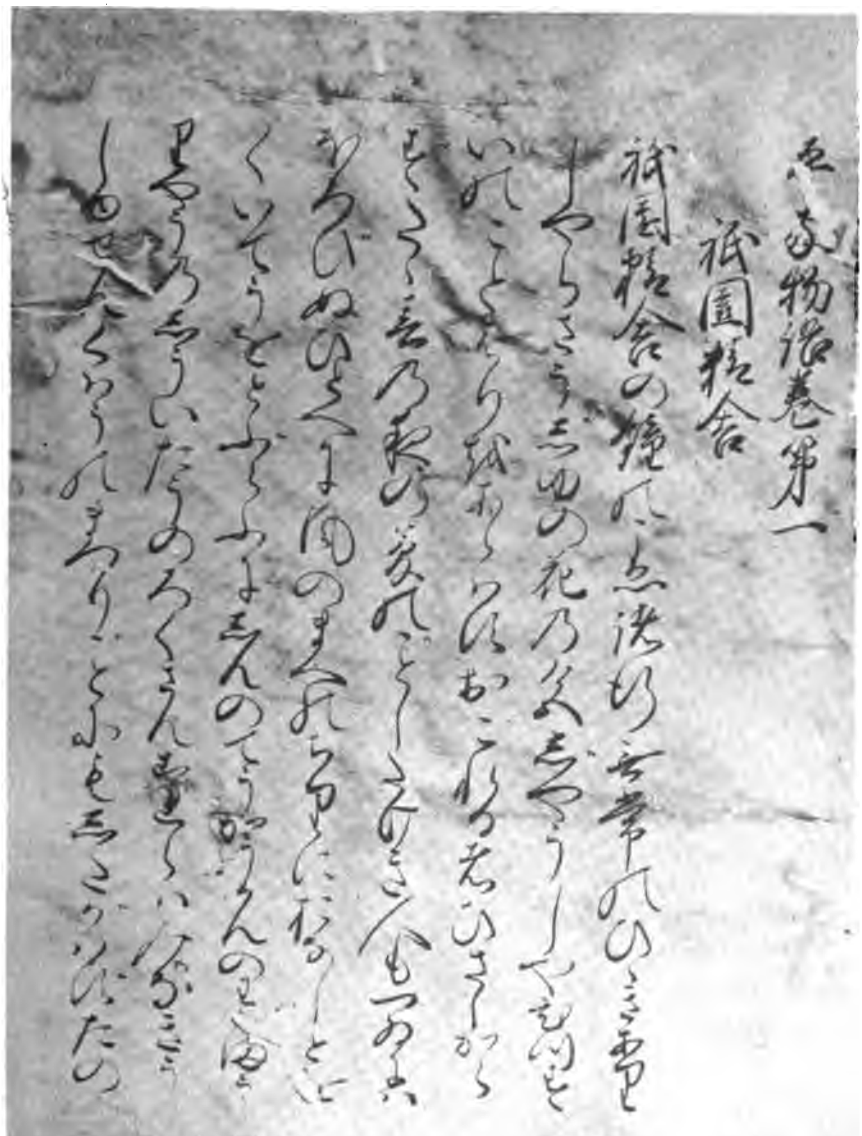
平家物語　古寫本　全十二冊　金八十五圓

縦七寸七分、横五寸八分、胡蝶裝。用紙厚き楮紙の裏表に一面九行になだらかに書したり。書寫年代は近世初期なるべし。表紙は藍地に青と褐色の糸にて模様を織り出せる美事なる古裂にて、その左肩に平家物語(卷數)の題簽を貼りたり。見返しは金のつぶし、光彩陸離たり。内側に紺色の紙を貼りたる黒塗の古箱の中に入る。時代の味ひ濃やかなる古寫本なり。

卷末奥書はなけれど、本文の系統は一方檢校本なるが如し。流布本と小異を存すれど、殊に漢字少く假名を用ふ事多きを特徴となすが如し。第一卷に蟲損及び水しみあり、表紙も第一卷は可成に色褪せたれど他の十一冊は汚損なきを賀すべし。

平家物語の古寫本必らずしも少きにあらざれど、その裝潢の美しさ、筆致のなだらかさに於て類多からざるものなるべし。

圖版第二十六號參照



平家物語巻第一
祇園精舎
祇園精舎の鐘の声諸行無常のひゝきあり
しやらさうしゆの花の色しやうしやひつすいの
いはれをあらはすおこれる者ひさしからす
たゝ春の夜の夢のことしたけき人もつゐには
ほろびぬひとへに風のまへのちりにおなしとを
くいてうをとふらへはしんのてうかうかんのわう
まうりやうのしういたうのろくさん是等は
しゆせんくわうのまつりことにもしたかはすたの

第二十六圖　古寫本平家物語　第一卷々頭

(29)

寶物集

古寫本　全三冊　金三十五圓

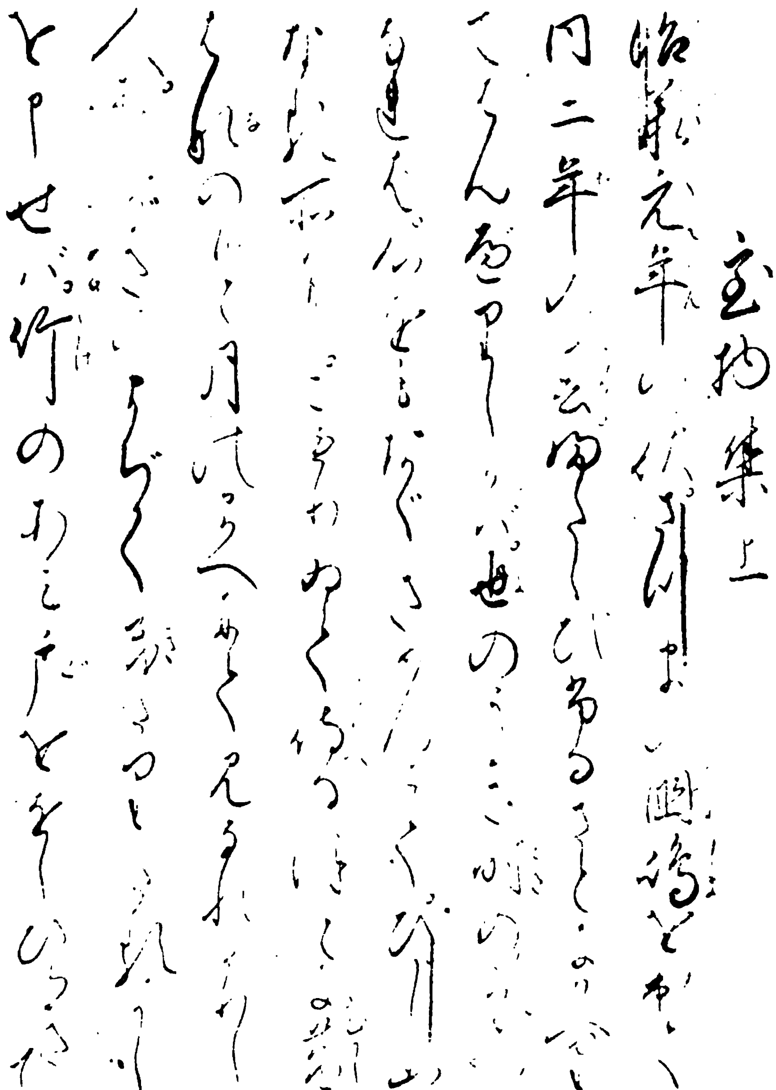
鎌倉期の說話文學中の尤品の一である「寶物集」の三卷本の古寫本で、縱九寸一分、横六寸五分の大形寫本袋綴じであります。表紙は古い蠟箋樣の濃藍色の紙の上に中央に　寶物集　上(中下)　の美しい題簽を置いて居り、頗る感じのよいものです。書寫の年代は近世初期を少しく下つた頃と覺しく、平假名交り半葉九行に、少し大きめの字をなだらかに書き流して居ります。漢字を交ふる事少く、多く假名をあてゝ居り、名詞の中央又は左傍に朱線を引いてあり、所々に朱で解釋を加へて居ります。

本文は同じ三卷本でも續群書類從第九五二卷に收めたものと甚だしく相違して居ります。個々の語句の相違などはとても數へ切れず擧げ切れませぬが、所によつては數十行脫落し或ひは前後して居り、全體の分量としては續群書類從本より約四分の一程少いですが、中の讀みつゞきは此の寫本の方が確かによいですから、前者には後人の挿入附加が甚だ多いものと思はれ、「寶物集」の古い姿には此の寫本の方が遙かに近いと信ぜられます。同續群書類從に所收の一卷本と比較しますと、此の三卷本は同じ三卷の類從本よりは寧ろ一卷本の方により近いと思はれる變つた系統のものであります。

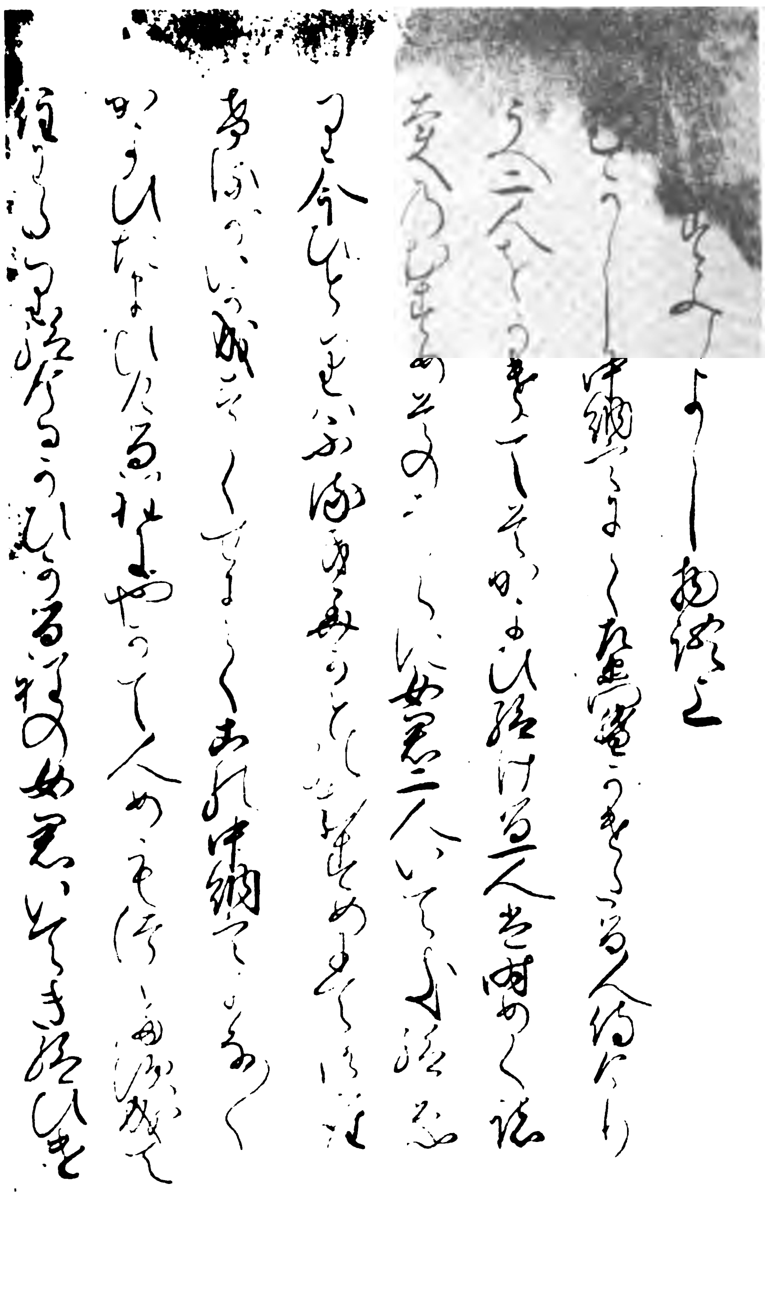
兎に角異本の多い「寶物集」中でも興味ある一傳本たるを失ひません。

各卷々末に印文不明の古黑印を捺して居ります。

圖版第三十號參照



第三十圖　古寫本寶物集第一卷々頭



第二十九圖　古寫本住吉物語　上卷々頭

(28)

住吉物語　　古寫本　　全二冊　　金三十五圓

縱八寸、横五寸七分。中本。袋綴じ。半葉九行。書寫の年代は近世初期なるべし。奥書なし。表紙は絹地に銀泥を以て草花を畫き、中央に光悦本の影響を受けたりと覺しき雲母摺りの題簽「すみよし物語上（下）」をつけたり。裝潢雅致多し。

本文は復雜にして異本多き住吉物語中の所謂廣本の部類に屬し、記述詳細なり。群書類從本及びその原本とも云ふべき古活字本に近き本文を有するが如しと雖も、まゝ差違あり。例へば卷頭の

「いま一人はふるき宮腹の御女にておはしけるが、いかなる宿世にて　云々」

と群書類從本等にある所は此の寫本には

「いま一人はふるきみかどのむすめにてお座けるが、いかなる宿世にて」

とあり又そのしばらく後の

「おほしかしづき給ふこと限なし」と切れたるは「おほしかしづき給ふことかぎりなければ」と續きたるが如し。

此の外新校群書類從の校合に使用したる宮内省圖書寮藏の古寫本と一致せる點多し。

圖版第二十九號參照

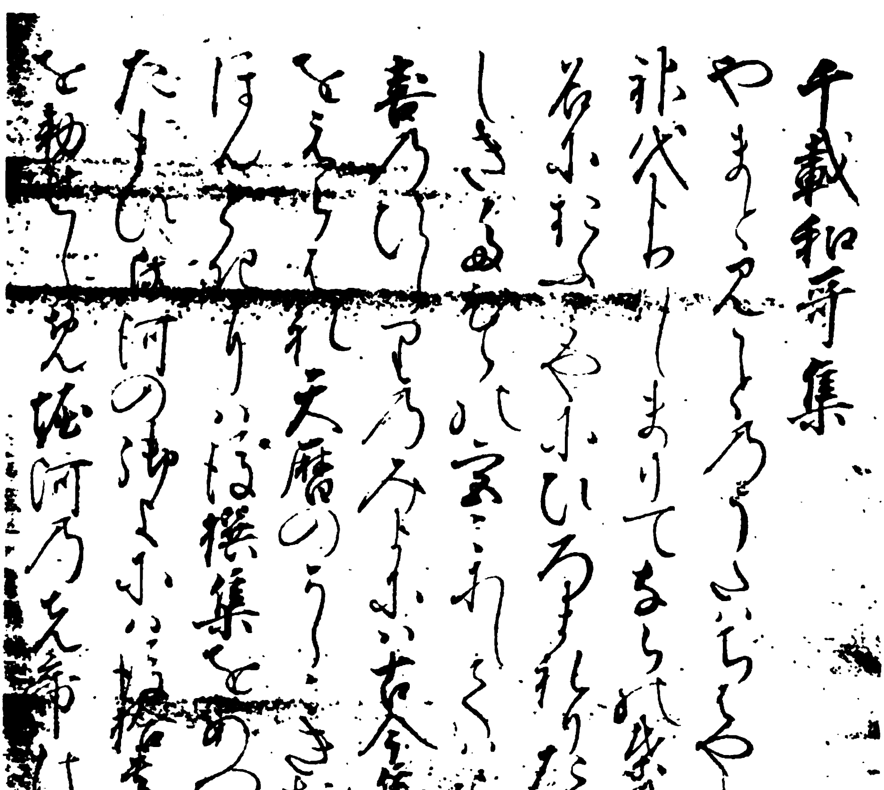
(27)

千載和歌集

古寫本　　全二冊　　金二十圓

白、黄、靑、緑、褐の諸色の濃淡交々の料紙に雲形、霞形、網形、格子形、等種々の文様を金銀藍等で捺し出した上に假名美しく書寫してあります。奥書はありませんので書寫の年代は不明ですが、徳川の初期より少しく下つた頃京都邊の公卿の寫されたものでせう。筆者は明かでありません。用紙は楮紙裏表に各十一行に文字はなごやかに麗はしく歌一首を二行に書いて居ります。縦横各五寸二三分の桝形本、表紙は濃い藍色の絹地に糸で模様を織り出した古いものを附けて居ります。本文は八代集本と大差ない様に思はれます。古雅な美しさを採つて戴く本です。桝形の様子のよさも買つて戴けませう。

圖版第二十八號參照


千載和哥集
やまとみことのうたはちはやふる
神代よりはしまりてならの葉の
名におふ宮にひろまれり玉
しきのたひらけき都にしては延
喜のひしりの御世には古今集
をえらはれ天暦のかしこきお
ほん時には後撰集をあつめ
たまひ白河の御よには後拾遺
を勅せしめおほん堀河乃先帝は

第二十八圖　古寫本千載和歌集　上巻々頭

式部史生秋篠月清集上

春部

はるたつ日ゆきのふりけれは

よしのやまなをしらゆきのふるさとは
こそやいらむはるのあけほの
はるのはしめに

そらはれしくもかけのゆきけなかれ
まえしあさきしのゝはらのうし
うこきなきこほりのいてはなきこえ
春をえてうる雲のしら水

第二十七圖　樂翁公本　秋篠月清集卷頭

吏部史生秋篠月清集　定家本 樂翁公奥書　全二冊　金五十圓

新古今時代の俊秀、「天性不思議の堪能」、高雅清新の歌風の人後京極良經の家集は流布本は元祿版の六家集本にて四卷に分れたるも、此處に擧げたる一本は流布本とはその組織を異にし、所謂定家本なる系統に屬するものなり。一冊は內題を「吏部史生秋篠月清集」とあつて流布本卷三四を收め、他の一冊は「百首愚草」として流布本卷一二に當る。月清集と內題ある冊の奥書には

「是御平生之時所被註置之本也夢後書留之粗一見了御本總返上之間不見中書之草字誤無極本不暗覽事不能直付」

安貞二年五月二日

と書きたるは流布本になき所、此の家集の成立を考ふる上に於て重要なる意義を有す。

「定家卿の書給うなるが淀大官の家藏なりしをかりものしうつさせしなりよくみたるが定家卿の書しをうつせしものとみゆ

文化七年庚午夏月　　樂　翁」

とあり、白河樂翁公自筆なり。即ち定家がその友にして弟子ある此の名門の歌人の歌を自筆にて寫せしものゝ傳寫本にて、本文にも流布本との差違あり、彼の靜嘉堂文庫所藏の傳飛鳥井賴孝筆本と系統を一にする重要なる一證本と云ふべし。

奥書のみは原本を臨寫せしと見え定家風の蒼勁さを示せり。彼の國歌八論の著者が「每首皆錦繡、句々悉く金玉、意情を述ぶればたゞちに感慨を生じ景色を言へばまのあたり見るが如し」と激賞せし後京極攝政の歌集を此の好傳本によりて吟誦し給へ。

約五寸五分四方の桝形本。卷首に樂翁公の「桑名」「樂亭文庫」及び渡邊氏の「霞亭圖書」の三藏印あり。

圖版第二十七號參照

(25) **平家物語**　古寫本　全十二冊　金八十五圓

縦七寸七分、横五寸八分、胡蝶裝。用紙厚き楮紙の裏表に一面九行になだらかに書したり。書寫年代は近世初期なるべし。表紙は藍地に青と褐色の糸にて模様を織り出せる美事なる古裂にて、その左肩に 平家物語（卷數） の題簽を貼りたり。見返しは金のつぶし、光彩陸離たり。內側に紺色の紙を貼りたる黒塗の古箱の中に入る。時代の味ひ濃やかなる古寫本なり。

卷末奥書はなけれど、本文の系統は一方檢校本なるが如し。流布本と小異を存すれど、殊に漢字少く假名を用ふ事多きを特徴となすが如し。第一卷に蟲損及び水しみあり、表紙も第一卷は可成に色褪せたれど他の十一冊は汚損なきを賀すべし。

平家物語の古寫本必らずしも少きにあらざれど、その裝潢の美しさ、筆致のなだらかさに於て類多からざるものなるべし。

圖版第二十六號參照



第二十六圖　古寫本平家物語第一卷々頭

集解云田祖先納所司差定田率舂米抄詳須進送公 義同令釈解

令俗解

田令第九

凡田ハ長サ三十歩廣サ十二歩ヲ一段トス十段ヲ一町トス一段ニ付テ稲五十束（一束ノ舂米ニスレハ五升ナリ五十束ハ舂米ニシテ二石五斗）一町ニテ五百束（舂米ニシテ廿五石）ヲ取ル其年貢ハ一段ニ稲二束二把（舂米ニシテ一斗一升）一町ニ廿二束充（舂米ニシテ一石一斗）

凡稲ヲ刈リ斂ムル事土地ニ依テ早キ所モ晩キ所モアルヘケレハ其土地次第ニ九月中旬ヨリ送リ始メ十一月三十日ヲ限リ納メ畢ル其舂米ハ京ヘ運フ事ハ翌年正月ヨリ始メ八月三十日ヲ限リ納メ畢フ是ハ年貢ヲ出ス家ヨリ人丈ヲ出シ御蔵所マテ運フ其仕方食服器物等ノ

(24)

田令和解　山崎美成自筆稿本　全一冊　金五十圓

好問堂山崎美成、彼の耽奇漫錄・海錄・文教溫故・江戸圖說集覽その他數十の著述ある美成の自筆本であります。令中の田令のみに關するもの四種を蒐めたものです。

「好問堂」と柱に印刷をし、半葉を十二行に黑い界線で分つた美濃判大の美成獨特の原稿用紙を使用し、卷頭には好問堂　の朱印と、守部の　椎本文庫　の二藏印を捺して居る感じのよいものです。總紙數三十四枚あります。

內容は第一は　令俗解　として田令第九を片假名書きにし、註を加へて居ります。上欄外には令集解を多く引用して居り、又他本との差違を記して居ります。第二は　田令俗解　第三は　令義解田令とし、第四は　諸證文出所如左　と記して居りますが、それ〳〵に眞面目で且有益な研究であり考證であつて、「制度提綱」「法曹至要鈔集解」「四禮通考」等の著者として一面制度學者として一家の見を持したと信ぜらるゝ山崎美成の學殖の廣さを示す好箇の小品であります。

圖版第二十五號參照

(23)

吾嬬箏譜考證

村田良阿自筆稿本　全二冊　七十五圓

上方の箏曲の代表たる生田流から出て江戸箏曲を創始した山田檢校斗養一の手によつて公にされた弓八幡・山櫻・小督曲・長恨歌曲・那須野・明烏をはじめ三十五の吾嬬箏歌、曲節の淸雅優艶で歌詞の婉麗・潤澤なるを特徴とする吾嬬箏譜を考證したものであります。著述の體裁は先づ曲名の出所を和漢の群籍に涉つて考證し、次に歌中の主要の詞句を拔書してそれ〳〵にその出典を探つて居ります。上卷々頭に　考證典籍　として引用書目をあげて居りますがそれによりますと、國典としては記紀・萬葉・古今・伊勢・源氏の古典から風俗通・松の葉・糸竹口傳・神靈矢口の渡まで約百三十種、漢籍としては孔子家語・史記・漢書・爾雅以下約七十種、その他般若經・寶積經・大乘起信論等數十部の佛典が縱橫に驅使引用されて此の奇書を成した事が明かであります。

內容は「俚言集覽」「考證千典」等の大著で知られて居る江戸下谷の町學者村田良阿の自筆で、良阿の著述としては從來知られて居なかつたものです。しかし色々な意味で「良阿らしい著作」であります。

「明證堂」と柱書を印刷してある有罫の原稿用紙に半葉十一行にしるし、註は割書して居ます。總紙數約百二十葉。

圖版第二十四號參照

吾嬬箏譜攷證

東都　沙門了阿編輯

吾嬬

日本紀第七 十六葉左 景行紀 四十年冬十月 日自甲斐北轉歴武藏上野西逮于碓日坂時日本武尊毎有顧弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶 嬬此云莵摩 故因號山東諸國曰吾嬬國也

後拾遺集第十六 八葉右 雜二 曰女のもとに侍つを

うつりかはあつまこゝろをさうし出く待ゝ遣も

大江匡衡朝臣

あふ坂乃關はあるかうしおほゆ秋であつまはしたゝ

寃姿餘嵗百歳經尺則盈也状如赤電黒雲謂之紫貝素質紅黒謂之珠貝青地緑文謂之綬貝黒文黄畫謂之霞貝紫愈疾珠明目綬消氣障霞伏蛆蟲置之器半白伏貝使人寡慧貝使人近淫黄唇點齒有赤駮雖貝使人善驚以親童子赤帯通脊日蚆貝使胎消

渚の丹敷上の巻

皇國にて介甲蚌蛤なと通して貝といへり訓はかひといふ他の國にてハ貝ハかく一物の名なり殻まうしにおもても順抄にえらり源氏物語よりいつれとはうなまう倭姫の世記よりも貝蠣と書て他の國にくハ長きこものと通して蚌といひはとらかなる通して蛤といふ凡而数の相谷なるとおしなへて蛤といふまた毛あるなと蠘蠟といひ尖ると齋蛤といひ小なるを麻といひ薄き殻蚌といふ稜あると蚶いふと云へり

第二十三圖 渚の丹敷 巻頭

(22)

渚の丹敷（にしき）

本間遊清自筆書入
橘守部本

全二卷合本一冊　金三十五圓

「渚の丹敷」二卷は「成形圖說」「本草綱目纂疏」等の大著で知らるゝ曾槃の著述で介類の考證記述であります。

收載する所の貝名は上卷に五十種二百四十三名附錄三十五名、下卷に七十二種二百九十七名附錄十九名で合計五百九十四を擧げ、產地•色彩•異名等を記し、又國典漢籍の引くべきは引用して居ります。引用書としては古事記舊事記•倭姬世紀•萬葉集•催馬樂•和名抄•延喜式•竹取•源氏の物語から八代集夫木抄等の國書數十卷と、爾雅•漢書•本草綱目•嘉祐本草•本草拾遺•坤輿外記から福州府誌•光州府誌等の地誌の漢籍數十卷に及んで居り、著者の博涉を思はせます。序も跋も享和三年の日附になつて居りますから、此の年に出來たものでせうが、後文政四年に稿の成つた「國史昆蟲草木考」に對比すべき著述にして注目すべきものだと信じます。

大本、總紙數七十葉百四十頁の上寫本で極めて綺麗に書かれてあり、所々に「動植和訓古義」「品物考和名類聚」「動物和名考」等の著述で知られて居る本間游清が自筆で朱を以て書入をし、又押紙をして正すべきを正して居ります。

橘守部翁の舊藏本で唐獅子の大きな朱印を押して居ります。

圖版第二十三號參照

(21)

事纂　淺井奉政自筆稿本 橘守部本　全十七冊　金百五十圓

著者淺井奉政は將軍德川吉宗の下に御書物奉行たりし幕人中の好學家にして、享保十九年に行年卅八才の若さを以て奉職中に病沒せり。その著「分類國史綱」二百卷を以て世に知らる。

「事纂」一百十卷全目錄十一卷、計一百二十一卷全十七冊は上は神武草昧の功より下は平安朝末期に至る一千數百年間の國史中の諸事を三十八部門四百七十一部四千八百八十六條に分つて分類編纂せる大著述にして、篇目の別は一に事文類聚に準じたり、古事記日本書紀以下六國史をはじめ歷代編纂の古書は收錄して漏らさず。享保八年秋九月起草し明年冬十月書成ると云ふ。「享保十年十二月廿七日、淺井奉政は自ら編集する所の圖書を淨寫し上に奉りて白銀十五枚を恩賜せら」れたる由の記錄存するが「分類國史綱」の稿成りしは享保十一年なれば、此の時進獻の書は恐らく「事纂」なりしと推定すべし。

此の書は今宮內省圖書寮藏する所三本、一は濱松水野侯の舊藏にして、二は好書の旗本朽木昌泰の舊藏、第三は舊來のものなるが如し。

此處に擧ぐる一本は奉政自筆の原本と目すべきものにして、目錄卷頭の自序の末に [淺井奉政] [一學輪選] の二朱印（各約一寸四方）あり。圖書寮藏の諸本は近親の所望に從つて此の原本によつて淸書又は轉寫したものにかゝるべく、現存傳本は圖書寮藏本以外最も稀少なるが如し。

橘守部舊藏、各卷々頭に [椎本文庫] 及び唐獅子の藏印あり。奉政の自序の裏面にその經歷を記したるは守部の筆なるべし。

圖版第二十二號參照

事纂巻之一

天道一

天

雞子含牙

古天地未剖、陰陽不分、渾沌如雞子、溟涬而含牙、及其清陽者薄靡而為天、重濁者淹滯而為地、精妙之合摶易、重濁之凝場難、故天先成而地後定　神代紀

無所根係

天地未生之時、譬猶海上浮雲、無所根係、日上

日本事物原始第一集

紀伊 鈴木真年 著

○國土開闢

古事記云、天神諸命以、詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用弊流之國、賜天沼矛而、言依賜也、故二柱神、游能碁呂嶋天降坐而、御合坐時、伊邪那美命先言舉而、生子水蛭子、此子者入葦船而流去、次生淡嶋、是亦不入子之例、次更伊邪那岐命先言舉而、御合、生大八嶋洲、

(一)淡道之穗之狹別嶋

(二)伊豫之二名嶋

伊豫國 愛比賣　讚岐國 飯依比古

粟國 大宜津比賣　土左國 建依別

第二十一圖 日本事物原始 上卷々頭

日本事物原始　鈴木眞年自筆稿本　全一冊　金三十圓

金子晋氏の著に「日本事物起原」及び石井研堂氏の著に「明治事物起原」と云ふ我が國諸般の事物の起原について考證記述した有用便益な著述がありますが、之れは略々同じ様な事を約半世紀前に紀州の學者鈴木眞年の爲した業蹟が即ち此の書であります。

此の書は擧ぐる所の項目の數に於て遙かに金子・石井兩氏の後代の著述に劣り、しかも各項の記述の精詳なる點に於て大に優つて居ります。先づ第一に「國土開闢」の項に於て「古事記」「書紀」等を引用して日本全國及びその各國の起源をしるし、次に日本國號、郡縣の制、官制等の起源を、次で田制、家屋を、更に五穀・酒・茶・塩・砂糖等の食料品から養蠶、木棉、麻類の起りを盡く古典に徵證を求めて記し、度量衡、美術、音樂に及んで筆を斷つて居ります。總紙數八十四葉、半葉十二行詰めの細字の草稿で、引用する書目は、記紀、萬葉、風土記、古語拾遺、和名抄、延喜式、神代卷口訣、日本紀纂疏、海人の刈藻、東鑑、類聚雜要、下學集等の國典より、史記、漢書、唐書、說文、本草綱目、東國通鑑等の漢籍及び朝鮮の古典にまで及んで居ります。之れは本目錄卷頭に所載の「古事記正義」の著述と共に眞年が世上傳へらるゝが如き單なる系圖學者たるに留らず、卓然たる一個の古典學者たりし眞面目を明かに示すものであらうと存じます。

圖版第二十一號參照

(19)

古文類葉

清水濱臣著
橘守部本

寫十五冊　金百五十圓

著者濱臣は此の書の凡例の中で

「此の書は中むかしのふりをまねびて、文かゝむとするたつきに、おのが心のとゞまるかぎり、つましるしておきつるを、こたみうつしてたくひをわかてり」

と記して內容の大要を示して居ります。分類の方法は「夫木和歌集」などゝ略々一致し、云はゞ古物語中の重要句索引とも云ふべきものです。「源氏物語名寄圖考」「伊勢物語添註」「宇津保物語考證」「唐物語提要」等の古物語の研究書を著はすと共に、多くの古物語の校合に從ふ一面、又語林類葉・擬字造語抄・皇朝喩林等の辭書的編述ある、濱臣の業蹟として眞にその所を得たものと云へませう。

收むる所の古文は、枕草子・宇津保物語・とかへばや物語・落窪物語・狹衣物語・濱松中納言物語・住吉物語・唐物語・西行物語・榮華物語等と共に、紫式部日記・和泉式部日記・蜻蛉日記・辨內侍日記・中務內侍日記・讃岐典侍日記・更科日記・十六夜日記等平安末期より鎌倉初期の名作を網羅して居ります。源氏物語のみを省きましたについては、著者は「源氏物語は稻彥のぬき出せるあれは、しはらくそれにまかせて」と斷つて居ります。古物語研究家にとつて重要な參考資料だと信じます。

あまり他の學者とは深い交渉のない不覊獨立の守部も濱臣とだけは一時頗る親交がありましたのですから、此の書も濱臣の草稿を借りて寫させたものでせう。美濃判の用紙に半葉十行になだらかに書き寫してあり、朱で校合してありますが校合は守部の筆と思はれます。總紙數、約六百葉千二百頁、第一編十冊、第二編五冊、全十五冊ものであります。中根氏の「慶長以來諸家著述目錄」に本書の名を擧げて全五冊として居るのは誤りと思はれます。各卷々首に「椎本文庫」の藏印あり。

圖版第二十號參照

古文類葉巻之一

春之部

初春

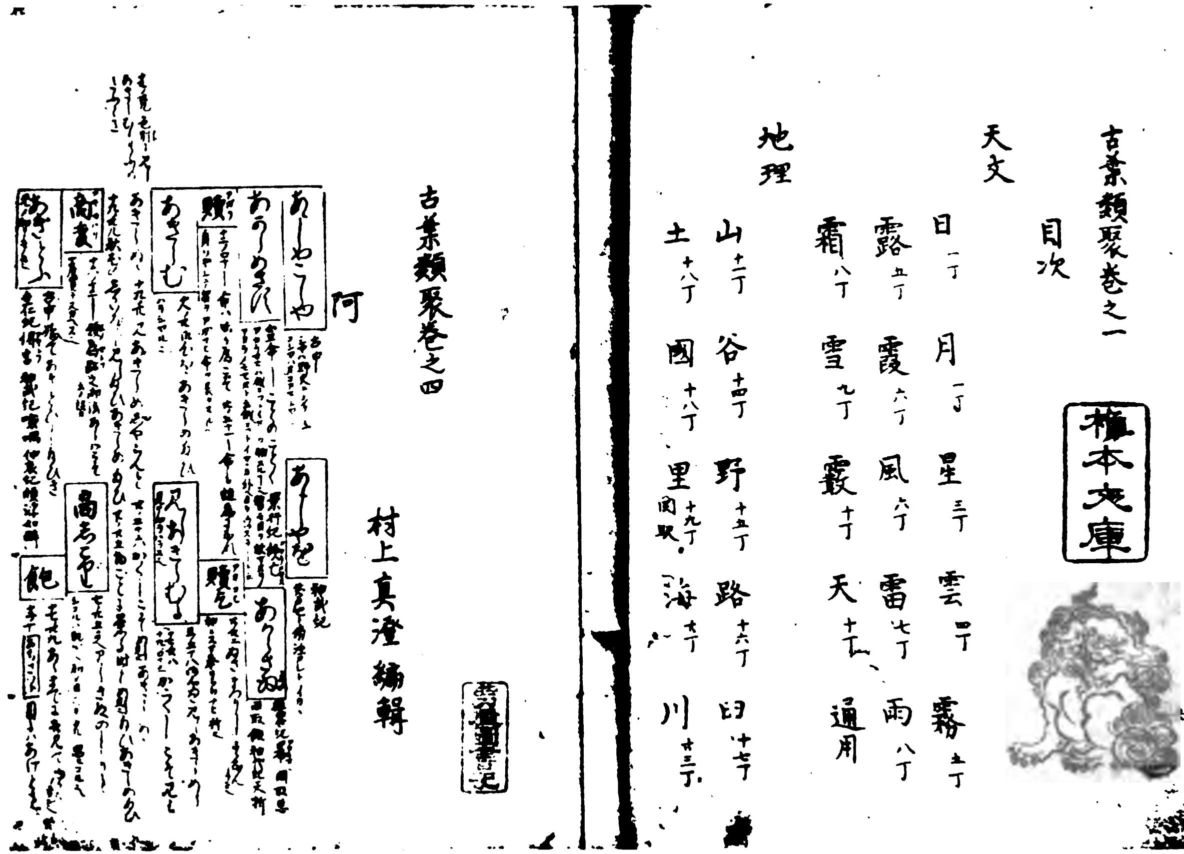
蜻蛉日記中ノ上

一 ことしばかりにいふこといみなどして。世中こゝろみむといふを聞て。はらからとおぼしき人まだ伏ながらきこゆ。天地を袋にぬひてと誦するにいとをかしうなりぬ。云々。

天地ヲ袋ニ縫ヒテ幸ヲ入レテモタレバ物思ヒナシ

枕ノ草子一ノ二

一 正月一日は。まいて空の気しきもうらうらと見えて
ーーー、霞こめたるに。世にありとある人は。
すがたかたち心ことにつくろひ。君をもわれをも


古葉類聚巻之一

目次

天文

日 一丁　月 一丁　星 三丁　雲 四丁　霧 五丁

露 五丁　霞 六丁　風 六丁　雷 七丁　雨 八丁

霜 八丁　雪 九丁　霰 十丁　天 十五丁　通用

地理

山 十三丁　谷 十四丁　野 十五丁　路 十六丁　田 十七丁

土 十八丁　國 十八丁　里 十九丁 関駅　海 十二丁　川 十三丁

古葉類聚巻之四

村上真澄 編輯

阿

第十九圖　古葉類聚　第一卷々頭

古葉類聚

寫本
橘守部本

全五冊　金九十圓

古葉類聚五卷五冊は寫本によりてのみ傳はる村上直澄の著にして、あらゆる古書によりて我が古言を集錄し、類に從つて之れを聚めたるものなり。分つて天文、地理、方位、宮室、歲時、氣形、草木、船車、橋、漁獵、服飾、器材、飲食、神祇、人倫、哀傷、慶賀、羇旅、離別、鬪戰、疾病、卜占、調貢、言辭、地名、神名人名に冠辭ある類となし、一々出所を掲げたり。

所收の古書は古事記・日本書記・萬葉集・祝詞・古風土記等の純古典のみなれば古語の研究上最も有益なる著述なり。

美濃判大本、總紙數約二百三十葉四百六十頁に細字にて書きたる外、所々に頭書をも加へたり。

序・跋・奥書等なきを以て著述の年代不詳にて、著者村上直澄の傳も明かならず。嘗つて東京帝國大學に藏し、今は燒失せし一傳寫本の奥書には文化十五年に寫せし旨を記せる由なれば、此の以前に稿なりし事疑ひなし。傳本最も稀覯なるが如し。

此處にかゝぐる一本は橘守部翁の手澤本にて各卷題簽及び卷頭に椎本文庫及び唐獅子の朱の藏印あり。彼の翁の神典研究、萬葉研究及び語學研究に役立ちしものなる事明かなり。

圖版第十九號參照

和名類聚抄

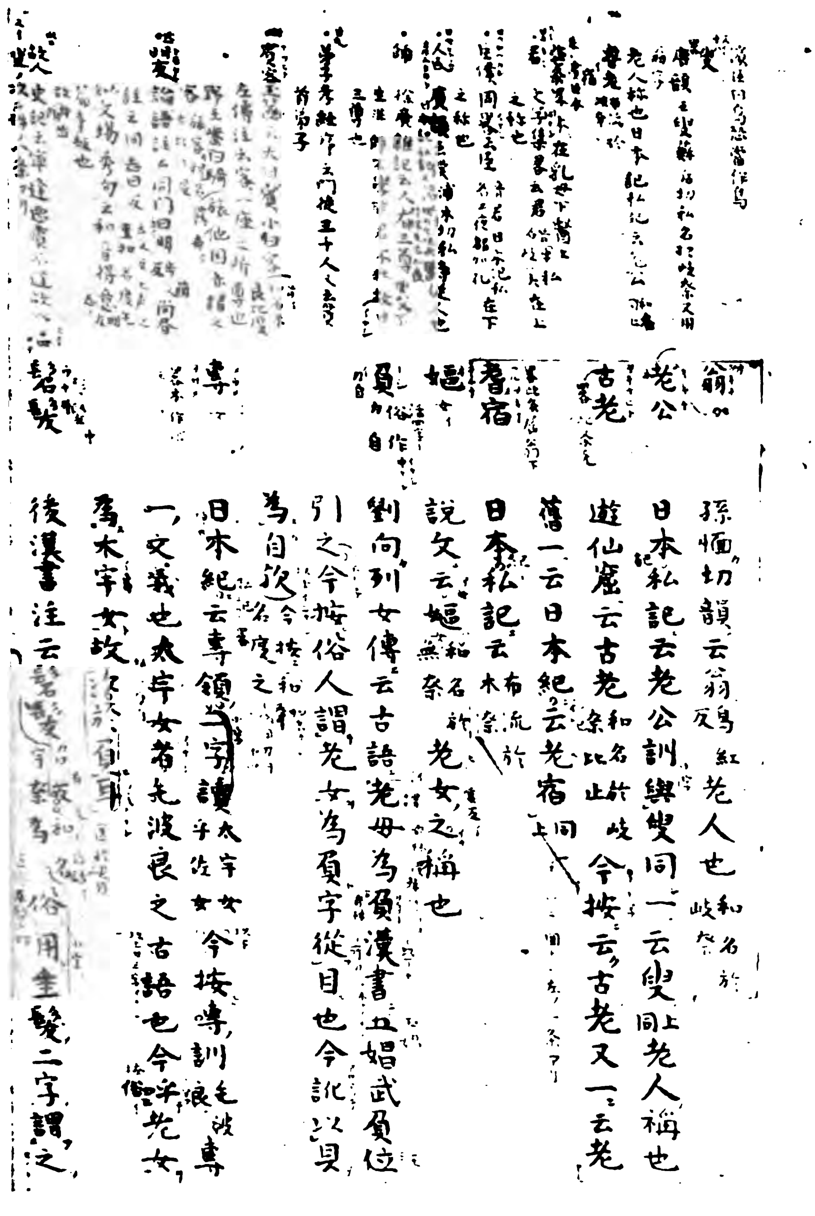
大野廣城校本　寫五冊　金百五拾圓

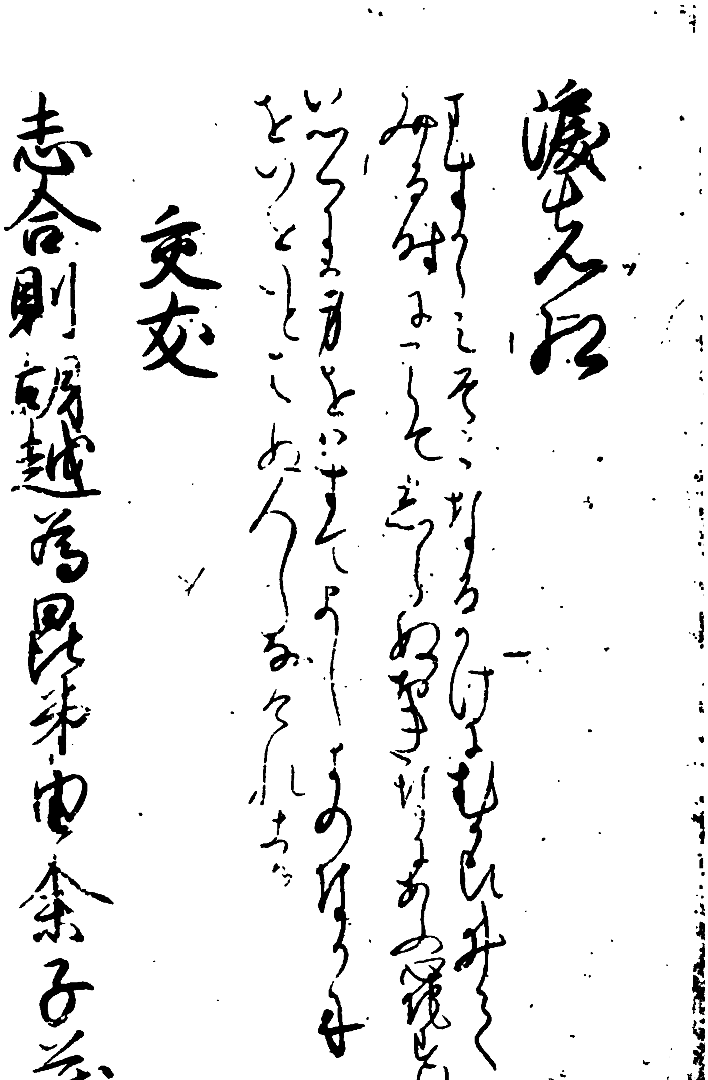
延長年間、源順の撰進になりて本邦最古の辭書として著名なる和名類聚抄の校本としては既に狩谷棭齋の「箋註和名類聚抄」本ありて世に名高しと雖、此處に掲ぐる所の一本は即ち棭齋と同時代人たる忍の屋の主大野廣城が異本廿三部を以て對校せし校本にして、その所引の異本の數は棭齋の十二種なるに對し實に廿三種の多きに達し未曾有の精詳博引を示せるものなり。且校合の態度も精確にして多く棭齋本に譲らざるべく眞に驚嘆すべき貴重の一本なりと信ず。所校の異本は

古　本　中西本　眞福寺本　南雲家所藏古寫本
那波道圓所藏古寫本　永和年間寫本　文安三年公意僧正自筆古寫本　略本
天文本　日下部勝美校本　古活字版　元和三年板本　沙門契沖校正本　加茂眞淵所藏校正本　寛文七年刊本　今井似閑校本　本居宣長所校古寫數本　藤貞幹所校古寫本　波泊部百樹所校古寫三本　清水濱臣校正本　加茂季鷹校本　興田吉從所校本　伴信友校本

の廿三本にして、文政十二丑年二月に對校を終りて成書とせし由、廣城の自筆記載あり。底本は二十卷本を用ひ、朱又は墨を以て精密に諸異本の差異をしるし、上欄に註及び考證を附する事極めて豐富且細詳なり。校異及び考證を附せんがために縦約一尺一寸横八寸の極めて巨大なる用紙を使用し、上欄を廣くとりて書込みに便したり。
校者大野廣城は幕吏にして國學を研め、忍軒と號す。「東國風流」「假字便覽」「證歌類葉」「太平年表」「青標紙」「殿居袋」等著述多く、「殿居袋」等の著述によつて罪を幕府に得て幽閉せられ天保十二年に悶死せし篤學者なり。
全紙數約二百二十葉。全二十卷の内第十九卷の一部及び二十卷を欠く。此の貴重なる古辭書の研究上最も有用なるべき此の校本にとつて白璧の微瑕と云ふべきか。
圖版第十八號參照

第十八圖　大野廣城校合本　和名類聚抄　内容の一部




交友
志合則胡越爲昆弟由余子

第十七圖　傳　後醍醐天皇宸筆　和歌朗詠集　內容の一部

（前頁よりつゞく）

本文は現在流布の諸本と異る點多し。例へば後人の附加にして大納言公任卿原撰の姿にあらずと信ぜらるゝ詩句の中、梅の詩句の末にある

烟添柳色看猶淺　　鳥踏梅花落已頻

の句を欠き、又藤の詩句の末にある

紫茸偏奪朱衣色　　應是花心忘憲臺

の句を欠く點は御物本朗詠集（傳行成筆）と一致す、但し佛名の末なる和歌

年の内につくれる罪はかきくらし　　ふるしら雪とともにきえなむ

松の第三の詩句たる

琴商改曲吹烟後　　蕭瑟催心學雨辰

等を存する點に於て御物本と異り、又竹の歌のはじめなる

いかてかは人にもとはむあやしきは　　思はぬなかのえさるましきを

を有する點は行能本、尊圓本と一致す、但し上の句の「いかてかは」を「いかてなを」とし、下の句を「えさるましきを」を「えさるましきは」とす。更に丞相の第五の詩句を存し、王昭君の詩句の末、遊女の詩句の末、白の最初の詩句等は御物本と全く一致す。

かくて本書はその眞名、假名の美しき點に於ては一の美術品として鑑賞秘藏に値すべく、その本文の古體を存する一傳本としては學術上貴重とし研究に値すべきもの、類を求めて容易に得べくもあらず。

圖版第十六、十七號參照

古寫本 和漢朗詠集　傳後醍醐天皇宸筆　全二帖　金六百圓

後醍醐天皇宸翰と傳ふる所の「和漢朗詠集」上下二帖は縦七寸九分、横五寸一分、胡蝶装の冊子にして表紙は古き緞子、用紙鳥の子、墨付上卷七十九丁、下卷八十五丁、兩面に書して半葉眞名五行の古鈔本なり。墨漆塗の上に金字を以て

後醍醐天皇宸翰
和漢朗詠集　全部

の十四字を浮き出せる美事なる古き箱の中に入り、その更に外側を同じく黒塗の箱を以て被ひたり。上卷初葉裏に

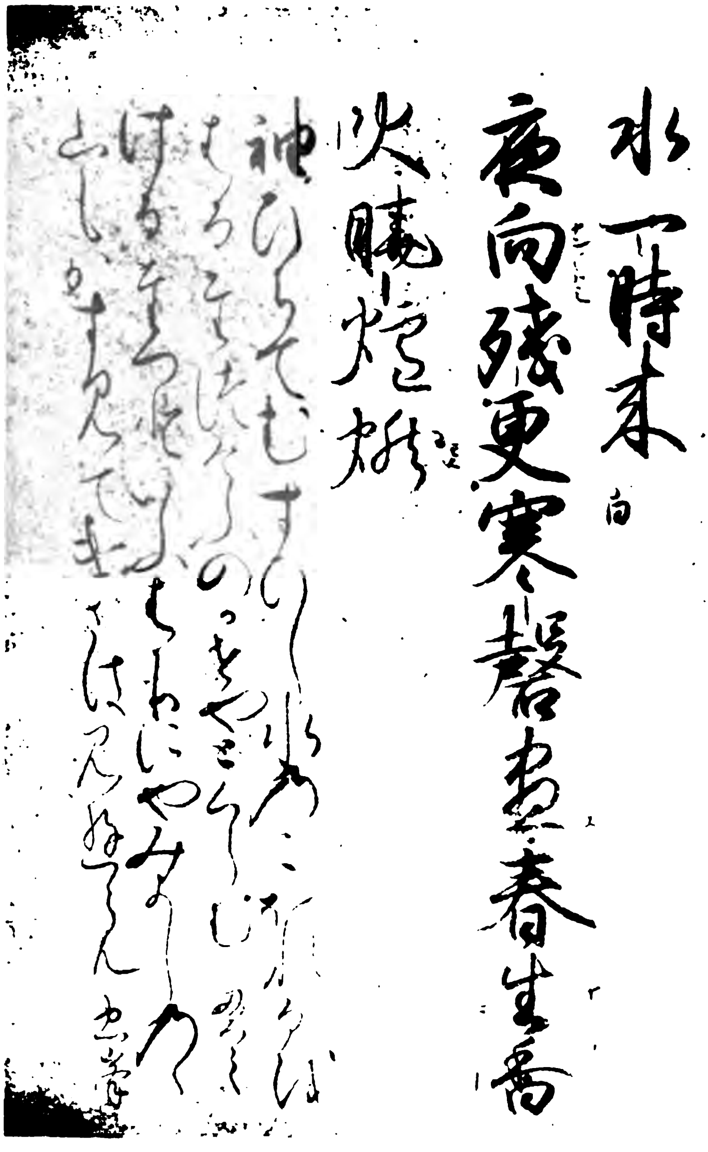
後醍醐天皇宸翰　和漢朗詠集　上下二冊　琴山

の極札を附し、更に別箱に折紙あり。

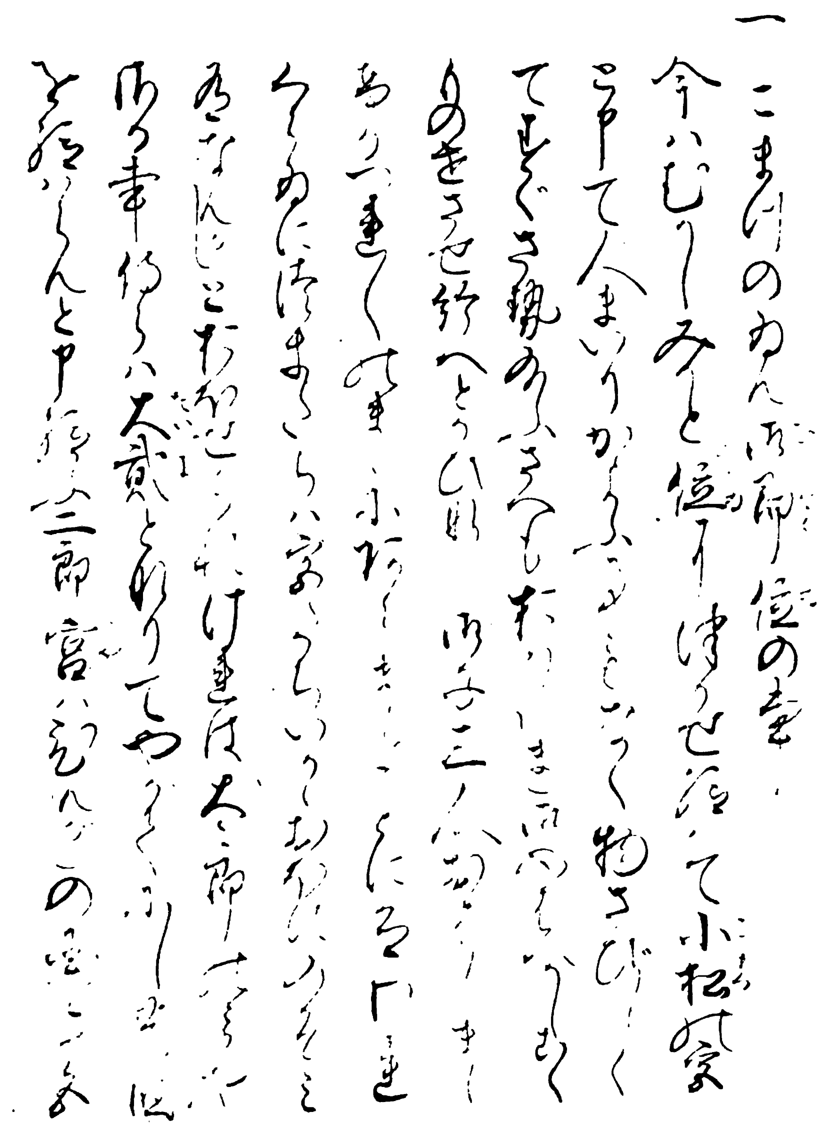
和漢朗詠集　全部二冊
後醍醐天皇宸翰分明不可容疑者也
（朱印）千五百貫
中冬上浣　古筆了仲 朱印

と七行に書したり。了仲は即ち古筆家三代了仲守直なり。書寫年代は紙質、墨色より見て鎌倉末期或ひは南北朝を下るべからず、書風は世尊寺一流の一分派たる後醍醐天皇流なるものにして、古筆家の所謂吉野切にあらはれたる筆勢と一致す。所々朱のヲコト點を附し又片假名にて訓或は送り假名を附す。假名中セを才、サを七、キを一と書する等古體の異字の存する事少なからず。

（次頁へつゞく）



第十六圖　傳 後醍醐天皇宸筆　和漢朗詠集　內容の一部



第十五圖　古寫本雜々集　上卷々頭

（15）

雑々集　古寫本　全二冊　金四十圓

古說話集「雑々集」は縦七寸八分、横五寸五分。楮紙、胡蝶裝の古寫本にして、近世初期の書寫にかゝるべし。紺紙の上に金泥を以て草木を描きたる極めて美事なる表紙を附し、その中央に　雑々集　上（下）の古き題簽を置きたり。桐材の古き外箱の上にも　雑々集　の三字をしるしたり。

上卷は　こまつのゐん御即位の事　より　古さされたる女鹿の年を聞てよむ歌の事　まで二十話を收め、下卷はしぢのはしかきの事　より　伊勢や日向の物語の事　まで二十話を載せ、合計四十段よりなる。體裁は平安朝末期の說話集と同じく「今は昔」なる語を以て書きはじめたる段多く、載錄の說話は平安朝中期より鎌倉初期までの雅俗樣々の物語なり。一葉の裏表に半葉十行に書し、上欄に段數を記したるは「伊勢物語」などの古寫本に遇々見るが如し。

此の「雑々集」なる題名を冠せる古寫本流布最も少きに似たり。

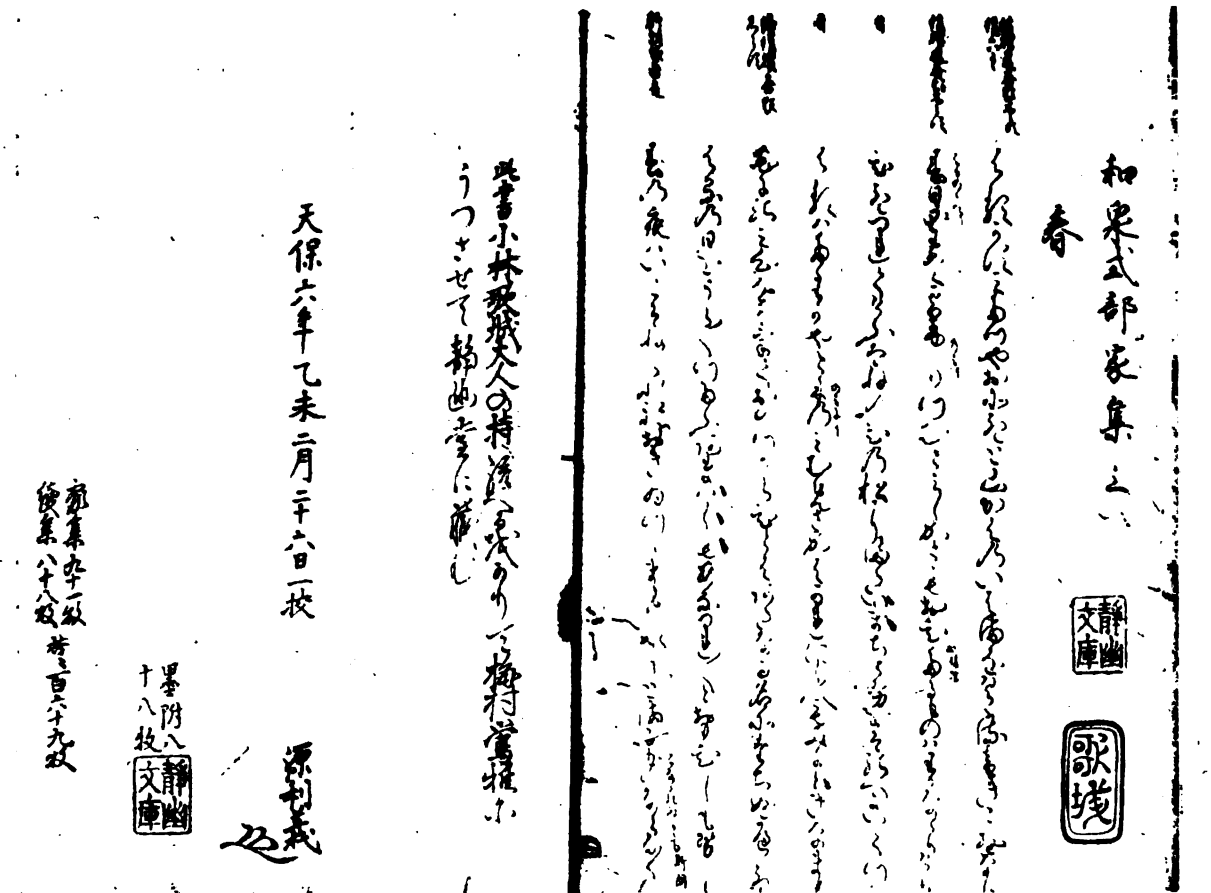
圖版第十五號參照

和泉式部歌集　小林歌城本　寫全二冊　金二十圓

「因襲風をなし、世を擧けて氣力なく、精神なく、たゞ模擬剽竊を事とする時、式部ひとり内に情火の燃ゆるあり感興自然に溢れて、限なき詩趣を生ず。千篇一律、茫々たる歌壇の荒野に倦み疲れたるもの翻つて眼を此の集に注けば、淸泉珠と迸り、黃鳥春を歌ふの概あり。ことさらに奇を衒ふにあらず、情を僞るにあらずして、抑へがたき胸中の炎の文字の間に閃くを見る。…………堂々たる鬚髯男子も和泉式部の前に如何の顔ばせかある。前に業平、後に西行、中頃の式部を併せて、これを平安朝歌道の三大才人とす」

藤岡博士の名著國文學全史平安朝篇の一節であります。此處あぐる式部歌集の一本は村田春海の弟子で歌人として又藏書家として知られた小林歌城藏の古寫本を靜幽堂の主、源利義が寫させたものである事が圖版第十四號に見ゆるが奥書によつて明かであります。正編五卷一冊は若泉法水なる人の筆で墨付九十一葉、續集二卷一冊は梅村篤雅の筆で墨付八十八葉、各半葉九行に歌一首を一行に書し、袋綴じであります。共に異本との校合があり、正編は墨で差違を傍書し、續編は朱で傍書して居りますが、異本々文の書入は正編に多く、續編に割合に少くなつて居ります。好書家で且歌好きの歌城の藏本の系統ですから御參考になる點が多からうと存じます。

圖版第十四號參照



第十四圖　和泉式部歌集　卷頭及び奥書

和名類聚抄　大野廣城校本　寫五冊　金百五拾圓

延長年間、源順の撰進になりて本邦最古の辭書として著名なる和名類聚抄の校本としては既に狩谷棭齋の「箋註和名類聚抄」本ありて世に名高しと雖、此處に掲ぐる所の一本は即ち棭齋と同時代人たる忍の屋の主大野廣城が異本廿三部を以て對校せし校本にして、その所引の異本の數は棭齋の十二種なるに對し實に廿三種の多きに達し未曾有の精詳博引を示せるものなり。且校合の態度も精確にして多く棭齋本に讓らざるべく眞に驚歎すべき貴重の一本なりと信ず。所校の異本は

古本　中西本　眞福寺本　南雲家所藏古寫本
那波道圓所藏古寫本　永和年間寫本　文安三年公意僧正自筆古寫本　略本
天文本　日下部勝美校本　古活字版　元和三年板本　沙門契沖校正本　加茂眞淵所藏校正本　寛文七年刊本　今井似閑校本　本居宣長所校古寫數本　藤貞幹所校古寫本　波泊部百樹所校古寫三本　清水濱臣校正本　加茂季鷹校本　興田吉從所校本　伴信友校本

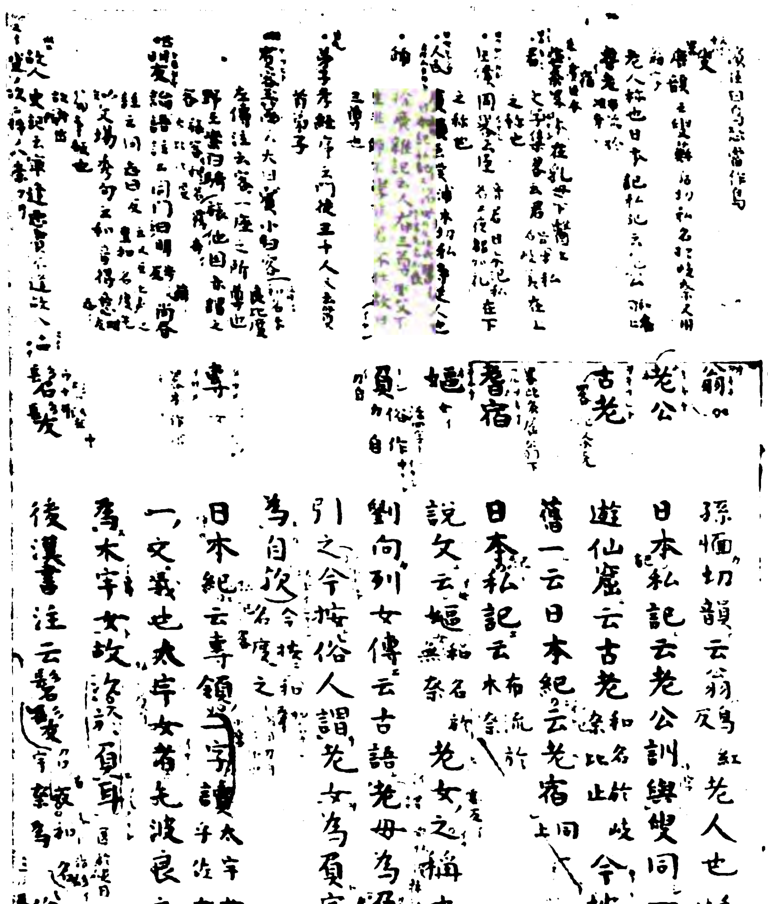
の廿三本にして、文政十二丑年二月に對校を終りて成書とせし由、廣城の自筆記載あり。底本は二十卷本を用ひ、朱又は墨を以て精密に諸異本の差異をしるし、上欄に註及び考證を附する事極めて豐富且細詳なり。校異及び考證を附せんがために縦約一尺一寸横八寸の極めて巨大なる用紙を使用し、上欄を廣くとりて書込みに便したり。

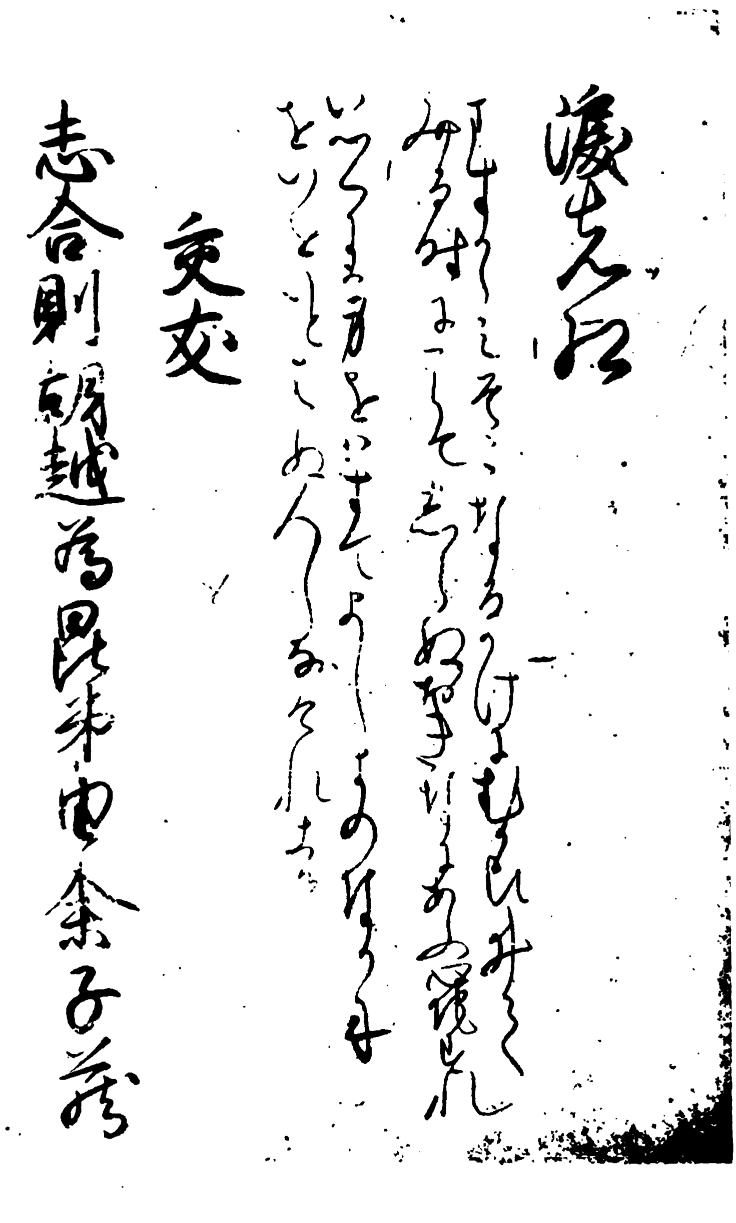
校者大野廣城は幕吏にして國學を研め、忍軒と號す。「東國風流」「假字便覽」「證歌類葉」「太平年表」「青標紙」「殿居袋」等著述多く、「殿居袋」等の著述によつて罪を幕府に得て幽閉せられ天保十二年に悶死せし篤學者なり。

全紙數約二百二十葉。全二十卷の內第十九卷の一部及び二十卷を欠く。此の貴重なる古辭書の研究上最も有用なるべき此の校本にとつて白璧の微瑕と云ふべきか。

圖版第十八號參照

第十八圖　大野廣城校合本　和名類聚抄　内容の一部





第十七圖　傳後醍醐天皇宸筆　和歌朗詠集　内容の一部

（前頁よりつゞく）

本文は現在流布の諸本と異る點多し。例へば後人の附加にして大納言公任卿原撰の姿にあらずと信ぜらるゝ詩句の中、梅の詩句の末にある

烟添柳色看猶淺　鳥踏梅花落已頻

の句を欠き、又藤の詩句の末にある

紫茸偏奪朱衣色　應是花心忘澁臺

の句を欠く點は御物本朗詠集（傳行成筆）と一致す、但し佛名の末なる和歌

年の内につくれる罪はかきくらし　ふるしら雪とともにきえなむ

松の第三の詩句たる

琴商改曲吹烟後　蕭瑟催心學雨辰

等を存する點に於て御物本と異り、又竹の歌のはじめなる

いかてかは人にもとはむあやしきは　思はぬなかのえさるましきを

を有する點は行能本、尊円本と一致す、但し上の句の「いかてかは」を「いかてなを」とし、下の句を「えさるましきを」を「えさるましきは」とす。更に丞相の第五の詩句を存し、王昭君の詩句の末、遊女の詩句の末、白の最初の詩句等は御物本と全く一致す。

かくて本書はその眞名、假名の美しき點に於ては一の美術品として鑑賞秘藏に値すべく、その本文の古體を存する一傳本としては學術上貴重とし研究に値すべきもの、類を求めて容易に得べくもあらず。

圖版第十六、十七號參照

古寫本 和漢朗詠集　傳後醍醐天皇宸筆　全二帖　金六百圓

後醍醐天皇宸翰と傳ふる所の「和漢朗詠集」上下二帖は縦七寸九分、横五寸一分、胡蝶裝の冊子にして表紙は古き緞子、用紙鳥の子、墨付上卷七十九丁、下卷八十五丁、兩面に書して半葉眞名五行の古鈔本なり。墨漆塗の上に金字を以て

後醍醐天皇宸翰
和漢朗詠集　全部

の十四字を浮き出せる美事なる古き箱の中に入り、その更に外側を同じく黒塗の箱を以て被ひたり。上卷初葉裏に

後醍醐天皇宸翰　和漢朗詠集　上下二冊　琴山

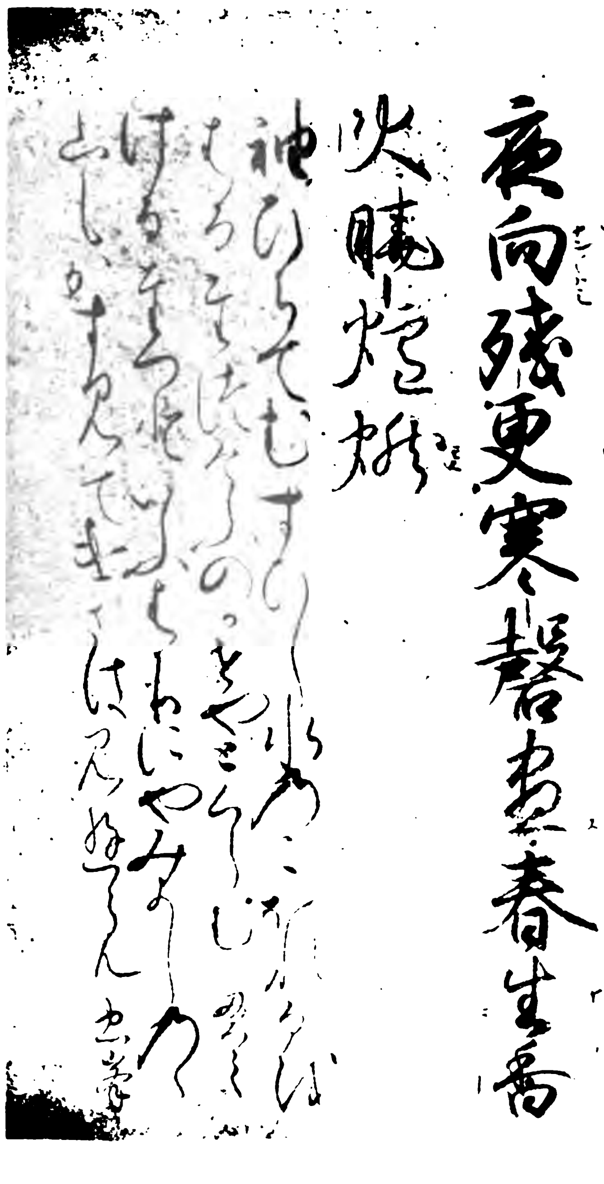
の極札を附し、更に別箱に折紙あり。

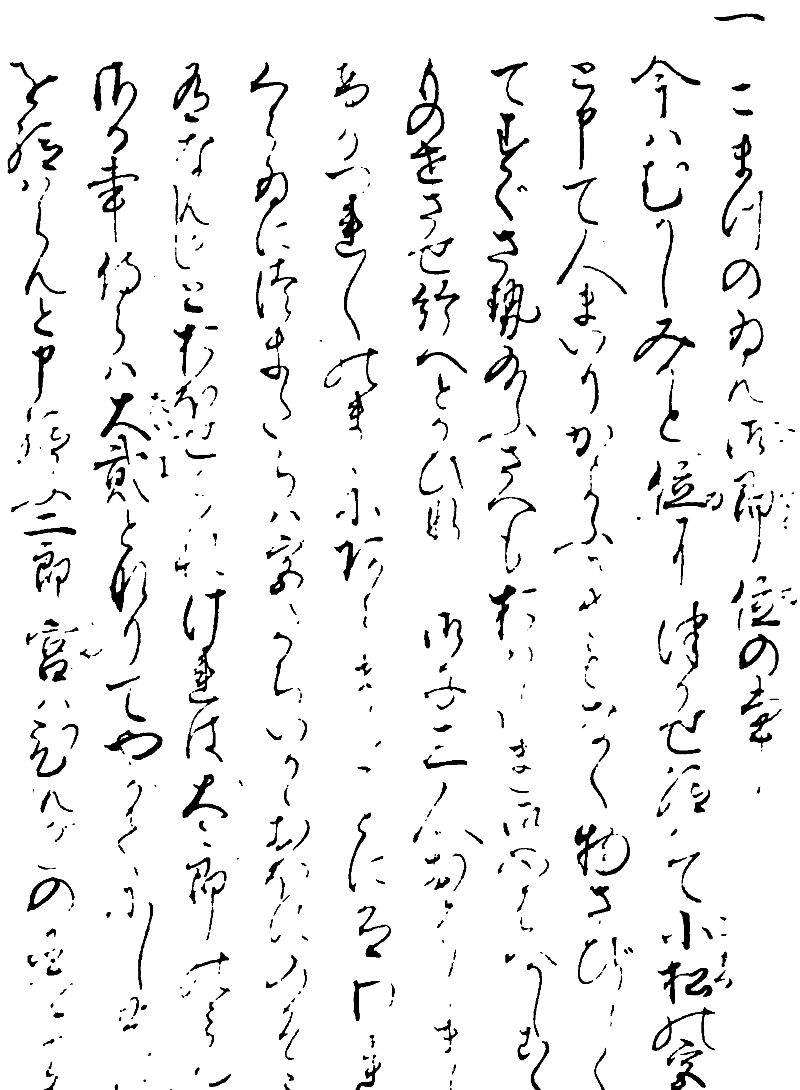
和漢朗詠集　全部二冊
後醍醐天皇宸翰分明不可容疑者也
千五百貫
（朱印）
中冬上浣　古筆　了仲　朱印

と七行に書したり。了仲は即ち古筆家三代了仲守直なり。書寫年代は紙質、墨色より見て鎌倉末期或ひは南北朝を下るべからず、書風は世尊寺一流の一分派たる後醍醐天皇流なるものにして、古筆家の所謂吉野切にあらはれたる筆勢と一致す。所々朱のヲコト點を附し又片假名にて訓或は送り假名を附す。假名中セを才、サを七、キを丨と書する等古體の異字の存する事少なからず。

（次頁へつゞく）

第十六圖　傳　後醍醐天皇宸筆　和漢朗詠集　内容の一部





第十五圖　古寫本雜々集　上卷々頭

雑々集　古寫本　全二冊　金四十圓

古説話集「雑々集」は縦七寸八分、横五寸五分。楮紙、胡蝶裝の古寫本にして、近世初期の書寫にかゝるべし。紺紙の上に金泥を以て草木を描きたる極めて美事なる表紙を附し、その中央に　雑々集　上(下)　の古き題簽を置きたり。桐材の古き外箱の上にも　雑々集　の三字をしるしたり。

上卷は　こまつのゐん御即位の事　より　古さされたる女鹿の年を聞てよむ歌の事　まで二十話を收め、下卷はしぢのはしかきの事　より　伊勢や日向の物語の事　まで二十話を載せ、合計四十段よりなる。體裁は平安朝末期の説話集と同じく「今は昔」なる語を以て書きはじめたる段多く、載錄の説話は平安朝中期より鎌倉初期までの雅俗樣々の物語なり。一葉の裏表に半葉十行に書し、上欄に段數を記したるは「伊勢物語」などの古寫本に遇々見るが如し。

此の「雑々集」なる題名を冠せる古寫本流布最も少きに似たり。

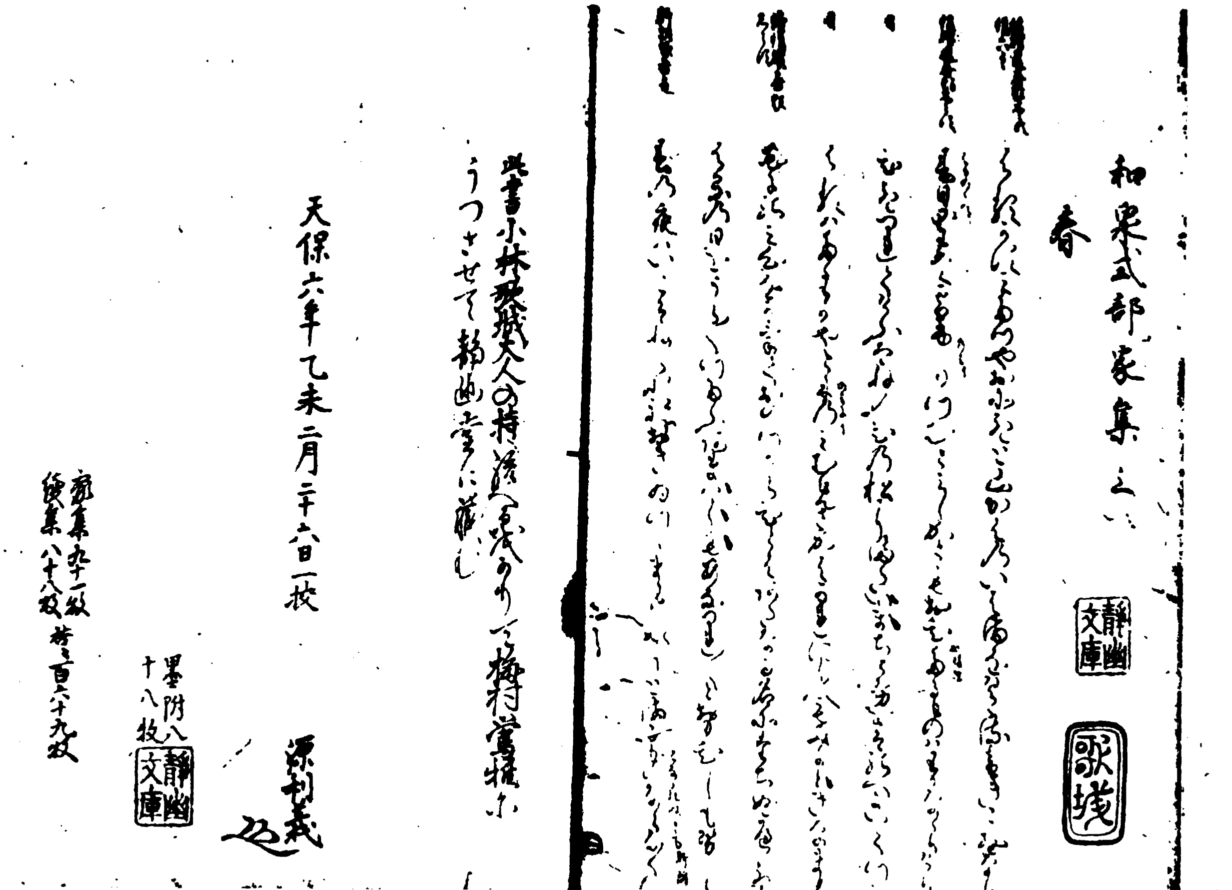
圖版第十五號參照

和泉式部歌集　小林歌城本　寫 全二冊　金二十圓

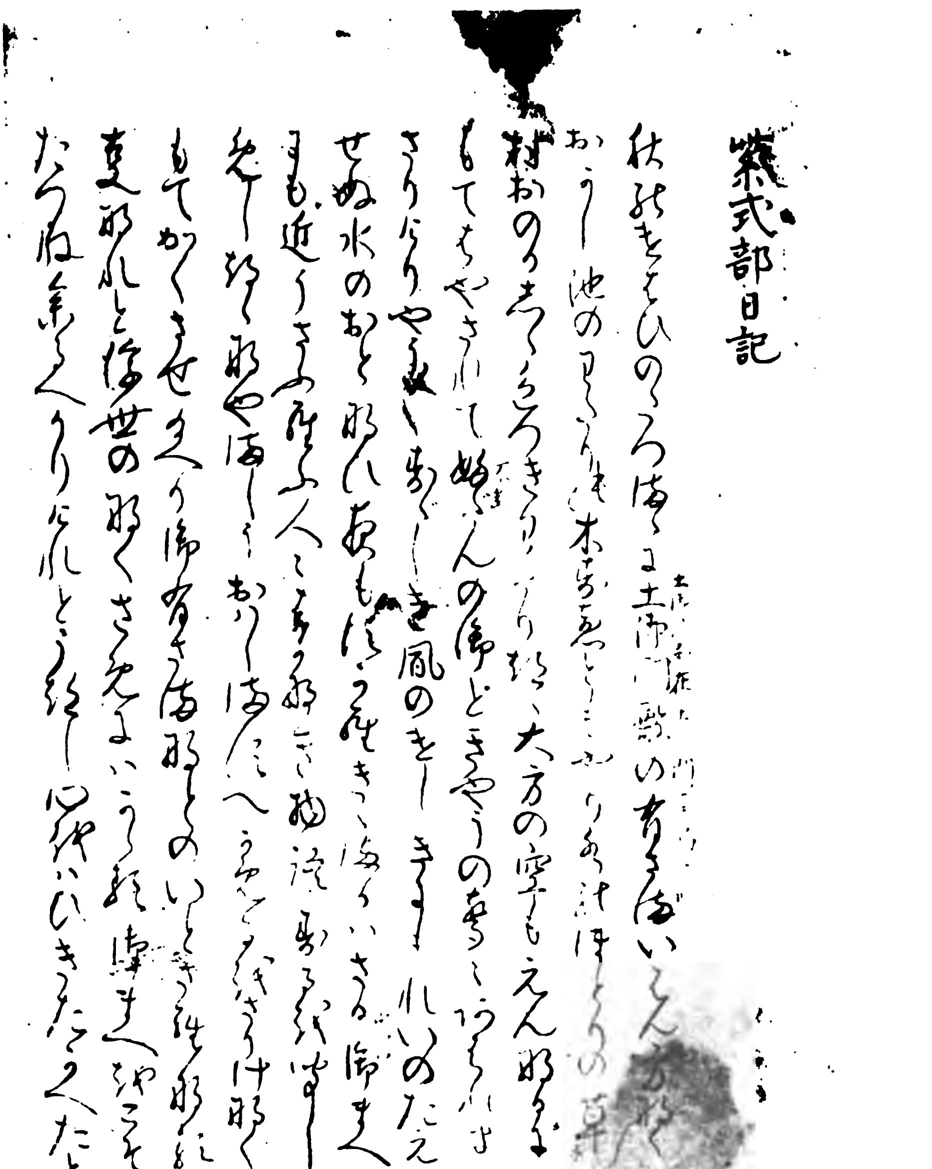
「困襲風をなし、世を擧げて氣力なく、精神なく、たゞ模擬剽竊を事とする時、式部ひとり内に情火の燃ゆるあり感興自然に溢れて、限なき詩趣を生ず。千篇一律、茫々たる歌壇の荒野に倦み疲れたるもの翻つて眼を此の集に注けば、清泉珠と迸り、黄鳥春を歌ふの概あり。ことさらに奇を衒ふにあらず、情を偽るにあらずして、抑へがたき胸中の炎の文字の間に閃くを見る。………堂々たる鬚髯男子も和泉式部の前に如何の顔ばせかある。前に業平、後に西行、中頃の式部を併せて、これを平安朝歌道の三大才人とす」

藤岡博士の名著國文學全史平安朝篇の一節であります。此處あぐる式部歌集の一本は村田春海の弟子で歌人として又藏書家として知られた小林歌城藏の古寫本を靜幽堂の主、源利義が寫させたものである事が圖版第十四號に見ゆるが奥書によつて明かであります。正編五卷一冊は若泉法水なる人の筆で墨付九十一葉、續集二卷一冊は梅村高雅の筆で墨付八十八葉、各半葉九行に歌一首を一行に書し、袋綴じであります。共に異本との校合があり、正編は墨で差違を傍書し、續編は朱で傍書して居りますが、異本々文の書入は正編に多く、續編に割合に少くなつて居ります。好書家で且歌好きの歌城の藏本の系統ですから御參考になる點が多からうと存じます。

圖版第十四號參照



第十四圖　和泉式部歌集　卷頭及び奥書


紫式部日記
秋のけはひのたつまゝに土御門殿のありさまいはんかたなく
をかし池のわたりの梢ともやり水のほとりの草
むらおのかしゝ色つきわたりつゝ大方の空もえんなる
にもてはやされて不断の御とききやうの声々あはれ
まさりけりやうやうすゝしき風のけしきにもれいのたえ
せぬ水のおとなひ夜もすからきゝまかはさる御まへ
にも近うさふらふ人々はかなき物語するをきこしめし
つゝなやましうおはしますへかめるをさりけなく
もてかくさせ給へる御有様なとのいとさらなる事なれと
うき世のなくさめにはかゝる御前をこそたつね
まいるへかりけれとうつし心をはひきたかへたと

第十三圖　古寫本紫式部日記卷頭

(13) 紫式部日記　黒澤翁滿本　全一冊　金二十五圓

奥書は

「右者文政五年正月壺井安鶴翁が校合本を寫す、原本假字いとみだりなりしを寫すまに〳〵めとまりしは改めつ、其外うたかはしきふし〳〵いさゝかかたへに朱もてしるす、猶てにをはも何もいかにぞや覺ゆる無にしもあらぬはよき本を得てこそ

黒澤翁滿」

とあり。安鶴翁は即ち「紫式部日記傍註」の著者壺井義知なるを以て、本書は義知の校合本を翁滿が寫し、いさゝか私意を加へしものなるを知るべし。

縦八寸、横五寸五分、半葉十三行、本文は群書類從本と大同にして小異を存す。所々假字の右傍に朱を以て眞字をあて、又本文中の引歌故事等を傍書又頭書せり。古今、後撰等の勅撰和歌集又は白氏文集等の一節を擧ぐる事多し原本たる義知の校合本の今何處に存するや知り得ざる所なるも、忍藩の大阪留守居役たりし翁滿が大阪在住人たりし壺井の遺書を見て寫せしはあり得べき事なるが、只その所在を書きのこさゞりしこそ惜しき心地せらる。とまれ傳本極めて少き此の女流日記の古寫本中に、最初にして且精確なる註釋書として著名なる「傍註」の著者の校合本を新に數へ得るに至れるこそこよなき幸と云ふべけれ。

圖版第十三號參照

異本 源氏小鏡　大永五年古寫本　全二冊　金六十五圓

最古の源氏物語梗概書として源語研究史上注意すべき作品とされて居ります源氏小鏡の、室町期の寫本、しかも本文が流布の刊本と著るしく異つた一傳本の存在を御紹介出來ます事を喜びと致します。

奥書は

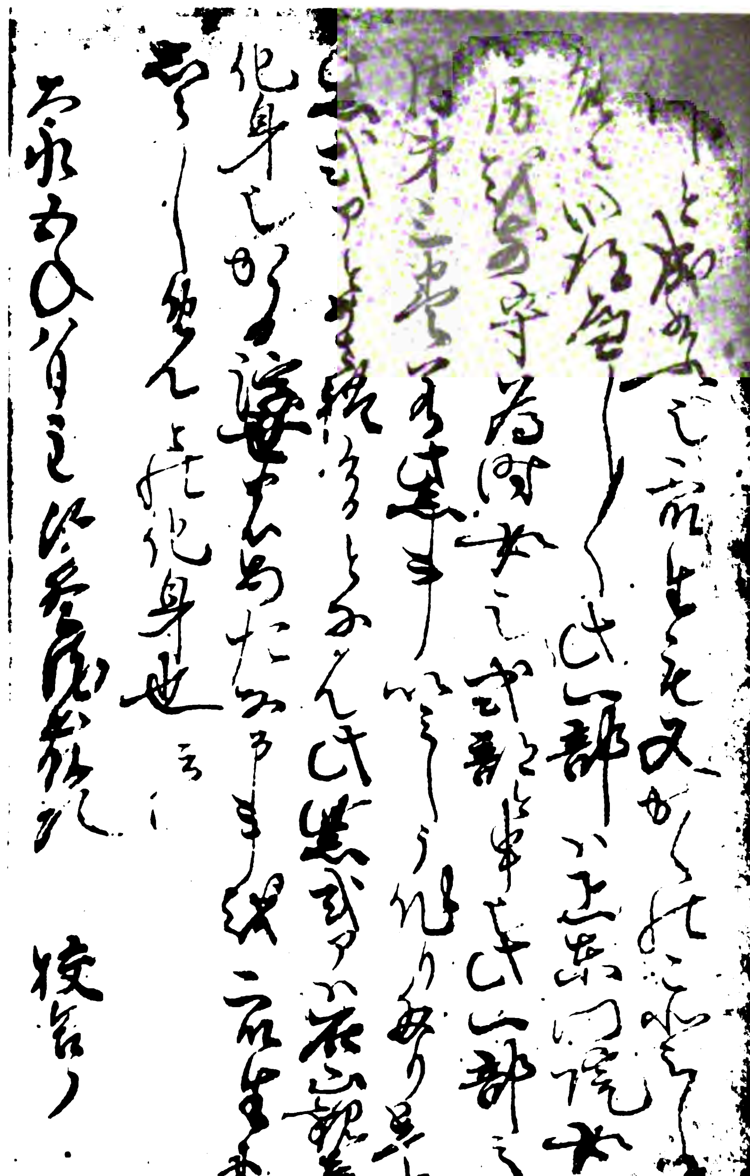
大永五年八月二日　（不明）參龍殿記

とありまして筆致は定家風の枯屈蒼古たるものです。紙質墨色等より見て大永のものであらうと察せられます。本文は流布本と全く異つて殆んど同一の一句だに見出し難い程であります。巻により繁簡一様ではありませんが概して流布本よりも簡略で殊に後半部に至ると此の傾向が甚だしいのは此の著の原の體裁を示すものでないでせうか。時に異本と校合してあり又間々傍註をも附して居ります。巻末に左の跋語を附して居るのは他の傳本に見ぬ所です

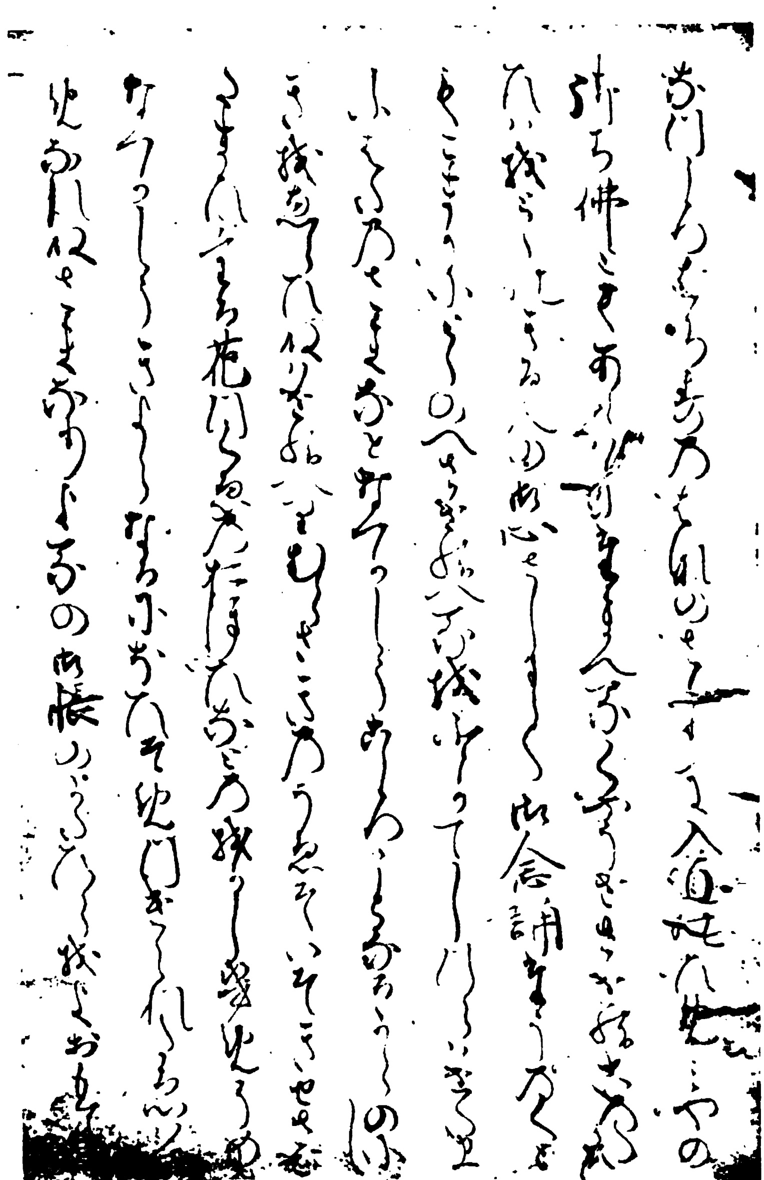
「此源氏壹部皆夢之儀也、世の中のあたなる事を衆生に知らしめんがため也、歌道をのぞまん人は石山を信ずべし、源氏に條々秘事在之、源氏壹部を五巻につゞめ定家卿撰をかれけるとなん、名は源名知顯抄あり、數奇ならん人は尋披見せらるべき也………（中略）………此紫式部は石山觀音の化身也、かゝる浮世のあたなる事を衆生にしらしめんとの化身也云々」

とあつて佛教思想の浸潤の痕を顯著に示して居ります。定家の「源明知顯抄」の名を記して居るのは珍とするに足りませう。中本、古き紙表紙。

圖版第十二號參照



第十二圖　古寫本源氏小鏡奥書の一部



第十一圖　古寫本源氏物語　鈴蟲の卷　卷頭

(11) 源氏鈴蟲の卷　鎌倉期古寫本　全一册　金二百圓

表紙は萠黄地の緞子に金にて唐草を織り出したる古裂、題簽を付せず、胡蝶裝なり。此の體原裝なるが如し。縦七寸四分、横四寸七分。古色深き白楮紙の裏表に半葉九行、行廿四五字詰に書す。墨附十九葉。此の種の傳本に多く存する古筆の極札を附せず。

見返しに六條院、大將、院、女三宮の年立を七行にしるし、次に餘白二頁を置いて第三頁目の中央に「すゞむし」とのみ記し、次頁より直ちに本文に入る。書風は筆端細く、切れるか如き鋭さの内に大らかなる柔か味を見せたる二條流の美しさを豐かに持ち、古筆家の所謂姫路切（源氏狹衣歌合、傳爲家筆）と類を一にし、又七海氏藏の傳爲相筆本伊勢物語と軌を同ふし、從つて彼の高野辰行博士秘藏の源親行自筆新古今和歌集の書風とも、一味相通じ、前田家本枕草子の筆に最も近似す。墨色鮮かにほのかなる古香全紙に溢るゝが如し。保存よく、かすかたる虫喰をとゞめざるにあらざるも讀み得ぬ一字とてもなく、ほどよき手づれも數百年の星霜を經つるを思はしむ。奥書なきを以て書寫の年代に付て明證を有せざれども、上記の形狀、紙質、書風、墨色、手づれ等よりして鎌倉期の書寫にかゝる事疑ひを容るべからず、恐らくはその中期を下るまじき頃の書寫にかゝるべし。

本文は流布本との語句の出入異同可成に認められ青表紙の系統を汲むものにはあらで河内本或ひはそれ以前の系統に屬するものと信ぜらる。此の書を指して親行自筆にかゝる河内本の一册なりとなすが如き甚だしき早斷は、筆者不敏と雖も敢てなすものにあらざるも、彼の河内守の時代を隔つる事遠からぬ年代の書寫にかゝる非定家本なる事は疑ひ得ざる所、僅々廿葉に滿たざる小册なりと雖、最も秘襲すべき寶册なるを信ぜんとす。

圖版第十一號參照

伊勢物語　古寫天福本　全一冊　金十五圓

縱八寸一分、橫六寸一分。楮紙の表裏に一面九行に書いて居ります。書風は定家風と光悅流の中間の樣な流で、書寫の年代はハッキリ致しませんが、元祿前後でございませう。表紙は例の靑の雲形の下に金泥で草花を描き中央に伊勢物語　の外題を貼つて居ります。

卷末には業平、行平等の年譜、萬葉集、六帖歌、宋玉神女賦の引用等の勘物があり、最後に天福二年正月廿日云々の天福本の奧書があります。その次に別本奧書として

合多本所用捨也可備證本　云々

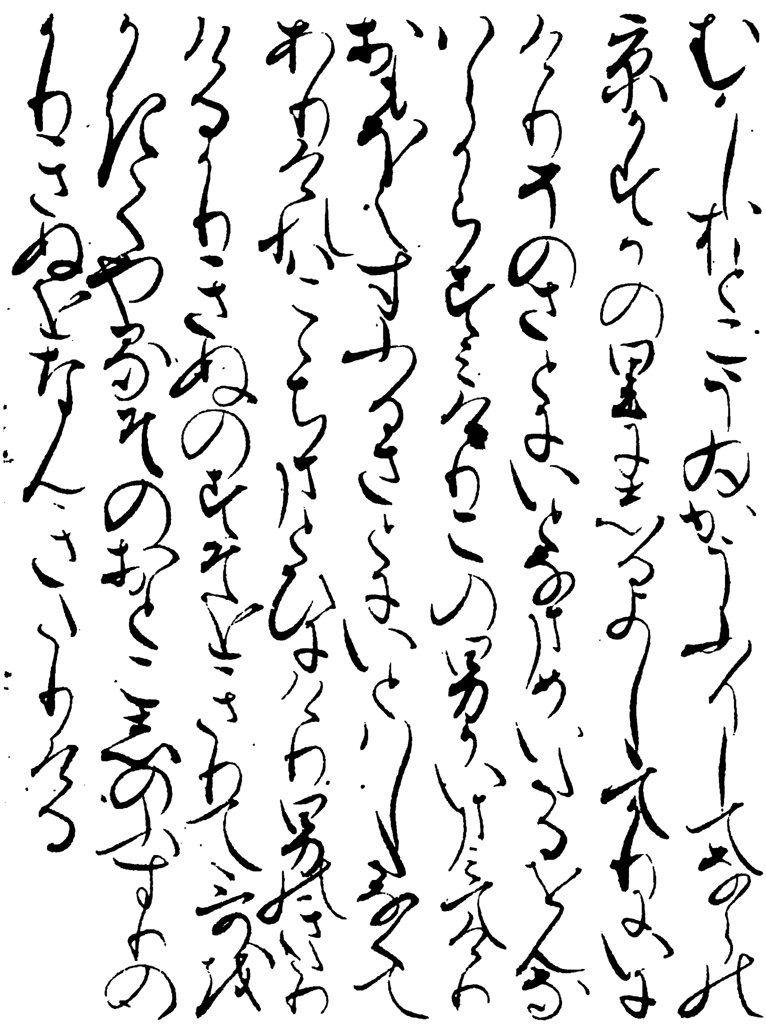
の武田本の奧書を記し更にその次に　又別書奧書　として

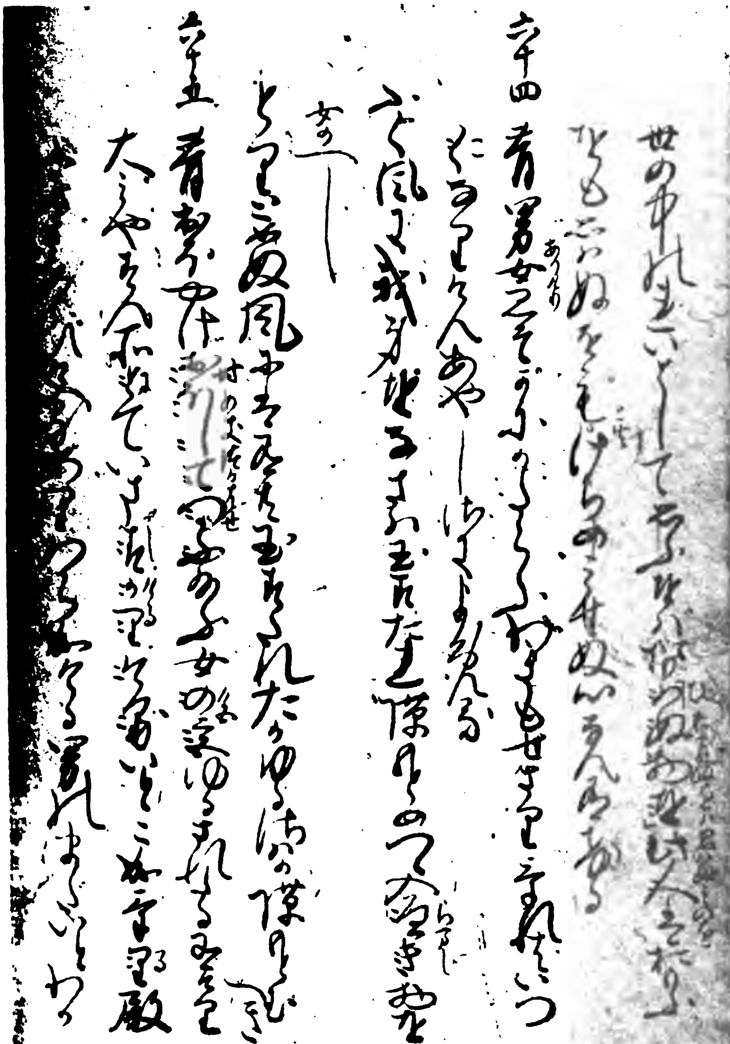
抑伊勢物語根源古人說々不同　云々

の流布本の奧書を擧げて居りますので、一寸見ては此の寫本の本文が定家本の三種中何れに屬するか判斷に迷ひますが、詳細に本文を比校致しますと紛れもない天福本の一本である事がわかります。所々にイとして他本との校合のあとを示して居りますのでしらべましたが、イは武田本に一致しますから武田本と校合したものでございませう。保存の非常によい本でございます。

圖版第十號參照

第十圖　伊勢物語　天福本


むかしおとこうゐかうふりしてならの
京かすかの里にしるよしゝてかりにいにけり
そのさとにいとなまめいたる女はら
からすみけりこの男かいまみてけり
おもほえすふるさとにいとはしたなくて
ありけれは心ちまとひにけり男のきたりける
かりきぬのすそをきりてうたをかきて
やるそのおとこしのふすりの
かりきぬをなむきたりける



第九圖　伊勢物語　鈴木眞年本　内容の一部

(9)

伊勢物語　鈴木眞年本　全一冊　金二十五圓

本文は流布本を寫し、書寫の年代は奥書にある通り享保八年霜月十四日で何の奇もないものでありますが採るべきはその校合でせう。所々をミセケチにして其の右傍に異本の本文を記して居ります個所が甚だ多く、しかもその異本が定家本、塗籠本、古本、大島本等の從來知られた系統のものと異つて居るのが奇とせられます。例へは五十六段の

むかし男ふして思ひおきて思ひ思ひあまりて
わが袖は草の庵にあらねども　くるれば露のやどりなりけり

とある文中、「ふして思ひおきて思ひ」の十字をミセケチにして「昔男ありけりねてもさめても」となし、又「露のやどりなりけり」の「なりけり」の四字をミセケチにして「宿りとぞなる」と改めて居ます。又五十七段の「むかしおとこ人知れぬ物思ひけり」の「おとこ」と「けり」が見せ消しになつて「むかし人知れぬもの思ひする男」と改つて居り此の種の變化は一々擧げるの煩に堪えません。「勢語」の本文としては全く珍らしい異本であります。惜むらくは此の校合は前半に詳しく後半に粗になつて居る樣です。此の外朱を以て註を書き入れ勘物を寫して居ります。鈴木眞年舊藏。

圖版第九號參照

伊勢物語　片假名傍註本　全一冊　金五十圓

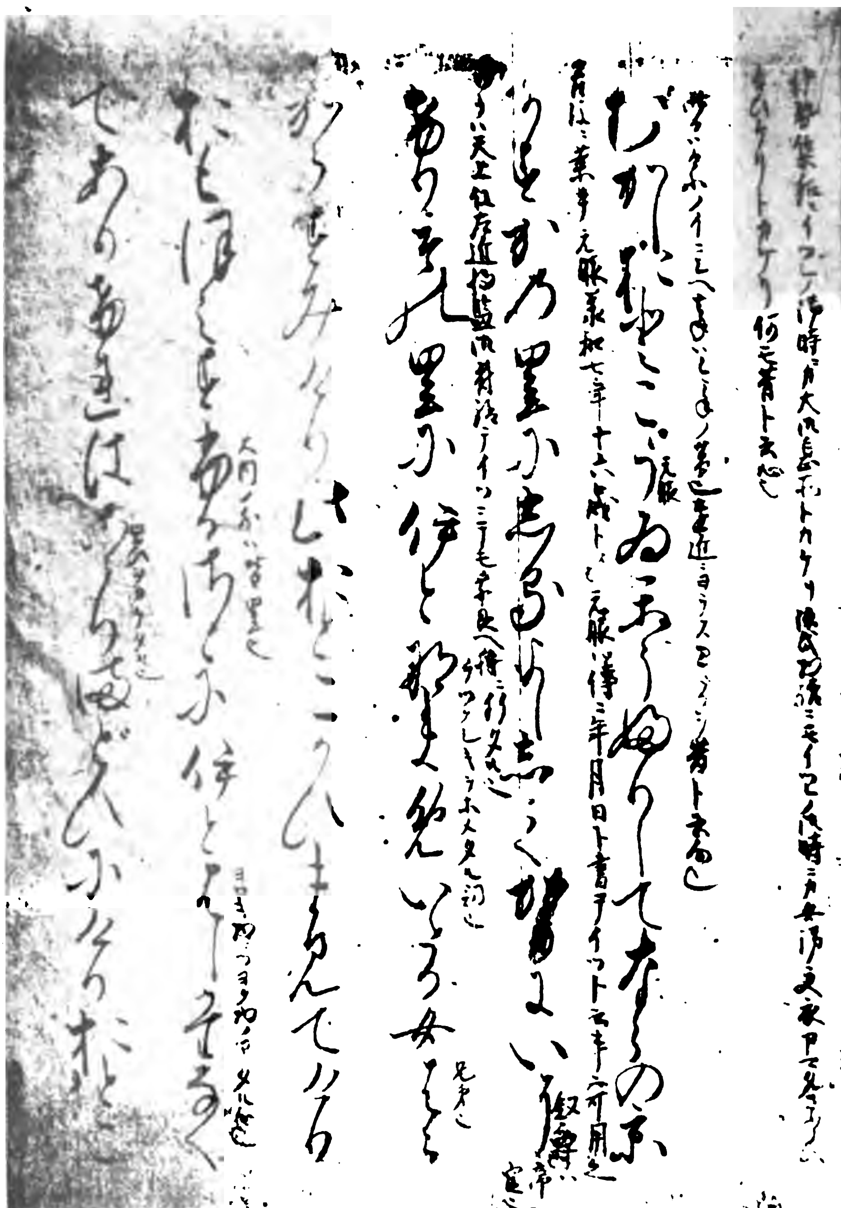
慶長を下るまじき古寫本、縱七寸六分、横五寸七分、袋綴じ。半葉八行乃至九行、奥書は

合多本所用捨也可備證本　云々

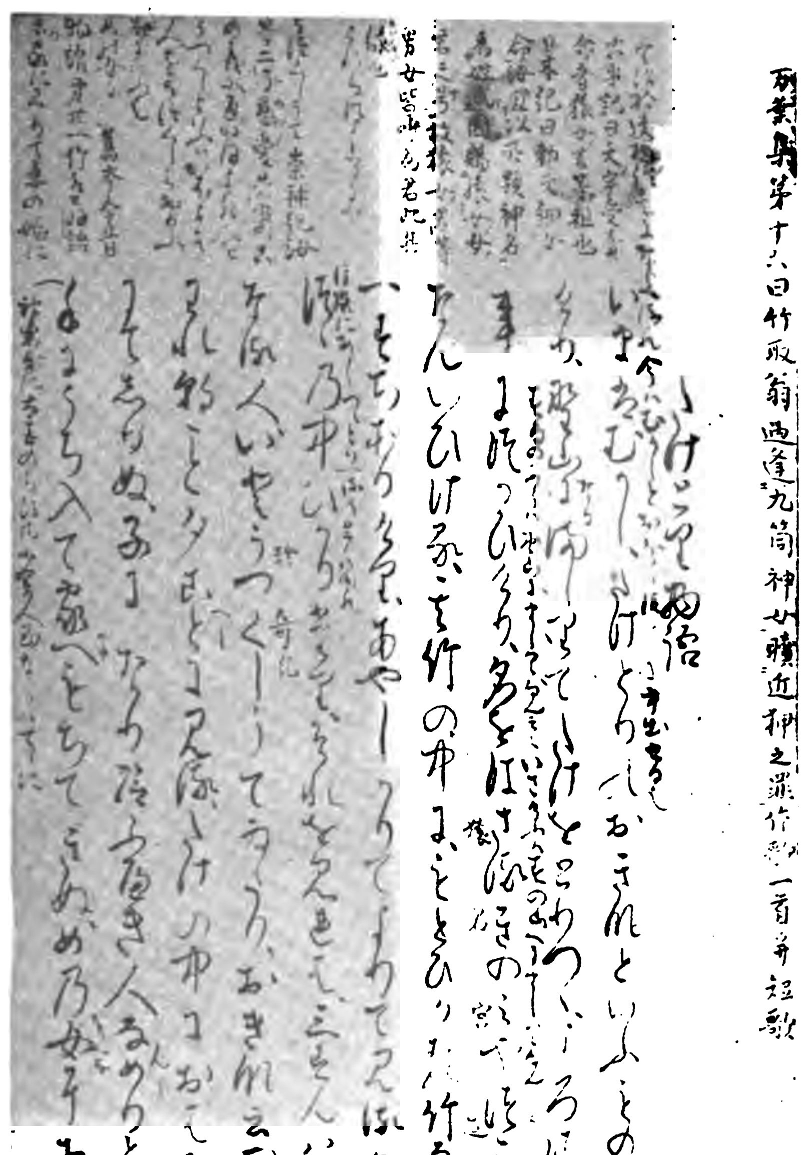
と云ふ武田本の奥書と、勘物と、その正しい本文とを盡く具備する一本で、定家本中、傳本の稀少な武田本に屬する事は疑ひを容れません。しかし此の本の特に尊むべき特徴は此の武田本たる事にあるのではなく、その行間に書き入れた豊富な傍註に在るのであります。

此の傍註は本文と書寫の時代を等ふすると見られますから、足利末期頃のものでせう。片假名書きで細字にしるした有様は圖版第八號によつても一班は知られませうが、可成詳細なものです。註は「聞書」ではなく自說であるらしいですが、何人の筆になるか明かでありません。第六十五段の本文の左註の中に「一禪御說ニハ　云々」などゝありますから一條兼良又は冬良等の系統を引く室町末期の研究者の筆になるものでせうか。片假名書だけに註の內容も學問的に優れたものらしく思はれます。筆致も近世に入つての書寫本と違ひどこか豊かな美しさを存して居ります。總紙數九十一葉、卷頭と卷末に「安藝延重氏」と云ふ古い丸の黑印を押して居ります。

圖版第八號參照


むかしおとこうゐかうふりしてならの京
かすかの里にしるよしゝてかりにいにけり
その里にいとなまめいたる女はら
からすみけりこのおとこかいまみてけり
おもほえすふるさとにいとはしたなく
てありけれは心ちまとひにけり

第八圖　古寫本伊勢物語　片假名傍註本卷頭



第七圖　契沖校本竹取物語卷頭

(9) 竹取物語　契沖校本　全一冊　金二十圓

「物語の出きはじめの祖なる」竹取物語の本文を僧契沖が校合して一部の校本をつくつた事はその著「河社」の奥附によつて知らるゝ所でありますが、その内容の如何なるものであつたかは、それが上梓せられなかつたために多く知られて居りません。此處に擧げました寫本は契沖校本を精密に傳寫したものでありますので、多く研究者を裨益するものだと思はれます。
美濃判袋綴じの大本一冊で半葉十二行に書き、朱と墨を以て校合し、所々本文をミセケチにもして居ります。巻末に

ある古本を以て一校せしめ早ぬ、互に見合て好本となし待るべし。

寶永四年亥八月　　隠士契沖

とあり、その次に

以高安氏收藏契沖阿奢梨校本校寫一校早

としるして居ります。書寫の年代は近世末期のものでせう。
前記「河社」の奥に、土佐日記、宇津保、大和の物語、萬葉集などゝ共に竹取物語の名を擧げて、
「右諸書契沖正ㇾ誤加ㇾ註者也」
とありますが、その通りで、此の寫本にも校合の外に上欄及び行間に甚だ多くの註の書入を加へて居ります。古事記、萬葉、うつほ、源氏、狹衣、今昔等の國典から漢籍まで引用して居り、その學殖博且深を見るに足るものがあります。此の重要な古物語に關する契沖の學說は此の寫本によつてのみ親ひ知らるゝ事でせう。本文比校の上にも有益なるべきは勿論の事であります。
圖版第七號參照

(6) 嘉祿本 古今和歌集　古寫本　全二冊　金六十五圓

縦八寸七分、横六寸七分。大形本で少し横ののびた感じ、水色の絹の古裂の表紙をつけ、古い桐箱にはいつて居り用紙は楮紙、裏表に十三行づゝ、歌一首を一行に書いて居ります。書寫年代は明證を存しませぬが、足利中期を下らぬものでございませう。外箱の上に

古今和歌集　全部二冊

連歌師廣憧筆

とあり、又上卷のはじめに　連歌師廣憧前廉之筆　と云ふ古筆の極め札を附けて居ります。卷頭に假名序があり、古註を本文につゞけて割書にしてあり、下卷々末に墨滅の歌を載せ、次に眞名序なく直ちに

此集家々所稱雖説多々且任師説加了見爲備後學之證本乎

戸部尙書判

嘉祿二年四月九日

于時頽齢六十五寧堪右筆哉

の奥書を記して居ます。即ち藤原定家が嘉祿二年に校訂し、後永く冷泉家の證本として尊ばれ、而も流布少しとさるゝ嘉祿本の一種である事が明かであります。

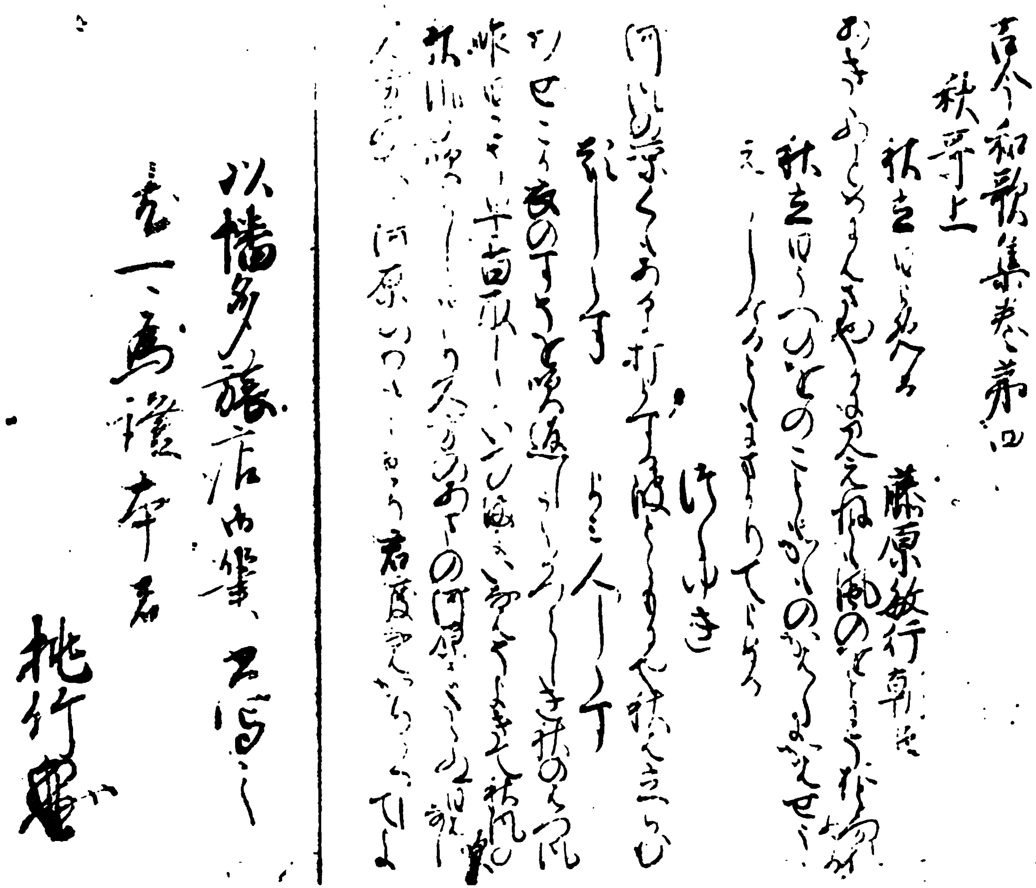
最後に圖版第六號の如く

以幡多旅店(?)御筆書寫之、尤可爲證本者

桃竹 押花

とあります。筆者桃竹については未だ之れを明かにし得ません。

本文所々朱にて合點を附し、又聲點と覺しきものを附して居ります。嘉祿本として性のよい傳本の一だと信じます



第六圖　古寫本古今和歌集內容の一部及び奥書

書日本後紀末

日本後紀四十巻舊本既逸矣今此二十巻其所抄
録耶所纂輯耶首載左大臣緒嗣公上書而上書不
收文粹如取諸朝野群載耶群載余未之見也坊間
續後紀亦本記奏上之事蓋闕略也矣意者上書綴
舊本缺簡殘篇而存于今亦不可知則不可又為偽
撰焉庚子之秋新倡〔借〕閲千二氏藏本而時寫之余也
閑習武事暇無幾至明年辛丑冬十一月漸成矣若
夫紀事者有類聚國史在以期他日考異焉伊庭太
郎書於鄉厨巻〔巷〕僦居時享保六年也

第五圖　纂本日本後紀奥書

纂本日本後紀　寫本　全二十卷 十冊　金二十圓

全二十卷を合冊して十冊となして居ります。丹表紙本、袋綴じで最終卷末の跋によれば享保六年に伊庭太郎（後出大石寺本「曾我物語」の書寫者）が寫したもので、原本は正德二年仲春に水野老平祖衡なる人の筆寫したものと云ふ事であります。第二十卷々末の水野祖衡の奧書によれば、此の書は當時秘府に藏された完本の日本後紀の眞本を倉卒抄出したもので、「其所ニ傳來一雖レ不レ詳焉然顧ニ其体製一頗與ニ他史記一不レ遠也思是抄出之疎略轉寫之卑俚而非ニ他僞撰之類一」と云つてその信憑すべきを主張して居ます。第一卷々頭には藤原緒嗣の上表を掲げて居りますのも異とするに足ります。

六國史の一として重要なる正史である「日本後紀」は全四十卷夙く亡佚して十卷を存するのみですが、眞本全部の抄略本としては日本後紀纂一卷が傳へられ、又尾張の堀正意が諸書から集めて編纂した四卷本も流布して居りますが、此の寫本はその何れとも異り、纂本或ひは抄略本としてはその量最も多く、その性質に注目すべき點がある樣に存ぜられます。

圖版第五號參照

萬葉集　寶永六年版 大書入本　全二十冊　金二十圓

寶永年間に京都の書肆出雲寺和泉椽が、萬葉集通行本流布の基をなした寛永二十年版をそのまゝ重刷し「寶永六丑季春吉辰」の刊記を附して刊行した本を、古本と校合し諸說を書入れしたものであります。

紺色の紙表紙袋綴りの冊子二十冊で、外題は「萬葉和歌集」とあり、盡く原裝を留めた美本です。一頁八行十八字詰、訓は眞名の右に片假名にて附し、題詞を低く歌を高くし、每卷に目錄があり、第廿卷末には　文永三年　權律師仙覺　の奥書あり、桑門寂印の應長元年及び權僧都成俊の文和二年の奥書ある本であります。

校合及び書入は朱と墨と二色を用ひて居ります。校合に用ひた異本としては、古本●元暦本●古葉略類聚●官本●一本古活字版本●代匠記本●略解本●今本の名が擧げられて居り、頭書し或は傍書して居ります諸學者の說としては、契沖●宣長●荒木田久老●村田春海●狛諸成●橘千蔭等の名が見えて居ります。外に　今案ニ　として筆者の自說と思はるゝものを多く記して居ります。

校合●書入共に全二十卷を通じて増減なく叮嚀詳細に記されて居り、朱書と墨書中前者が多くその筆勢も確かで見事ですが、惜むらくは何人の手になるか不明なのであります。思ふに近世中期以後の篤學者のものでせう。

圖版第四號參照

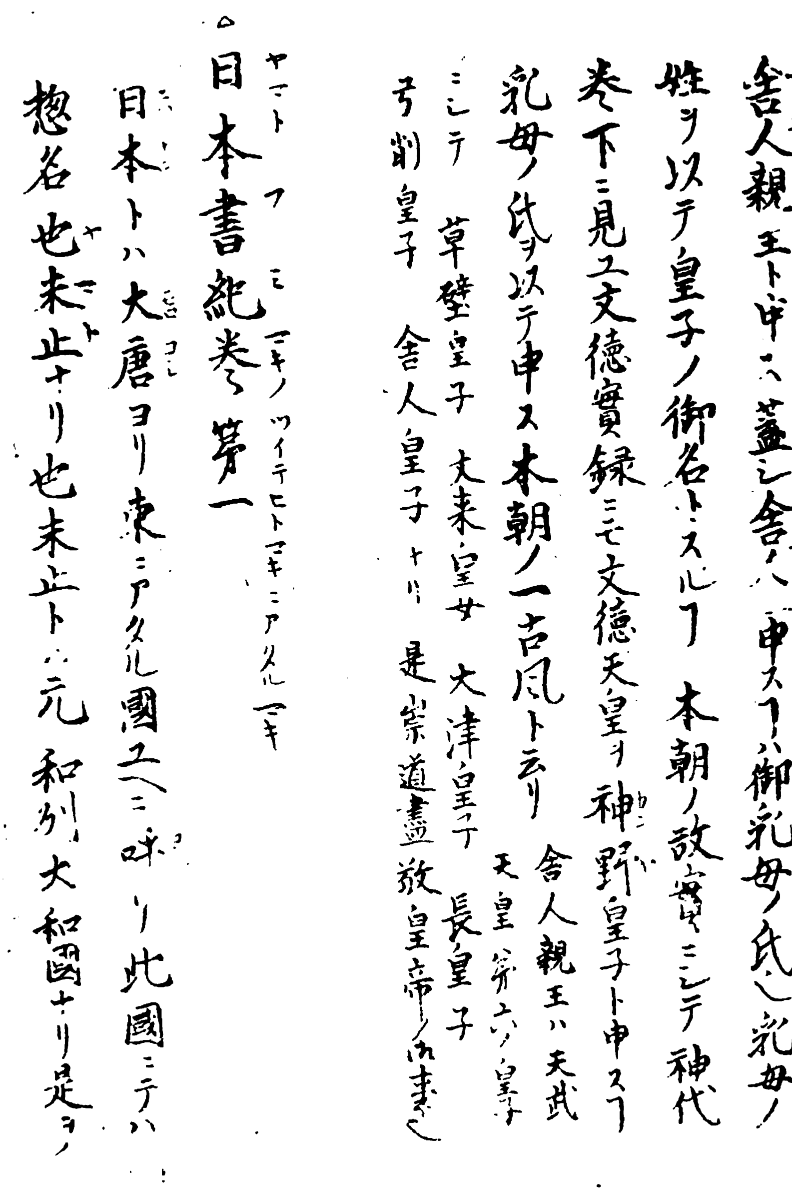
雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　太泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳爾菜採須兒家吉閑名告沙根虚見津山跡乃國者押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾己曾座我許者背齒告目家乎毛名雄母

高市崗本宮御宇天皇代　息長足日廣額


舎人親王トモ申ス、蓋シ舎人ト申スコトハ御乳母ノ氏也乳母ノ
姓ヲ以テ皇子ノ御名トスルコト　本朝ノ故實ニシテ神代
巻下ニ見ユ文徳實録ニモ文徳天皇ヲ神野皇子ト申スコト
乳母ノ氏ヲ以テ申ス本朝ノ古風ト云リ　舎人親王ハ天武
天皇第六ノ皇子
ニシテ　草壁皇子　大來皇女　大津皇子　長皇子
弓削皇子　舎人皇子ナリ　是崇道盡敬皇帝ノ御事也
○日本書紀巻第一
日本トハ大唐ヨリ東ニアタル國ユヘニ呼ソ此國ニテハ
惣名也耶麻止ナリ也末止トハ元和州大和國ナリ是ヲ

第三圖　日本書紀小汀抄　内容の一部

(8)

日本書紀小汀鈔　　山本廣滿自筆　　全十二冊　　金百二十圓

「小汀鈔」十卷全附錄「神代卷神號荷田氏古傳」二卷は「國學啓」の筆者にして國學の創始者なる荷田春滿の日本紀神代卷講述の聞書なり。內の附錄「古傳」二卷は、嘗つて大貫眞浦氏が、その寫本を故井上賴圀翁の文庫に探り得て、自著「荷田東麿翁」中にて報告紹介せられし「荷田氏古傳」の原本にして、古く伊能氏の藏本たりしものなり。「小汀鈔」の內容は未だ公にせられたる事なく、又その存在も知られたる事なくわづかに前記賴圀翁藏の寫本の奥書によつて名のみを知られたる稿本なり。本書成立の原由は「右神代卷上下卷廣滿羽倉信盛へ尋ね、又黑田正足講述を聞き、依之不佝之考按をも得合て是を書つゞればいつしか十卷になりしまゝ小汀と題して序を加へて政滿にあたふものなり。中〳〵志源の意味吾濟の筆力の及ぶべきにあらねど、又不得止染筆すといへども九牛の一もとひらく事を得んや（下略）」云々とある跋によりて明かなり。「延享三丙寅年秋七月四日」と日付あれば此の年に編まれしものなるべし。「古傳」は神代卷中の神名を抽出し解釋を加へ考證をなせしもの、「小汀鈔」と共に廣滿がその子政滿に傳へし稿本なる事は自序によりて知る事を得。近時稻荷大社刊する所の「荷田全集」には春滿講述の筆記として「日本紀神代卷箚記」五卷を收載すと雖も內容「小汀鈔」と全く異り、又量も少く且「古傳」に相當するものは全く之れを缺くが如し。彼の春滿大人書紀研究の成果として最も注目すべき寫本なり。

縱一尺、横六寸八分の大本。紙數約六百葉千二百頁。片假名交り半葉十行。

圖版第三號參照

日本書紀　古寫本　零本八冊　金七十五圓

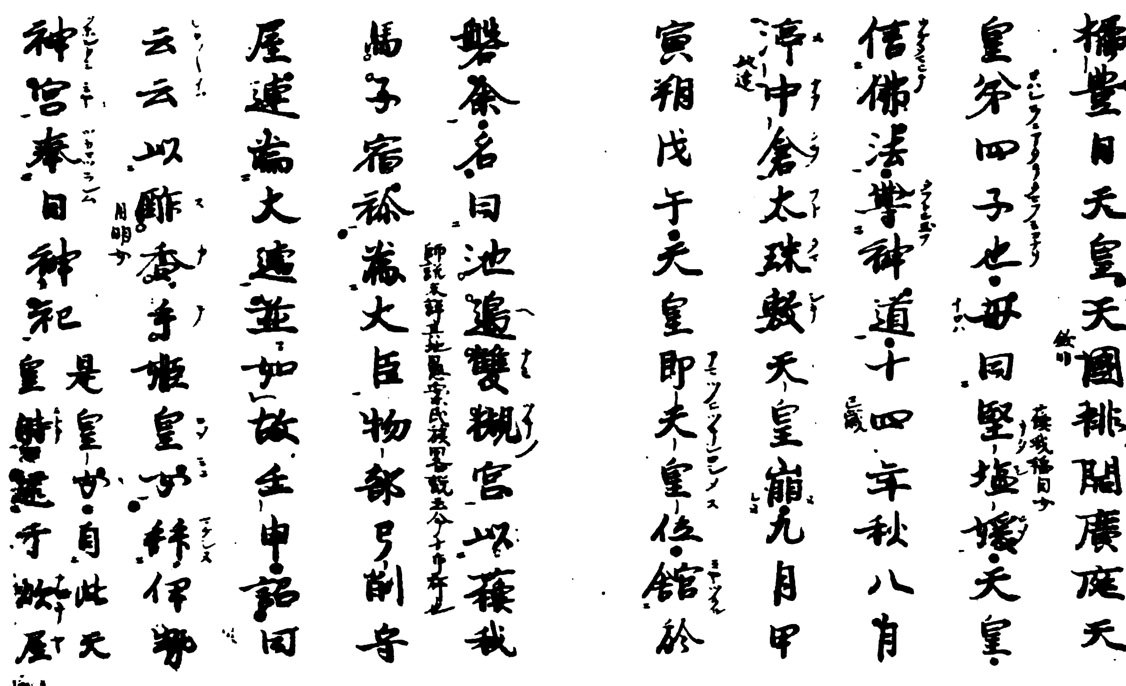
近世中期の臨寫本と覺ゆ。書風勁放に字體巨大、古風を存し、且全文詳細にヲコト點を附したるを以て、餘程の古鈔本を寫せしものなるべく想像さる。文中「一書に曰く」を本文中に割書にしたるは足利末期以降の寫本に類を見得ざる古體にして「書紀」原撰時の俤けを留むるものとして學者の寶重する所、本書亦此の體を採るは偶々此寫本の原本の古きを裏書するものと云ふべし。用紙の薄様紙なる事は臨寫の推定を助くるものなり。

縱九寸七分、横六寸八分の大本、現存の卷數は第四、第六、第八、第十七、第十八、第廿一、第廿六、第三十の八卷なり。（内第八卷々末に數葉の脱落あり。）奥書を存せざるを以て原本判定の資料を欠けども、現存の古鈔本にして之れ等の諸卷を存し、しかも「一書曰」を割書にせる種類のものは北野神社藏の古寫本（平安朝末期より足利中期までの數筆）及び内閣文庫藏の慶長寫本の二本を存するのみなるが、後者は字體小く、前者は字體大きく、而して本寫本は文字甚だ大なるを以て、恐らくは北野神社本を臨寫せしものにあらざるべきか。若し然らずとせば本書の原本は既に亡逸して傳らざるものゝ如し。

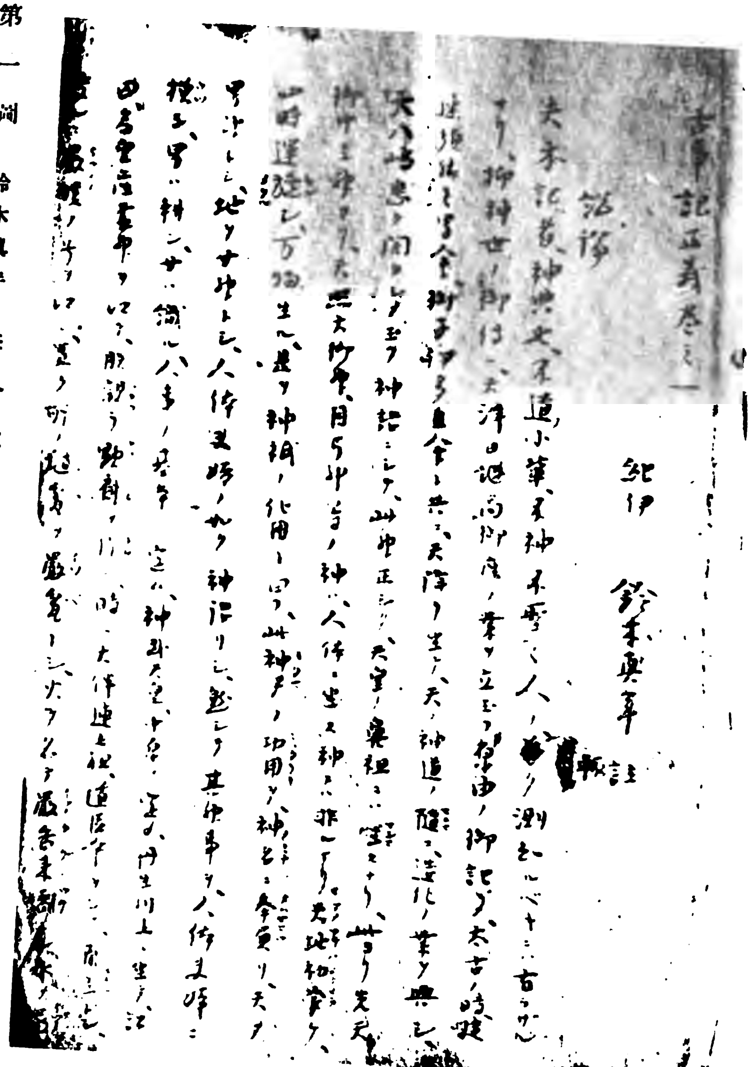
卷四、六、八、廿一、廿六の五卷は半葉五行に、十七、十八、三十の三卷は半葉八行に書寫す。全卷朱を以てヲコト點を附し、墨を以て返點送假名を書し、又まゝ片假名にて訓讀を附する事は全く相同じ。

古事記と共に國典の筆頭に位する日本書紀の古寫本として重んぜざるべからず。

圖版第二號參照


橘豐日天皇天國排開廣庭天
皇第四子也母曰堅塩媛天皇
信佛法尊神道十四年秋八月
渟中倉太珠敷天皇崩九月甲
寅朔戊午天皇即天皇位館於
磐余名曰池邊雙槻宮以蘇我
馬子宿禰爲大臣物部弓削守
屋連爲大連並如故壬申詔曰
云云以酢香手姫皇女拜伊勢
神宮奉日神祀是皇女自此天
皇時逮于炊屋

第二圖　古寫本日本書紀　内容の一部


古事記正義卷之一

紀伊　鈴木眞年輯註

第一圖　鈴木眞年自筆　古事記正義　卷頭

（1）

古事記正義　鈴木眞年自筆稿本　六冊　金百五十圓

皇國第一の聖典「古事記」の註釋は、彼の鈴屋の翁の「古事記傳」の前に古事記傳なく、「古事記傳」の後に古事記傳なしとせられて、他に見るべき著述として、わづかに橘守部、富士谷御杖等の著の二三を擧げ得るも、質量共に「傳」と比すべからざるものとせられたり。此處に此の至重の古典の一註釋書として、紀州の國學者鈴木眞年の「正義」（その質は春滿、眞淵、宣長、篤胤等の說を包攝して更に新奇を加へ、その量は「傳」にも比敵すべき大著なりしと想像せらる）の自筆稿本の發見を報告し得るは單に筆者の光榮にのみ留らざるべし。

「古事記正義」今存する所六冊、內第一卷は總論にして、「夫本記ハ神典也。不道ノ小輩、不信不聖之人ノ輙ク測知ルベキニハ有ラザルナリ」との喝破にはじまり、本記の註釋の歷史を略述し、更に宣長の說を批判し、彼の陰陽の理を否定せるを難じ、又その漢意邪說論を反駁す。曰く「漢意邪說トハ何ゾヤ。夫學問ニ自他ナク物理ニ內外アランヤ。若シ神道ハ我邦限リノモノト云ハヾ、神祇ハ瑣小ナルモノニテ私道ト云ハザルベカラズ。イカデサル事アルベキヤ。天地モ日月星モ萬邦一體ノ天地ナリ。神道又同ジ」と。以て本書記述の態度の一班を察すべし。第二卷より第六卷までは古事記上卷の註にして總紙數約二百二十葉、一葉三十行、一行三十六七字詰めの細字の草稿、これを活版印刷に改むるも約四百頁はあるべし。從つて古事記全卷の註としては裕に一千頁以上に及ぶべき尨大の著にて「古事記傳」以外に比すべきものなき詳註なり。惜むらくは、上卷の註六冊のみを留めて他は散逸せるが如し。

鈴木眞年の學問的業蹟は、現在靜嘉堂文庫に秘藏の「諸家系譜」二十六卷「百家系圖稿」二十一卷の稿本及び刊本「百家系圖」全六十四卷等の大著により系圖學者として多く知らるゝが如しと雖も、幸に此の大作及後揭の「日本事物原始」「萬葉攷實集」等の新發見により、その古典研究者としての業蹟の全貌の闡明せらるゝに至るべきを信じて疑はず。

圖版第一號參照　原本の大さ縱八寸三分、横五寸七分。

弘文莊待賈古書目

第二號

書名索引（ＡＢＣ順）

內容目次

御註文の栞

□記載品は性質上全部一部づつしか持ち合せて居りませんので、なるべく早く御用命を願ひます。御送本は嚴密に先着順に致します。

□市内の御註文は電話「小石川六四一〇番」を御利用願ひたう存じます。地方の御急ぎのものは電報で書名と御名前だけを御知らせ下されば其の書を保留して置きます。

□御註文はなるべく前金又は代金引換小包にして戴きたう存じます。但し圖書館、學校、官廳の捺印ある御註文は此の限りでありません。

□御送金は振替口座「東京一一〇二番」へ御拂ひ込み下さるのが便利で且安全で御座います。

□送本料は特に無料で奉仕させて戴きます

此處では只前回と同じ氣持で此の號をも編輯した事だけを申上げるに留めます。

七、前號は全國へ一齊に發送致しましたために地方の御客樣へは遲着致しまして、そのため折角何點か御注文頂き乍ら既に先着注文がありまして一點も御送り出來ない向も御幾人か御座いまして眞に申譯けない思ひを致しました。今號は遠隔の地の御方へはそのつもりで早く發送しまして、なるべく各地の皆樣へ略々同時に屆く樣加減を致して居りますから、御入用のものは、なるべく早く御注文を願ひたう存じます。

八、第三號は來春刊行致す豫定でございますが、一號毎に少しづゝでもよりよいものにしたいと念じ居ります。御氣付の點を御漏らし願へましたら何より喜ばしう存じます。

昭和八年十一月二十五日

弘文莊主　反町茂雄

謹識

許しを願ひたう存じます。

四、記事の内容については前號でも申し上げました通り、出來る限り正確を期し、良心的な態度をとりたいと思つて居ります。百頁に余る此の目錄の解說中には誤りも多い事でせうが、虛僞と出たらめと甚だしい誇張とは充分に避ける樣に注意しました。「恒に信用的（トラストウワーシー）であらねばならぬ」と云ふ信念が、弘文莊の他のすべての仕事と同じく、此の目錄をも支配して居ります。

五、前號の記事も私としては出來る限り注意をしたつもりでございましたが、行き屆きませず、數ケの過誤の御指摘を諸先生方から頂戴しました。（御教示に基いた訂補は本號卷末に記して居ります。）此の號の解說中にも全じ樣な誤謬を冒して居りはせぬかと氣遣はれます。御叱正を願ひたう存じます。

六、本書目前號の中で、所收の古書賣價は出來る限り公正であり合理的でありたいと誌しましたに就て、「公正なる古本値とは何ぞや」との御質問に接する事幾度かに及びました。右については近々の中に卑見を陳べさせて戴く機會がございませう。

まへがき

一、「弘文莊待賈古書目」第二號は紀州の國學者鈴木眞年・橘守部及び學者の家として著名な大槻家の舊藏書を中心として、古寫本、古版本、名家自筆本を主とした和漢書と、若干の洋書の珍籍とを併載して居る小莊の古書目で、所收の書は昭和八年十一月廿五日現在で全部在庫して御需めを待つて居ります。

二、「待賈古書目」第一號に掲げましたものは一切重ねて收錄致しませんでした。從つて此の目錄中のものはどなたにも御眼新しいものであらうと存じます。

三、所載の古書については心要なる範圍内で、その裝釘、版式、紙質、筆致、製作年代、製作者の畧歴、内容の概要、汚損の程度等の大要を記して御參考に供する樣に致しました。筆者の寡聞故と紙數に限りあるためとで、說いて詳かならざる所或は繁簡宜しきを得ぬ所等少なからずありまして、さぞ御目だるい事でございませうが、追々とよりよいものに致す樣不斷に努力致して居りますから暫くは御

一、弘文莊は和漢洋の善本の賣買を營んで居ります。微力ではございますが稀覯書、珍籍專門の特殊書肆でございますので、普通圖書は新古を問はず特別の御注文以外一切お取扱ひ致しません。

一、弘文莊は同時に書誌學、國文學を中心とした良書の出版に從事して居ります。出版致しますものについては、充分なる存在理由を持つもの以外には安んじて梓には上せぬ事に致したく存じて居ります。

一、弘文莊は古書肆として又出版者として、充分に御信頼願へるものたらうと撓まぬ努力を拂つて居ります。勤勉に、堅實に、眞面目に、と云ふのが不斷のモットーでございます。幾久しく御引立を御願ひ申上げます。

東京・本郷
弘文莊

弘文莊待賈古書目

第二號

昭和八年六月一日發行

東京市本郷區森川町宮前
發行者　弘文莊　反町茂雄
電話小石川[illegible]六四一〇番
振替東京一一〇二番

弘文莊

MADE IN JAPAN

弘文莊の取扱ふ古書

は和漢洋・東西の比較的稀覯、貴重の圖書に限りたいと思ひます。從つて今迄の我が國に見られなかつた分化した純然たる專門書肆でございます。賣買共に御利用、御引立の程を御願ひ致します。

弘文莊の出版

は書誌學、國文學を中心とした價値ある良著の良心的出版で地味に且堅實に營まれて居ります。本質的價値の豊富な著作は多少の犧牲を拂つても公にしたい希望でございます。どうか適當のものがございましたら御遠慮なく御照會下さい。

分化し專門化した古書肆

が特殊の圖書の出版業を兼れる事は、進歩し合理化された一の營業形態でございまして、我が國では全く新しい試みでありますが、將來の大きな一の流れを暗示し先驅するものだと借に確信し、ひたすらの精進を期して居ります

誠實に！勤勉に！

それが弘文莊のどの仕事の中にも一貫して流れて居る不動の營業方針でございます。宜敷御指導御後援の程、幾重にも御願ひ申し上げます。

弘文莊在庫古書目錄 第一號

實價金壹圓

昭和八年五月廿五日印刷
昭和八年六月一日發行
限七百五十部印行

東京市本郷區森川町百七番地
編輯兼發行者 反町茂雄

東京市神田區三崎町一丁目一番地
印刷者 新陽堂印刷所 相原太郎

發行所 東京市本郷區森川町宮前 弘文莊
電話小石川(85)六四一〇番
振替東京一一〇二番

弘文莊待賈古書目

第一號

大尾

書名索引（ABC順）





第九十七圖　天工開物 挿繪の一部

(93)

天工開物

文政十二年刊　全九冊　金十八圓

「天工開物」十八卷九冊は明末清初にあたる崇禎十年に彼の地で刊行され、越えて文政十三年備前の人江田益英によつて校訂訓点付けの上出版された當時の産業百科全書であります。五穀、鹽、砂糖の製法から製油、染色、織物醸造、製紙、製陶、冶金、鍛冶、造船等あらゆる部門の三百年前の産業の材料と技術とを挿繪入りで説明した貴重な資料です。比較的近年の刊行ですが品の少いため高價を呼んで居ります。崇禎の刋本は近年支那で覆刻本が出來ました樣です。

元表紙、原題簽、虫入りもなき上本です。

圖版第九十七號參照

人見流拔覺集　　古寫本　全一冊　金三十圓

唯見れば何の變哲もない馬術の寫本です。七寸五分の五寸三分の大さ、澁表紙がついて紙數約六七十葉の小冊子です。だがよく見て行きますと最後の奥書次の通りです。

右條々大事之徳儀努々不可有他言者也

慶長十八年癸丑八月十五日還之

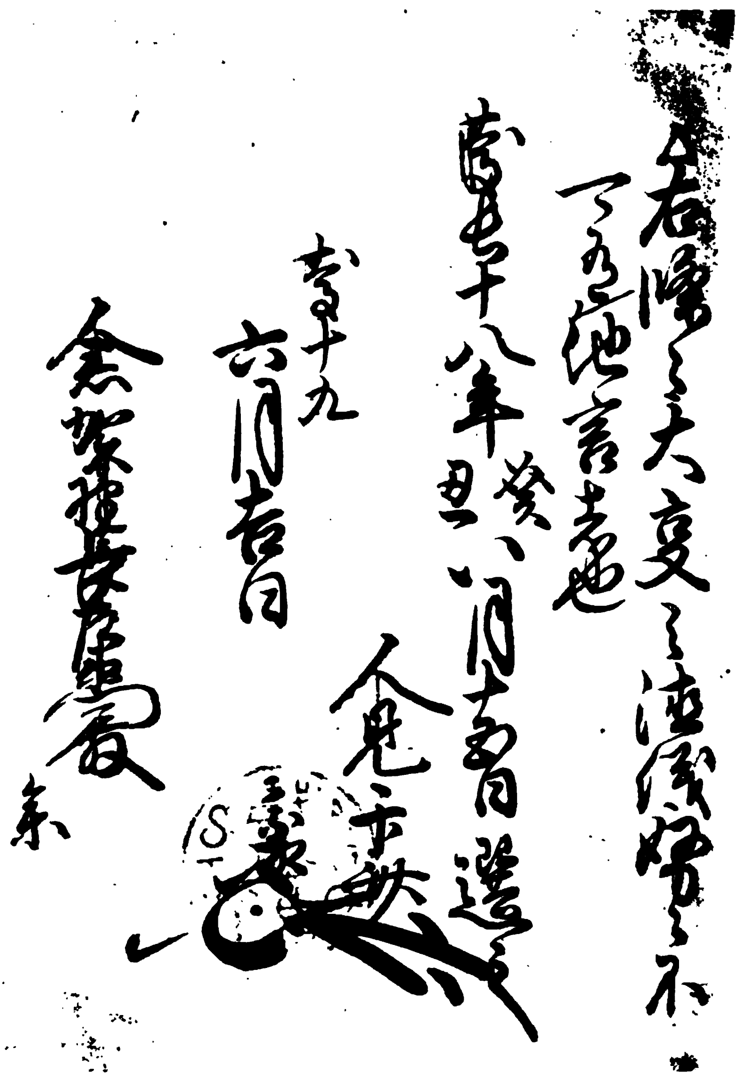
慶十九　　人見掃齊

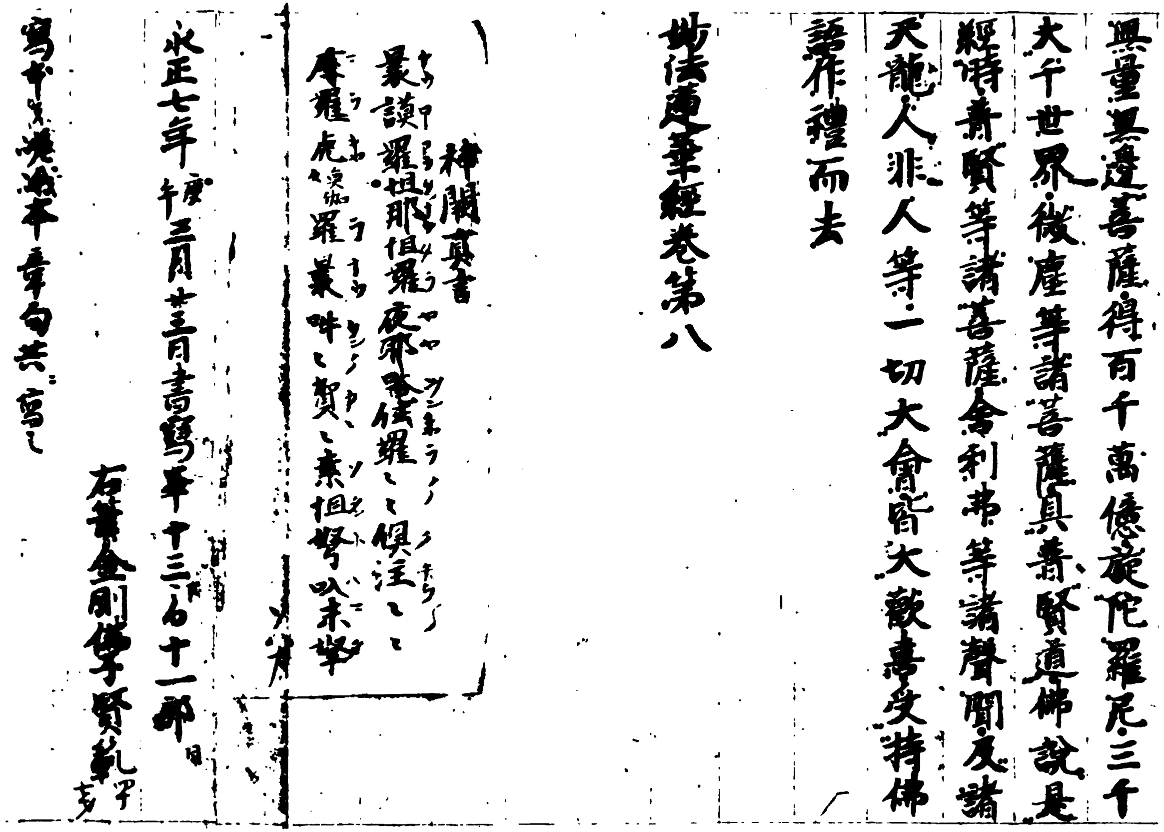
六月吉日　　宗（花押）

倉賀野長左衛門殿　參　（朱印）

即ち人見と云ふ馬術の先生が倉賀野なる人に與へた秘傳書です。此處で重要なのは此の印であります。圖版でも分ります樣に大きな朱の切支丹印を用ひて居ます。印面はハッキリとは讀み取れませんが、中央に「皆傳」と讀まれる漢字を書き、左にSTを右にAGQらしく見える字が並んで居ます。STは聖（サン）の略字でせう。AGQはアゴスチノと云ふのではないでせうか。アゴスチノ人見と云ふ名の人物は日本の切支丹史上表はれて來ませんピエール人見と云ふのがパジエスの「日本基督教史」及びデルプラスの「日本加特力教史」に出ますが何れも簡單な記述で「伏見に居たが出羽に移つて仙北郡で布教した」と云ふ程度の事ですから果して此の掃齊と仝一人であつたか否か不明です。唯此の本の出所が仙北郡に近い所であつたゝめ或ひは仝一人ではないかと推測させます。兎に角ピエールであらうとあるまいと慶長の頃にこんな切支丹印を用ひた馬術の達人が居た事それ自身が興味をそゝります。　圖版第九十六號參照

第九十六圖　人見流拔覺集　卷末


右隠之大事之法儀條々不
可有他言者也
寛永十八年辛巳八月吉日
人見[illegible]
寛永十九
六月吉日
金塚権兵衛殿
參


無量無邊菩薩得百千萬億旋陀羅尼三千
大千世界微塵等諸菩薩具普賢道佛說是
經時普賢等諸菩薩舍利弗等諸聲聞及諸
天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛
語作禮而去

妙法蓮華經卷第八

神閑真書
曩謨羅怛那怛羅夜耶佉羅々々俱注々々
摩羅虎羅吽賀々素怛拏吽末拏

永正七年庚午三月十三日書寫畢十三石十一郎
右筆金剛佛子賢乳
寫本漢本章句共寫之

第九十五圖 古寫本 妙法蓮華經第八卷末

(91)
妙法蓮華經　卷八　古寫　一卷　金三十圓

縦八寸五分、廓内縦六寸八分、有界、行十七字。强靱なる紙に書す。書体は室町期の特色を多く存し、中古の同種のものに比し、必らずしも賞すべからざるが如し。

全文朱墨の點を美しく正しく付し點本の一標本となすを得べし。

奥書は左の如し。

永正七年庚午三月廿三日書寫畢十三之内十一部
右筆金剛佛子賢範四十七才

寫本者嵯峨本章句共ニ寫之

此の時代の書寫たるは疑ふべからず。而して最後の「寫本者」云々の句は當時既に

「應安五年三月十四日　希果拜書」

の識語を卷八の末に有する版本の「妙法蓮華經」を嵯峨本なる名稱を以つて呼びたる事の傍證として興味多し。恐らくは嵯峨本なる名稱を存せる最古の書たるべし。

圖版第九十五號參照

(90) 貽藏界念誦次第私記　古寫本　全一冊　金十五圓

縦八寸二分、横五寸五分。胡蝶裝。

白界を引きたる楮紙の裏表に七行十七字に書し、朱を以てヲコト點を附したり。書寫の年代は鎌倉中期なるべきか訓をあらはしたる片假名に異体の字を交へたり。書風謹直なり。惜むらくは末尾數葉を欠く。

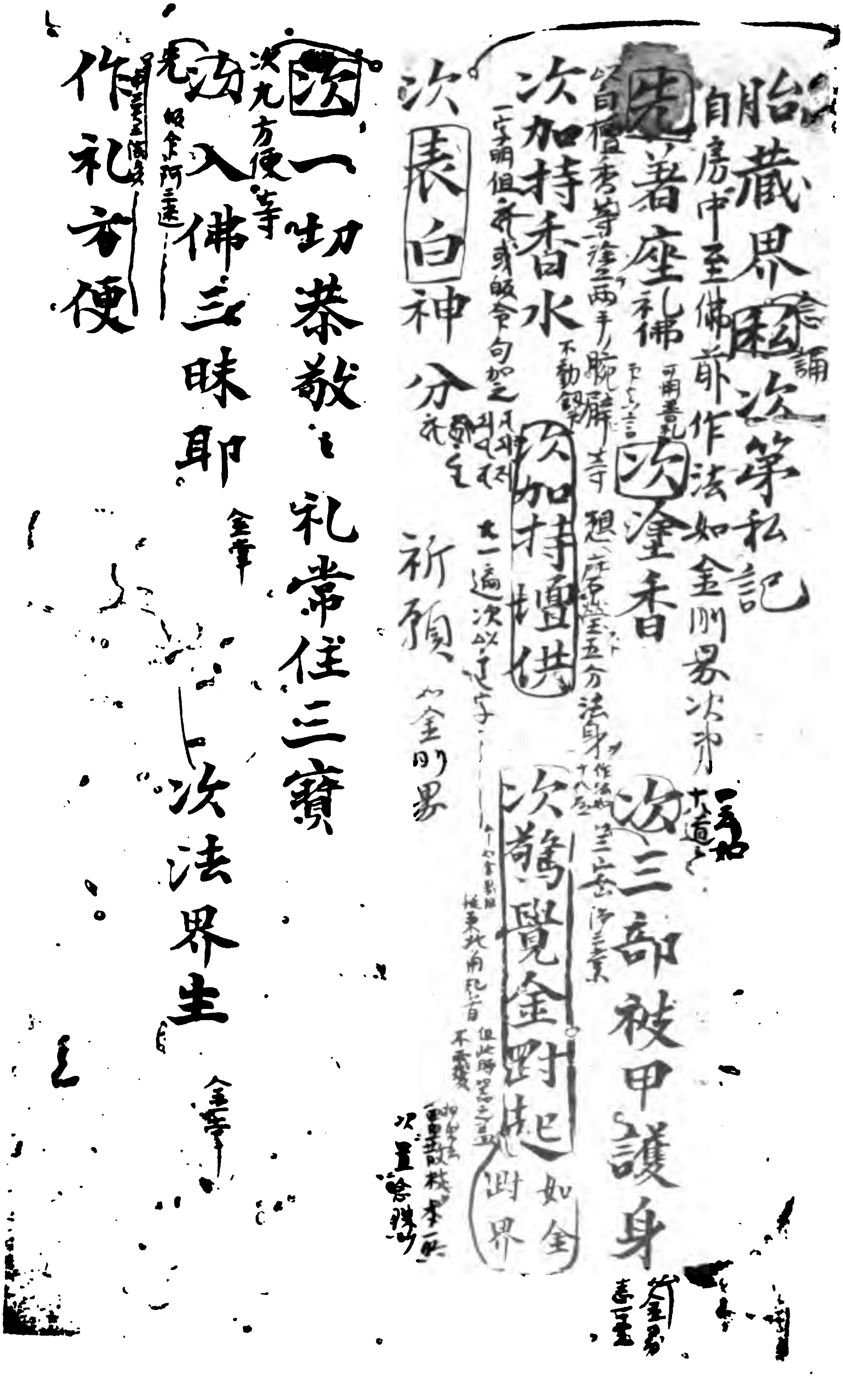
裏表紙に

康正二丙午歳春瑞殿寺晋旨

賜従先師　範圓

と墨記あり。

圖版第九十四號參照


胎藏界念誦次第私記
自房中至佛前作法如金剛界次第
先著座礼佛
次塗香
次三部被甲護身
次加持香水
次加持壇供
次驚覺金剛起
次表白神分 祈願
次一切恭敬礼常住三寶
次入佛三昧耶
次法界生
次九方便等
作礼方便

第九十四圖　古寫本　胎藏界念誦次第私記　卷頭

一少年の春　此發言　踏花同惜少年春
そのをりからをとれる年の心也　是ハ花踏
と云心なるへし
一中将の歌ハ　夏よりさきつゝしを歌の心
物のこともいひかるゝ門なりあり
一井手の事なり　されハ池や井手乃河そり
かはつなきまつ山吹庵もあり　源氏胡
蝶巻の歌をひく也
一侍從　同前　東融院
一源氏　まめのへとこ　堀川大臣のことハ光帝の

第九十三圖　古寫本狹衣下紐卷頭

(86) 狹衣下紐　古寫本　全二冊　金三十圓

表紙は薄綠の紙の上に金泥で竹と梅を描きましたのが上卷で、咲き誇つた山櫻を畫きましたのが下卷です。左肩に下紐 上(下) と書いた題簽を付けました落ついた美しさを持つ古寫本です。

奥書は

本云

此抄二冊者去年以昌俔所持之本令書寫之今玆又以法橋昌琢本校之

元和四年應鐘朔日　寬佐

とあります。即ち寬佐が元和中に昌俔の本を寫し、昌琢の本を以つて校合したものの傳寫本であります。寬佐については不明ですが昌俔は昌琢の弟であり、昌琢は下紐の著者紹巴の弟子昌叱の子であり、又古物語類の藏書も相當多かつたらしい人物ですから其の藏本で校合した此の元和の寫本は下紐の寫本として尊重すべきものなる事は論のない所でせう。傳寫した時代は略々寬永から正保頃でせうか。半葉十行に美しく書き、まゝ朱の合點を付して居ります。

圖版第九十三號參照

(88) 伊勢物語古註　古寫本　全一冊　金十五圓

縦八寸一分、横六寸、胡蝶裝。

濃緑地に、紅葉、笹の模様ある絹地の表紙。題簽は焼けたる銀地に「伊勢物語」とのみあり。奥書なけれど徳川中期頃の書寫本なるべきか。厚手の紙の裏表に書す。書風古体を存するに似たり。

卷頭に「伊勢物語」の作者などにつきての勘物を附し、本文に入つては原文を一行ほど書しては其の分の評を二行に割註す、百二十五段の全部を備へたるが如し。註釋の作者不明なり。

本文は流布本の系統らしけれど、詳細割註を附せる點珍らし。

圖版第九十二號參照



第九十二圖　古寫本伊勢物語古註内容の一部

第九十一圖

マルコポーロ記念會紀要 タイトルページ

CENTENAIRE

DE

Marco Polo

CONFÉRENCE

Faite à la *Société d'Études Italiennes*

LE [illegible] DÉCEMBRE 1895

A LA SORBONNE

PAR

HENRI CORDIER

[illegible]

[illegible] SOCIÉTÉ DE GÉOGRAPHIE

[illegible] STORIA PATRIA

PARIS

ERNEST LEROUX, ÉDITEUR

28, RUE BONAPARTE

18[illegible]

(78) マルコポロ記念祭紀要　コルディエ著　全一冊　金拾五圓

一八九五年十二月十八日の水曜日に、ソルボンヌの伊太利研究會で行はれた、此の偉大なヴエネチア人、日本の最初の報告者ポロの記念祭の講演が、アンリコルディエ教授、彼の「支那書誌」「日本書誌」をはじめ無數の秀れた東洋關係の著作の作家なるコルディエによつてなされたと云ふ事は、極めて人を得たるものと申せませう。本書の第一部三十八頁は此の際の講演速記であり。其の中には幾多の古寫本古版本からとつた七八枚の美しい挿繪がありますが、第二部は「マルコポーロ文獻（ビブリオグラヒー）」でポロに關する各國にて出版された諸異版が漏れなく記載されて居りますが、此はコルディエの獨壇場で他の何人の追從をも許さぬ所でせう。最後に「マルコポロ文獻年代別一覽表」と云ふ便利な一表がついて居ります。

パリーのルルー書店より一八九六年刊行、菊版百十二頁。

圖版第九十一號參照

(86)

諸蕃志（チャウシユークヮ）

ヒルト
ロックヒル 共譯　全一冊　金六十圓

宋の趙汝适の著「諸蕃誌」は當時の最も秀れたる人種學的著作であり又、東西通商史であると云はれて居ります。それは十二、三世紀の、アラビヤ人とペルシヤ人の掌中に通商權が握られて居つた時代の東西の交通史に幾多の新しき光明を投げる最大の史料の一で其の學術的價値はよくマルコポロや初期アラビヤ人の紀行などと匹敵するものと普く認められて居ります。

此の重要な古文獻の英譯が、最も優れた支那學者の一人なるフリードリッヒ、ヒルトとWWロックヒルの兩氏によつて完成された事は正に其の人を得たものとして慶賀さるべきでせう。ヒルト氏等は此の稀覯書を單に飜譯したばかりでなく詳細な註を付けました。單に附註したのみでなく卷頭に四十頁に渉る長編の解題的序説をつけました。之れは卷末の完備した總索引、異名索引、解説的地圖と共に本書の學術的價値を此の上なく重からしめるものでせう

四六倍の大本約三百頁ペテルブルグ學士院より一九一一年刊行。

圖版第九十號參照

CHAU JU-KUA:

His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-fan-chï,

Translated from the Chinese and Annotated

by

FRIEDRICH HIRTH

and

W. W. ROCKHILL.

ST. PETERSBURG.

Printing Office of the Imperial Academy of Sciences;

Vass. Ostr., 9th line, 12.

1911.

第九十圖 ヒルト・ロックヒル諸蕃誌タイトルページ

第八十九圖 シュプレンゲル 東方驛傳史考 タイトルページ

Die

Post- und Reiserouten des Orients.

Mit 16 Karten nach einheimischen Quellen

von

A. Sprenger.

Leipzig 1864

in Commission bei F. A. Brockhaus

(85) 東方驛傳史考　シュプランゲル著　全一冊　金四十五圓

東方と申しましても、陸路としてオクサス河を渡つた東方大月氏國方面及び古代ペルシヤ、アラビヤ及び小亞細亞の交通路であり、海路としてはチグリスユーフラテス河から印度及び支那に至る交通路と其の驛傳の研究でありまして、ペルシヤ、アラビヤ語の原典を自由に豐富に渉獵、驅使、引用した劃紀的な名著であります。彼のリヒトホーフエンの名著「絹の道(サイデンストラーセン)」と並稱される古代東西交通史研究の最高權威であります。

此の書の卷頭に著者シユプランゲルのシエフアーへの獻辭があます。曰く「秀拔なる東洋學者にして且東洋語古寫本蒐集家なるChシエフアーへ尊敬と親愛の意を表するために此の書を獻ぐ」と。そして此處に掲ぐる所の書は奇しくも此のChシエフアーの舊藏書で見返しに同氏の藏書票が貼つてあります。或ひは著者から贈つた本であるかも知れません。どの樣な經路を經て此の書が日本に渡つて來たのか、限りない興味を湧かせます。

ライプチッヒ、一八六四年刊の菊版背皮、本文百五十九頁、銅版附圖十六葉。

圖版第八十九號參照

第八十九圖　シュプレンゲル　東方驛傳史考　タイトルページ

Die

Post- und Reiserouten des Orients.

Mit 16 Karten nach einheimischen Quellen

von

A. Sprenger.

Leipzig 1864

in Commission bei F. A. Brockhaus.

(85) 東方驛傳史考　シユプランゲル著　全一冊　金四十五圓

東方と申しましても、陸路としてオクサス河を渡つた東方大月氏國方面及び古代ペルシヤ、アラビヤ及び小亞細亞の交通路であり、海路としてはチグリスユーフラテス河から印度及び支那に至る交通路と其の驛傳の研究でありまして、ペルシヤ、アラビヤ語の原典を自由に豐富に渉獵、驅使、引用した劃紀的な名著であります。彼のリヒトホーフエンの名著「絹の道(サイデンストラーセン)」と並稱される古代東西交通史研究の最高權威であります。

此の書の卷頭に著者シユプランゲルのシエファーへの獻辭があます。曰く「秀拔なる東洋學者にして且東洋語古寫本蒐集家なるChシエファーへ尊敬と親愛の意を表するために此の書を獻ぐ」と。そして此處に掲ぐる所の書は奇しくも此のChシエファーの舊藏書で見返しに同氏の藏書票が貼つてあります。或ひは著者から贈つた本であるかも知れません。どの樣な經路を經て此の書が日本に渡つて來たのか、限りない興味を湧かせます。

ライプチッヒ、一八六四年刊の菊版背皮、本文百五十九頁、銅版附圖十六葉。

圖版第八十九號參照

(84)

羅馬東亞通商史

レイノー著　一八六三年刊　全一冊　金三十圓

東洋語學校のアラビヤ語教授でありパリー國民圖書館の東洋鈔本保存官であるMレイノーの、此のユニークにして前人未開の學問的分野の開拓は彼の如き惠まれたる地位と豐富なる學識とを併せ有する學者にしてはじめてなし遂げ得る學問的業績に屬しよう。

此の書は最初に約三十頁の序說をのせ、次に、羅馬のシーザーの死後の內亂、アントニーとクレオパトラ對オーガスタスの抗爭、後者の制覇其の統治、ホレース・ヴァジル等に表はれた東洋に關する記載、當時の地理的知識を、約百三十頁にわたつて述べ、第二章には當時に於ける印度との貿易、第一世紀前後に於ける支那の政治的社會的狀態、プトレミー地理學の體系等の項目を約六十頁に記し、第三章には其の後第五世紀までの羅馬の盛時に於ける東方諸國殊にヒルカニヤ、印度、バクトリヤ及び支那との關係を記載論斷した約百頁を揭げ、其の後に附錄として各章の註を集錄し、最後に本文の記事に基いた銅版の地圖四葉を付けて居ります。即ち記事の範圍は第一世紀より第五世紀まで五百年間に限られて居ります。單に羅亞交通史と云ふ興味多き題目の研究にとつてのみならず、西人の眼に映じたる當時の支那の社會狀態、又當時の學者達の世界觀を知る上に於ても比類少き文獻であります。

圖版第八十八號參照

第八十八圖　レイノー　羅馬東亞通商史　タイトルページ

RELATIONS POLITIQUES

ET COMMERCIALES

DE L'EMPIRE ROMAIN

AVEC L'ASIE ORIENTALE

(L'HYRCANIE, L'INDE, LA BACTRIANE ET LA CHINE)

PENDANT LES CINQ PREMIERS SIÈCLES DE L'ÈRE CHRÉTIENNE,

D'APRÈS LES TÉMOIGNAGES LATINS, GRECS, ARABES, PERSANS, INDIENS ET CHINOIS,

AVEC QUATRE CARTES,

PAR M. REINAUD,

MEMBRE DE L'INSTITUT,
PROFESSEUR D'ARABE À L'ÉCOLE SPÉCIALE DES LANGUES ORIENTALES,
CONSERVATEUR
DES MANUSCRITS ORIENTAUX DE LA BIBLIOTHÈQUE IMPÉRIALE, ETC. ETC.

PARIS.

IMPRIMERIE IMPÉRIALE.

M DCCC LXIII.

第八十七圖　ザイド　印度及び支那事情　タイトルページ

RELATION
DES VOYAGES

FAITS

PAR LES ARABES ET LES PERSANS

DANS L'INDE ET À LA CHINE

DANS LE IX^{e} SIÈCLE DE L'ÈRE CHRÉTIENNE

TEXTE ARABE IMPRIMÉ EN 1811

PAR LES SOINS DE FEU LANGLÈS

PUBLIÉ

AVEC DES CORRECTIONS ET ADDITIONS
ET ACCOMPAGNÉ D'UNE TRADUCTION FRANÇAISE
ET D'ÉCLAIRCISSEMENTS

PAR M. REINAUD

MEMBRE DE L'INSTITUT

TOME I

INTRODUCTION ET TRADUCTION

PARIS

IMPRIMÉ PAR AUTORISATION DU ROI

À L'IMPRIMERIE ROYALE

1845

(83) アブーザイド　印度及び支那事情　レイノー譯　全二冊　金四十圓

唐代支那の燦然たる文化と、當時の東西の交通狀態を仔細に眼の當り見聞したアラビヤ人アブーサイドの「印度及び支那事情」は其の支那關係の部分に於て夙に著名であり、支那學者間に於ても最も多くの話題に上るアラビヤ語史料である。其の歐洲語譯は早く一七一八年にルノードーによつて公刊せられ、一時學界を騷がせ、英譯其の他も出版せられたが其の飜譯には不滿の點多く學界の恨事とされて居た。此處に揭ぐるレイノー氏の譯は此の不滿を滿すべく、新にパリーの國民圖書館にて發見せられたる原本の古寫本を忠實に譯出した新版であつて、縱五寸、橫三寸三分の小本二冊、佛譯文とアラビヤ語の原文と註とを併せ載錄して之れに百八十頁にも及ぶ長編の解說を附せる雄篇である。東洋史、殊に支那史及び東西交通史の研究者の必らず參稽を怠るべからざる好著である。一八四五年パリの王立印刷局から出版され夙に絕版となり稀覯書の一に數へられて居る。

圖版第八十七號參照

(82) ヴェダ索引　ブールムスフィールド著　一九〇六年刊　全一冊　金四十圓

縦一尺七分、横九寸の極大版一千百頁の大册です。ランマン教授編の「東方叢書」中最も大部であり且内容のすぐれた著作です。著者モーリス、ブームスフィールドはジョンホプキンス大學の梵語及び比較言語學の教授として、合衆國に於ける輝ける東洋學者の一人です。

内容は既刊の總てのヴェダ文獻の各節、各行のアルファベット順の索引で、同時に又その祈禱式の索引でもあります。

先づ最初に本書の總括的なプランや、使用法及び取扱ひ範圍、引用書目解說等があつて本文に入ります。一頁二段組で各段約三十の語彙を擁しますから全部で六萬以上もあるわけです。最後に附錄がついて居ります。

圖版第八十六號參照

第八十六圖 ヴエダ索引 タイトルページ

A VEDIC CONCORDANCE

BEING AN ALPHABETIC INDEX TO EVERY LINE OF EVERY STANZA OF THE PUBLISHED VEDIC LITERATURE AND TO THE LITURGICAL FORMULAS THEREOF, THAT IS AN INDEX TO THE VEDIC MANTRAS, TOGETHER WITH AN ACCOUNT OF THEIR VARIATIONS IN THE DIFFERENT VEDIC BOOKS

BY

MAURICE BLOOMFIELD

PROFESSOR OF SANSKRIT AND COMPARATIVE PHILOLOGY
IN THE JOHNS HOPKINS UNIVERSITY, BALTIMORE

CAMBRIDGE, MASSACHUSETTS
Published by Harvard University
1906

第八十五圖　沙翁語彙　タイトルページ

AN

INDEX

TO THE REMARKABLE

PASSAGES AND WORDS

MADE USE OF BY

SHAKSPEARE;

CALCULATED TO POINT OUT THE DIFFERENT MEANINGS TO WHICH THE WORDS ARE APPLIED.

BY THE

REV. SAMUEL AYSCOUGH, F.S.A.

AND ASSISTANT LIBRARIAN OF THE BRITISH MUSEUM.

LONDON:

PRINTED FOR JOHN STOCKDALE, OPPOSITE BURLINGTON-HOUSE, PICCADILLY. 1790.

[Entered at Stationers-Hall.]

(81)

沙翁語彙

エイスコー著
一七九〇年刊

全一冊　金二十圓

菊版一七五二頁の大冊にルビ大の小さな活字でギッシリ組んであります。記載の方法はシエクスピアの用ひた重要な章句單語をアルファベット順に掲げて、其れを含む戯曲の名、何幕目か、幾場目か、何頁の何欄の何行目にあるかを詳細に誌したもので、十八世紀末の著述としては非常に詳細明確なものとして沙翁研究史上、重要な地位を占むるものでありませう。著者が大英博物館の司書であつたからこそ、當時にかゝる大著述を完成する事が出來たのだらうと思はれます。

多少損じては居りますが古い總革装の雅致多い本です。

圖版第八十五號參照

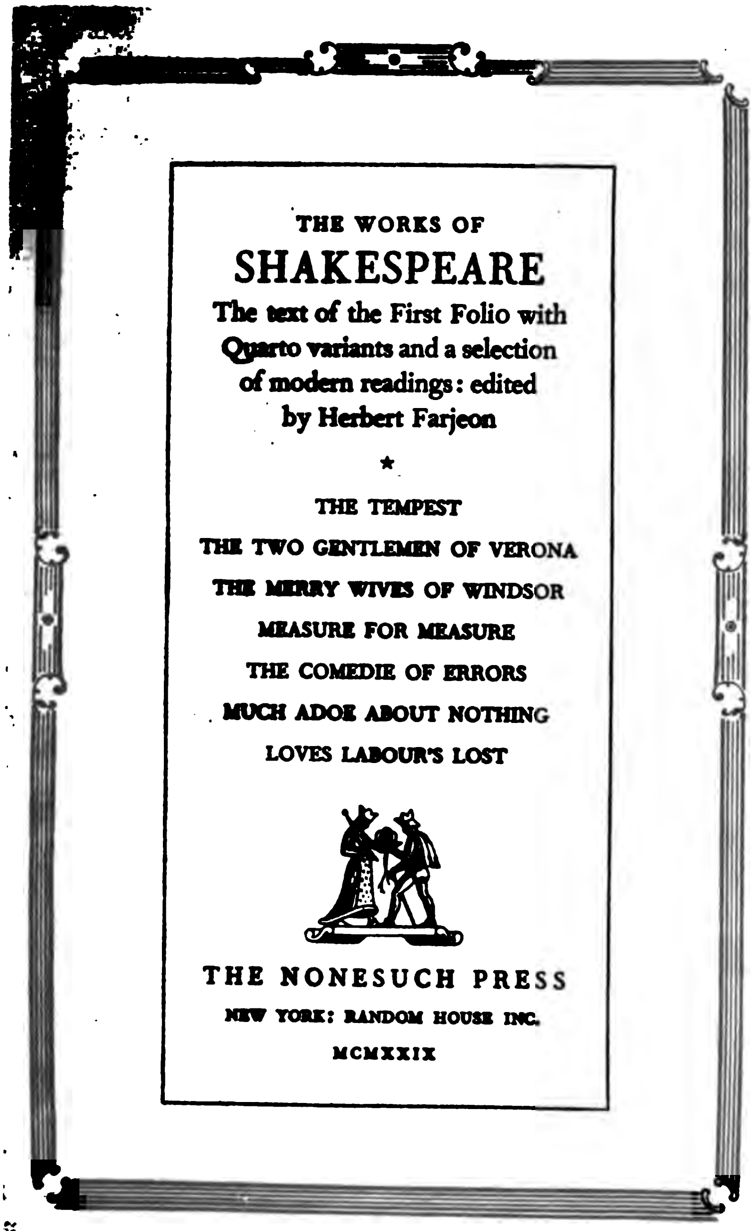
(80) ナンサッチプレス　シエクスピア全集　三冊　金六十圓

印刷の美しさとか、豪華版とか、限定版とかを云々する人々はどなたも御承知のナンサッチプレス、海の向ふの人達からはケルムスコット版などと一緒に取扱はれる好印刷です。しかも一六二三年のファーストフォリオを底本としたシエクスピア全集です。デザインをしたのはフランシス、マイネル、印刷者はケムブリッヂのウォルター、レウキス、製本者はA、W、ベーンの豪華版です。千五十部を英國で、五百五十部を北米で限定公刊しました。本書は其の第七百九號です。

收む所はテムペスト、ヴエロナの二紳士、ウィンソアの陽氣な女房達、以尺報尺、間違つゞき戀の骨折損等の七篇が第一卷で、眞夏の夜の夢、ヴエニスの商人、御氣に召すまゝ、ぢや〳〵馬馴し、十二夜、冬の夜話の六篇が第二卷で、ジョン王、リチャード二世、ヘンリー四世、ヘンリー五世、ヘンリー六世の五篇が第三卷です。

全部赤革の贅澤な裝釘で天金、他の二方は耳附きです。紙、印刷共申し分ありません。

圖版第八十四號參照



THE WORKS OF

SHAKESPEARE

The text of the First Folio with Quarto variants and a selection of modern readings: edited by Herbert Farjeon

★

THE TEMPEST

THE TWO GENTLEMEN OF VERONA

THE MERRY WIVES OF WINDSOR

MEASURE FOR MEASURE

THE COMEDIE OF ERRORS

MUCH ADOE ABOUT NOTHING

LOVES LABOUR'S LOST

THE NONESUCH PRESS

NEW YORK: RANDOM HOUSE INC.

MCMXXIX

第八十四圖　ナンサッチプレス　シエクスピア全集　タイトルページ

第八十三圖　モリス無何有郷便り　タイトルページ

NEWS FROM NOWHERE

OR

AN EPOCH OF REST,

BEING SOME CHAPTERS FROM

A UTOPIAN ROMANCE

BY

WILLIAM MORRIS

AUTHOR OF THE EARTHLY PARADISE.

LONDON:
REEVES & TURNER.
1891.

(79) ウイリアム モーリス **無何有郷便り**（ニユースフロムノーホイヤー） 初版特製 著者署名入 全一冊 金八十圓

中世主義者（メディーヴアリスト）として、藝術家として、ケルムスコット版の創始者として又空想的社會主義者（ユトピアンソシアリスト）として著名なウイリアムモーリスの主著 News from Nowhere の初版です。一八九一年の刊行で大形本と並製本と二種出たらしいですが本書は此の大形本で僅か二百五十部だけ限定印行したものの中の一部です。しかも著者モーリスがマグナッソンと云ふ人に與へた署名入りで、日附は一八九一年三月二十八日になつて居り表紙も原裝をそのまゝに存して居ります。ですから本書はモーリスの此の主著のあらゆるよい條件を全部具備して居ると云へるものです。

大型本と申しましても縱七寸、横四寸五分の普通の四六版と菊版との間位の大さの本であります。並製本はポケット形でどもあつたのでせうか、用紙は耳附の厚い上等紙で印刷活字共に充分に意を用ひた鮮麗優雅なものです。さすが書物裝幀家として古今を通じての一流大家の著作にふさはしいものです。此の種の本を取扱ふ事は本統に愉快です。

ウイリアムモーリスに興味を持つて居られる人達及び一般の愛書家の座右に捧げる最も好ましき書の一です。

圖版第八十三號參照

佛譯 三國通覽圖說　全一冊　金十五圓

林子平原著、有名なる東洋語學者クラプロート譯、パリー一八三二年刊。The Oriental Translation Fund にて刊行。菊版。

譯者クラプロートは一八〇五年露國學士院より派出せられイルクーツクに來ましたが、此處で此の著作を入手にて興味を覺え飜譯に着手しました。どう云ふ經路で此の林子平の主著の一が彼の手にはいりましたかは不明ですが、此の飜譯の難業を完成するについては當時イルクーツクの航海學校の日本語講座を担當して居た日本人の船頭新藏(此の人は有名な伊勢の漂流民幸太夫の連中の一人で耶蘇教に改宗したゝめ幸太夫等と共に日本に歸るを得ず、一生をシベリヤで送つた數奇の運命の人)の援助を受ける事が多かつた相です。本書序文の第二頁で新藏について次の如く記して居ます「彼は普通の教育があるに過ぎぬが日本語學につき余を益する事が多かつた、但し漢字の知識が甚だ乏しく往々文字の誤謬があつた」と。內容は圖說の說の部即ち本文のみで、地圖の部は欠けてをります。しかし約百年前に北シベリヤの地で一日本人との協力で六無齋の著書が飜譯されたと云ふ事自身が少なからぬ興味をそゝります。

圖版第八十二號參照

R. Okada

三國通覧圖說

SAN KOKF TSOU RAN TO SETS,

OU

APERÇU GÉNÉRAL

DES

TROIS ROYAUMES.

TRADUIT DE L'ORIGINAL JAPONAIS-CHINOIS,

PAR

Mʳ J. KLAPROTH.

OUVRAGE ACCOMPAGNÉ DE CINQ CARTES.

PARIS:
PRINTED FOR THE ORIENTAL TRANSLATION FUND
OF GREAT BRITAIN AND IRELAND.
SOLD BY
JOHN MURRAY, Albemarle Street; and PARBURY, ALLEN, & Co.
Leadenhall Street.

M.DCCC.XXXII.

第八十二圖　クラプロト　三國通覧圖說　タイトルページ

第八十二圖　マルナ日本公教會の復活　タイトルページ

LA "RELIGION DE JÉSUS"

(IASO JA-KYŌ)

RESSUSCITÉE AU JAPON

Dans la seconde moitié du XIX^e siècle

PAR

FRANCISQUE MARNAS

MISSIONNAIRE APOSTOLIQUE

VICAIRE GÉNÉRAL HONORAIRE DU DIOCÈSE D'OSAKA

« Est, est, non, non. »
S. MATH.. C. V, V. 37.

TOME PREMIER

DELHOMME ET BRIGUET, ÉDITEURS

PARIS — 83, Rue de Rennes, 83

LYON — 3, Avenue de l'Archevêché, 3

(7) 公教會の復活 (耶蘇―邪教)　フランシスク マルナ著　全二冊　金二十五圓

二百年間の迫害と潛伏との後に、幕末の革命と共に再び燃え上つて、解放のための戰を鬪つた切支丹の動きを書いた名著です。著者は大阪司教管區の助任司祭を勤めて長く日本に在つた篤學熱信の宣教師です。上卷六二八頁、下卷五七二頁、の大冊でございます。

先づ筆を「初期布教の回顧」として葡人の來航サビエルの傳道に起して、信長、秀吉、家康時代より寛永の鎖國令までの布教狀勢をのべ、第二章には「一六四〇――一八四四年の布教師日本潜入の企圖」として、フイリッピンのドミニカン、シドチ師等の來訪を記し、以上約百頁を序說として以下本論に入ります。

琉球の宣教、香港より日本への布教、開港問題と宣教切支丹の露見、最後の迫害、王政復古と明治初年の迫害、浦上切支丹の流刑、迫害の終末と共の明日等の興味ある諸題目が見られます。

此處に藏せました本はチヤンバレーンの手澤本で、彼が一八九七年に函館の司教ベルリオツツから贈られたものなる由自筆で誌されてあります。珍となすべきでせう。

圖版第八十一號參照

(16) 日本加特力教史

デルプラス　全二冊　金十八圓

デルプラスの此の著は有用な名著として好評の書の樣です。第一卷は「フランソアザビエーと其の初期の後繼者、一五四〇――九三年」と云ふ小標題で一九〇九年に刊行されました、總頁數が二百七十五、附錄として長崎及び有馬のセミナリーの人名簿、宣教者名簿等の重要資料を附し又卷頭に日本布教地圖を掲げて居ります。

第二卷は「殉教者の時代、一五九三――一六六〇年」として一九一〇年に刊行されました。總頁數二百六十一、附錄として一六一三年現在の耶蘇會の管區表及び一六二七年――六〇年の日本殉教者名簿を載せて居ります。研究者にとつて便宜多い好著と云へませう。大して古い刊行でもありませんが既に絕版で、しかも日本には割合少ししか來て居らぬ樣です。

圖版第八十號參照

第八十圖　デルプラス　日本加特力教史　タイトルページ

LE CATHOLICISME AU JAPON.

L'Ère des Martyrs

1593-1660

PAR

L. DELPLACE, S. J.

TOME SECOND



BRUXELLES
Librairie Albert Dewit,
53, rue Royale,

1910

第七十九圖 ブラック 維新の日本 タイトルページ

YOUNG JAPAN.

YOKOHAMA AND YEDO.

A NARRATIVE

OF

THE SETTLEMENT AND THE CITY

FROM THE

SIGNING OF THE TREATIES IN 1858,

TO THE

CLOSE OF THE YEAR 1879.

WITH

A GLANCE AT THE PROGRESS OF JAPAN

DURING A PERIOD OF TWENTY-ONE YEARS.

BY

JOHN R. BLACK,

Formerly Editor of the "Japan Herald," and of the "Japan Gazette"; Editor of the "Far-East," Illustrated Monthly Magazine. Also the Proprietor and Editor of the "Nisshin Shinjishi"—the first Newspaper (worthy of the name) ever published in the native language in Japan.

IN TWO VOLUMES.

VOL. I.

NEW YORK:
BAKER, PRATT & COMPANY.
LONDON: TRUBNER & CO. | YOKOHAMA: KELLY & CO.
1883.

(75) 維新の日本（ヤングジャパン）

ブラック著　全二冊　金二十五圓

日本語で書かれた最初の新聞らしい新聞「日新眞事誌」の所有者兼編輯者であり。又ジャパン、ガゼット、ジャパン、ヘラルド其の他の新聞の編輯者として明治文化の發展に貢献の頗る多かつたジョンR、ブラックの書いた江戸及び横濱を中心として見た明治維新史、維新裏面史です。井伊大老の決斷で最初の日佛條約が結ばれ横濱の開港が決した安政五年（一八五八年）から、西南戰爭が片附き、大久保利通が暗殺されて伊藤、井上、大隈、板垣等の手で新日本が建設の大道をすゝみはじめた明治十二年（一八七九）まで廿一年間、即ち維新大革命の最も眼まぐらはしい變轉期を目の當り見、自らが其の渦中に相當の役割をつとめた一外國人、日本にとつて可成り多くの豫備知識と充分な興味と、且鋭く奇警な觀察力とを兼備した一外國人の僞りのない生き〲した回顧録です。示唆に富んだ史料であると共に面白い讀み物です。

第二巻が先づ一八八一年にトリユブナー商會の手で刊行され、第一巻は二年遅れて一八八三年にベイカー、ブラット會社から出版されました。菊版約一千頁の本です。

圖版第七十九號參照

(74)

十七世記に於ける

和蘭東印度會社と日本との關係

ナホド著　一八九七年刊　全一册　金三十五圓

オスカー、ナホドの有名な著書です。一八九七年ライプチヒのロベルト、フリーゼから刊行された菊版本約六百頁此の方面で最も重要な作品の一ですが絶版になつて今日は可成りの稀覯書の一です。

第一章は「一六〇〇年以前の日本の歴史的發展の概觀」として上古から慶長までの日本文化史を六七十頁にわたつて述べ、第二章に和蘭東印度會社の成立と組織の充實、第三章に和蘭人の日本發見、第四章に日蘭關係創始時代の日本の狀態第五章平戶商館時代の會社と日本との關係第六章長崎出島商館時代の日本との關係、等の標題の下にそれ〳〵詳細明確に複雜にして興味多き史的諸問題を處理して居る。就中第五章、第六章の二章は基礎史料を縱横に讀破驅使して海外交通史上最も興味多き百年間の秘をあばき、隱をあらはしたる生彩多き數百頁である。史家の一讀を怠るべからざる好著でせう。

卷頭に引用書目を擧げ、卷末に六十三項にも及ぶ大附錄を附して居ます。各項共重要なる史料です。

圖版第七十八號參照

第七十八圖　セーリス日本航海記　タイトルページ

THE VOYAGE

OF

CAPTAIN JOHN SARIS

TO

JAPAN, 1613.

Edited from Contemporary Records

BY

SIR ERNEST M. SATOW, K.C.M.G.,

Her Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary to China, and late Her Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary to Japan.

LONDON:

PRINTED FOR THE HAKLUYT SOCIETY.

M.DCCCC.

第七十七圖　ナホド　十七世紀に於ける和蘭東印度會社と日本　タイトルページ

Die Beziehungen

der

Niederländischen Ostindischen Kompagnie

zu

Japan

im

siebzehnten Jahrhundert

von

Oskar Nachod.

„In so hochkultivirten Sperrländern, wie auch Japan, sind die Faktoreien mehr zur Ueberwachung, als zum Schutze der Fremden bestimmt." (Roscher, III. Handel und Gewerbfleiss. Paragraf 26. Anmerkung 13.)

Leipzig 1897.

Rob. Friese Sep.-Cto.

(73)

ジョン セーリス 日本航海記 アーネストサトー編 全一冊 金六十五圓

ジョンセリーリスは、慶長十八年(一六一三年)五月にクローブ號に乘つて日本平戸に來着し、九月には駿府で家康に謁見し、更に江戸で秀忠に接見して歸途家康の答書及び通商許可の朱印狀を得て平戸に歸り、後事をリチャードコックスを託して歸國した初期日英交通史上の大立物です。本書はこのセーリスが一六一二年でバンタンの港を發して翌年日本につき、その後日本を退去するまでの間の日誌を主とし、之れにコックスの書いたセーリス留守中の平戸の出來事の記述、セーリス航海記のパーチヤスの譯からの拔萃、クローブ號の歸英航海記、セーリスのバンタンに滯留中の貿易報告、希望峰で書いた書翰等を附加して居ます。原本は東印度事務局に保管してある古寫本で、之れをサンツペリー女史の英譯したもので、サーアネストサトーの七十餘頁にわたる長大の解說的序說を附して居ります。初期日歐關係史料としてフアンダメンルなものの一でございます。

ハツクライト協會から刊行されたのは一九〇〇年ですが、夙に絶版となり、今日では同會刊行の諸書中最も稀覯なものの一になつて居り、市價も最も貴いものの一です。それだけ内容的價値も多い爲でせう。菊版約三百頁。

圖版第七十七號參照

(72) 和魯通言比考　ゴシケーヴィッチ 橘耕齋 共著　全一冊　九十五圓

一八五七年ペテルブルグの刊行の和露辭典です。此の年は我が安政四年に當り、我が國では露和辭典をつくる所か英和や佛和や獨和さへを碌々出版されて居らず、毛筆で寫した粗末な對譯辭書の二三種が非常に珍重せられて用ひられて居た事は福澤諭吉翁の「福翁自傳」などで明かですが、此の頃既に露都で、かくの如き書の出版せられて居たのを見ると驚異に近い氣持になります。著者ゴシケーウィッチの如何なる人ですか明かにし得ませんが、何れ彼の地の極東語學校の教師か何かでせう。補助者の橘耕齋は日本で惡事を働いてロシヤに逃げ彼の地でヤマトフと稱して居た奇妙な人物です。

体裁は略菊版程の大さで脊皮です、原裝でせう。扉の次ぎには著者の序文十七頁がついて居りついで本文に入ります。イロハ順に日本の單語を片假名及び漢字（又は片假名のみ）で左側にあげ其の右側に相當する露語を記して居ます。全頁數四百二十三頁で一頁に約三十の語彙を載せて居ますから、千二三百の言葉を含んで居る勘定です。勿論日本人に使はせる事を目的としたものでなく日本語を學び又日本に來る露人の實用を目的としたものでせうからこれなら一通り充分間に合つた事でせう。附錄として重要なる常用漢字の三体を記し、文法に似た樣なものも最後に少しつけて居り仲々行き屆いたものです。

性質上多く印刷しなかつた故でせう。今日頗る稀覯となつて居ります。

バジエスの日本書史第六三二號所載。

圖版第七十六號參照

和魯通言比考

ЯПОНСКО-РУССКІЙ СЛОВАРЬ,

СОСТАВЛЕННЫЙ

И. Гошкевичемъ

при пособіи японца

Тачибана но Коосай.

橘耕斎

САНКТПЕТЕРБУРГЪ

1857.

第七十六圖 和魯通言比考 タイトルページ

第七十五圖　アストン日本文法改訂原本　タイトルページ

A

GRAMMAR

OF THE

JAPANESE WRITTEN LANGUAGE

WITH A

SHORT CHRESTOMATHY,

BY

W. G. ASTON, M. A.

INTERPRETER AND TRANSLATOR TO H.B.M.'S LEGATION, YEDO, JAPAN.

LONDON:

PRINTED FOR THE AUTHOR, AT THE OFFICE OF THE "PHOENIX,"
3, GEORGE YARD, LOMBARD STREET.

1872.

(71) アストン　日本文法　著者自筆訂正本　全一冊　金四十五圓

「日本紀」「土佐日記」等の最初の英譯者であり、又「日本文學史」「神道」等の著者であるウイリアム、ジョウジアストンの主著の一なる「日本文法」の初版に著者自身が全部手を入れて訂正を加へた一種の稿本とも見るべきものです。御承知の通り此の書の初版は一八七二年ロンドンロムバート街の「フエニツクス」編輯所から刊行されました。（コルディエーの日本書史第五九八欄に於横濱刊行とありますが誤りと思はれます。）そして再版は五年後一八七七年に横濱で刊行されて居ります。そして此の初版と再版と内容に甚だしい差違があつて、頁數にしても初版の百十五頁に對し再版二百十二頁（大きは共に約菊版大です）で殆んど倍近くになつて居ります。此の大訂正増補が此の著者自筆訂正本にソツクリそのまゝ現はれ居るのですから興味が多いではございませんか。

訂正加筆はペンでなされて居る所もありますが。多く鉛筆で書いてあります。毎頁筆の加つて居ない所はありませんが。甚だしい所になりますと「滅茶〱に」と云ふ形容詞があてはまる程縦横無盡に書き入れ補正して居ます。挿繪によつても其の一班はお見取り願へる事と思ひますが、とても之れは印刷屋へ廻すわけに行きませんから、印刷屋へやつたのは之れを基とした清書本で、此の本は永く著者の手許へ留めて置いたものでせう。見返しには［英國阿須須藏書］と云ふ有名な藏書印が捺してあります。裝釘は脊皮平クロースの元のまゝです。先哲の苦心の痕の偲ばれて自ら頭の下る様な氣のする貴重な本です。

圖版第七十五號參照

(70) パジエス 日佛辭典　一八六二年刊　全一冊　金八十五圓

有名なパジエスの日佛辭典、編者が此の書を刊行した頃は主として實用に充てたものでせう。が今日では一の歷史的な稀覯書として尊重されます。

辭書とに申しながらパジエスの新しく編纂したものではなく、慶長八年（一六〇三年）長崎の耶蘇會士の手で刊行された例の切支丹版の日葡辭書（之れはプチヂャン師の飜刻で御刷染です）の佛譯です。此の三百餘年前に出版された日葡辭書をパジエスは此の書の序文の中で「彼の立派な辭書」と稱讃して居りますから學問的に見ても有用なものだつたのに違ひありません。

內容は日本語を片假名とローマ字とでアルフアベツト順に竝べ、之れに相當する佛蘭西語を其の右に印刷したもので全紙數九三三頁、一頁を二段に組み約三十の語彙を包容して居りますから全部で三萬語近くの語數を擁して居る頗る立派な辭書です。パジエスの原著に對する讃辭を尤もと存じます。

初版は一八六二年に、再版は一八六八年に六十フランでパリーで刊行されました。此處にあるものは初版でございます。

圖版第七十四號參照

DICTIONNAIRE

JAPONAIS-FRANÇAIS

CONTENANT : 1° LA TRANSCRIPTION DES MOTS ET EXEMPLES JAPONAIS ; 2° LES CARACTÈRES JAPONAIS ;
3° L'INTERPRÉTATION

TRADUIT DU DICTIONNAIRE JAPONAIS-PORTUGAIS

COMPOSÉ PAR LES MISSIONNAIRES DE LA COMPAGNIE DE JÉSUS

ET IMPRIMÉ EN 1603, A NANGASAKI

(Le Japonais en caractères romains et le texte en Portugais).

ET REVU SUR LA TRADUCTION ESPAGNOLE DU MÊME OUVRAGE

RÉDIGÉE PAR UN PÈRE DOMINICAIN

ET IMPRIMÉE EN 1630, A MANILLE

(Le Japonais également en caractères romains.)

PUBLIÉ PAR LÉON PAGÈS

PREMIÈRE LIVRAISON (PP. 1 à 200)

Prix de la Livraison : 12 fr. 50

Il y aura 3 autres livraisons de 200 pages chacune, et une livraison complémentaire

---

PARIS

BENJAMIN DUPRAT

LIBRAIRE DE L'INSTITUT, DE LA BIBLIOTHÈQUE IMPÉRIALE ET DU SÉNAT

ET DES SOCIÉTÉS ASIATIQUES DE PARIS, LONDRES

MADRAS, CALCUTTA, CHANG-HAI ET NEW-HAVEN (ÉTATS-UNIS D'AMÉRIQUE)

Rue Fontanes (Cloître-Saint-Benoît), 7

25 MARS 1862

第七十四圖　パジエス日佛辭書タイトルページ



VITA; E VIAGGI
DEL
B. ODORICO
DA UDINE
DESCRITTI
DA DON BASILIO ASQUINI
BERNABITA,
E DEDICATI ALLI MM. RR. PP.
GUARDIANO, E RELIGIOSI TUTTI
Del Ven. Convento di San FRANCESCO
della stessa Città.

IN UDINE, MDCCXXXVII.
Nella Stamperia di Giambattista Murero.
CON LICENZA DE' SUPERIORI.

第七十三圖　オドリコ上人傳　タイトルページ

（69）オドリコ上人傳　一七三七年刊　全一冊　金十五圓

オドリコ上人はカソリックのフランシスカン派の高僧で蒙古（即ち元）の全盛時代に支那を中心として西藏、印度ジャバ、スマトラ、ペルシヤ等に布敎をし、不朽の名著「オドリク紀行、東方にタルタリー奇聞」をものした傑僧です。此の紀行は彼の「東方に黄金の島あり」として、はじめて日本を歐州に紹介したマルコポロの「東方見聞錄」の後を直ちに承けて更に詳密精確のものでポロの書に漏れた多くの東洋の事物を歐州人に傳へました、例へば支那の鵜飼の事、手指の爪を長くし纏足をする風俗などは彼によつてはじめて知らせられたものと云ふ。彼の後に出た有名なマンデヴィルの「東洋見聞錄」は大部分此の著の燒き直しであるとされて居る。

「上人傳」は此の冒險僧の生涯を西人ドン、バシリオ、アクイニ、ベルナビタの記述したもの、一七三七年ウディーネにて刊行、縱五寸六分、横三寸六分。紙數二六〇頁の古雅な總革裝の本である。オドリコ上人傳としては最も古きものの一に屬しよう。

圖版第七十三號參照

日本切支丹殉教報告　一六〇七年ローマ刊　全一冊　金百五十圓

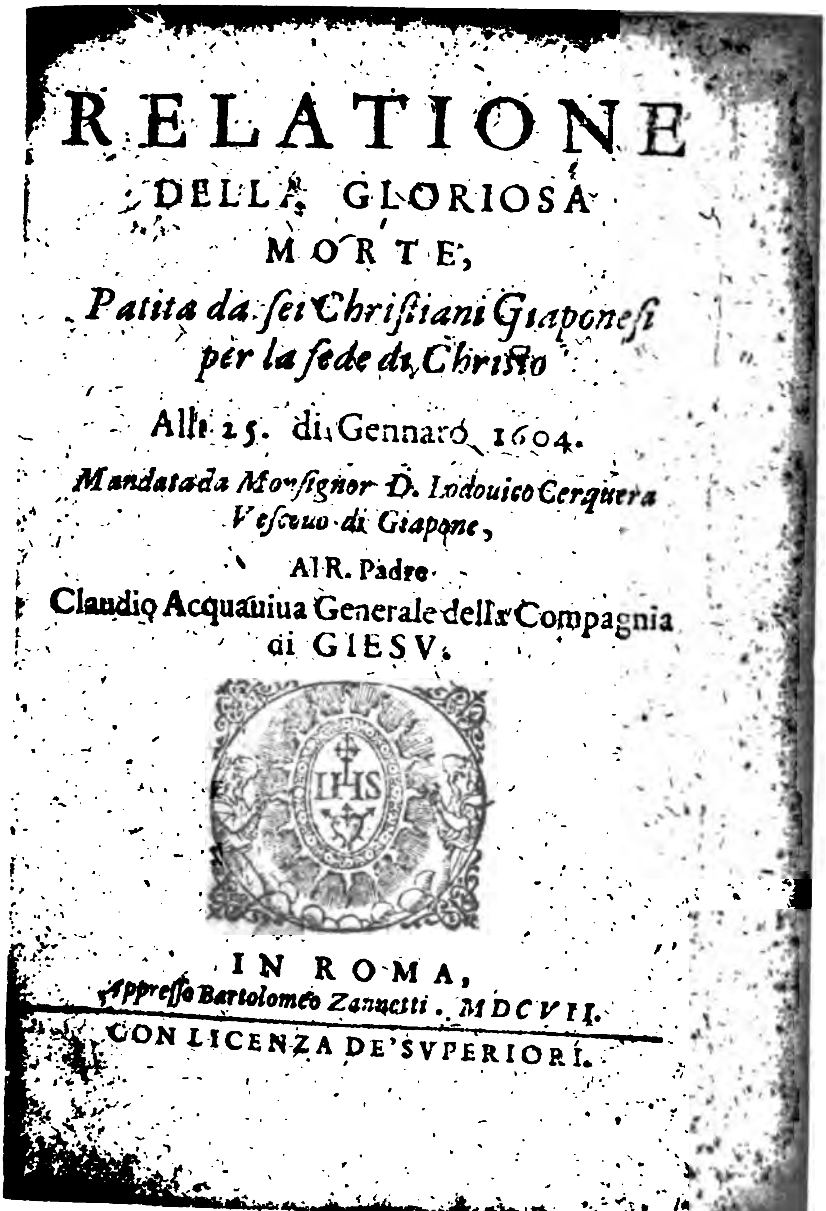
縦五寸五分、横三寸九分、當時の切支丹書翰集殉教報告等の大部分がそうである様に小形の本です。表紙は白の牛皮で金字を押し、極めて立派なものです。頁數は扉共七十一頁あります。

發信者はルトヴィコセルケーラです。師は一五五二年ポルトガルに生れ九八年に日本に渡來し、一六一四年六十二才で長崎で沒するまで日本司教の重職にあつて全日本の宣教師達の中軸だつた重要人物です。此の報告發信の日付は一六〇四年（慶長四年、關ヶ原戰後四年目）一月二十五日で、發した場所は長崎になつて居ります。此の長文の手紙が此の書の六十五頁を占め、殘る六頁は其の附錄であります。此の書翰發信の前年即ち一六〇三年はその前年から關ヶ原役後新に肥後一國を領した加藤清正が勢ひに乘じて「南無妙法蓮華經」の旗を振りかざし切支丹大名なる小西行長舊領の肥後半國に切支丹退治の大鉈を振ひ、迫害の旺んに行はれた時ですから、此の報告の中でも此の事に多く觸れて居る樣です。又此の頃には、フランシスカン派やアゴスチノ派の宣教師も多く入り込んだ時ですから、耶蘇會の司教としてセルケーラは對他派の問題をも報告して居る事でせう。兎に角面白い一報告書です。

「コルディエの「日本書史」第二五三欄、パジエス日本書史第九十四番所藏。前者によれば、パリーの國立圖書館に同本一本を藏すと。

尚本書の見返しにチャンバレンの自筆にてサトー卿より一八八八年に賜られたる由記して居ります。此の年はサトー卿の久し振りに本國に歸り不朽の名著「日本耶蘇會刊行書誌」を執筆した年に當るのも興を添えます。

圖版第七十一號參照



RELATIONE
DELLA GLORIOSA
MORTE,
Patita da sei Christiani Giaponesi
per la fede di Christo
Alli 25. di Gennaro 1604.
Mandata da Monsignor D. Lodouico Cerqueira
Vescouo di Giapone,
Al R. Padre
Claudio Acquauiua Generale della Compagnia
di GIESV.

IN ROMA,
Appresso Bartolomeo Zannetti. MDCVII.
CON LICENZA DE' SVPERIORI.

第七十二圖 セルケーラ切支丹殉教報告 タイトルページ

字書

倭名類聚鈔 廿巻五冊 狩谷本 大字本

仝 活版 廿巻十冊

仝 写本 天文本ト云十巻三冊 跋ニ天文何年ト記セリ 読書ノ伴信友翁校正セラレシヲ得テ或人ニ金六円ニ売渡セリ

仝 大字本 廿巻五冊

狩谷棭斎翁自筆ニテ校正セシ本ノ黒川氏蔵セリ 価金十五円

第七十一圖 珍書目録（内容の一部）

(67) 待賈堂珍書目録　寫本　全三冊　金三十圓

日本の古書肆の歴史を探る人は、達摩屋五一の名を記憶される事でせう。彼は「文事と書賈を兼ぬる事幽顯一体分身の俠傑」と稱せられた人で主として珍書を賣買したので有名です。「待賈堂珍書目録」は五一の子活東子の編で主として其の取り扱つた古珍書の要領と價格とを記した、色々な意味で興味豐かな大形寫本であります。全二冊を古寫本と繪卷と古版とに三大別し、各々を更に諸項に細別して誌して居ります。例へば古寫本の部國史の項を見て行きますと次の樣にあります。

續日本紀　金澤文庫本、寫本四十卷、二十冊

余前年仝商人ヨリ得テ本所辻氏ニ金七圓ニ賣レリ、本文無点ニテ界紙ニ謄寫セリ格別異同ナキヨシ。

之れが今尾州侯にある貴重書ではないでせうか。又物語の項に次の通りあります。

伊勢物語古意　大形　眞淵自筆本九冊

田安侯ニテ書物拂出シノ際金二兩ニテ買落加藤氏ヘ金拾圓ニテ賣渡セリ。

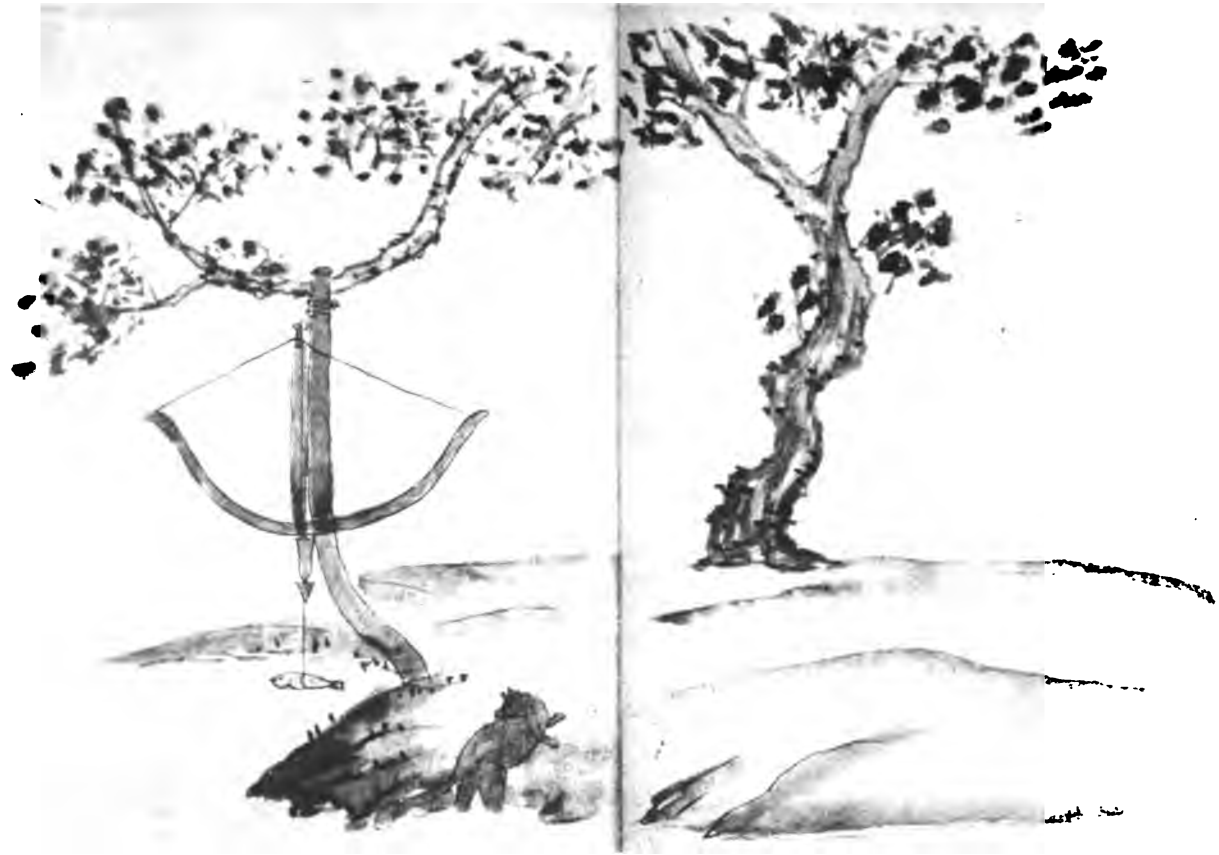
眞淵の自筆本がその由緒の多い田安家に殘つたのはありさうな事に思はれますが、仝家でそれを賣つたのはどうした事でせうか。二兩で買つて、十兩で賣つたと云ふ記事も當時の古本屋の樣子が伺はれる氣がしてほほえまれます眞面目に考へても可成參考になる点が多く、又一寸退屈凌ぎに見るのも面白い本です。紙數は一冊約六十枚づゝです。附錄の舊刊書目一冊は松澤老泉の門人保人即ち西山玉巖の作で、古刊書の體裁・跋・刊記等を丹念に記して居ります。　圖版第七十一號參照

(66)

蝦夷銅柱餘話　寫本　全四冊　金二十圓

「蝦夷銅柱餘話」は常陸州間宮林藏話、備中州村上貞助編としてあります。即ち林宗の話を奏檍丸が筆記した事になつて居りますが、內容は略々安政二年刊の北蝦夷圖說と一致して、樺太土人の事を記したものであります。金田一京助氏の說によりますと此の書は又蝦夷見聞誌とも云ふ相です。大きさは版本より少しく大きく縱九寸、橫六寸五分の罫紙に寫して居りますが、此の用紙は「開拓使函館支廳」と印刷したものを用ひて居りますから、多分明治初年に函館の役所で寫させたものでせう。本文は版本と殆んど同じですが、少しく增補になつたと見られたところがあり、挿繪も大體版本と同樣ですが少異が見られます。役人の寫しと見えても繪も文字も素人くさいのが草創時代の北海道を偲ばせます。

圖版第七十號參照



第七十圖　蝦夷鋼柱圖說 挿繪の一部

鳥獣魚虫

獣 チラマンテプ▲キモツペ

熊 ホクユク

狐 チロンヌプ▲シユマレ▲アーレウプ

犬 シタ▲セタ▲ヘク

鹿 ユク 牡 アプカ▲ピンチラウ 牝 モマンベ▲ホンアリ

鹿の如き大獣 ツナカイ カラフト詞

土龍 イプチケレ

何喰ふ獣 ペウレプ▲セベリク

狸 モユク▲ヌマリ

兎 イシヤポ▲イセポ

鼠 イリモ▲イリム▲エルム

てじと ニウフ▲ニウヨ

猴 ヌイヒカモイ

牡熊のよく大猫 リコシカモイ カラフト

第六十九圖 蝦夷方言藻汐草第一頁

(65) 蝦夷方言藻汐草　文政元年刊　全二冊　金二十圓

縦四寸三分、横六寸、横本。

見返しに「蝦夷方言藻汐草　鈴驥圓藏」とあり、次に白虹齋の序文一頁を載す。文化元子年の日附あり、次に蝦夷地之圖として黒刷一枚の蝦夷圖を擧ぐ。未だ鈴驥園及び白虹齋の何人なるかを明かにせず。

先づ蝦夷方言部分として目次をあげ以下、愈々本文に入つて天、地、土、雲等をはじめとして先づ日本語を單語な上に書し其の下にアイヌ語を假名書にして掲ぐる事圖版第六十九號の如し、下卷の半ばまで約千二三百の單語をあげたる後熟語數頁をかゝげ、次に對話を記し、共にアイヌ譯を附す。最後に「ユーガリ浄瑠理の事」として近時金田一京助氏が其の研究を發表せられたアイヌ古謡ユーカラの本文を二十數頁に渉つて片假名書にして終る。奥付なし元表紙元題簽に外の袋までつきたる美本。

圖版第六十九號參照

輿地紀略

安政五年刊　全一冊　金二十圓

輿地略說は美濃版和紙刷の和蘭文翻刻本です。翻刻者は例のチチングの愛弟子「日本產物誌」其の他の有用の諸述著のある尾張の伊藤圭介です。表紙は「地學訓蒙　輿地紀略」と二行に橫書にし、其の下に橫文字の原書名を木版で印刷して居ります。見返しに黃色の紙を用ひ其の上に圖版の樣なタイトルを書き、それと對照の頁には長い原書のタイトルをそのまゝソックリ木版で移して印刷して居ます。以下本文百四十八頁は全部蘭文の原著を寫し取りそれを版下にして一枚づゝの板に刻した整版橫文字本で、當時の出版者の苦心がマザ〳〵と見られるものです。最後に日本風の奧附があつて、尾張伊藤圭介藏版、發行書肆、名古屋永樂屋東四郞、菱屋藤兵衞、江戶岡田屋嘉七としてあります。伊藤圭介の私塾で敎科書にでも用ひたものでせうか稀れにしか見ぬ本です。

圖版第六十八號參照

第六十八圖　輿地紀略　見返し

GEOGRAPHISCH
ZAKBOEKJE.

安政五年戊午新春開雕

輿地紀畧

尾張　伊藤氏花繞書屋藏





第六十七圖　泰西輿地圖說　折圖の一部

(63) 泰西輿地圖說　寛政元年刊　全三冊　金五十圓

天明時の蘭學の大パトロンにして且イサクチチングの親友、蘭癖の貴公子福知山侯朽木龍橋の著「泰西輿地圖說」は寛政元年東都松本善兵衛の板行であつて全六冊、卵色の表紙をつけたる半紙本である。此の著は全じ著者の手になる「西洋錢譜」と共に、有名なる「日本志」の著者チチングの強き影響の下に述作された當時殆んど唯一の正確な「歐洲地誌」である。先づ第一章に「歐羅巴總論」として概論をあげ以下各論に入つてポルトガル、イスパニヤ、フランス、英吉利（漢×利亞（エンゲランド））ネデルランド以下八國の地理風土、產物政治等を略述し最後に歐洲の輿地全圖、諸州都圖、諸地諸圖數十葉を載せて居る。單に朽木侯の著述としてのみならず、我が國最初の歐洲地誌として興味津々たるものがある。

此の書現存比較的稀れで、蘆田伊人氏の說によれば內閣文庫外一ヶ所に存するを知るのみと云ふ。それ程迄に稀覯でもないが、兎に角西洋錢譜などに比すれば遙かに珍らしいものの様です。

元表紙、元題簽の極美本、帙入です。

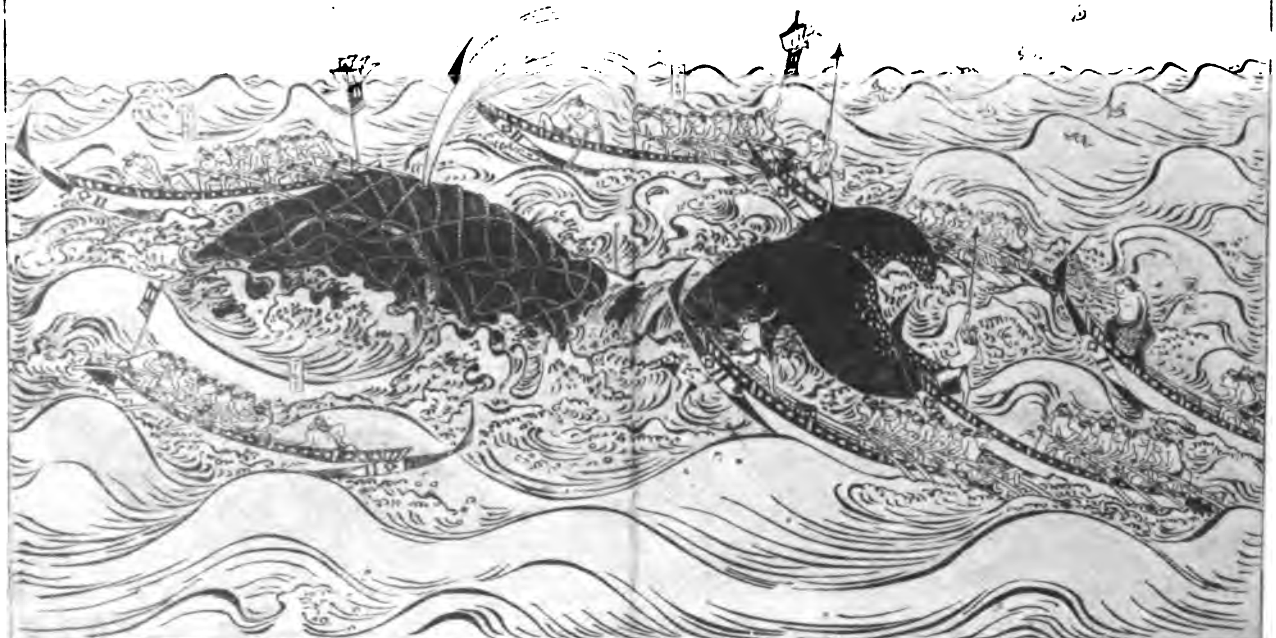
圖版第六十七號參照

(62)

勇魚取繪詞　文政十三年刊　全二帖　金五十圓

縱一尺一寸三分、横七寸六分、大本。青地紙の元表紙の中央に白地に黒く「勇魚取繪詞、上(下)」の元題簽を存す。美本。古來著名なる鯨捕りの繪本なり。肥前平戸沖の生月島の富豪益富又左衛門一家の捕鯨の實狀を事も細かに繪にて描き附するに詳細なる解說を以てす。先づ此の島の位置形狀よりはじめて益富家納屋、苧綱、網作、出漁準備より其の用品を記述し、繪解きし、それより鯨見、鯨網、代追入、銛突(モリツキ)より捕獲の實狀を繪と共に記し、其の解体處分、漁祝ひを以つて上卷を尾り、下卷は鯨の種類形狀より說き起して身体の諸部、臓腑を說明し、轉じて捕鯨船の船印(フナシルシ)、船具、漁具、解体用具、料理用具まで手に取る如く一々挿繪を入れて說明し、最後に小山田與淸の跋文を掲ぐ。繪よく文字よく、印刷よく、稀に見る佳書なり。

圖版第六十六號參照



第六十六圖　勇魚取繪詞　挿繪の一部



第六十五圖　歌麿　虫えらび　初版

(61)
繪本虫えらび　下卷　天明七年刊　一册　金三十圓

喜多川歌麿の繪本は「繪本若えびす」「繪本江戸雀」「潮干のつと」「繪本百千鳥」等種々ありますが「虫えらび」を以つて最稀覯とし、其の上本は數千圓の高値を唱へた事もありました。天明七年に初版が出來、文化六年に「繪本虫あはせ」として再版が出來ました。此處に揭げましたのは此の最稀覯を以つて知らるる初版でありますが、惜むらくは上卷を欠き下卷一册であります。虫類に草花を配した二枚つゞきの色刷繪七枚と歌麿の師鳥山石燕の跋とからなつて居ります。又以つて精巧絢爛を極めると共に潤ほひと柔か味に富んだ歌麿の花鳥畵の眞髓を窺ふに足りませう。

圖版第六十五號參照

吉原しつつい　　延寶二年刊　　全一冊　　金百五十圓

大きな原題簽が淺黄の元表紙の左半分を占領して居ります。元祿以前の此の種の本ににまゝ見受ける「不調和の調和」です。中本一冊、紙數三十一葉、はじめに序一葉あつて、本文は第二葉よりはじまり、徒然草の「鐵槌」になぞらへてつくつたために版式も之れをもぢつて下に本文を刻し、上に頭注の樣なフザケタ文句を付けて居ります。
菱川風の挿繪が六ヶ所に挿入してあつて最後に、

油虫朝臣濡高氏勘太郎
噸歌朝臣ふくべ氏十太郎
延寶貳年甲寅二月中旬
大傳馬三町目　　九左衛門板行

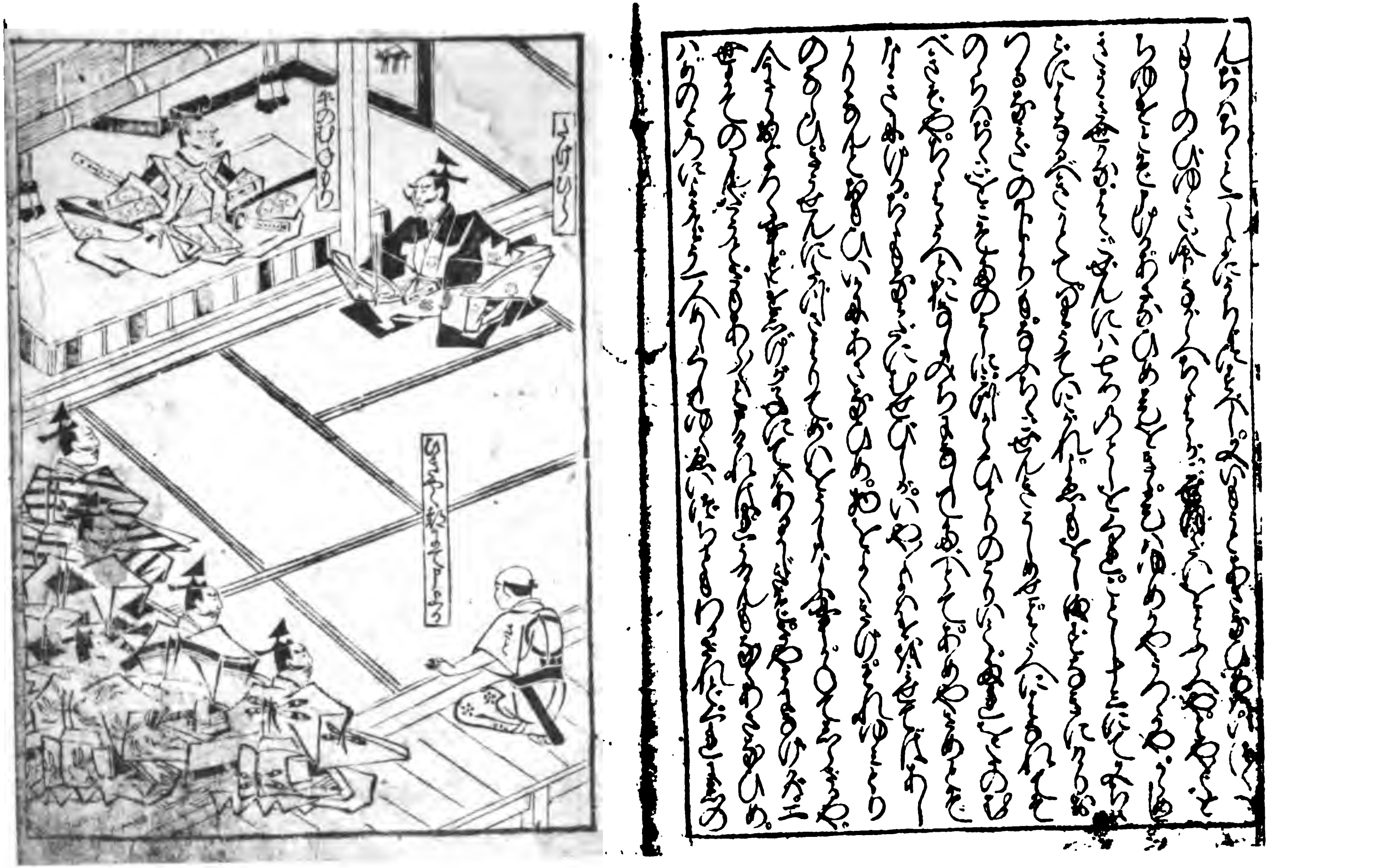
となつて居ります。
此の書は非常に稀覯であると覺しく、早く彼の柳亭種彦は其の「吉原書籍目錄」の中に

吉原の事を「つれ〳〵草」になぞらへて書きし冊子のはじめなり。「鐵槌」にならひて自注あり、故に「失墜」と號すよし序に見えたり、注釋には昔を考へべき事ありてをかしき冊子なり。惜むべし此冊子、今に傳はる事稀なるか、竹本氏の藏書のみにて類本未だ見ず。

とあります。博覽な種彦の言は充分に信じてよいと思はれます。
元表紙、元題簽、手づれ虫入なき上本です。
圖版第六十四號參照



第六十四圖　延寶二年刊　吉原しつつい　挿繪の一部



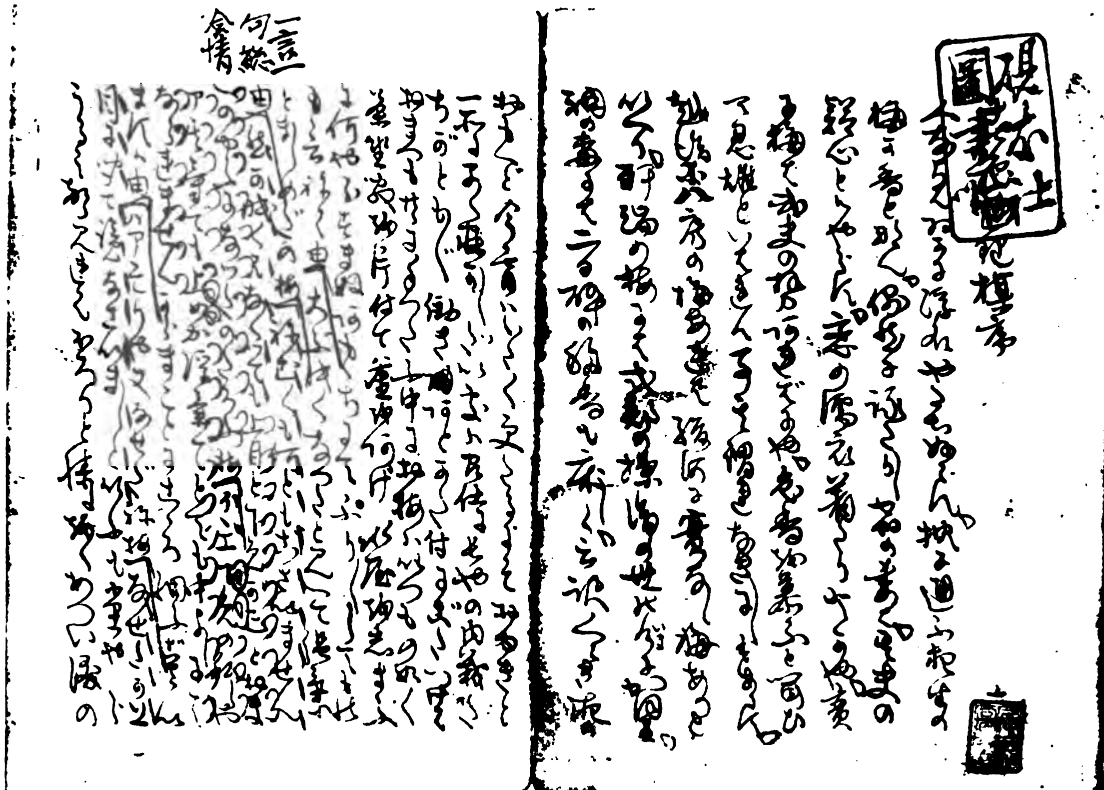
第六十三圖　繪入ゆや物語

(59) 繪入 ゆ や 物 語　全二冊　金二十五圓

製本縱八寸九分、横六寸二分、印面縱七寸五分、横五寸四分。美濃版。
四周單邊、十四行、卷首に「蕎閒齋藏書記」の印あり。刊記は下卷の奥に「松會衛門板」とありて年代なし。著者の名も不明なり。「日本小說年表」にも著者刊年共に不明の旨記載あり。其の版式挿繪等より見て、寛文延寶の交に刊行せられし繪入假名草子の一なるべし。師宣風の挿繪多し。
元表紙、原題簽を存すれども惜むらくは下卷初葉に破れあり。
圖版第六十三號參照

春色連理梅　尾崎紅葉手寫　全五冊　金百三十圓

製本縱六寸、横四寸二分五厘、本文縱五寸三分、横四寸、小本なり。卷頭に［硯友社圖書所］及び［尾崎圖書］の藏印を押したり。
梅暮里谷峨作の此の人情本の版本を手づから寫したるもの。書寫の由縁は卷尾の「朧寫のいひ草」の中に述べたるが如く挿繪のあまりに猥りがましきを嫌ひてなる由。此の「いひ草」の終りに明治十七年八月廿六日の日附あれば紅葉は慶應三年生れ故數へ年十九才の夏の事なるべけれど早熟の彼の事とて、筆は達者に例の蜀山張りなり。署名は半可通人とあれば當時此の戯號を用ひしと見えたり、「柳巷花紅亭に於て」とあれば家をかくは呼びしか。
本文は版文をそのまゝ墨にて寫し、句讀點を附し、又興多き個所には圈點を附し、又欄外に屢々短評を挿みたり。此の點、圈、評は共に朱書なり。評は終りに近づく程多く、曰く「評曰シリャセンヨ」「評只字有千鈞力」「又ヒヤ〳〵〳〵」「ヘンイケ巫山戯ヤガラ」「眞是苦肉計」「此一言足散阿梅之恨」等隨時本文に應じて好適の評言下し得て頗る妙にて、併讀の興豐なり。以つて青年時の紅葉子の鑑賞眼批評力を窺ふべき資料なり。
圖版第六十二號參照



第六十二圖　尾崎紅葉自筆　春色連理梅　内容の一部



第六十一圖　萬福長者寶藏入草稿　挿繪下書の一部

(57)

萬福長者寶藏入

自筆稿本　全一冊　金二十圓

日本の古書は古筆の切を除いては、何でも外國より何倍か何十倍か安いですが、就中最も廉價なものが文學者、作家の自筆稿本類です。版本は如何に少いと云つても元來が少く共五十部なり、百部なり印刷したものですから、天下一品とか世界の孤本とか稱しても何時何處から同じものが現れるか新しく發見されるかわからぬものです。之れに對して自筆稿本類は一々が天下一品で全くユニークなもので、よし初稿再稿三稿とあらうと、それはそれ〴〵に異つて意義を持つもので研究上非常に重要であるのみならず、此の紙を著者が手にとつて、こんな繪、こんな字で書いた事、どこをどんなに訂したか、字が拙いか、繪が巧みか、又挿繪製本にどんな希望を持つたか等が一々掌を指す如く判る自筆本の面白さは千篇一律な版本の少異をあさるのと比すれば甚だしく興趣豐かなるを覺えます。現在は有力にして熱心な蒐集家なきため此の版本類は外國の同種のものに比すると驚くべき程安いですが、軈て遠からぬ中に數倍數十倍に騰貴する事疑ひないものは此の種の本でせう。「萬福長者寶藏入」は此の自筆稿本の一種です。縦五寸六分、横三寸九分、紙數廿一枚の小冊子です。著者は齋西堂主人とありますが誰の事か判明しません。挿繪は國芳が書いたらしいです。卷頭に爲永春水の序が一頁あります。春水の自筆です。

圖版第六十一號參照

(56)

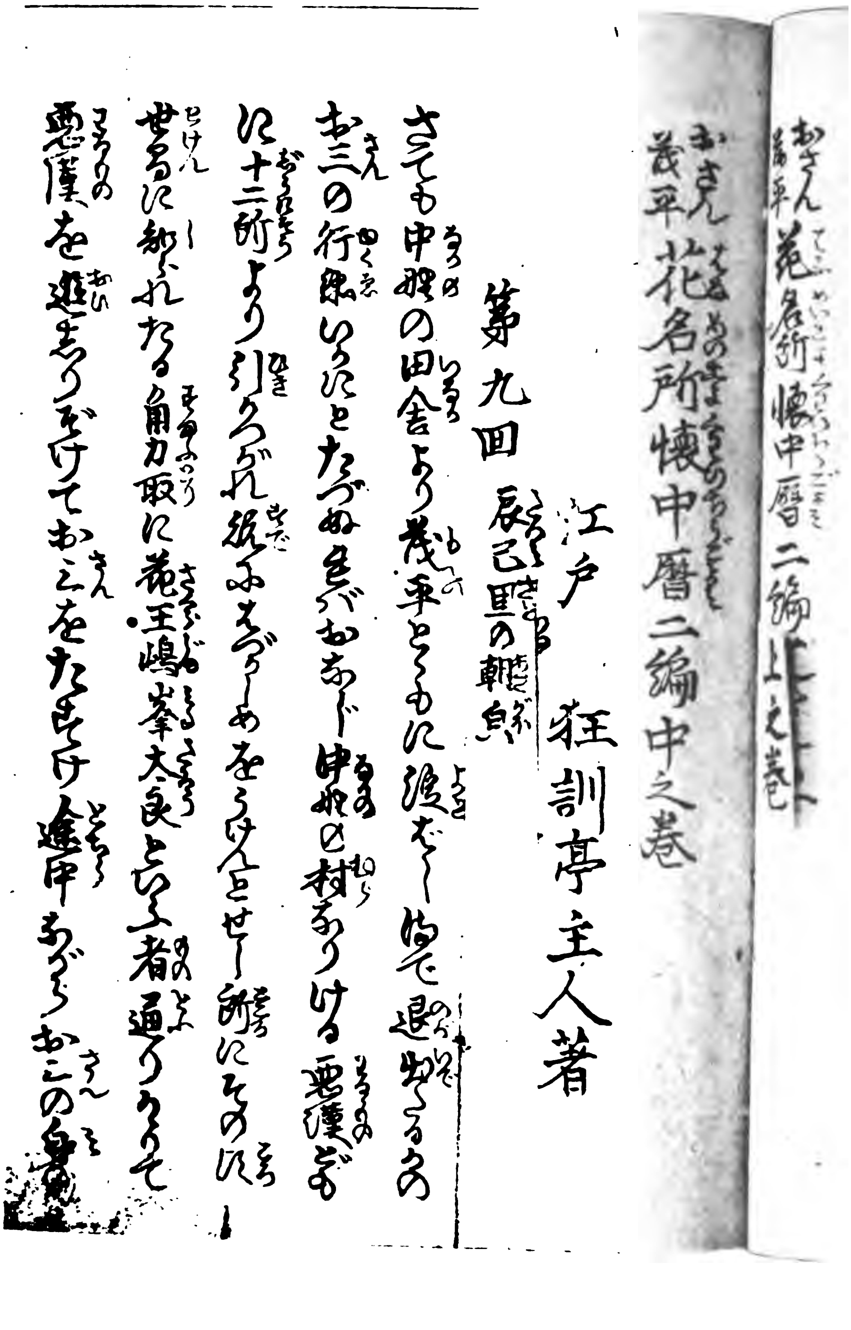
おさん茂平　**花名所懐中暦**　爲永春水自筆　全一冊　金三十圓

縱九寸四分、横三寸九分、小本、著者自筆稿本。第二輯一冊なり。紙數六十四葉。

卷頭に四頁にわたりて著者の自序あり、次に五頁に及ぶ口繪の下書ありて、其の後に本文に入る。本文中にも口繪の下書七八葉あり。何れも春水の自筆になる。此の下繪の上に朱にて「口繪ハ二丁にてよろしく、初編に似ざる樣願上候」「舟宿のさんばし、舟よりげいしやの上る所よろしく」などゝ畫工に對する註文書きを附したるも興多し。序文の末に、于時天保六未林鐘　とあれは著者四十八才時の作にて、傑作「春色梅暦」を出せし後三年に當り彼の文壇的地位確立し、十分なる自信を持ちて縱横に艶筆を揮ひし時代の作なり。

文字は美しき方にてはなけれども、一寸癖ある一流の筆、讀み易し。繪は器用人多き當時の作家としては寧ろ拙き方なり。とまれ「江戸人情本の元祖」と自稱せし未曾有の艶本の作家の俤げを偲ぶべき一好資料なり。

圖版第六十號參照


おさん 茂平 花名所懐中暦二編上之巻

おさん 茂平 花名所懐中暦二編中之巻

江戸 狂訓亭主人著

第九回 辰巳

さても中野の田舎より茂平とともに浪宅を退出するお
お三の行衛いかにとたづぬるにおなじ中野の村なりける悪漢が
に十二所より引かくれ好ふたづねしあなうけんとせし所にその頃
世間に知れたる角力取に花王嶋峯太良といふ者通りかかりて
悪漢を追ちらしておさんをたすけ途中おさんの身を



第五十九圖　富樫廣蔭筆　詞のとき衣草稿　卷頭

12 讀史抄錄 全一冊　13 讀太平記 一冊
14 神祇考證 全一冊　15 神道大意 全一冊
16 講餘抄 全一冊　17 祭祀略記 全一冊
18 神祇諸祭略 全一冊　16 神祇官心得書 全一冊
20 廣蔭雜稿 三冊　21 廣蔭見聞錄 四冊
22 椿の落葉・其の他 八冊

第二類 手抄類

1 和訓集抄出 全九冊　2 古史傳抄出 全一冊
3 玉勝間抄出 全一冊　4 不問語抄出 全一冊
5 日本釋名抄出 全一冊　○6 排佛論抄出 二十四冊

右自筆稿本類は未だ書名だも知られざりしもの、書名のみ知られて內容の傳はざりしもの多く貴重稀覯の資料と云ふべし。

右の內「詞玉橋」草稿は自筆の全二冊もの一組と、本文を他に寫さしめ自ら訂正加筆せる第一卷二冊とを含む。手抄書は「和訓集」「玉勝間」等の諸著の要所を拔萃し、「廣蔭云」として自說を添加せるものにて、廣蔭の說を知る材料として興多きものなり。谷川士清の彼の著書に對しては最も手厳しき批判を加へたる文句多く、「廣云カラ心〳〵ワカ國ノ大道ヲシラレザリシハイトアハレ」「廣云コノ事コジツケモ又甚シ心シテ見ルベシ」「廣云妄說也」「廣云アヤマリナリ」等の句頻出す。此の尨大の辭書を細字もて九冊に縮寫し、一々評言を加へたる精力驚くべし。排佛論抄二十四冊は江島活堂の著を同樣に寫して評を加へしもの。圖版第五十八號、五十九號參照

(55)

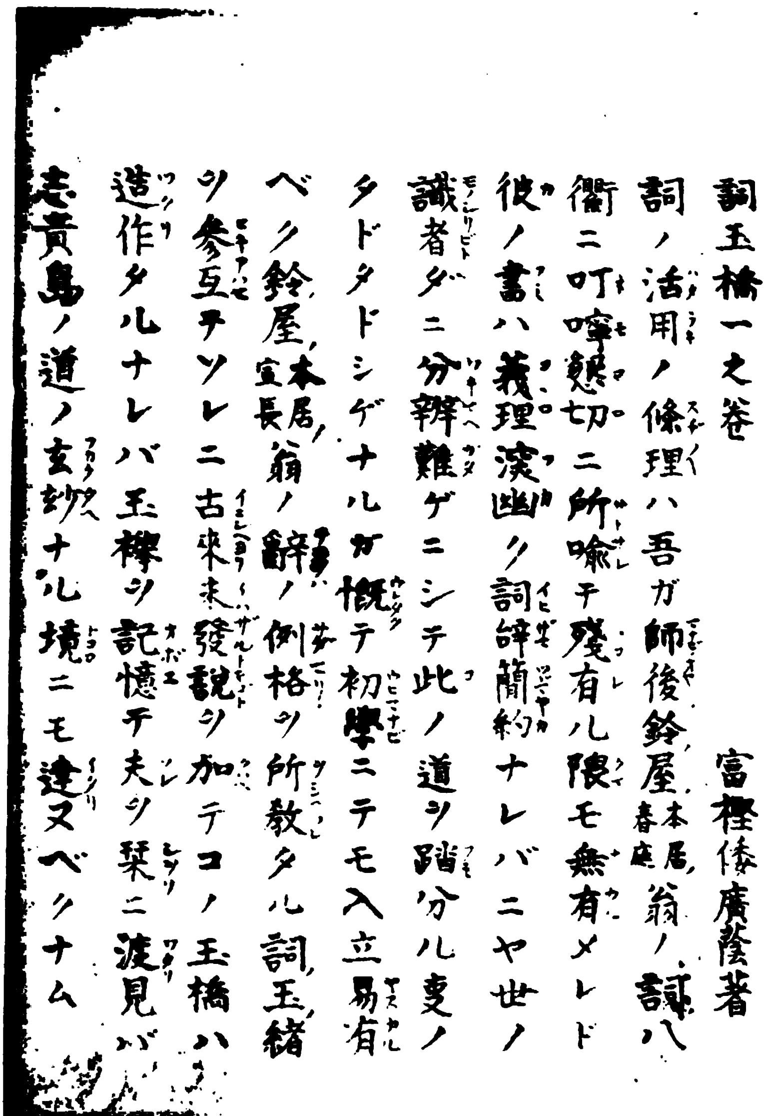
富樫廣蔭叢書　廣蔭自筆草稿　八十五冊　金三百八十圓

言幸舍の主、富樫廣蔭は紀州の產、本居大平の門に入つて國學を學び、努めて倦まず、其の才學を師に愛せられて養子となり本居長平と稱せし人。其の著述は四十餘種に及ぶと傳へらるゝも、今に存するもの極めて稀れにて赤堀又次郎氏國語學書目解題に彼の著として擧ぐる所は「詞の玉橋」二卷「辭玉襷」一舖にすぎず。此の事實は彼の「國文學研究史」の著者をして「前略、然るに其の發刊せられし物洵に寥々、而も遺稿殘篇多く散佚せりと云ふに至りては誰か廣蔭の爲に之れを惜み又學界の爲に遺憾とせざるものあらん、……予は今日彼の業績を述ぶべき資料の乏しきを痛嘆するものなり」と嘆ぜしめたり。小莊此處に此の廣蔭の手稿數十種を學界に提供し得るを最も欣快とするものなり。

小莊藏する所の寫本八十五冊盡く廣蔭の手寫かゝる。書目左の如し。（書名の上に○を附したるは不完本）

第一類　廣蔭自筆稿本類

1 詞玉橋　全四冊
2 詞のとき衣　全一冊
○3 言靈幽顯論　二冊
○4 五十音義　三冊
○5 韻鏡捷見　一冊
○6 九集類辭羽翼　四冊
○7 古今和歌集紀氏直傳解　二冊
○8 古事記正傳　二冊
9 論語用字格　全三冊
10 大學譯解　全一冊
11 正實直言記　全一冊


詞玉橋一之巻

富樫廣蔭著

詞ノ活用ノ條理ハ吾ガ師後鈴屋（本居春庭）翁ノ詞八衢ニ叮嚀懇切ニ所喩テ殘有ル限モ無有メレド彼ノ書ハ義理深幽ク詞辭簡約ナレバニヤ世ノ識者ダニ分辨難ゲニシテ此ノ道ヲ踏分ル叓ノタドタドシゲナルガ概テ初學ニテモ入立易有ベク鈴屋（本居宣長）翁ノ辭ノ例格ヲ所教タル詞玉緒ヲ参互テソレニ古來未發說ヲ加テコノ玉橋ハ造作タルナレバ玉襷ヲ記憶テ夫ヲ栞ニ渡見ガ志貴島ノ道ノ玄妙ナル境ニモ達ヌベクナム

第五十八圖　富樫廣蔭筆　詞の玉橋草稿　卷頭

學教語目録

㊀漢籍ハよむまじきよしの事

聖人ハうハべ仁者とミせて内心邪悪なる論

㊁聖人ハ偽をいひて人を欺くよしの事

外戎の王ハ誠の位ならねバ度々亡びかはる論

外戎の王ハいやしきよしの論

㊂皇國ハ万國ヲ勝れて尊きよしの事

御正統連綿としてつくべきよしの論

天皇の御位ハ私ならぬよしの論

皇國ハよしをとさするべきよしの論

第五十七圖　齋藤彦麿筆　初學教語目録

(54) 初學教語　齊藤彦麿自筆稿本　全一冊　金二十五圓

縱七寸八分、横五寸四分、中本。全紙類三十六頁。

「國書解題」「諸家著述目錄」等には未載。帝國文學第八卷六號に堀田治郎氏の掲げられたる「芦假庵略年譜」には寛政九年彦麿三十才の述作として本書の名を擧ぐ、靜嘉堂文庫亦著者自筆の一本を藏すと云ふ。內容は、

「味酒（ウマサケ）ならぬ辛國（カラクニ）の聖人らが釀たる毒酒にあたり醉狂へる人あまたあるは其の文詞の口にあひたるなるべし。そを醒させんとて書たる此の一卷なり」

と云ふ自跋の一節によりて知らるゝ如く、皇國の萬國にすぐれ、皇教の異教に超えたる所以を明かにす。目次の概要を揭ぐれば、

一、漢籍は讀むまじき事
二、聖人は僞りを云ふて人を欺くよしの事
三、皇國は萬國は勝れて尊きよしの事
四、皇國の政道は誠にかなへるよしの事
五、天皇は外戎の王どもが主君たるべき事

以上朝庭の御記を以て辨ぜり、外戎の書籍を引て編ぜり、とあり。以つて其の獨特の國粹思想を察すべし。

稱意館舊藏本。

圖版第五十七號參照

(53) 濁語考

清水濱臣稿
岡本況齊筆

全一册　金二十五圓

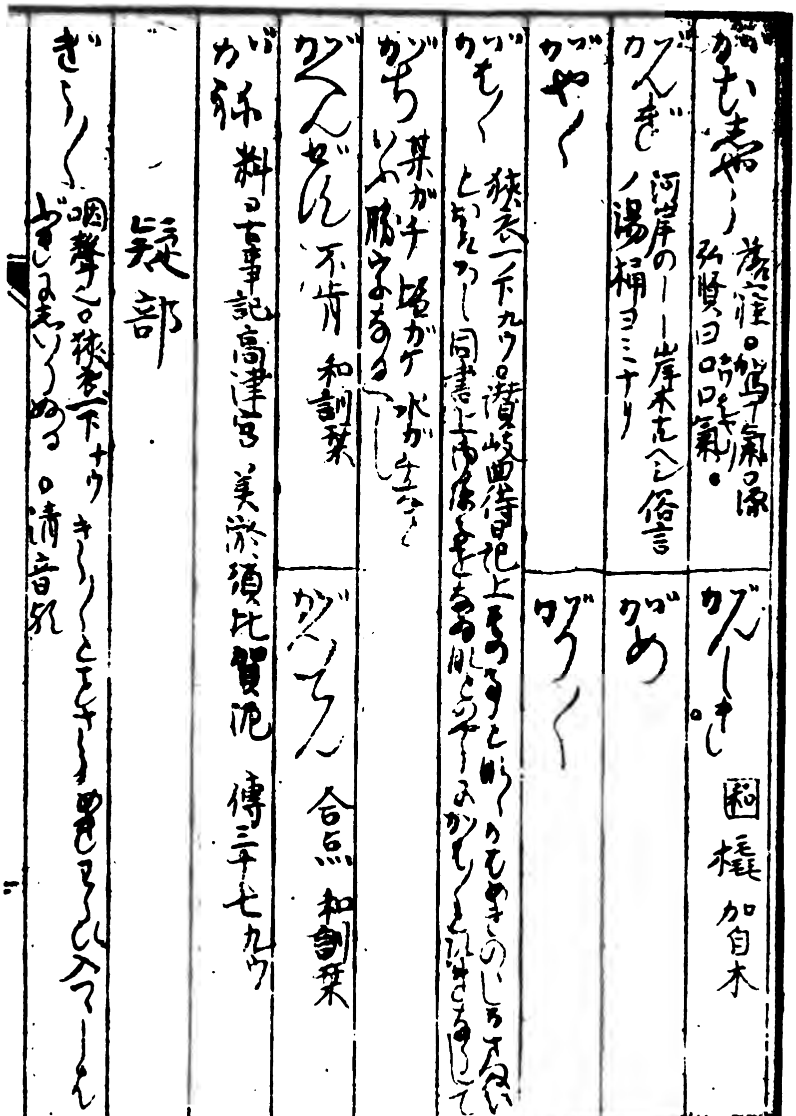
縦六寸一分、横四寸三分、總紙數三十六頁。

全編を我、疑、具、牙、碁、邪、自、受、敍、太、治、豆、傳、杼、婆、備、夫、倍、煩、是の二十濁音に分ち各項の下に其音を頂く古語と其の語意を記し出典を擧ぐ。引用する所古事記、日本書紀、萬葉集、古語拾遺、落窪、源氏、狹衣、枕草子、靈異記、今昔物語等の古典數十部に及び近くは谷川士清の和訓栞を引證す、又契沖、宣長屋代弘賢等の説も引きたり。奥書は、

「此一まきは師のかきおかれたる物なれば、反古の中よりとりいでゝかくかきあらためおくなり。されどよく考へたゞされたるものならで、かりそめにかきつけたる一まきなれば、こゝにしるしおけるせちどもを、師の定説とにて云ふまじきものなん。後見ん人心してとりも捨てもすべし、文政十年六月はつか余りの日、岡本保考。」とあり。

此の書淸水濱臣又は岡本保考の纂著としては諸著に記載なし。新資料とすべきか。

圖版第五十六號參照



がむやう　蒼頡。鵝鳴。氣。原 弘賢曰嗚呼氣。

がんぎ　河岸のー　岸木（ヘン）俗言ノ湯桶ヨミナリ

がんしき。　國　橇　加白木

がやく

がめ

がらく

がもく　狹衣一下九ウ。讃岐典侍日記上　とかへかし同書上

がちり　果ガチ　堪ガケ　水ガ　ふ勝ふるへし

がんぜん　不肯　和訓栞

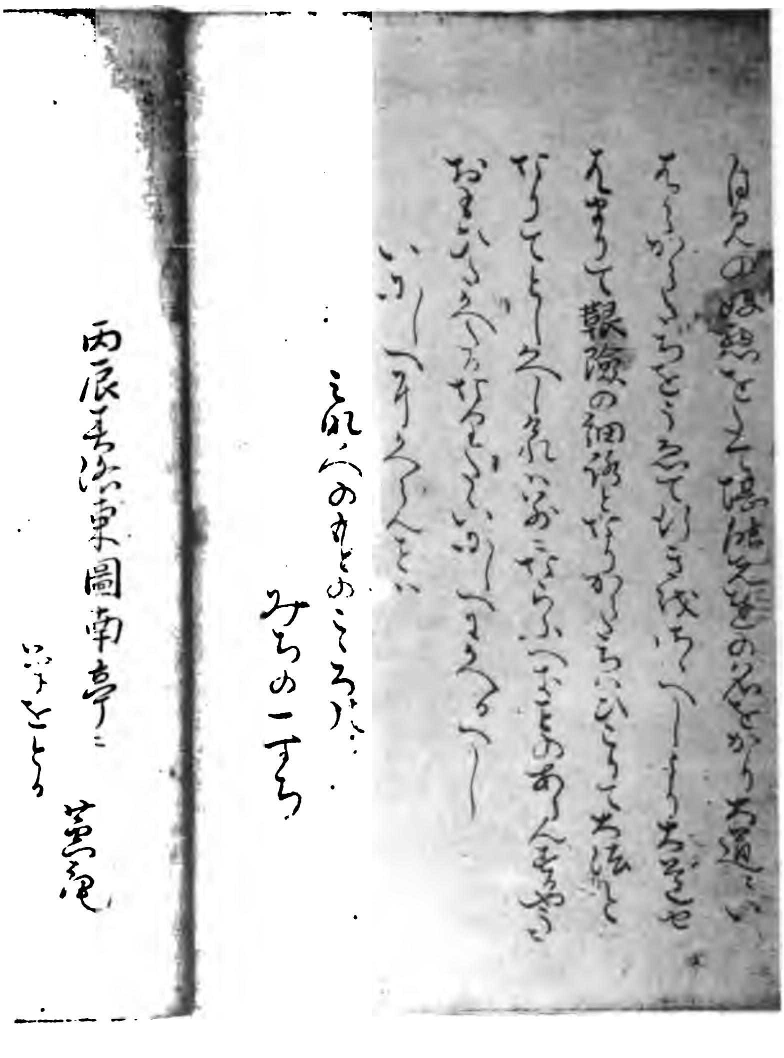
がくてん　合点　和訓栞

がか　料ヨ古事記高津宮　美豆須比賀池　傳三十七九ウ

疑部

ぎらく　咽聲ナ。狹衣一下十ウ　きらくとてきゝ[illegible]入つて　ぎきしみえ　ぬる。清音か

第五十六圖　岡本保孝筆　濁語考　内容の一部



第五十五圖　小澤蘆庵筆　振分髪

振　分　髪

小澤蘆庵自筆稿本　全一冊　金六十圓

縣居の翁を先達とした萬葉の古調の和歌が一世を風靡した頃に、之れに對する反旗を高く京洛の空に飜して、自由詩論を唱道したたゞごと派の首將小澤蘆庵の自筆の稿本です。「ふり分がみ」は「六帖詠藻」「ちりひぢ」などと共に彼の主著の一であり、殊に彼獨特の歌論を見るべき書としては「ちりひぢ」と共に最も重要な著書であります自筆稿本は寛政八年三月京都吉田四郎右衛門刊の木版本と比較しますと可成に差違があります。小異同は述べぬとして例へば版本第七葉の裏の第一行目「きこえざれば歌にあらず」から八葉の表の第四行目「及ぶ所あらんや」まで十數行は稿本にはありません。又同じ版本の八葉の裏四行目「是は共に貫之主の歌也」とある所は稿本には「これは心同じくてすがたかはれりされは心おなしとてきらうべきにあらず古今撰者すでにかくのごとし、

古今　住のえの松をあき風ふくからに　こえうちそうる沖つしら浪　みつね
御集　住よしの松にしらゆきふるからに　こえよはりゆく沖つしほ風　後鳥羽院

この詞大かた似て心かはれり」となつて居て六七行加はつて居ります。此の種の差違は相當多い樣ですから、版本は幾度か稿を改められた後に上梓されたものかも知れません。奥書の「丙辰春洛東圓南亭に筆をとる蘆庵」とあるは版本と全く同じです。

圖版第五十五號參照

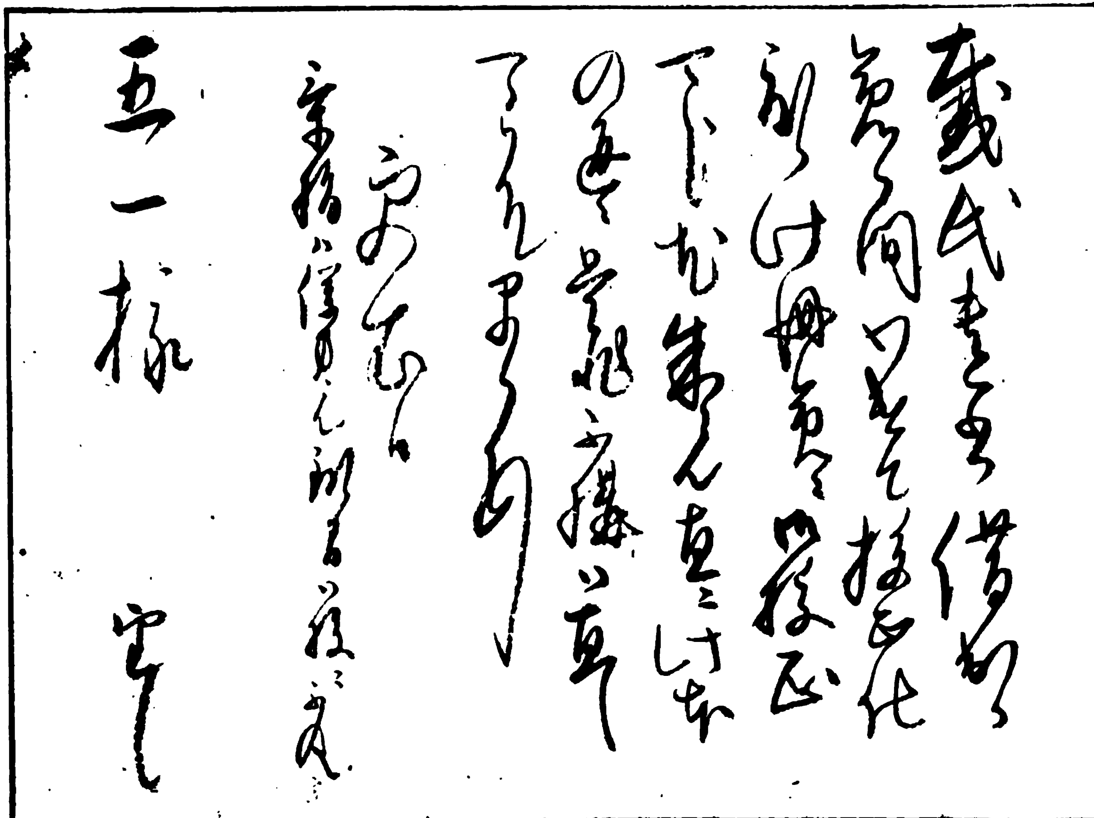
(51)

狩谷棭齋書翰　七通　全一巻　金八十圓

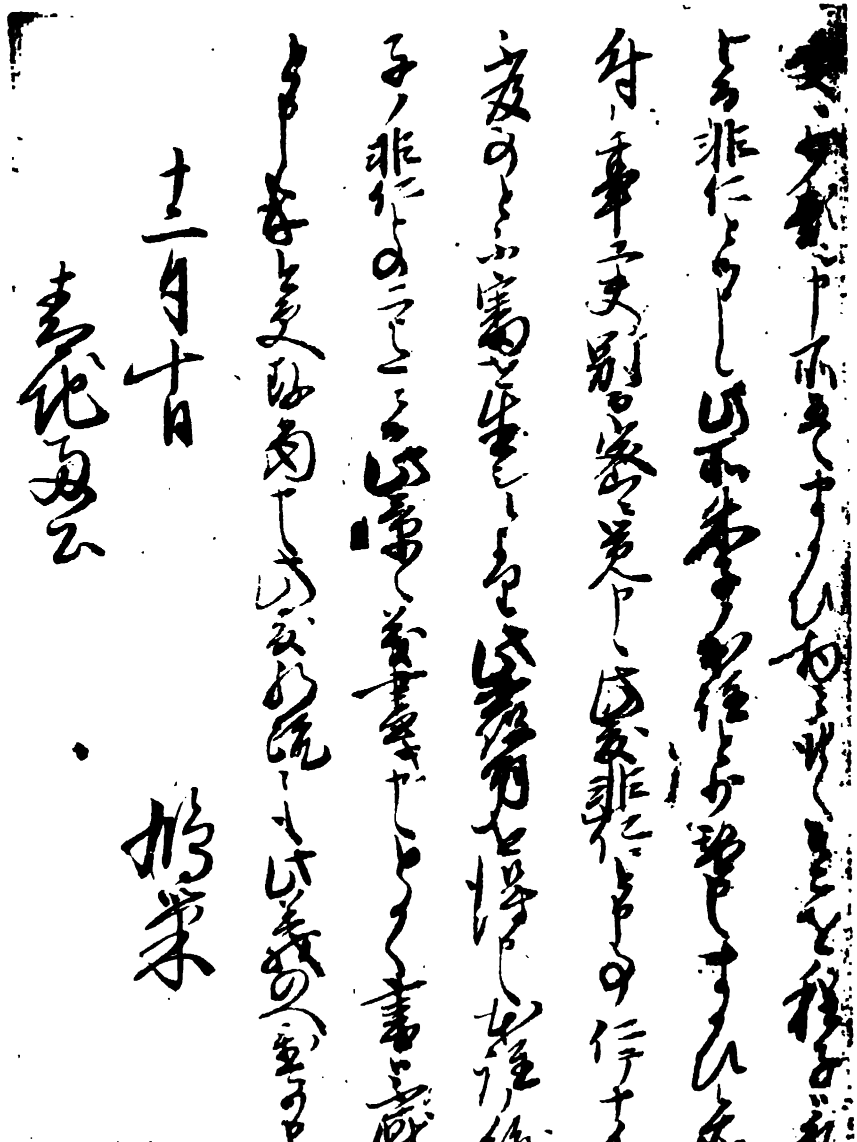
縦五寸八分、普通の書翰箋に書きたるものを表装して一巻とす、全部七通、皆其の友にして弟子なる小島成齋宛のものである。

第一通は長さ二尺三寸、宛名は小島五一様、署名は狩谷三平とあり、第二通は一尺一寸、靜齋先生、棭齋とあり、第三通は七寸、五一様棭齋とあり、第四通は七寸、五一様望之とあり、第五通は一尺、靜齋様、棭齋とあり、第六通は九寸、靜齋君、望之とあり、第七通は一尺一寸、五一様棭齋とあり、いづれも比較的短信にて贈答月並の挨拶等多けれど、中に書籍の貸借、印刷の校正等に關するものもあり、兩人の交情を窺ふべき一資料たるべし。

圖版第五十四號參照



第五十四圖　狩谷棭齋書翰　内容の一部


十二月十日
鳩巣

第五十三圖　室鳩巢筆　四書答問　內容の一部

四書答問　室鳩巣自筆　全一冊　金四十五圓

縱七寸一分、横五寸二分。所謂中本です。總紙數十九葉、之れに蠟箋様の靑表紙をつけて居ります。

兼山麗澤秘策の著者である加賀の學者靑地禮幹兄弟及び小寺興義と其の師室鳩巣との四書中の難句についての答問であります。共に書狀の形式になつて居り各自筆であります。

本文を見ますと最初には「仁說」として「孟子」中の仁の哲學的解釋について靑地の問と鳩巣の答とがあり、次は「論語疑問」として論語中の難解の章につきての小寺興義の問に對し懇切なる鳩巣の釋義があります。此の書翰は十一月十日の日付になつて居りますが、それが何年ので彼が何歳の時のものか判明せぬのが殘念です。其後に論語中の「自反縮雖千萬吾往矣」と云ふ有名な語句についての問答あり、更に「仁說」靑浚新疑問として重ねての問に對し詳細反復して其の蒙を啓いて居ります。單に彼等師弟間の美しい情義と親密な交情を見るべき興多い文獻であるに留らず又大儒鳩巣の學術的見解を見るに足るべき重要書だと信じます。

圖版第五十三號參照

(49)

毘沙門の本地　奈良繪本　全三冊　金百圓

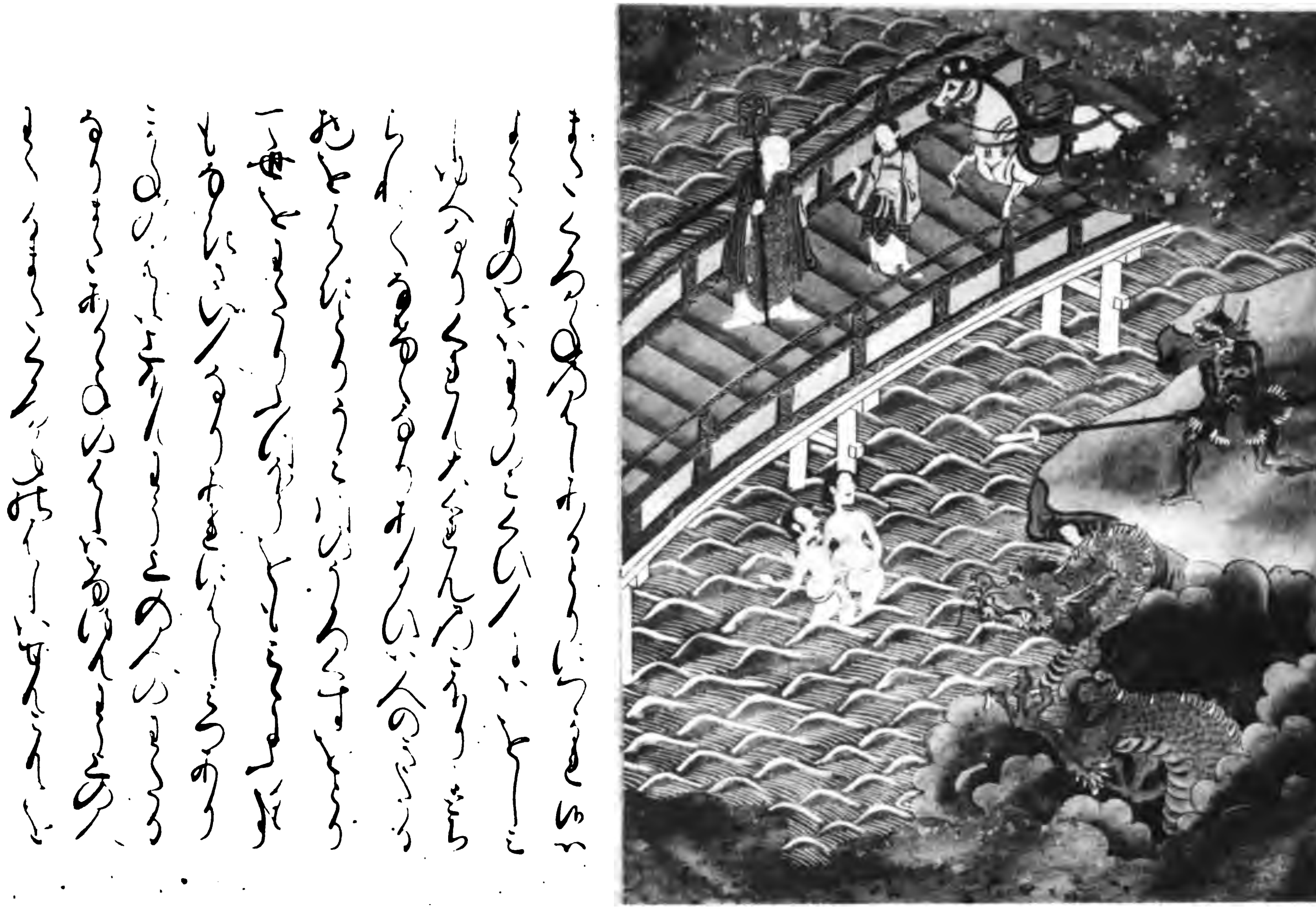
縦七寸九分、横五寸七分。胡蝶裝。

表紙は紫紺色の紙の上に金泥を以て草花風景等を畫き、左肩に丹色の題簽をはり、「びしやもんの本地上(中、下)」と記し、見返しには濃き金泥を置き上に文様を押したり。本文は半葉十行づゝに書し、書寫の年代は近世初期ならん。

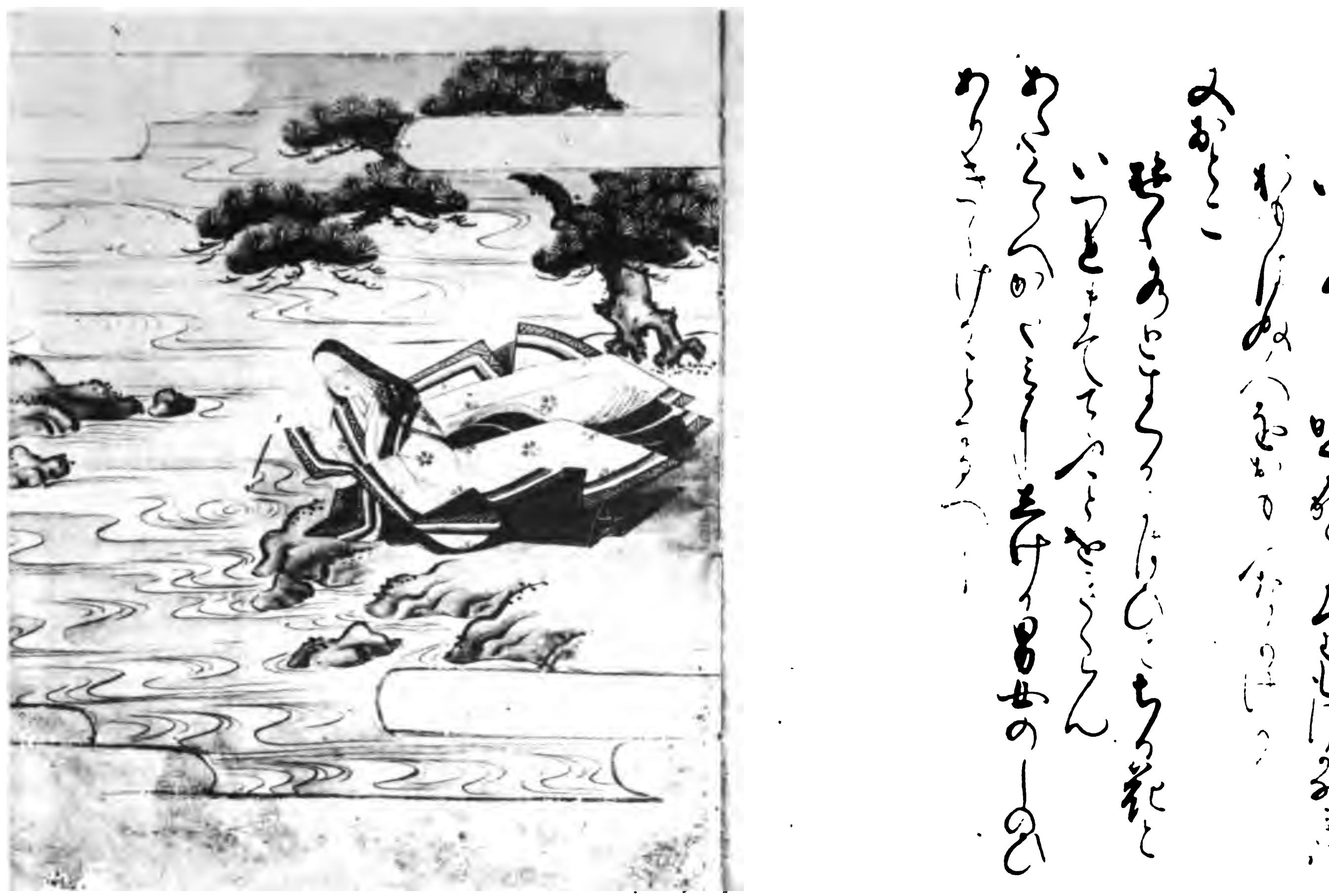
內容は中世末から近世初期にかけて流行せし所謂本地ものの數多くある中にて典型的なるものの一に屬する「毘沙門の本地」を奈良繪を挿入しつゝ書寫せるもの。奈良繪の數は上中下三巻に各六葉づゝ、計十八葉なり。繪は極密とはなし難けれど相當精緻にて美麗なり。

圖版にとりし所は此の物語の主人公金色太子が權婆國の姫君をたづねて大梵王宮に向ふ途中三途の川の橋の上にて地藏菩薩に逢ひて教を受くる所、全文中文章最も精彩ある部分にて繪亦二頁にわたり畫面華麗を極む。

圖版第五十二號參照



第五十二圖　奈良繪本　毘沙門の本地　内容の一部



第五十一圖　奈良繪本　伊勢物語　内容の一部

(48) 伊勢物語　奈良繪本　全三册　金百三十圓

丹青の着色濃厚に、稚拙を本旨とするかの如く見える奈良繪本の中にも、自ら精粗巧拙種々あります。此の伊勢物語は其の中でも、どう見ても上の部に屬するものと信じます。

文字は鳥の子紙の上に金泥で花鳥の粗畫を描いた上に風情よく書いてあります。繪も線は叮嚀で色彩はこまやかです。繪の具の色、墨色共に鮮麗で書寫の年代は寛永から元祿の間でございませうか。奈良繪の數は第一卷二十一葉、第二卷十四葉、第三卷十四葉で合計四十九葉あります。

古い錦布の表紙が之れ等を蔽ふて居り、其の左上に金砂子を置いた題簽が「伊勢物語上(中、下)」と云ふ文字を浮き出させて居ります。

全体の大さは縱七寸八分、横五寸七分、綴じは內容にふさはしい胡蝶裝です。堅い樫の塗箱に入つて居ります。最後に稀覯書の豐富を以つて天下に聞えた狩野亨吉博士の舊藏書の一である事を附け加えて置きますのも蛇足ではございますまい。氣持のよい本です。

圖版第五十一號參照

(41) 寛永卯月本 謠曲百番　寛永六年刊　全百番二十冊　金百八十圓

寛永卯月本謠曲百番につきては田宮仲宣の「隨一小謠」の中に

「卯月本と云謠本は謠曲家の尊む本也今の山本板の本は共の臨寫也卯月と云は觀世太夫黒雲齋慕閑入道の自筆の板本也寛永六年卯月と奥書有故斯く稱ふる也黒雲齋とは恐多くも又無き堪能力ものなりと臺命有て黒き雲の字を號給（ナヅケ）ひしより斯く申なり黒雲齋は藝能堪能のみならず手跡は嵯峨樣の能書也眞跡まれに出づ卯月本にて鑑定すべし」

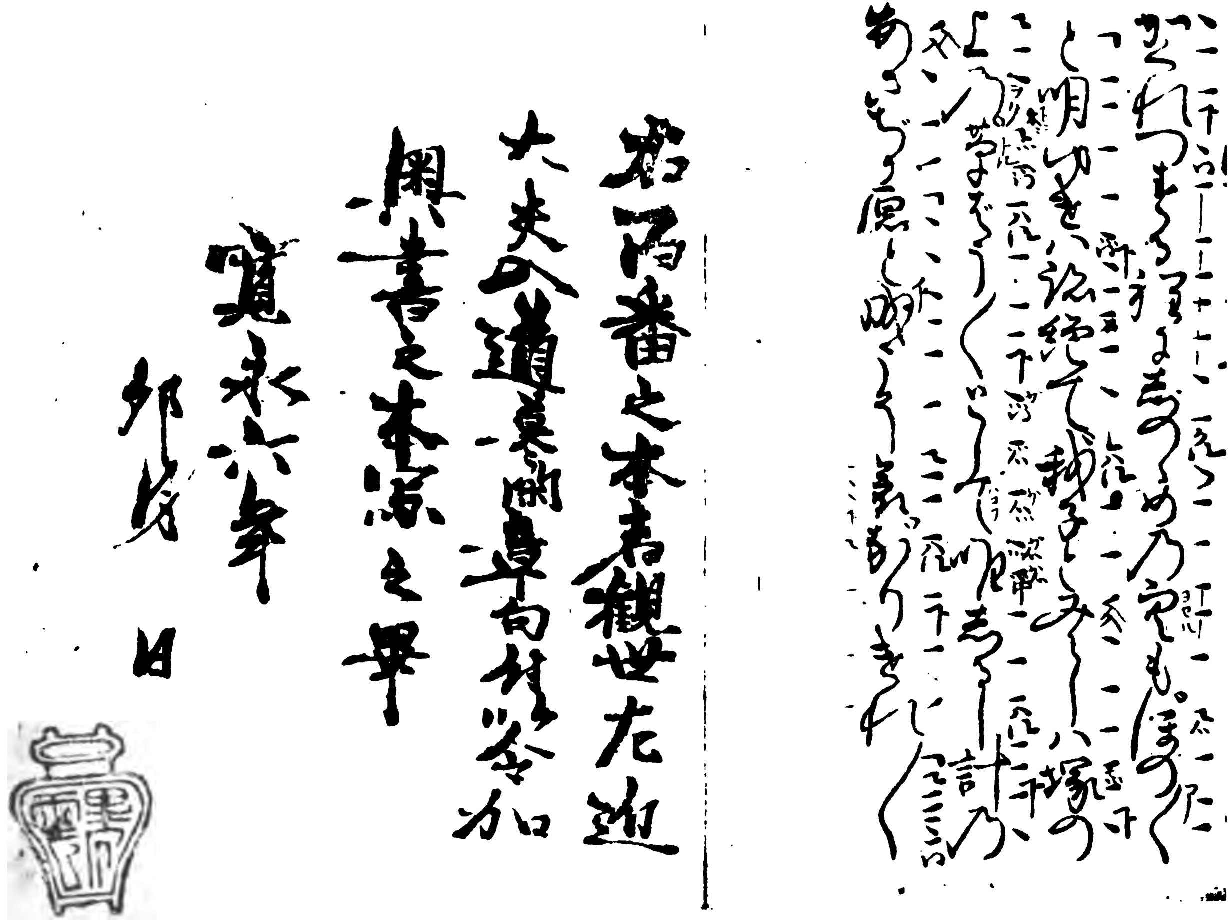
とあり。右に云ふ奥書は左の如し。

右百番之本者觀世左近太夫入道慕閑章句付以令加奥書之本寫之畢

寛 永 六 年 卯 月 日

此の奥書の書體光悅風にて黒雲齋の版下と見えたり。縱七寸六分、横五寸五分。美濃紙を袋綴じにし、半葉七行に、行十六七字に彫りたり。紺表紙の中央に題簽を附す。

此の書の傳本稀れにして時に零本を見る事あるのみ。京都小山源治氏所藏の百番揃ひは一番一冊づゝにて百冊に分つ山。此處に就する所は五番綴り二十冊にて、小山本とは裝潢を異にすと雖、表紙に貼付せる題簽は原題簽にて各五番の曲名を印刷せるを見れば、五番綴りが原裝なるべしと考へられる。又各冊毎に奥書の下に壺形の「黒雲」の黒印を押捺せるによつて（此は普通の卯月本と見ざる事に屬す）此の書は慕閑翁の手澤たるか、或ひは證本たるかなるを知るを得べし。紙魚の痕、裏打等なき美本、箱入。圖版第五十號參照



第五十一圖　寛永卯月謡本刊記及び觀世慧閑藏印

光武帝紀第一上　范曄　後漢書一上

唐章懷太子賢註

世祖光武皇帝諱秀字文叔禮祖有功而宗有德光武中興故廟稱世祖諡法能紹前業曰光克定禍亂曰武伏侯古今註曰秀之字曰茂伯仲叔季兄弟之次長兄伯升次仲故字文叔焉南陽蔡陽人南陽郡鄧州縣也蔡陽縣故城在今隨州棗陽縣西南高祖九世之孫也出自景帝生長沙定王發長沙郡今潭州縣也劉攽曰按文言出自景帝生長沙定王發文意不足蓋此生字當作子字發生舂陵節侯買舂陵鄉名本屬零陵泠道縣在今永州唐興縣北元帝時徙南陽仍號舂陵故城今在隨州棗

後漢書　古活字本　全三十三冊　(前記前漢書と併せて)金九百圓

製本縱一尺一寸、横七寸七分、極大本。印面縱七寸四分、横五寸六分。四周雙邊、九行十七字。註雙行、柱書左の如し。

　後漢記(傳)　(卷數)　(丁數)

刊記を欠くと雖、恐らく前記前漢書と同時の刊行にかゝるべく、然らずとするも元和以前に遡るを得ざるべし。

全三十三冊。緋に近き美しき丹表紙なる事、普通見るを得ざる極大形の本なる事等は、前漢書と共に本書も獻上本たりしなるべしとの推測を可能ならしむ。綴糸も原のまゝなるべし。蟲損汚脱なき稀れに見る善本なり。今春四月大阪府立圖書館に同館三十年記念の近畿善本展覽會を見るに、廣橋家舊藏本として此の書の丹表紙大形本出陳せらる。ついて見るに全く弊莊藏のものと同じ。よつて此の大形刷印本數部の存せしを知る。

前漢書と共に古き四つの箱に入る、古香掬すべし。

圖版第四十九號參照

(45)

前漢書　古活字本　全五十冊　(後記後漢書と共に)　金九百圓

製本縦　九寸七分、横七寸。印面縦七寸四分、横五寸七分。四周雙邊。十行十七字。註雙行。柱書は左の如し。

前漢紀(傳)　(卷數)　(丁數)

刊記は最終卷の卷末に在りて次の如し。

寛永第五戊辰曆菊月廿一日

於洛陽本能寺前刊行焉

即ち寛永の初期に京都本能寺前にて刊行せられしもの、寺院版の影響の下になりしものなるべし。

漢書は史記と共に近世初期の活字印本中最も大部のものに屬し、しかも史記の數度開板せられしに反し漢書の刊行は恐らく唯一回に留りしが如し。遺存のもの後漢書三十冊は比較的流布本多きに反し、前漢書五十冊は見る事稀に正に五に一に當るべし。

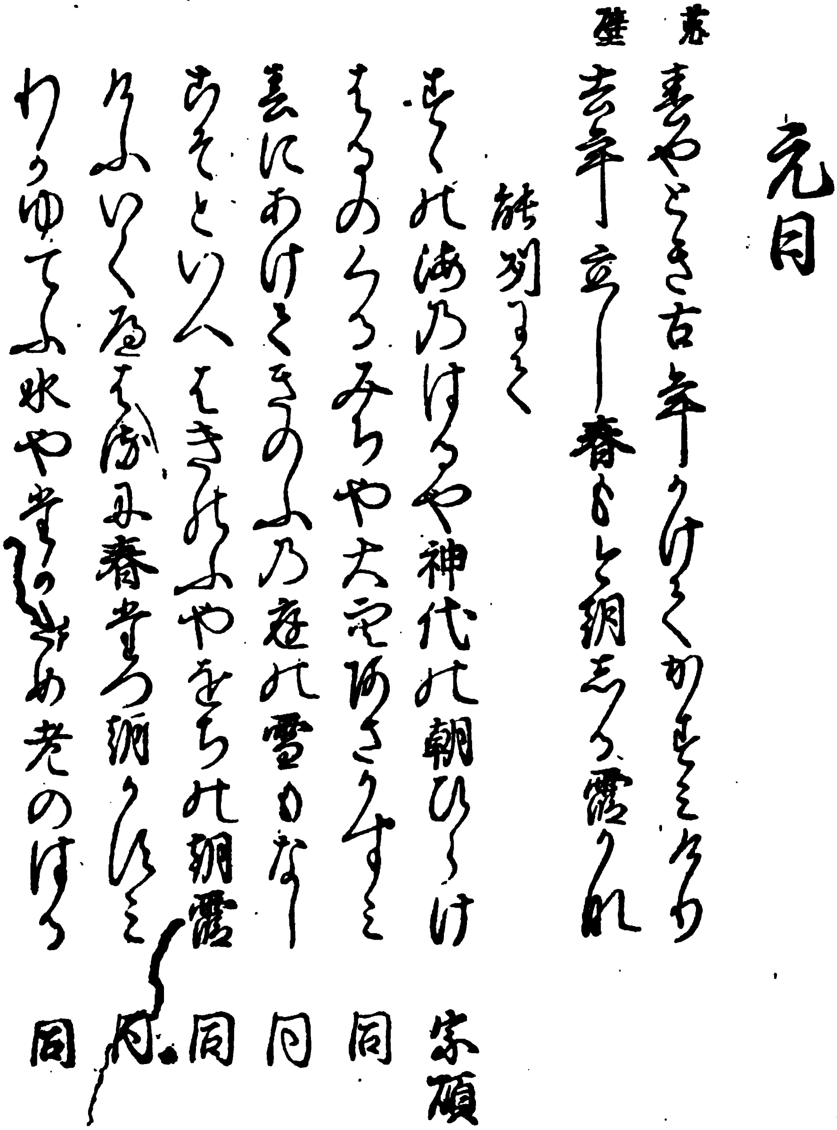
本書全部丹表紙、蟲損、汚脱等一切なき極めての上本なり、後記後漢書と共に尊貴に獻上せし本なりしと思はる。

圖版第四十八號參照

司法參軍潘　說
重詳定宣德郎守秘書省著作佐郎監杭州
裝御斛斗錢帛綱運兼糧料院權書記廳
公事馬　元康

寛永第五戊辰曆菊月廿一日

於洛陽本能寺前刊行焉



第四十七圖　古活字版發句帖卷頭

(44) 發句帖　古活字版　合本一冊　金百圓

古活字版の「發句帖」と申しますと「そんなものがあるものか」と仰しやるお方が多いでせう。「自分は見た事がある」と云はれる方は恐らく甚だ其の數が少いと思はれます。更に「私はそれを持つて居る」と云はれる御方に至つては廣い日本中でも、指を屈する程もない事と信じます。事實、私の手許にある著名な諸文庫、圖書館の目錄のどれの中にも見出す事が出來ないのです。

それは縱八寸六分、横六寸一分の大本で、四周無邊、柱書も丁附もなく、一頁十二行詰です。澁色の古雅な表紙がついて居ります。

各行に一首づゝ句を書いてあります。宗祇、兼載、心敬、宗長、宗碩、宗牧、周桂、昌休、昌叱、紹巴など足利中期から慶長、元和頃までの著名な宗匠達の句ばかりが載せられてあります。即ち發句帖と云つても德川時代の俳句集ではなく、連歌の發句の帖なのです。

在庫の分は春の卷夏の卷の二卷各百數十枚以上の厚冊で秋冬の卷は出來たものかどうか不明です。舊所藏者は三十余年間秋冬の二卷を探して得なかつたと聞いて居ります。とに角珍らしいものに相違ありません。刊記はありませんが所收の句からして元和中の刊行と推定致します。

圖版第四十七號參照

(43) 天正記　古活字版　九巻九冊　金百二十圓

外題「天正記」。但し原題簽を缺き、第一巻にのみ此の墨記あり。淡色古雅表紙。製本竪九寸四分、横六寸七分、印面縦七寸八分、横五寸七分、大本。

四周無邊、柱書なし。十二行二十字乃至二十一字。平假名交り古活字印本、まゝ二字つゞきたる活字を使用す、刊記なし。第九巻末に

太田和泉守記之

慶長十五年三月十三日

とあり。仝様の記年は毎巻末に存せりと雖も刊年とは目すべからざるが如し。元和中の印行なるべきか。

「成簣堂善本書目」中に「天正記」八巻三冊本を載せ、元和頃刊となせるに比すれば巻數冊數共に相違すれば本書と異るものなるべし。尙仝書目に十一行本二種ありと傳ふ。亦本書と異るや明かなり。保存上。

圖版第四十六號參照

百枚まいらせられけれは人々くはんきよし候
小袖数々まいらせられ又地蔵院
米行として　あめのひ侍ちうふすりて
新知として　千六百石　三條随意ら
まいらせらるゝ　旧野三ケ村くそんあてらるゝ
小野むら　くさちか村　以上これハ西秋
もちをよむせられ地きのはなれやくそくたつのを
されはすわ天氣のさわひもなくすゝくめくれ
きこらんてうく

太田和泉守記之

慶長十八年二月十三日

天正記共九冊

父母之喪衰冠繩纓菅屨三日而食粥三月而沐期十三月而練冠三年而祥比終茲三節者仁者可以觀其愛焉知者可以觀其理焉強者可以觀其志焉禮以治之義以正之孝子弟弟貞婦皆可得而察焉仁者有恩者也理義也察猶知也

禮記卷第二十

經五千三百三十三字
注二千九百八十一字

保延三年四月廿一日於永昌坊亭見合或本了　東市正賴滋
五月廿一日於大炊亭讀了　年十六

第四十五圖　古活字版　禮記　最終卷末

(42)

禮　記　古活字版　全二十卷 五冊　金百八十圓

縦九寸一分、横六寸五分。廓内縦七寸五分、横五寸五分。四周雙邊、有界。半葉八行、一行十八字詰めでございます。註は雙行になつて居り、柱書は「禮記卷之一（丁數）」になつて居ります。

刊記はありませんので刊年に關する明證は存じませんが、其の植字から見、又版式から見、紙質から見て慶長中の刊行であらうと思はれます。紳田喜一郎氏、川瀬一馬氏の如き人々も同種の印本を慶長活字版と見て居られますから先づ誤りはないでせう。各冊卷頭に［永源書房］［原泉堂］［通涅］の三朱印を捺し、又本文にも朱墨を以つて句讀訓点を施して居ります。書入も隨分多い様です。第二十卷の末には

保延三年四月廿一日　於永昌坊

亭見合或本――東市正賴滋

五月九日於太秦亭讀了年十六

との墨記があります。平安朝末期書寫の禮記とでも校合したのでせうか。感じのよい本です。書き落しましたが表紙は褐色の古いもの、多分原装でせう。題簽は墨で書いて居ります。

「禮記」の活字本は比較的稀だと思ひます。宮内省圖書寮、成簣堂文庫等に各一本を藏される由ですが。

圖版第四十五號參照

見取れぬ程ですが注意深く一字一書につき檢して行きますと漸くハッキリと違ひがわかつて參ります。上卷の末尾に「慶長廿暦八月廿七日　□□重山［花押］」の墨記を存して居ります。

從來の整版の易林本を見た場合それを慶長二年版と受け取るには何とはなしに物足りなさが感じられました。「此の古さで慶長二年版かしら」と云ふ疑問が自ら湧いて來ました。此の物足りなさは此の古活字版の古香に一目接するたけで直ちに完全に除去されます。紙、刷、裝潢共に「文祿蒙求」「慶長元年刊十四經發揮」に直ちにつゞく古版であり、我が國最初の附訓活字版である所の實錄を裕に示して居ります。

圖版第四十三號參照

(41) 源氏小鏡　古活字本　全三冊　金貳百圓

澁色の古き表紙に白き題簽を貼り、墨にて「源氏小鏡」と記せり。

製本は縦九寸、横六寸三分にて、印面は縦七寸三分、横五寸五分、大本なり。半葉十二行、各行二十一字乃至二十二字、四周無邊、柱書なく丁附もなし。各卷々頭に目錄あり。「源氏目錄」と題して桐壺以下の諸編名を擧げたり。本文は平假名交りの木活字版にて、卷末刊記なけれども元和頃の刊行なるべく、慶長十五年十二月の奥書ある所謂嵯峨本「源氏小鏡」とは書名同じけれど植字版式共に全く異る。

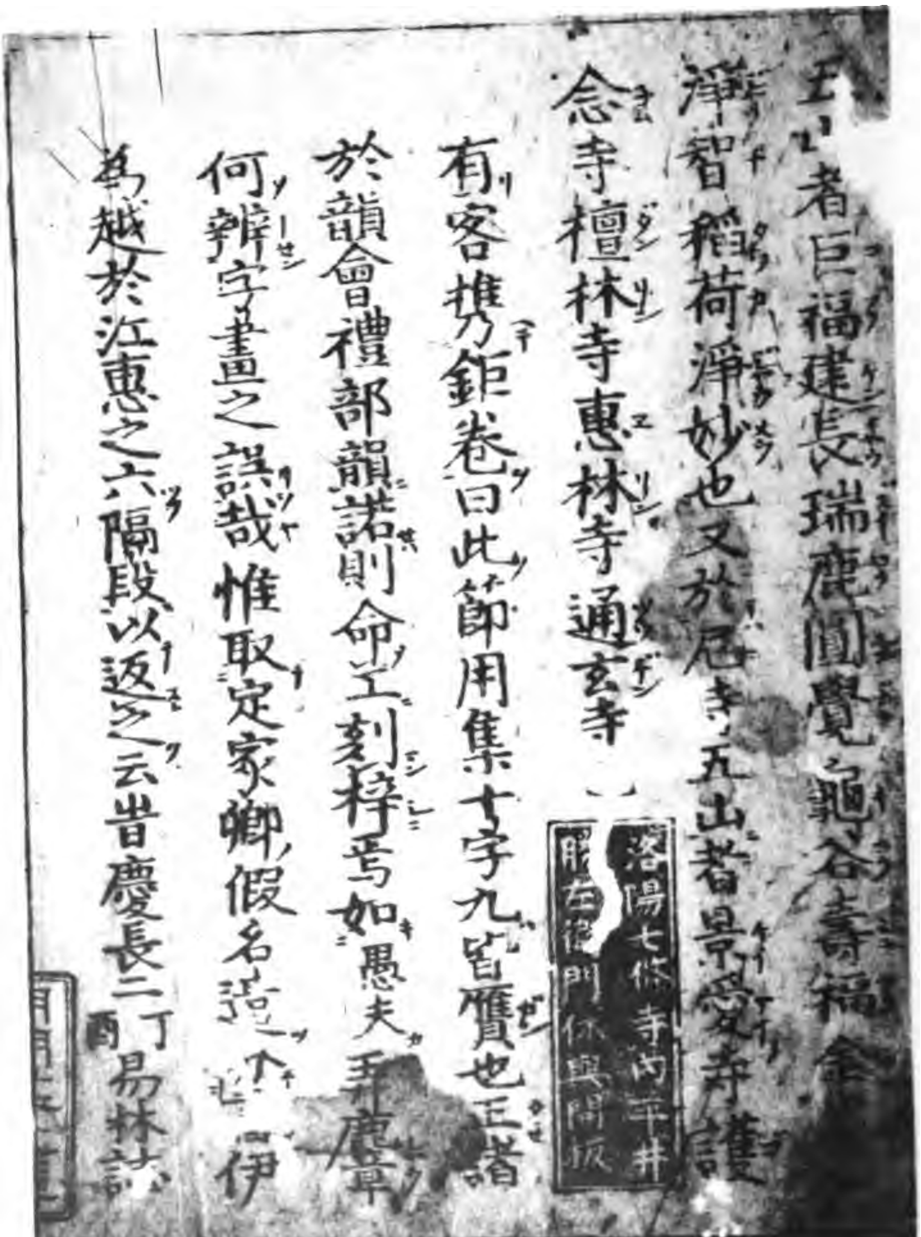
卷頭に「服部氏藏書印」と云ふ正方形の大印あり、又上卷に少しく朱の書入を存するも、全体として生ぶのまゝの感强き上本なり。稀覯。

圖版第四十四號參照

第四十四圖　古活字版　源氏小鏡　巻頭

[illegible]

桐壺といふまきの事内裏のうちにおほき
てんは名をしげいしやと云をきりつぼはのち世
あのきりつぼはおはしまし源氏は御母さうゐをせにふ
そしてきりつぼのかうゐとぞ申けれ此かうゐ
を一の人などはなやめなどしてへおしきうこひ
てこやはらひみちへまいりおほひしそうしはら
めどれおのにらさめの[illegible]ひしうへかうへの女御
かうゐのみやをあそ[illegible]をふるおそれまうこ一所
このかうゐは帝ふかくそおさせ給ふこのまへ二人
おそ給ふおい乃あるにたくかうのかく[illegible]給ふ
やまひつきをおけまへといつきの内にて人のかく逝
おとはる事おけまし帝しをかやてさとへやそ


王者巨福建長瑞鹿圓覺之亀谷壽福金
淨智稲荷淨妙也又於尼寺五山者景愛寺護
念寺檀林寺恵林寺通玄寺
有客携鉅巻曰此節用集十字九皆贋也正諸
於韻會禮部韻諸則命工刻梓焉如愚夫手摩
何辨字畫之誤哉惟取定家卿假名遣之一伊
爲越於江恵之六陽段以返之云旹慶長二丁酉易林誌之

洛陽七條寺内平井
勝左衛門休與開板

第四十三圖 古活字版 易林本節用集刊記

易林本節用集　古活字版　全二冊　金五百圓

古活字版易林本節用集の新發見を御報告出來ます事を至幸と存じます。約一ヶ月前此の世にも稀れな珍書を偶然にも手に入れた時の胸の高鳴りを今も忘れる事が出來ません。

慶長二年の易林の跋のある節用集は昔は活字版だと云ふのが通說でした。それが明治以後になつてから、反對に、活字版でないと云ふのが定說になつて昔の學者は皆間違つたのだらうと云ふ事に略々決定しました。例へば尾崎雅嘉の「群書一覽」西山玉巖の「舊刻書目」黑川春村の「節用集考」桂川中良の「桂林漫錄」等は皆一致して活字版となして居りますが、「古本節用集の研究」では「活字と云ふのは誤りであらう」(全書八十六頁)「活字版と誤認したのであるまいかと疑はれる」(全書九十一頁)とし、「訪書餘錄」では「該書を活字版とするは恐らく誤りなるべし」(重刊本二三四頁)と記し、「日本古印刷文化史」は「此の書を以つて活字版として居るが之れは誤りで整版である事は明かである」と斷定して居ります。大正十五年刊行の易林本節用集の復製の解說中に宮內省、內閣文庫、京大、東北大、岩崎文庫、南葵文庫、三井家、京都圖書館等の藏本も亦皆整版本なる事が報告されて居ります。此の際に此處に紛れもない活字版、現に四五種の異版を存するすべての易林本の祖本と見るべき此の古活字版の出現は德川期の諸學者のための雪冤であり、古活字版研究上の新資料を提供するものと信じます。

古活字版節用集は縱九寸二分、横六寸七分。印面縱七寸八分、横五寸九分。半葉七行、上下及び綴目に單界を有し柱書は「節用集 上(下) 丁數」となつて居ります。全二冊で眞黑な原表紙を存し、題簽はありません。下卷末に易林の跋と［洛陽七條寺內平井 勝左衞門休與開板］と云ふ小刊語を具へて居ります。之れ等は萬事流布の平井版整版本と一致し、唯大さのみが稍々小さく別版易林本（平井の刊語を欠くもの）と類似して居ります。平井版と別版との字劃の差違ある點は、活字版は完全に前者と符合して居ます。右の小異を除く外此の三書は甚だしく酷似して居て一寸見には相違が

(89) 口傳書　古活字版　全一冊　金貳百圓

「口傳書」の此の種の古活字本は一兩年前迄其の存在を知られて居なかつたものです。和田維四郎氏が「嵯峨本考」をものされる時、博捜につとめられながら遂に入手し得ず、否寓目だにされなかつたゝめに、彼の名著の中に未收であつたのを、近時川瀬一馬氏が大阪高木利太氏藏書中に一本と見出し、新しき嵯峨本資料として一昨年はじめて現存唯一のものとして公表せられてから世に知られました。從來嵯峨本と稱したものゝ一種で、本阿彌光悦の家職用の書です。

縱八寸四分、横六寸、四周無邊、柱書なし。十一行十八字詰。刊記はなく卷末に、

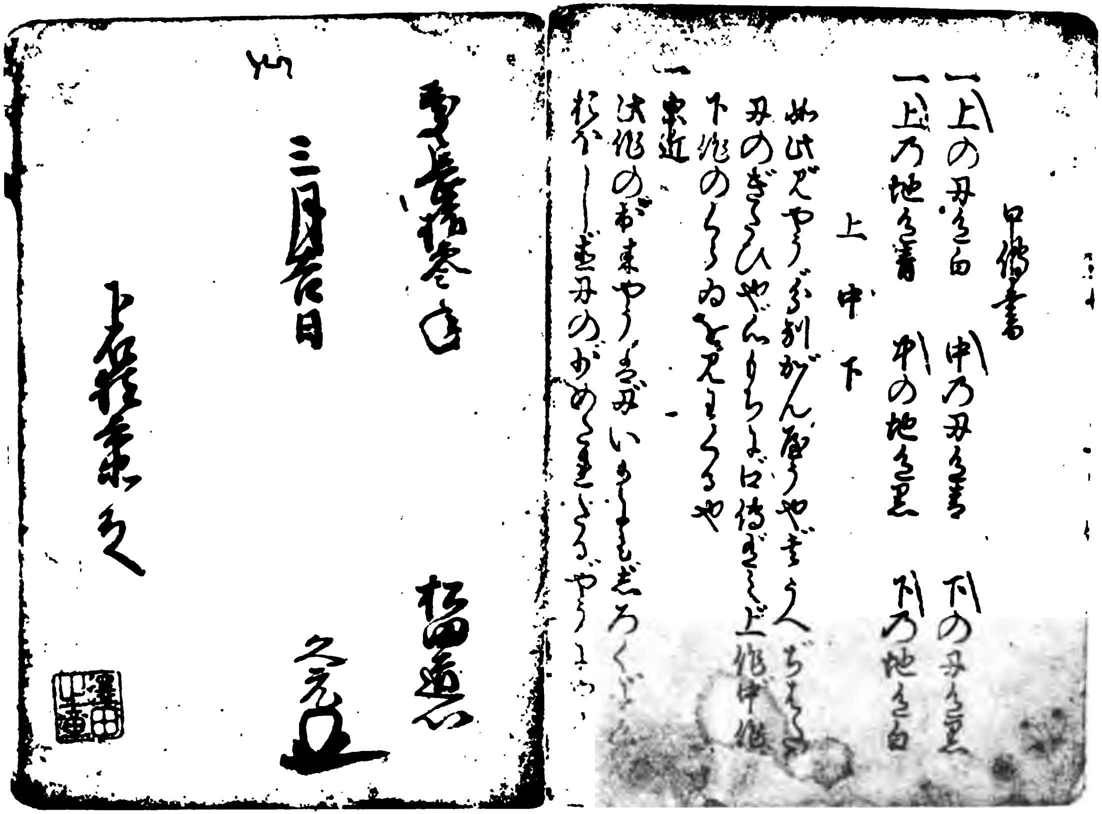
慶長十三年三月吉日　松田道以久元（花押）

下石杜市衛殿

と墨で記して居ります。即ち本書の刊行は慶長十三年乃至それ以前に限定せられるわけです。版式は所謂嵯峨本の「古刀銘盡」と同じで「伊勢物語」「謡曲百番」などは異つて居ります。

在庫分は幸に原表紙（具粉引の色紙を二枚貼り合せ、柿色の上に雲母で松の光悦模様を刷り出す）を存して居り、丹紙の古い書き題簽附けて居ります。之れによつて現在我國に於ける本書の傳本が新らしく一部を加へ全部で二部を數へ得るに至つた事をお知らせの出來ます事を欣幸と存じます。

圖版第四十二號照參



第四十二圖　古活字版　口　傳　書　卷頭及び奥書題記

さこそ情ある人を乃けこそ我
くへ近う寄りて名乗り候へし
本より我等乃為修行人のなるすハ
さけまとも所望なき人をも名
乃り候へしなうよりて名を名乗
くもし長井斎藤別当
実盛ハ此篠原乃合戦よ討たれぬ

光悦本謡曲　三十番　三十帖　金四百五十圓

日本印刷文化史上の一名物である光悦本の中でも、最も有名であり且代表的なものとされて居る観世流謡本百番中の三十番です。
縦八寸、横六寸弱、印刷面は縦六寸二分、横五寸弱。半葉七行、行十二三字。厚様の雁皮紙を貼り合せ、之れに央粉を塗つた五色の料紙を用ひて居り帖装になつて居ります。表紙は同じ紙の上に雲母で文様を刷り出し左肩に淡褐色の題簽をはり曲名を光悦風の書體に書いてあります。印刷は木活字、版下は光悦自筆です。嵯峨本らしい嵯峨本、美しく優雅な本であります。各冊卷首に時習館の印を押して居ります。
曲目は左の三十種です

采女　善界　右近　海士　志賀　舟橋　鵜　難波　朝長　大會　大原御幸　をしほ　實盛　皇帝　野の宮　箙太鼓
玉かつら　殺生石　春日龍神　通小町　柏崎　鸚鵡小町　永室　あこ木　天鼓　をば棄　清經　東岸居士　項羽
杜泉　以上三十番

此の同じ種類の古活字版百番揃ひの完本は現在岩崎文庫のものが知られて居るだけであります。その曲目を之れと比較致しますと多少の出入がある様に思はれます。
圖版第四十一號參照

(37)

秘鈔目錄

古寫本　全一冊　金二十圓

外題は古い白楮紙の表紙の上に打ちつけに

秘鈔目錄　幷聖教類聚之名
　　　　　八祖讃

とあります。內題は「秘鈔日記」として秘鈔第一、全第二から第十七まで各經名を數個づつ擧げて第十七の末に已上本記分、と誌して居ます。次に「異尊四卷」を記し、次に「作法上下二卷」を記し以下「屬星供作法」一卷「諸尊支度」一卷「諸尊卷數」一卷「酉酉地藏院傳受次第、秘鈔」の順に記し、更に「諸尊類聚所引之先德名字事」を書し、其の後に「山門之書目錄少々」を擧げ最後に龍猛より弘法まで八祖の略歷を誌して居ります。末尾に

永萬元年極月中旬

　　　奉受金剛佛子待賢

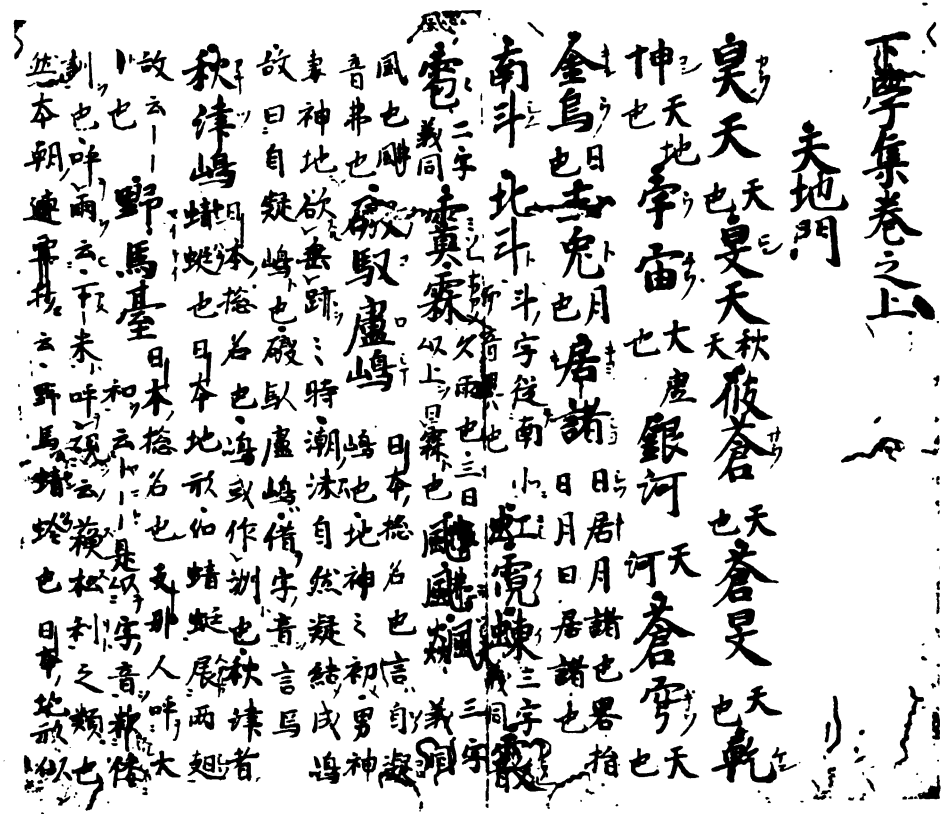
と別筆で朱書してあります。書風雄勁で古体を存して居りますから或ひは此の時代のものではないかと思はれます

縦五寸三分、横八寸一分。總紙數八葉。

圖版第四十號參照



第四十圖　古寫本秘鈔目錄表紙



下學集卷之上

天地門

昊天 天也 旻天 秋天 旼蒼 天也 蒼昊 天也 乾

坤 地也 宇宙 天地也 大虚 銀河 天河 蒼穹 天也

金烏 日也 玉兎 月也 居諸 日月居諸也 日居月諸 日月也

南斗 北斗 斗字從南 虹霓 蝃蝀 三字 霰

雹 二字義同 霙霖 以上雨也 三日已上霖也 飂颸颭 三字義同

風也 䬅 駁盧嶋 日本惣名也

秋津嶋 蜻蜓也 日本惣名也 日本地形似蜻蜓也

野馬臺 日本惣名也

第三十九圖　明應本　下學集　卷頭

(36)
下　學　集　　明應八年古寫本　　全二冊　　金貳百五十圓

「此の書は分類體の辭書にして類を十八門に分ち本文は眞字にて記し片假名にてよみ方を付けたり。漢文にて註したる語多し、卷首に撰者の序あり」と（國語學書目解題六八頁）此の記事主として元和三年及び寛永二十年刊の整版本に基くべし。此處に揭ぐる所の寫本は即ち明應年間の古寫にかゝり其の內容は之れ等刊本との差違多く、本邦古辭書の沿革史上重要なる一新資料なり。

此の書上卷は縱九寸二分。横五寸八分。袋綴じの册子なり。奧書は

明應八年己未九月十一日山城國相樂郡於當尾中殿書寫之　右筆五十七

□□□□□

としるしたれど□の個所は墨にて塗りつぶしたれば判讀し難し。別筆にて　本主　豊久　及び、東大寺□□院及び、山邊梅實豊彥[花押]の墨書及び[光日]の黑印[朝倉藏書]の朱印あり。下卷は書寫年代略々同じけれど筆異る。表紙に重祐の墨記あり。重祐は即ち高野博士藏の「銘肝腑集鈔」（太平記古寫本）の舊所有者にして、足利中期の學僧たるべし。本書下卷は或ひは同人の自筆にかゝるべきか。

內容を寛永二十年刊本に比するに文字に少異あり。刊本の方が可成に分量多く、其の多き部分は各門の終りにのみあるを以つて、此は後人の新に附加せるものの如し。又よみかたは刊本は多く漢音にて附し、古寫本は多く和訓にて記したり。又刊本上卷は「支體門」を以つて終りたるも、古寫本は其の後に「雜々字和記」「妙樂大師八箇大事」「弘法大師十五無益」等を附し、又下卷は刊本の「點畫少異字」を以て終れるに對し古寫本は更に其の後に「日本國六十餘州名記」を附したり。文安元年に東麓破衲の筆になりし此の和學辭書の眞の姿は此の著撰述後間もなく書寫せられし此の貴重なる古寫本の研究によつてのみ髣髴し得らるべし。圖版第三十九號參照

(35) **言塵集**　古寫本　二冊　金三十五圓

縱七寸五分、横五寸二分、題簽なし。奥書には年代なく、唯最後の頁に、

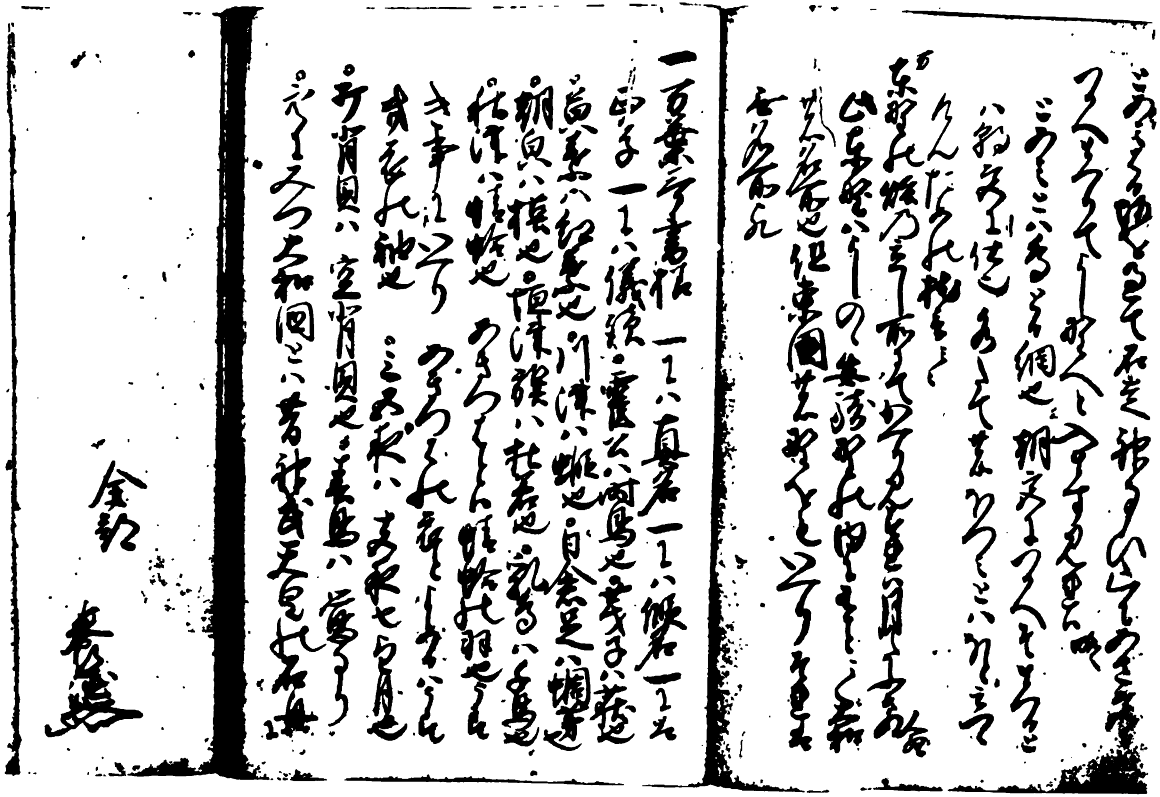
全部　養徳 花押

と書したるのみ。別に古筆の極札樣のものを存し、之れには、

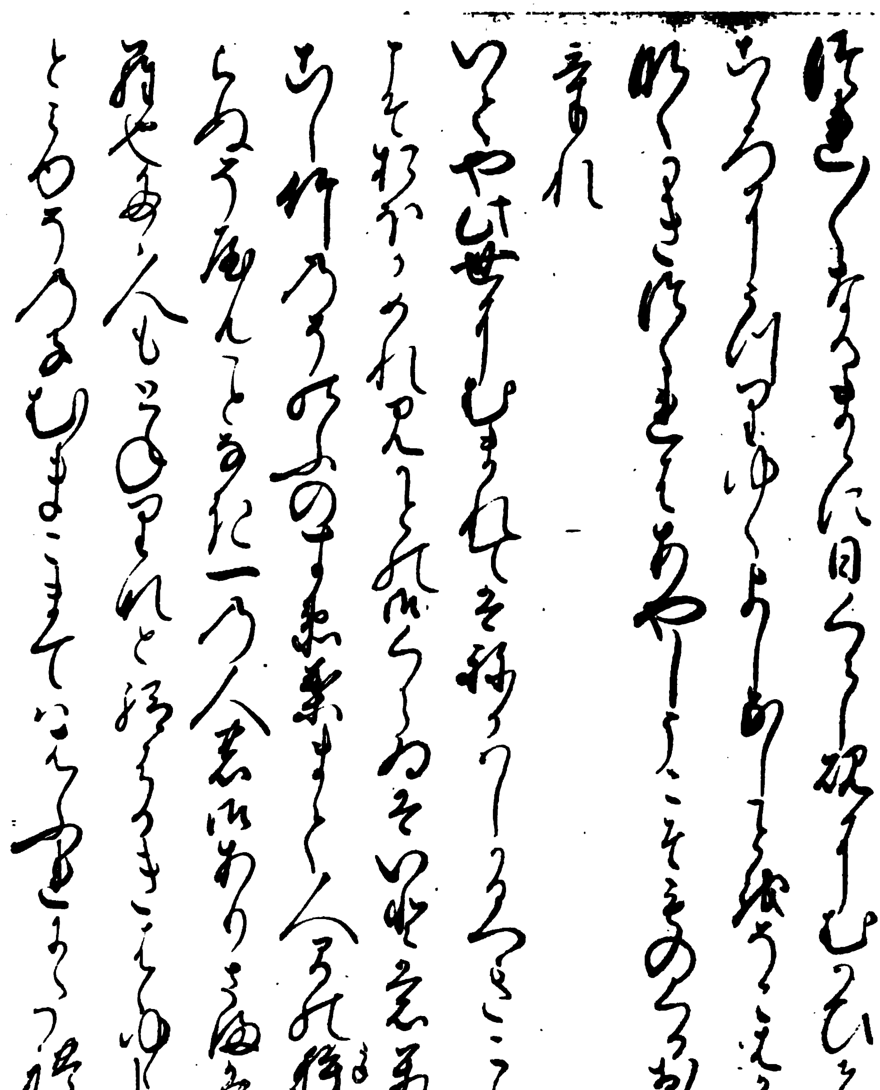
今川家養徳筆　名判在

としるしたり。紙質の古さ、書体の勁さなどよりして足利末期に下らざる頃の書寫と認む。筆者の今川養徳なる人の傳は未だ審らかにせざるも、其の今川と云ひ養徳と號する點より見て、本書の著者にして中世に於ける聞ける歌學者の一人たる今川了俊の晩年徳翁と號したるより察して、或ひは其の近親者の一人たるべきか。之れを「國語學書目解題」所載の承應三年の刊本と比するに、目次は大体同じき樣なれ共、まゝ同筆の書入ある點異る。又刊本は七卷本なる由なるも、此の古寫本は四卷本なり。本書元來歌學の書なれ共、總論の部の外は多く言詞の解なるを以つて國語學書の一の如し。傳本比較的少しと思はる。

圖版第三十八號參照



第三十八圖　今川養徳筆　言塵集　内容の一部及び署名



第三十七圖　古寫本徒然草卷頭

(34) 徒然草　古寫本 傳河野秀信卿筆　全二冊　金四十圓

縱八寸一分、横五寸九分。胡蝶裝、桐箱入。

表紙は古雅なる絹地に金砂子置きたる青き色の題簽をかけ、「つれ〳〵草上(下)」と草体に書きたり。本文の書寫の年代は寛永より元祿の間になれるものか、一頁に十行づつに書きたる筆蹟美し。用紙は楮紙なり。

奥書なきも本文は流布本と略々一致するが如し。唯章段の流布本と異る點一個所あり。即ち下卷第十二段（流布本百四十八段）の「四十以後の人、身に灸を加へて云々」の段の次に「鹿茸を鼻にあてかゝぐべからず」の章あるを流布本には一段として立てゝ第百四十九段になすと雖、本寫本に於ては第十二段中に入れて一段とす。爲に全体として章段の數一段少きを特色とす。

河野秀信卿筆なる旨は箱に古き墨書あり。奥書なし。

圖版第三十七圖參照

(33) 兼好法師集　古寫本　全一冊　金二十圓

縱八寸、橫五寸八分。胡蝶綴、古裂を以つて表紙とす。

本文の用紙は金泥にて雲、波、草花等の形を押し、又は靑、褐色等に文様を刷りたる五色の色變り紙を用ひ、歌を二行に書す。墨附六十二枚。

此の集は上下二卷に分つものと卷次を分たざるものとの二系統あり。本書は後者に屬す。本文は略々群書類從本に一致すれども彼になくして之れにのみある歌一首あり、即ち、

「ある人にいざなはれて四國見に渡し時波風あらかりし事をおもひいでゝ

世の中をわたりくらべて今ぞしる
阿波のなるとは波風もなし

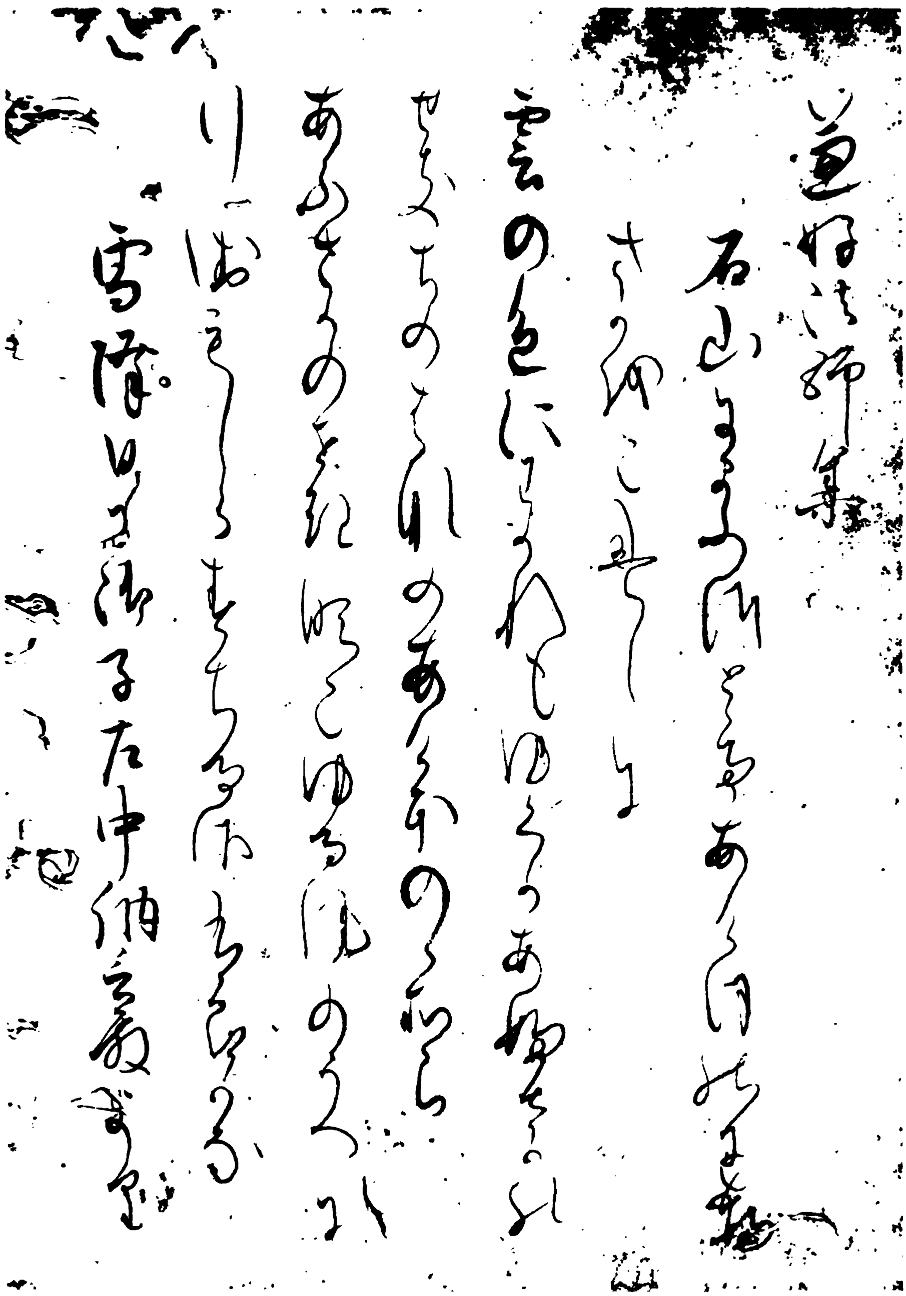
と云ふが之れなり、一異本と云ふべし。同種の傳寫本を曾つて野村八郎氏が雜誌國語と國文學誌上にて「余が最近に得たる兼好法師家集」として紹介せられたる事あり。

奧書は

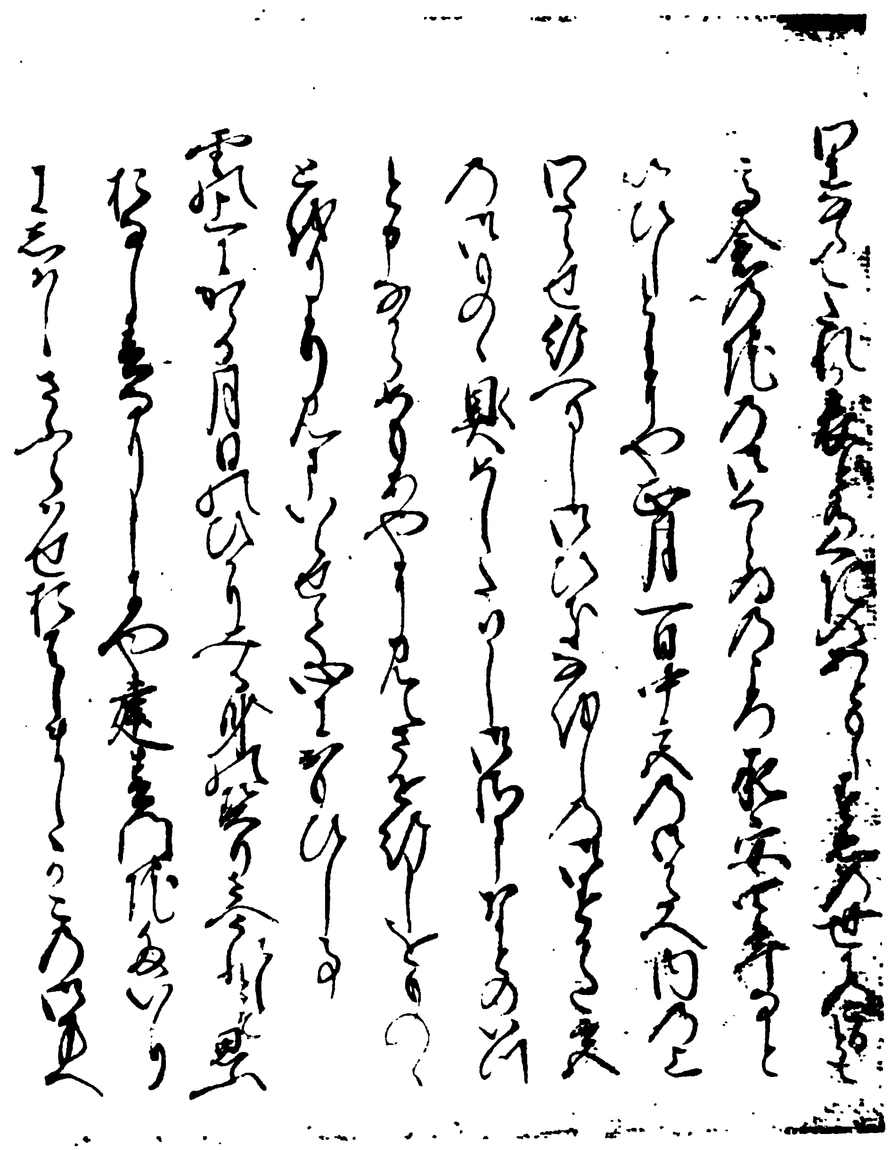
延寶第七仲夏天　　黃門藤　花押

とあり、公卿補任其の他を案ずるに藤原定淳の筆寫にかゝるなるべし。」

圖版第三十六號參照



第三十六圖　古寫本兼好法師家集巻頭



第三十五圖　古寫本建禮門院右京大夫集卷頭

(32) 建禮門院右京太夫集　古寫本　全一冊　金二拾圓

縦五寸八分、横五寸三分、美しい桝形本です。表紙は鶯色の絹地に雲形をあらはし、丹色の題簽には「建禮門院右京太夫集」と達筆に書いてあります。見返しは金泥のつぶしに輪違ひの文様、用紙は鳥の子。奥書はなく、本文の終つたところに世尊寺系圖として一條攝政伊尹から右京太夫までの家譜を書いてあります。

本文は群書類従本と大差ないのでせう、小異はあります。書寫年代は徳川初期で筆蹟は非常に美しく、鎌倉期の舊鈔本を臨寫したものゝ様に見えます。行成の六代の後裔、定信の孫であり又重盛の子平資盛の愛人たりし此の佳人平家一門の榮華と沒落とを背景として詩と戀愛と思ひ出の中に一生を終へた麗はしの此の巾幗詩人の歌日記に晩春の宵の微鬱を拂ひ給へ。

圖版第三十五號參照

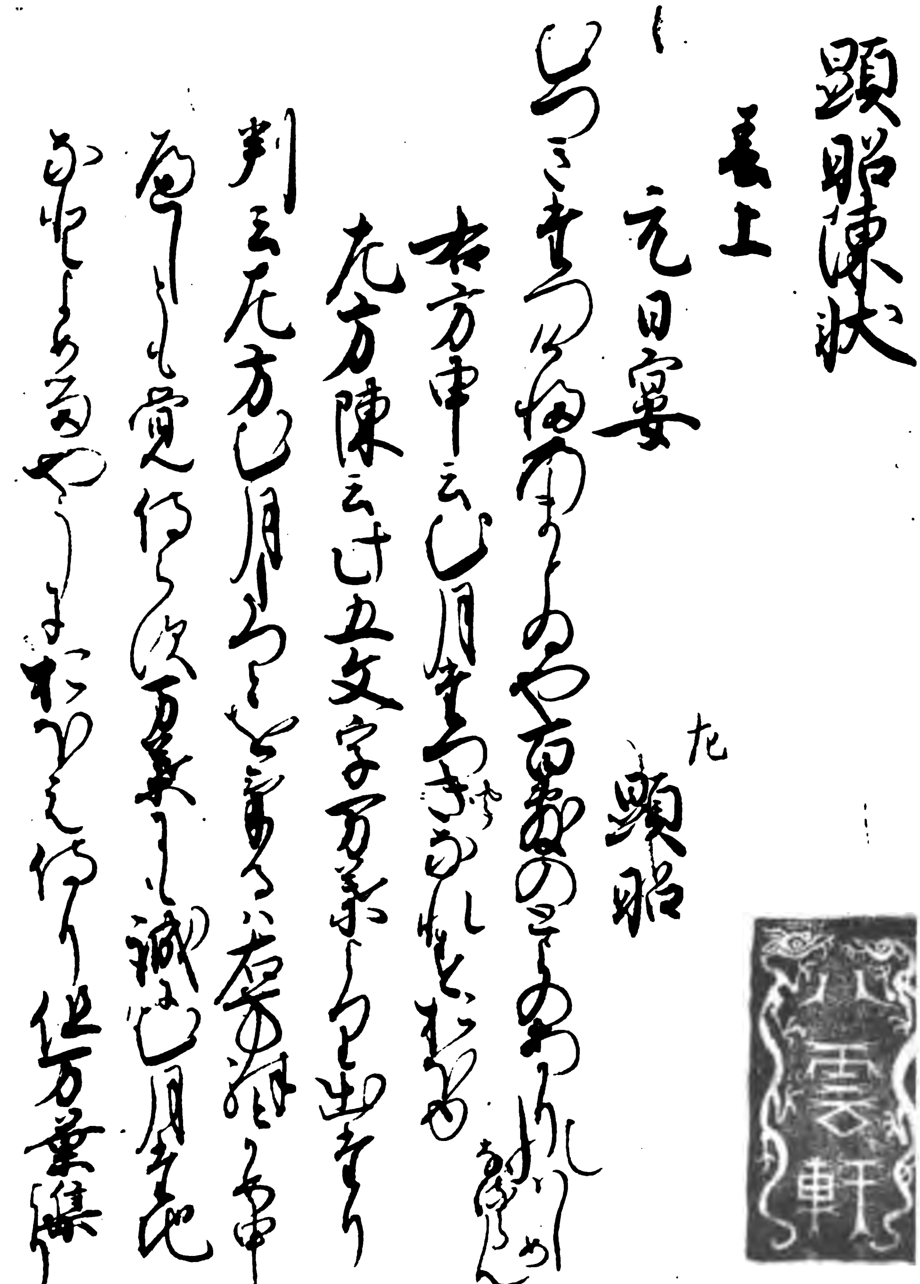
(31)
顯昭陳狀　　古寫本　　全一冊　　金十五圓

歌壇空前の學匠法橋顯昭の手になる顯昭陳狀一卷は歌論史上、最も注目すべき作品の一なり。此處に載する所の古寫本は脇坂安元手澤本の一にして、藏印數個の跡を留む。縱八寸四分、橫六寸一分、楮紙の裏表に半葉九行に書したり、書寫の年代は寛永頃なるべし。

本文は處々に校合のあとを留めたるも略々群書類從本と一致す。類從本は藤原元長本の傳寫なる宗勝の藏本を底本とし宮紫一清藏本を以つて校合したりとあれば、弊莊藏の寫本も元長本の系統を引くものなるべきか。

圖版第三十四號參照

第三十四圖　古寫本顯昭陳狀卷頭



少年の春はをしめともとゝまらぬ物なれは
きハやよひの廿日あまりにもなりぬ御前の
木たち何となく青みわたれる木くれ
中に中嶋の藤ハ松にのみとおもひかほに咲かゝりて
山郭公まちかほなるに池の汀の八重山
吹ハ井手のわたりにやと見えたり光源氏の
身もなけつへきとの給ひけんもあはれにさふら
ひわらはのちいさきをなかして一枝をらせて
源氏の宮の御方にもてまいりたまへれハ
ゝ中納言中将なとやうの人ゝさふらひて

第三十三圖　古寫本狹衣物語　四冊本卷頭

（30）さごろも物語　古寫本　全四帖　金七十五圓

縱七寸八分、橫五寸五分、胡蝶裝。

紺地の紙に金泥にて草花を書ける美しき表紙。中央に赤き題簽を付し、「さごろも春（夏秋冬）」と書す。全四帖を春夏秋冬の四季に分つ。書寫の年代は近世初期なるべきか。楮紙の裏表に各十行に記したる筆蹟は尋常なり。奥書なし。本文は略々流布本と一致すれども、まゝ小異同あり。夏の卷々頭に數葉の欠丁あるは惜むべし。

圖版第三十三號參照

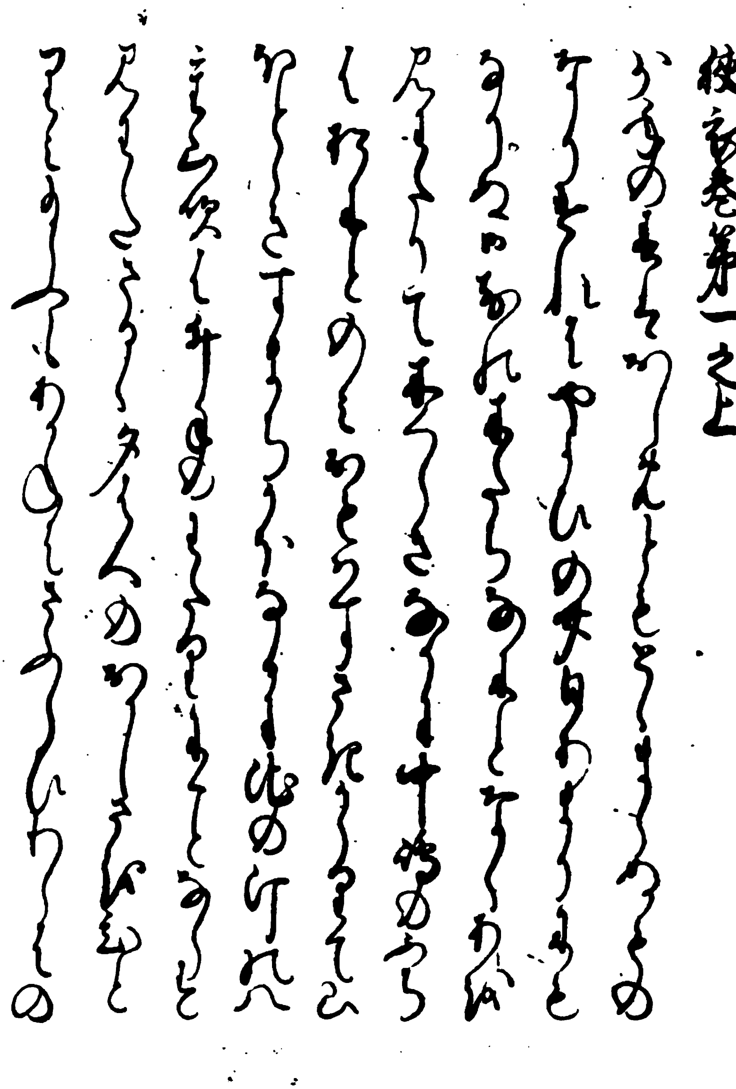
(29) 狹衣物語　古寫本　全十册　金百二十圓

美しい寫本でございます。表紙も中味も。

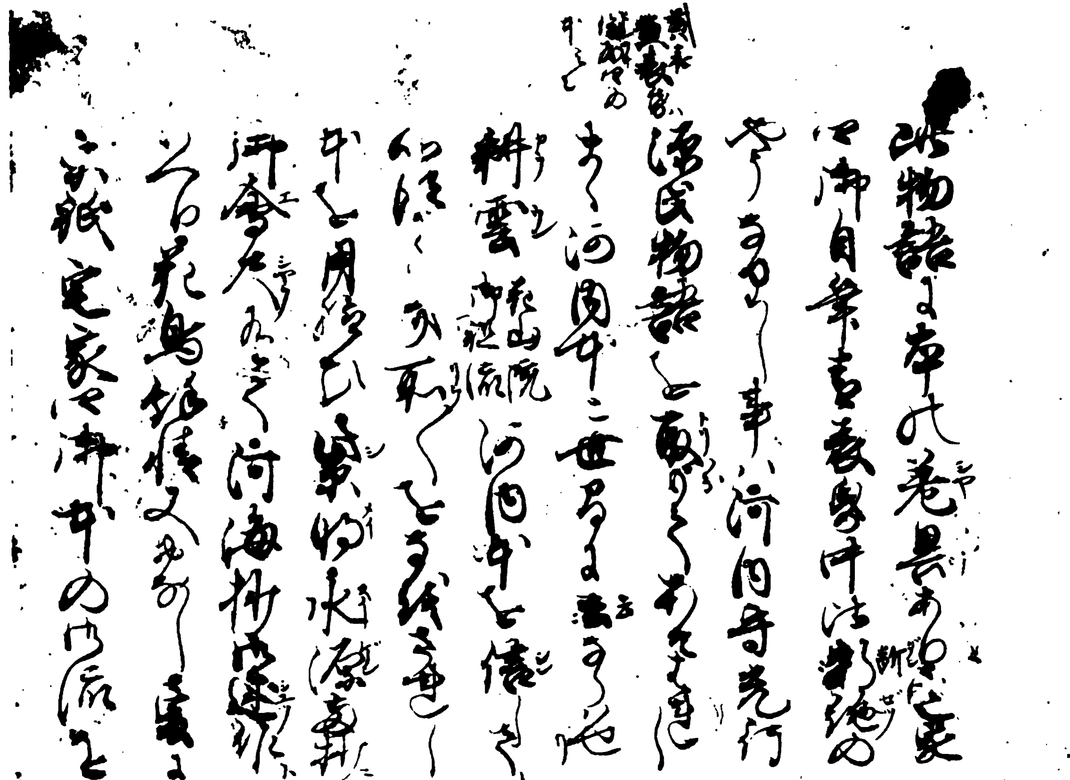
縱八寸、橫五寸九分のやゝ大形の寫本ですが表紙は紺紙の上に、金で上部に雲を、中程に草花を、下部に水の樣なものを書き、やゝ華麗とも云へる程美事です。中味は淡褐色の紙の裏表に半葉十行に書き流し、筆は柔かく美しうございます。書寫の年代は寛文前後でせうか。全部胡蝶裝で十册になつて居り、一、二卷が上下に、三、四卷が上中下に分れて居ります、此の十册本は寫本としては割合に少く、版本としては承徳三年の繪入刊本がありますので、此の版本の寫しとか思つて少ししらべましたが、少しづゝ違ふ樣でございます。何分奥書を存して居りませんので本文の系統はハッキリとは判りませんが、無論深川本ほどの異本ではありますまい。少しづゝの差違が此の古典の本文校訂の上にいくらかでも役立ては幸福だと存じます。

美しい事は御請合出來る美本です。

圖版第三十二號參照



第三十二圖　古寫本狹衣物語　十冊本卷頭



第三十一圖　古寫本源氏物語之抄　卷頭

(28) 源氏物語之抄　古寫本　十七冊　金七十五圓

縱五寸四分、横七寸五分。横本。

古い澁表紙をつけ、外題は表紙の左肩に「源氏物語之抄」と打ちつけに書いてあります。奥書はなし。書寫の年代は慶長前後と思はれます。達者な勁い筆です。各卷首尾に「八雲軒」「藤亨」「安元」の三印を押す事は他の八雲軒本と同樣です。

內容は紹巴抄であります。成立後あまり遠くない時代の書寫本と覺ぼしく、此の本の傳本としては最も古いものの一に屬しませう。所々朱で合點を附し校合もし、又圓點の聲點を附して居る個所もあります。末摘花の卷尾に「永祿七端午日中終功了」とあり、花の宴の末には「永祿七五廿五朝天終功了」薄雲の尾に「永七八三　朝霧の川べや時の鳴海潟」槿の尾に「永祿七八六」乙女の末に「永七八十三、快き色は夏の野山かな」玉かつらの終りに「永祿七八月廿日立筆二十九日晦也今日朔三ヶ日間終功了」初音の尾に「永祿七重陽前日終功了」螢の末に「永祿七九廿二於灯終功了十九日ニ筆立し」眞木柱の終に「永祿七十月四日朝天終功了」竹川の尾に「永祿七臘十八未刻終功」宿木の尾に「永祿八二六及黃昏終功其朔日日暮立筆二五日月次於私宅張行了」とあるはいづれも本書の成立年代を語るものとして興味がありませう。惜らくは十一、十六、十七の三卷を欠いて居ます。

圖版第三十一號參照

(27) 源氏物語弄花抄　古寫本　三帖　七十圖

縱七寸八分、横五寸三分。無地の青の素朴な表紙をつけ題簽はありません。胡蝶裝。書寫の年代は足利末期を下りますまい。此の書完成後間もなく書寫されしものと信ぜられます。

筆勢は健放でよく彼の時代の特色を備へて居ります。はじめに「光源次年次」を記し、次に「源氏物語聞書或説幷料簡加之」を數頁記し、しかる後に本文の註釋に入つて居ます。奥書は

「本云文明第八仲夏初九入眼畢」云々の肖柏の記及び「追聞書初聞之後十四年、長享三季春中八於種玉受庵主說合點了」の追記を具へ、更に「一答トハ」云々「一勘トハ」云々と註を書し、其の奥に

右肖柏老人聞書借請之　六月廿七日立毫連々忩忙八月十七日終其功七冊、調之靜加一見可清書抄出也

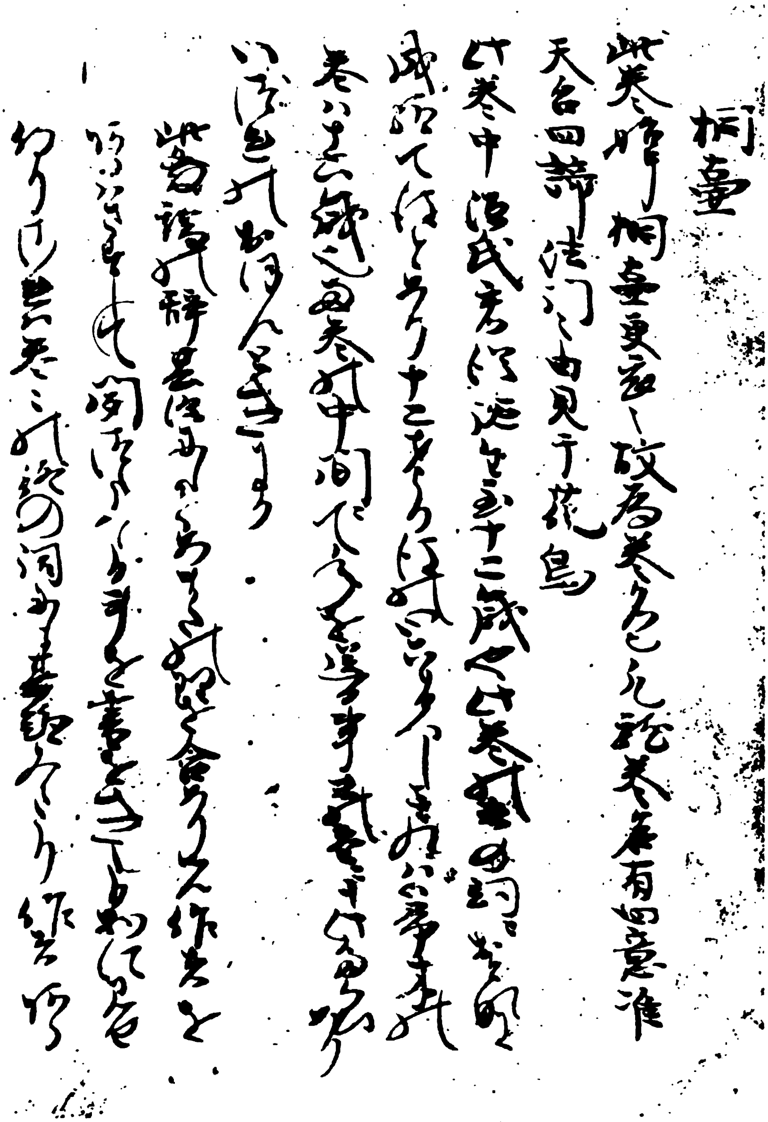
永正七年記之

とあり、更に其の奥に「女房裝束抄」として二頁ばかり記し最後に

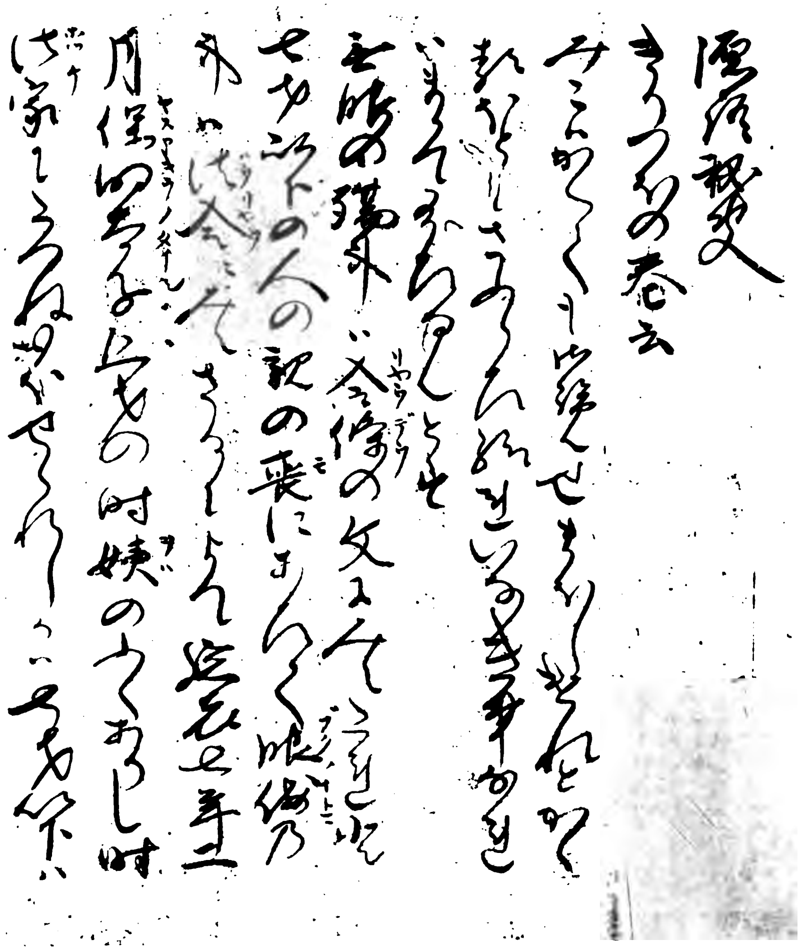
此抄六月下旬立毫今日終書功調之爲七冊不可多見而已　永正第七八月十七日

と記して居ります、此の詳細なる奥書は自ら弄花抄成立の經路を物語ると共に、本寫本の寫本として價値を裏書きするものでせう。弄花抄の現存諸寫本中最も重要なるものゝ一なる事は疑ひありませんが惜むらくは全六帖乃至七帖の內三帖を存するのみです。初帖と終帖とを存するをせめてもの幸と致しませうか。八雲軒藏印あり。

圖版第三十號參照



第三十圖　古寫本源氏物語弄花抄卷頭



第二十九圖　古寫本源語秘訣卷頭

(26) 源語秘訣　古寫本　一冊　金二十五圓

縱八寸、横六寸五分、一寸見ると大桝形の樣な本です。無地の青い古い表紙がつき、題簽はありません。袋綴じでございます。書寫の年代の寛永二年なる事は奥書で分明です。

奥書の第一は

「御成恩寺奥書

唯傳一子之秘說也、堅可禁外見者　御判」

とあり、つゞいて奥書の第二は

「光源氏物語秘曲一帖令附屬英因法師雖爲子孫無其器用者不可傳之者也

延德二年後八月八日　前大僧正判」

とあり、その次に第三の奥書として

右一冊者光源氏物語之秘事三ヶ之大事並十三ヶ條各十七條也、口傳全部物語講尺成就候刻傳授候處也

寛永二年八月吉日　北野豐　花押

脇坂淡路守殿

とあります、即ち圖書寮藏の松岡行義舊藏の本及び尊經閣の藏本と同じく、此の書の著者一條兼良から其子冬良に附せられてから十三年後の寫本の系統を引くもので、奥書が普通の本と一寸異つて居る點が興味があります。本文も流布の類從本とは可成異つて圖書寮本に近似して居る樣に思はれます。脇坂安元の師北野豐某の自筆本でせう。非常に達筆です。

圖版第二十九號參照

(25)

源氏桐火桶

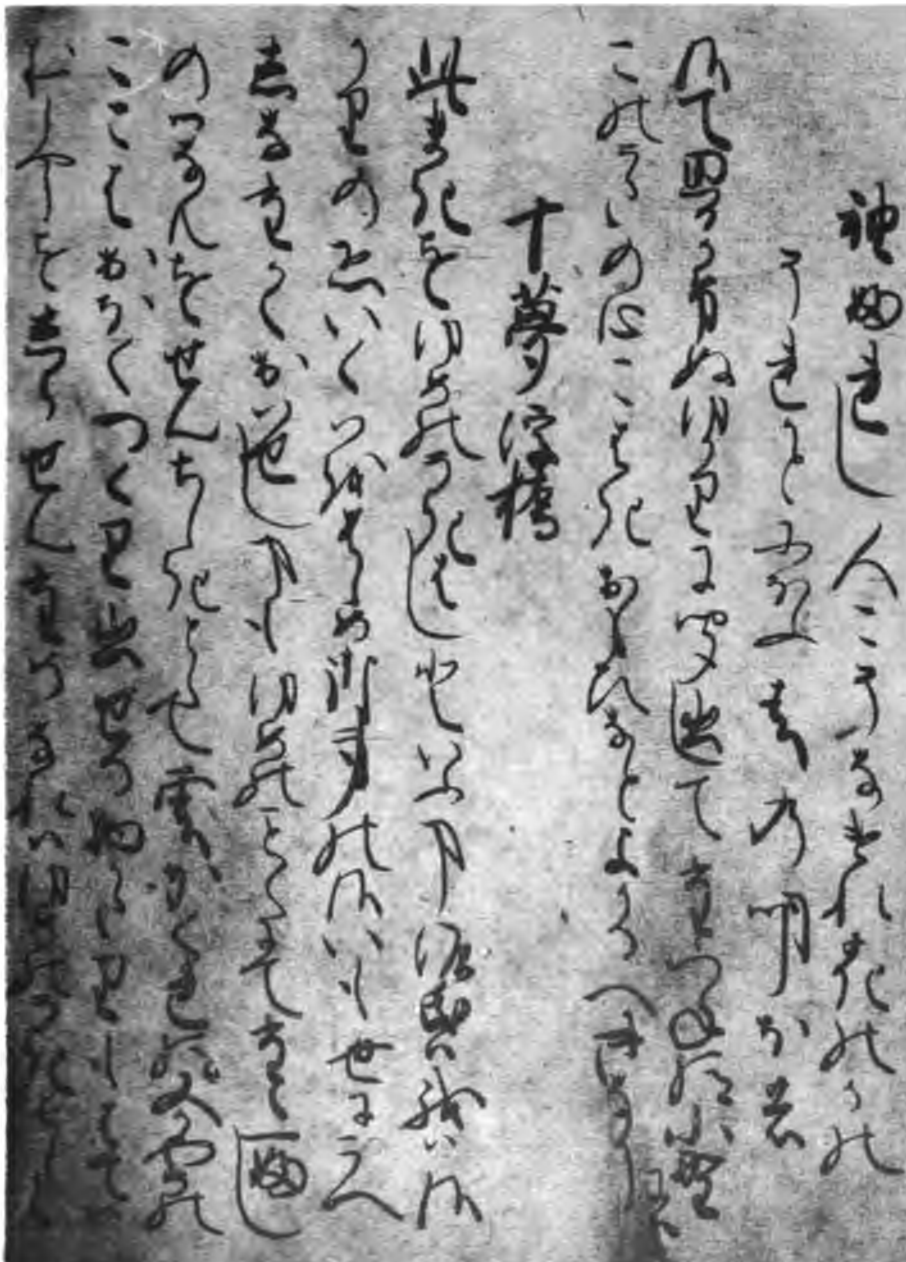
傳近衞信尋筆
古寫本

全二冊　金六十五圓

縱七寸六分、横五寸五分。胡蝶裝。古き桐箱入、箱の裏に「近衞殿信尋　桐火桶上下全國」と云ふ古筆極札を貼りたり。表紙は古き朽葉色の絹に五三の桐の紋を青黃白の三色に織り出したる裂を用ふ。上卷の見返しに貼紙あり、「信尋公御筆、源氏物語桐火桶上下二冊、上ノ紙數四十七枚掛目拾匁二分、下ノ紙數四十四枚掛目卅七匁六分、極札添」と極めて詳細に記したり。楮紙の裏表に半葉十一行乃至十三行に書したり。

桐火桶と稱するも定家撰と傳へらるゝ同名の歌書とは無關係にて、大体源氏小鏡の一種と見るを得べし。流布の「小鏡」とは可成に出入多ければ其の異本の一なるべし「小鏡」に桐火桶の名稱を附したるは珍とすべきが如し。信尋筆と云ふも確證なし、書寫の年代は略々其の時代なるべく寛永期と見るを得べし。

圖版第廿八號參照



第二十八圖　古寫本源氏物語桐火桶　夢の浮橋

源氏御談義

桐壺

一何ノ御時ニカトト云ハ延喜ノ御時ヲ申シイフ

一更衣ノ更ハ義和里ヨリ始マル也

一女御 三位 更衣 五位 女蔵人 六位

一アツヽシクトハヨハリナヤミタル病也 靈運當是ト云又

篤ノ字ニシモアツシヽクト読ナリ

一アイナウ 無益也

一玉ノヲノコミコ 源氏生給事ヲ云也

一メツラシ 珎イ ト云起ハ神功皇后新羅征伐ノ時シ、皮ノ軍



第二十七圖 古寫本 源氏物語千鳥抄 卷頭

(24) 源氏物語千鳥抄　古寫本　全一冊　金壹百五十圓

縱八寸三分、横六寸一分。大形の楮紙を袋綴じにし半葉十行に書す。筆致勁放なり。表紙は濃綠の古き紙表紙にて中央に小さく「源氏御談義」の題簽を附す。書寫年代は足利末期なるべきか。卷首に「八雲軒」卷尾に「藤亨」「安元」の三藏印を押す。近世初期脇坂淡路寺安元の舊藏本たり。

千鳥抄は源氏註釋書中、傳本最も稀少に屬し、東京帝大國語學研究室藏の加持井宮舊藏本の大震火災に滅してより又好傳本の數ふべきもの寥々として少なく、多年學界の恨事とせられたりしものなり。家藏本は其の書寫年代或ひは加持井宮舊藏本よりも古く、又片假名本なる點、標出したる主要なる語句に聲點も付したる點等より見て、現存の最も重要なる千鳥抄の一寫本たりと云ふを得べし。濁點には圓圈を用ひたる事も古き樣式なりと云ふべし。奧書は「昔四辻儀同三司光源氏の物語講讀の席をひらかれて」云々にはじまり「于時應永廿六年季春下澣之れをしるす」に終る。更に其の奧に「件本就載法橋之秘本也恩借之刻誂少童、白地令寫之、雖有文字之訛謬、校合功早　幸下叟」とあり。此の兩奧書を存する傳本宮內省圖書寮に一部を存するのみ。源氏物語註釋書史上貴重なる一新資料なり。

圖版第二十七號參照

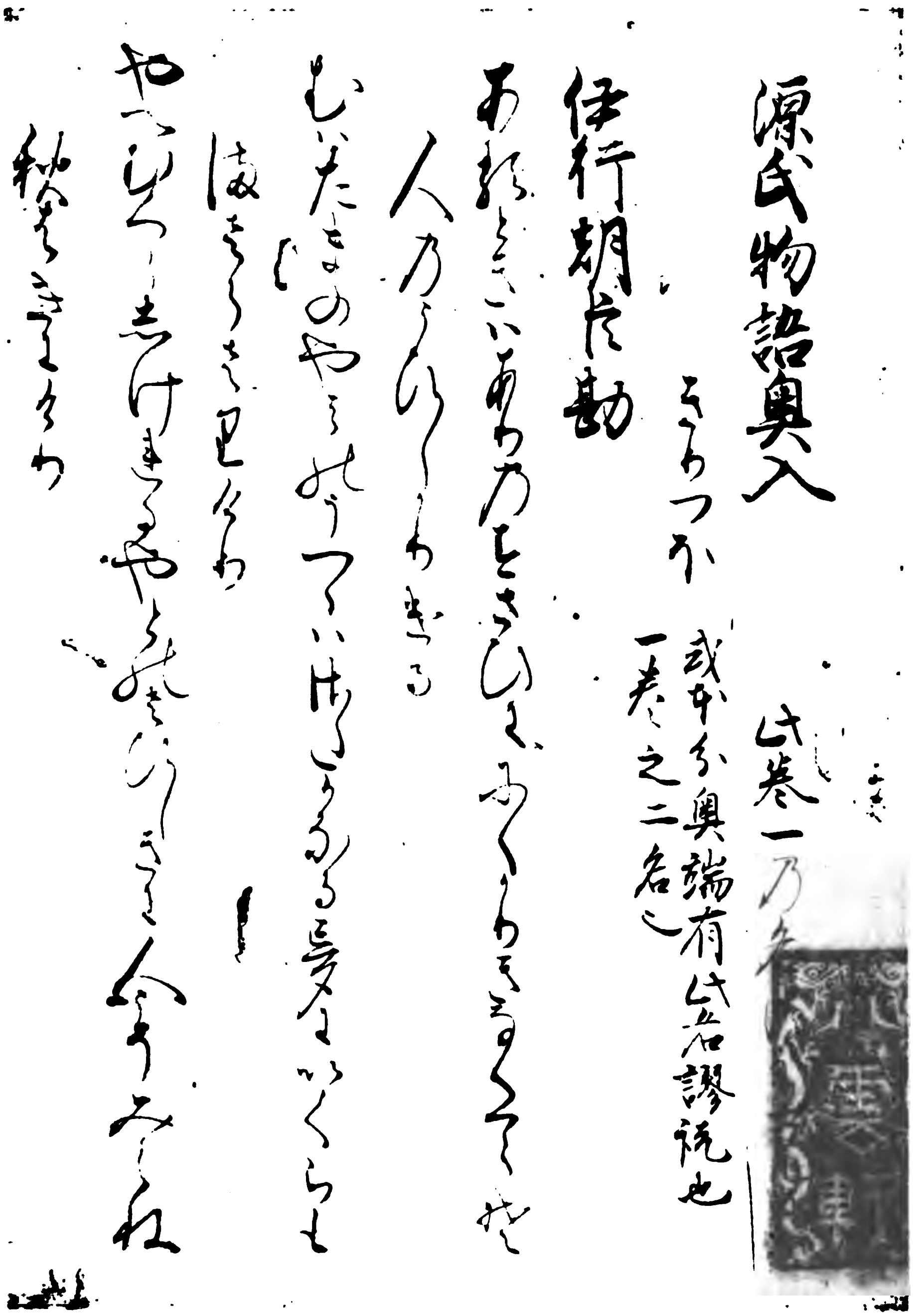
(23) 源氏物語奥入　古寫本　一冊　金七十五圓

縱九寸三分、横六寸二分。大形の楮紙を袋綴じにして、半葉八行乃至九行に書いてあります。近世初期の筆寫本でございませう。表紙は白地に金泥で雲及び草木の模様を書き題簽は雲母を押した紙の上に「源氏物語奥入」と大きく書いて左肩に貼つてあります。卷頭卷尾に「八雲軒」「藤亭」「安元」の三印を捺して居ります。

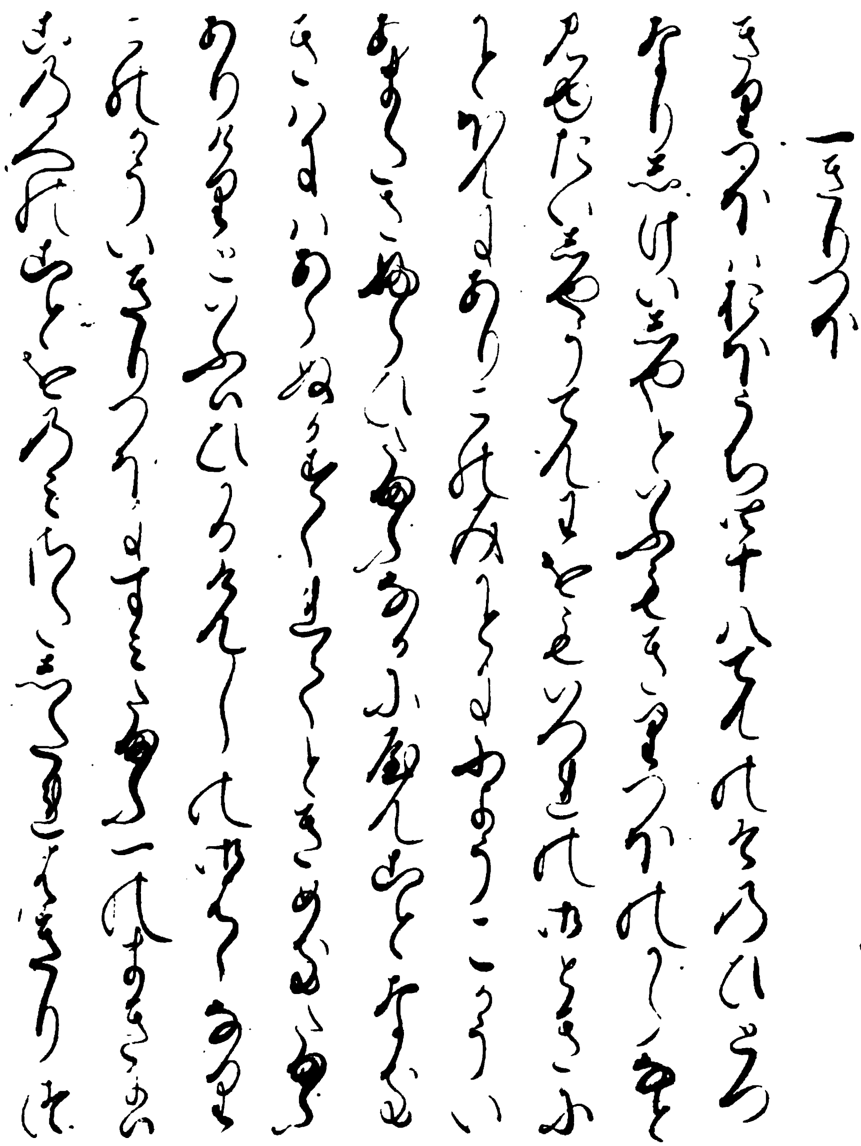
本文を群書類從本其の他の諸本と比しますと出入が甚だ多いのに驚かされます。一々擧げる煩に堪えませんが、例へば、桐壺の卷の中程の「三條右大臣家屛風、貫之」の句の前に「今さらにとうべき人もおもほえず、やへむぐらして門させりてん」の和歌を載せ又箒木の卷の中程の「戀しさを何につけてか慰めむ、夢だにみえずぬる夜なければ」の次に「鈴鹿山いせをのあまのぬれ衣、しほたりたりと人や見るらん」「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわがみとおもはん」の二首をのせて居りますが之れ等は諸本に見えぬ歌であります、此の外、他本にあつて之れになきもの、他本になくして之れにのみ存するものは到底一一此の紙上には書き盡せません。どちらかと云ふと類從本などよりも高野博士秘藏の藤原冬自筆の本に似たる點が多い樣ですが、差違も非常に多くございます。

傳本の極めて少い「奥入」の本文校訂上、又一歩進めて「伊行釋」の推定上重要な一資料だと存じます。

圖版第二十六號參照



第二十六圖　古寫本源氏物語奥入卷頭



第二十五圖　古寫本三帖源氏巻頭

(22) 三帖源氏　　古寫本　全三冊　金百圓

縦七寸九分、横五寸五分。胡蝶裝。古き淡褐色の絹に淡黄の模様を織り出したる高雅なる表紙の中央に 三帖源氏上（中、下）としたる美しき題簽をはる。

書寫年代は近世初期なるべきか。楮紙の兩面に半葉十行に書し、時に註を二行に割註したる個所あり。上卷には先づ序を書し、次に桐壺より花散里十一卷を、中卷は須磨より藤の裏葉まで二十二卷を、下卷はわかなより夢の浮橋まで二十一卷の要領と略註と和歌とを記したり。卷頭の序文の中にては源氏物語著述の動機、卷の數を天台六十卷にかたどりたりとの說、紫式部の名の由來、伊勢物語との類似點等を書きしるしたり。本文中には和歌の掲出甚だ多く殆んど原本の歌の大部分を網羅し、併せて其の引歌を多く記したり。源氏大鏡、光源氏一部歌幷詞、淺聞抄、源氏無外題等と稱する諸寫本多く之れと類を一にす。東大、神宮文庫等に各寫本一本を藏すと。

此處に掲げたるは類少き美寫本にて全三冊を春慶塗の桐箱に收めたり。稀覯と云ふべし。

圖版第二十五號參照

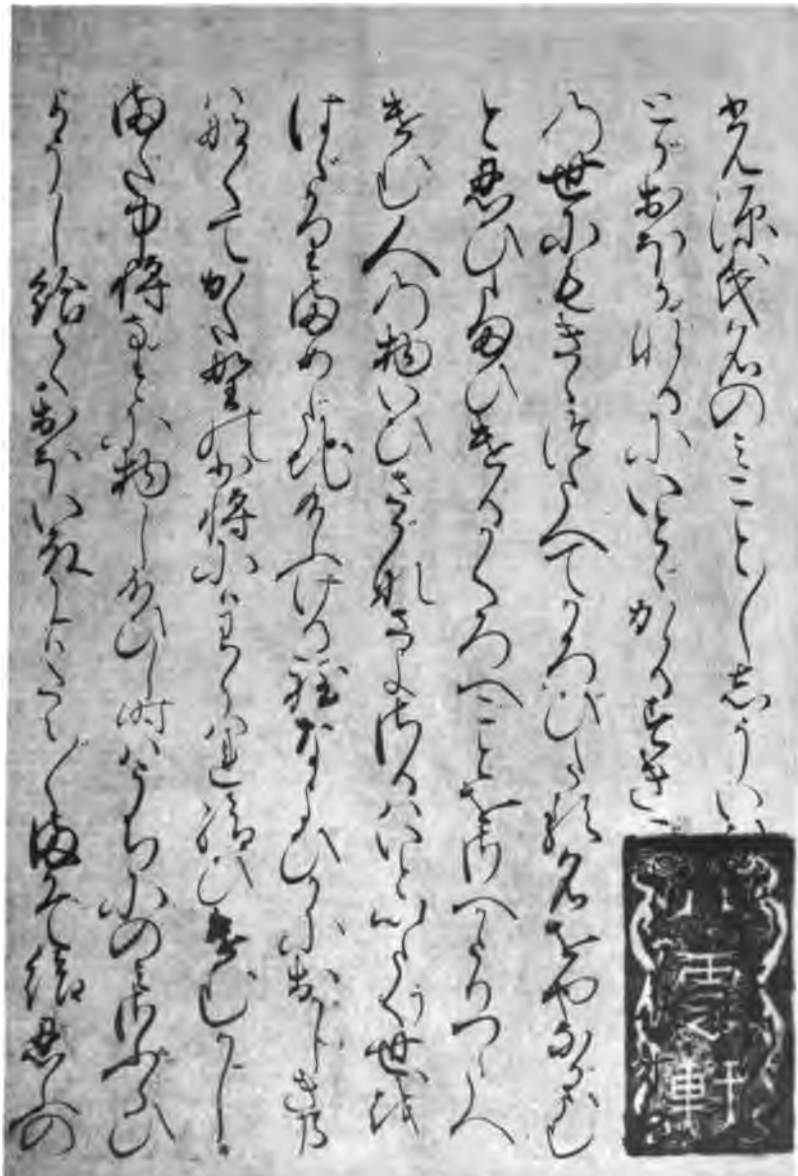
(21) 源氏物語　古寫本　五十二冊　金八十圓

縱八寸、横五寸七分。楮紙を袋綴じにし、半葉九行に書寫せり。書寫年代は元和、寛永の頃なるべく、各卷首尾に「八雲軒」「藤享」「安元」の三藏印を捺したり。脇坂安元の舊藏にかゝる。表紙は濃き紫紺色の紙表紙中央に卷名をしるしたる題簽をつけたり。

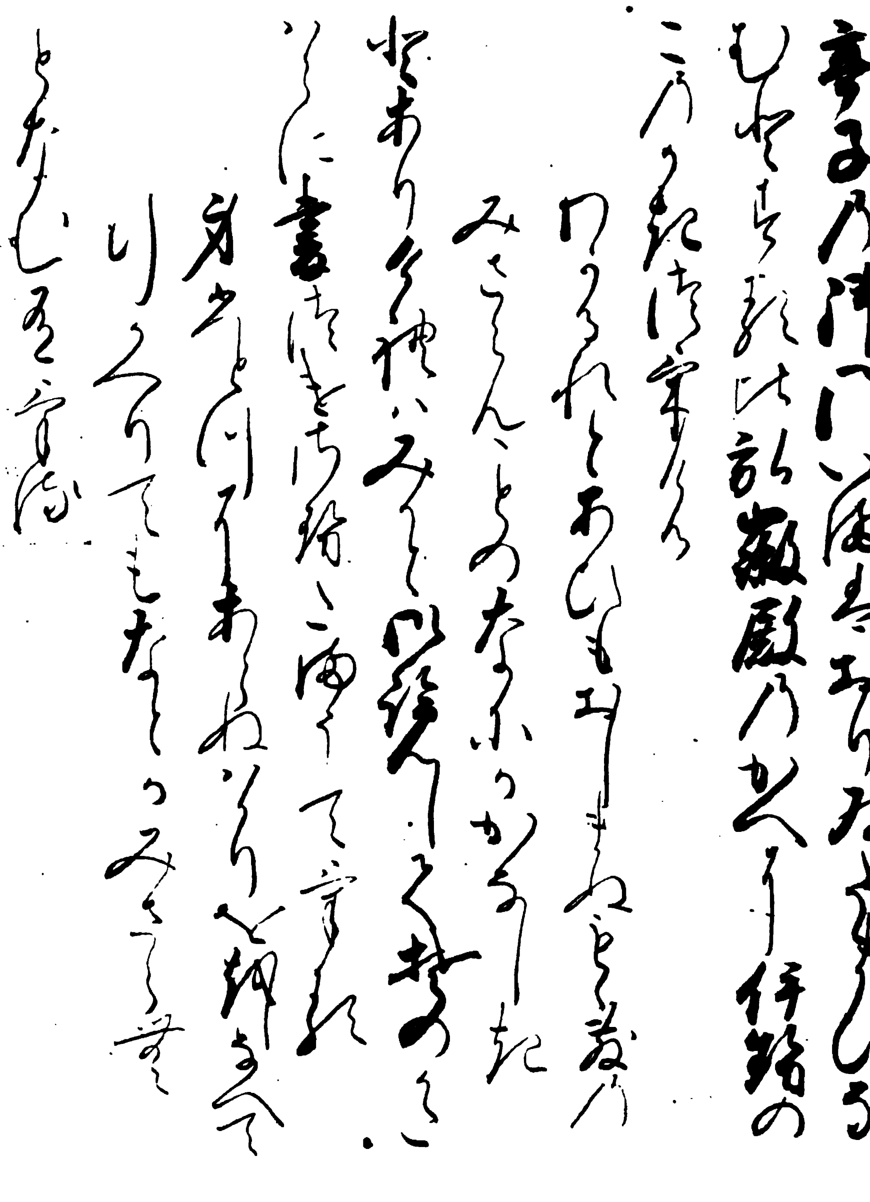
本文は靑表紙本の系統らしく、異本と校合して差違を書入れあるも、此の個所多からず。まゝ朱にて合點を附し、且全文にわたりて一々詳細に濁點を附したるが特徴となすべきか。所々にテニオハを「みせけち」にしたる個所も見受けらるゝ様なり。筆勢古雅なり。

全五十四冊の內、桐壺と野分の二卷を欠く、惜むべし。

圖版第二十四號參照



第二十四圖　古寫本源氏物語卷頭



亭子の帝のいまはおりゐさせたまひな
むとするころ弘徽殿のかべに伊勢の
ごのかきつけける
わかるれどあひもをしまぬもゝしきを
みざらむことのなにかかなしき
とありければみかど御覧じてその
かたはらに書きつけさせ給うける
身ひとつにあらぬばかりをおしなべて
ゆきめぐりてもなどかみざらむ
となむありける

第二十三圖　古寫本大和物語卷頭

(20) 大和物語　古寫本　全二冊　金三十圓

縦七寸五分、横五寸六分、胡蝶装。青地の絹に、淡黄色にて文様を織り出したる表紙の中央に「大和物語上(下)」と書きたる古き美しき題簽を附す。見返しには金泥を置きたり。一枚の紙の裏表に半葉十行つゞに書く。書寫の年代は元祿期前後なるべし。

本文は爲家自筆の二條家系統本に屬する如く、群書類從本と比するに大差なく小異を數ふるを得。著るしき相違は下巻末の「霜雪のふるやの」云々の歌の次に「花山院の御つくり物がたりなりとある本にあり」と、あたかも本文の如く記したる點なり。

此の種の傳本宮內省圖書寮藏の一本及び池田氏藏の文明古寫本を數へ得と云ふ。古体を存するものと稱すべきか。又上下の段の分ち所、流布本と異り。上巻の尾は「大空はくもらずながら神無月云々」の歌に終り、下巻首は「大膳のかみ公平の女ども」云々にはじまれり、異とすべきが如し。

圖版第二十三號參照

(19) 伊勢物語繪卷　古寫　全三卷　金百八十圓

下卷の奧書によれば、詞書の筆者藤原公尹、畫の筆者正三位基董となす。公尹は阿野家の支流、山本家の人、今の子爵家の祖なり。基董は中御門の分流、壬生基起の二男にして石山子爵家の祖なり。「古畫備考」卷三に、

石山師香、始名基信又基董、壬生基起卿二男、權中納言從二位、享保十九年十月十三日薨年六十三

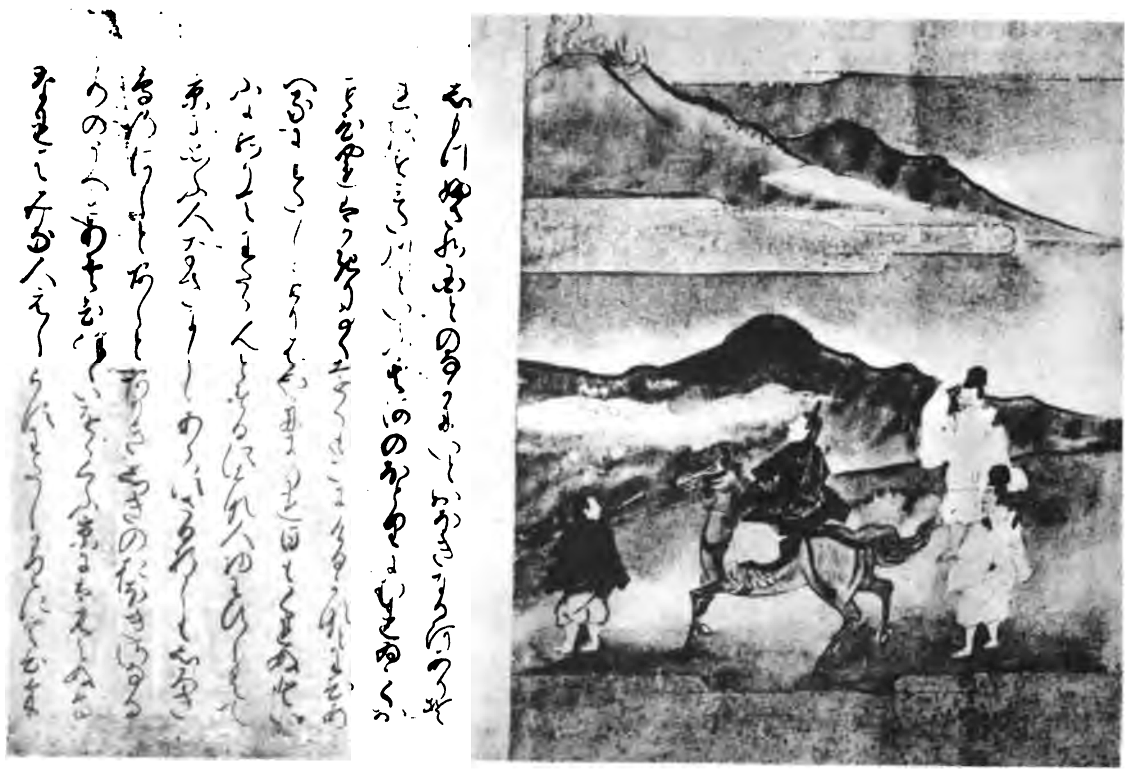
とあり又「書畫一覽」に

書法成一家妙彫物細工又能和歌

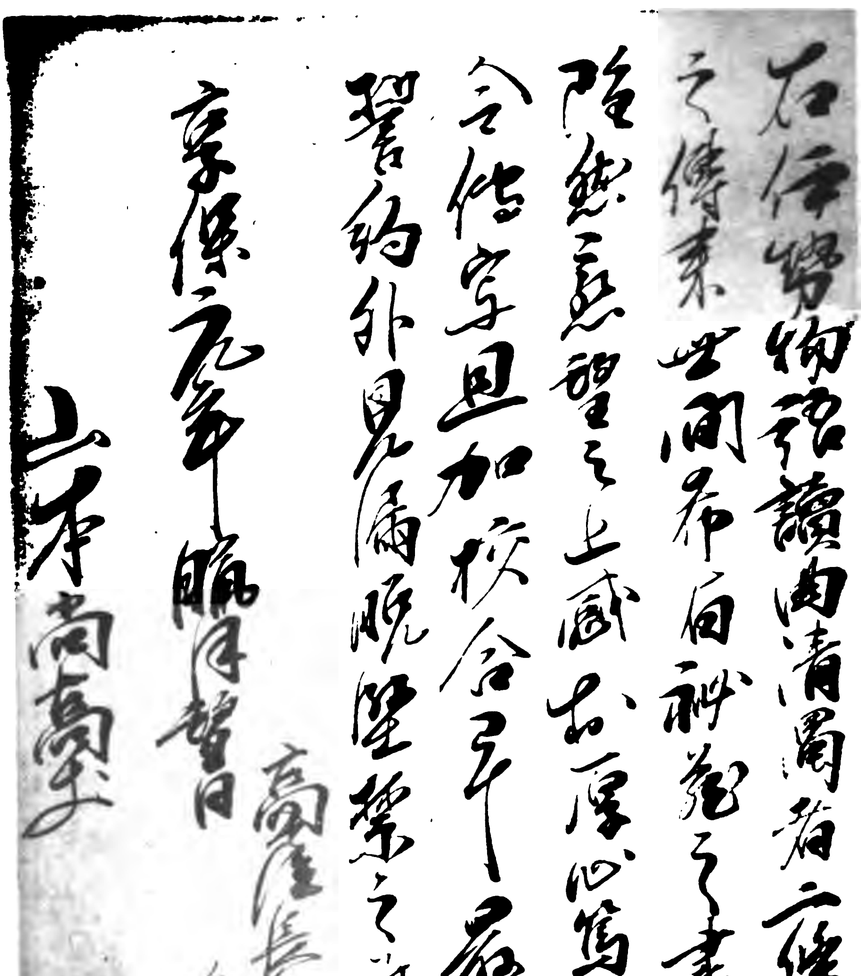
とある人なり。伊勢物語の本文二十五段を書きたる公尹の筆は二條流の趣きを留め金銀朱黃彩色美しき數十葉の繪を描ける基董の筆は奈良繪風なり。「右伊勢物語依所望染筆畢藤原公尹」「右依或所望畫早正三位基董」と云ふが第三卷末の奧書なり。

縱七寸六分、錦裂を以つて表裝し、二重の箱に入りたり。元來袋綴じ本なりしを何時の頃か卷子に改めたりと見ゆ書寫の年代は師香の基董を稱する事より察して寶永年間なるべし。

圖版第二十二號參照



第二十二圖　古寫本伊勢物語繪卷



第二十一圖　古寫本伊勢物語　高雄長徹本奥書

(18) 伊勢物語　古寫本　高窪長徹本　全一帖　金二十圓

縱七寸七分、横五寸八分。胡蝶裝。

表紙は濃緑色の無地の絹を用ひたれど、半ばすりきれたり。享保元年の書寫本にて書体は定家を學びたるが如くなるも奥書は定家本系統のもの一もなく、唯本文末に、

「右伊勢物語讀曲清濁者二條家之傳來世間希有秘藏之書也、雖然懇望之上感知厚心篤實令傳寫且加校合畢、最如誓約外要漏脱堅禁之候也、

享保元年臘月望日　　高窪長徹

山本尚高丈　　近久（花押）

とあり。即ち二條家秘傳の讀みくせを傳へしものと見ゆ。

勘物を行間に挿入せる點より見れば、武田本の系統に近きものなるべきか。

圖版第二十一號參照

(17)

伊勢物語　古寫　武田本　全一册　金二十圓

足利の中期に武田伊豆入道紹眞が秘藏した故に武田本の名稱を附せられた定家自筆の「伊勢物語」の一本は、轉々して細川幽齊の手に入り更に德川家康の藏に歸したが其の後姿をかくした。此の系統をひく所謂武田本の「伊勢物語」は定家本系統の古寫本中最も稀少せらるゝものであるが、其の特徵は（一）本文が武田本である事（二）勘物が行間に存する事（三）武田本の奥書を有する事、とされる居る。

本書は完全に此の三條件を具備したる武田本の一傳本である。即ち本文を比較するに、そは疑ひもなき武田本であり、勘物は天福本と違つて皆行間に附記してある。且武田本の奥書なる（別葉寫眞版參照）「合多本所用捨也、可備證本云々」を持つて居る。

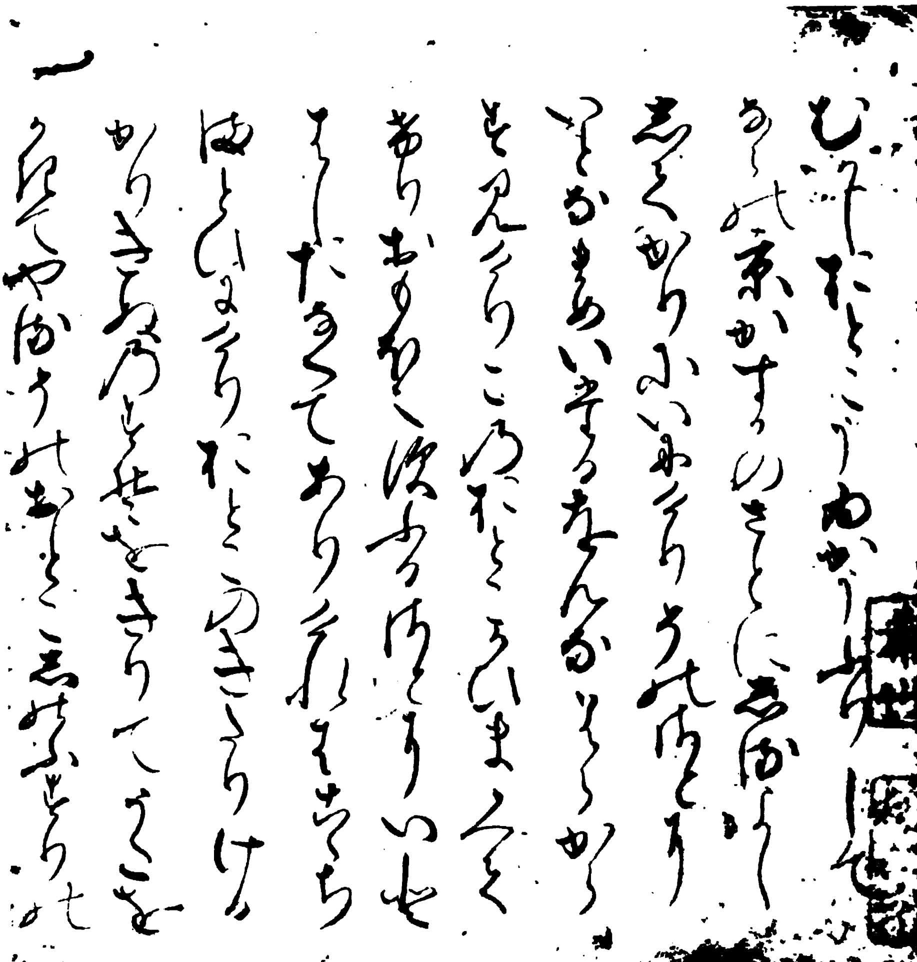
縱七寸五分、横五寸一分。淡き水色無地の紙表紙。題簽なし、胡蝶裝。書寫年代は元祿前後か、厚手の和紙の裏表に九行に書す。伊勢物語研究上參考となすべき一本であらう。

圖版第二十號參照

合多本所用捨也可備證本
近代以狂使事爲端之好事者
之人之業也更不可用之
此物語古人之説不同或稱在中將自書
或稱伊勢之筆作就彼此有書落事
上古之人説不可尋之作者只可翫詞
華言葉而已

戸部尚書

第二十圖　古寫本伊勢物語　武田本奥書



第十九圖　傳家隆筆　伊勢物語　天福本卷頭

(16) 伊勢物語　古寫天福本 傳家隆卿筆　全一帖　金九十圓

縦五寸四分、横五寸四分。全くの正方形なり。表紙は鳥の子紙にて題簽も題書もなく、時代の「さび」「つや」のみ床しくのこれり。見返しに紙を貼り、此の紙の上に

家隆卿筆　伊勢物語

と書し、[希世][橘松藏]の二朱印を押す。胡蝶装なり。本文は鳥の子紙の表裏に半葉十行づゝに書し、奥には業平より河原左大臣融に至る履歴と「かそへなく」より「みやび」までの註釋、所謂勘物を附し、更に其の奥に

天福二年正月廿日巳未申剋陵桑門之盲目連日風雲之中遂此書寫授鍾愛之孫女也同廿二日校了

とあり。以上全く定家自筆本の一系統なる天福本の各條件を具備す。念のため本文を比校するに、亦天福本たり。家隆卿筆を傳ふと雖も確證なし。恐らくは鎌倉期の書寫にはあらで南北朝乃至足利初期の傳寫たるべきか、尤も現存天福本の傳本としては最も古きものの一に屬し、其の形式又純粹に近きが如し。桐箱入。

圖版第十九號參照

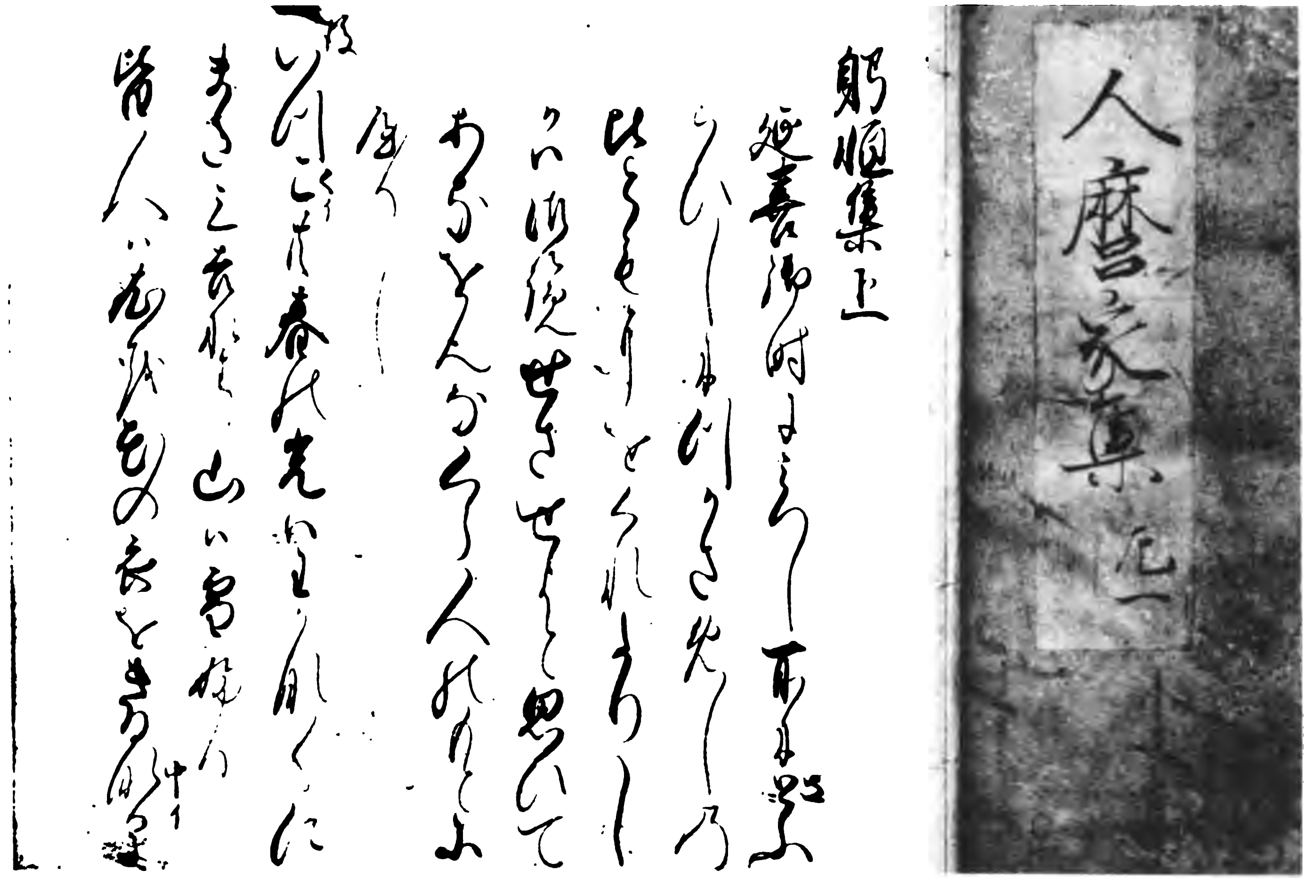
(15) 三十六人歌集　圓池宗朝筆 古寫本　全三十六帖　金二百二十圓

三重の箱に入つた非常な美寫本です。三十六帖完全に揃つて居て、四冊乃至八冊づつ六つの小箱に藏められ其の上に塗箱、更に其の外を桐箱で保護して居ります。

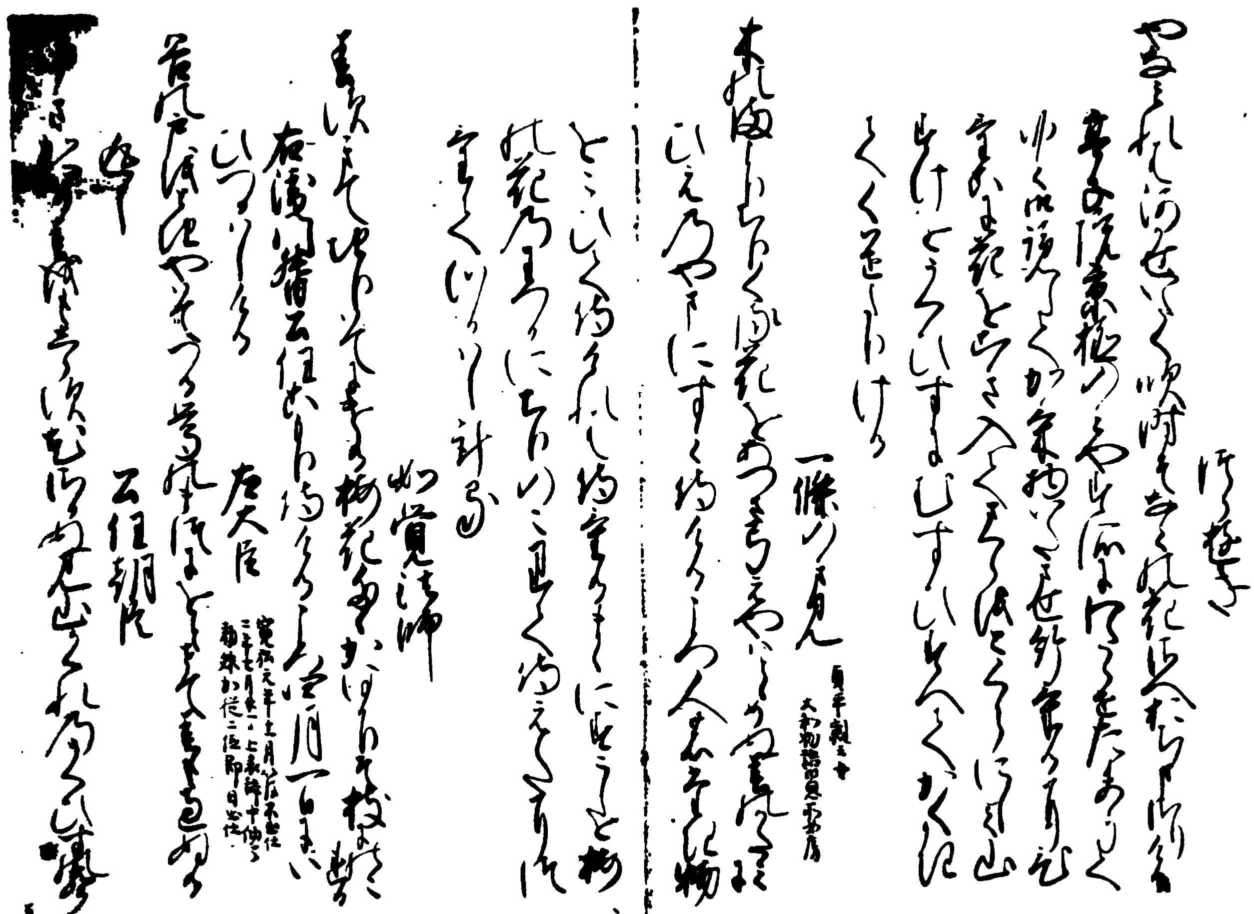
各冊は縱五寸三分、横五寸の桝形本で薄青地に金銀泥を以て花鳥を描いた表紙をつけ、題簽も表紙とふさはしいものをつけて居ます。胡蝶裝です。中味は地に文様ある薄い楮紙の裏表に半葉十行に書いて居ります。各冊毎に異本と校合したらしく、本文の傍にイとして傍書をして居ります。本文は流布本を寫した思しく、校合に用ひた本は何れかの古寫本でせう。

人麿集の末に「書寫本色紙手跡古体也　建長五年六月日　此本以三ケ之本校正了　全六年三月日　藤原朝臣在判」とあり又躬恒集の末には「此一冊以定賴卿自筆之本令校合畢」とあり、朝忠集の末には「借請右大辨入道之本建長六年十二月廿四日申刻書寫之同夜燈下校合了在判」とあり、信明集の奧には「以相傳之本書寫校合了消存尙如本也建長元年八月日藤原朝臣　在判」とあり、素性集の奧には「以院御本行家朝臣筆書寫之　建長三年七月日」とあります。之れ程美しい本で、しかも三十六帖完全に揃つて居るのは一寸珍らしうございます。

圖版第十八號參照



第十八圖　古寫本三十六人家集



第十七圖　古寫本　拾遺和歌集

(14) 拾遺和歌集　古寫本　全一冊　金八十圓

縦八寸五分、横五寸八分。胡蝶裝。濃き靑表紙に丹色の題簽「拾遺和歌集」を附す。原裝なるべし。
厚き鳥の子紙の裏表に歌を一行に書し、書風健剛墨色鮮麗なり。奥書なけれど書寫の年代は足利中期なるべきか。
本文は略々流布本と同じく、唯、詞書中接續の「の」を省きたる事多きが異れり。本文の所々の横又は下に註或は勘物を加ふ。
裏表紙の内面裏に貼紙あり、曰く、「カミ百八十二枚、内スミ付百七十八枚」と、其の上に古筆の古黒印を押したり。全二十卷、千三百五十一首。古今和歌集、後撰和歌集と共に三代集として長く歌壇の典型たりし古典を此の好傳本によつて味ひ給へ。

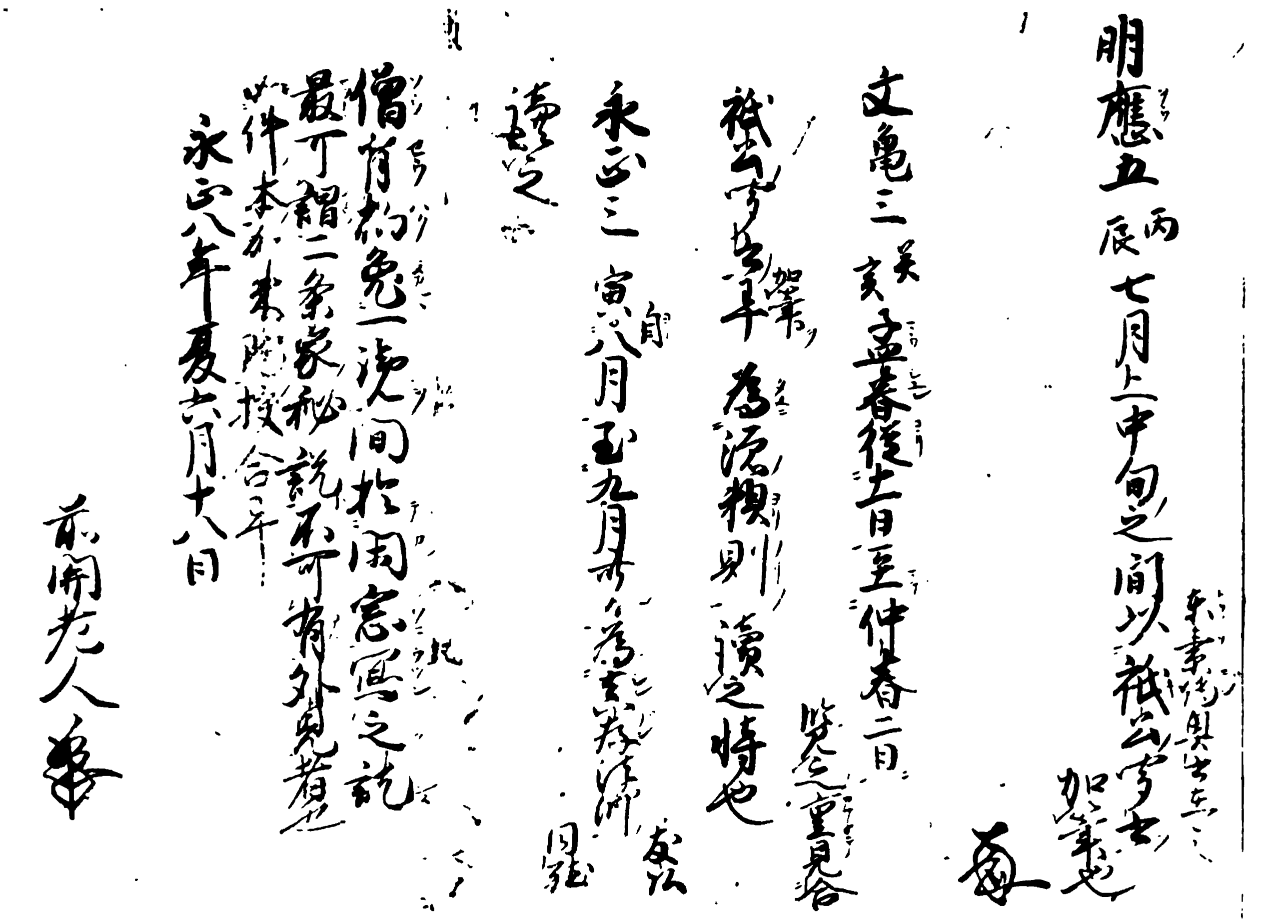
圖版第十七號參照

古今集聞書　古寫本　全三冊　金百八十圓

多分宗祇說の聞書であらうと思はれますが、何人の作であるかわかりません。奧書は非常に復雜で一寸私の樣な者には判らないのです。大体をありのまゝに記して置くに留めます。

全部で三冊です。縱八寸、横六寸六分。靑い紙表紙のついた大桝形本で各冊が百葉乃至百五六十葉楮紙を袋綴じにした大冊です。第一卷の卷頭に「文明十三辛丑八月十八日於種玉庵受之宗祇禪師」と朱で誌して居ります。第一卷では古今集の卷一から卷十までを八月十八日から九月三日までに講釋したものを書き留め、最後に可成長い奧書があります。第二卷は仝じ九月三日から仝廿四日までに卷十一から卷二十までを講じたものも誌し、奧に矢張長い奧書を存します。第三卷は仝年九月廿六日から十月三日までは假名序、眞名序を講じた要領を記し、最後に約三頁の奧書を記して居ます。即ち約四十五日間に古今の講義を終つたものらしく、殆んど連日講じて居り此の間に休んだ日は三四日に過ぎぬ樣です。內容は宗祇の講義そのまゝではないらしく、一句を擧げては數行づつ解釋をのべて居ますが、所々に「御師說」「裏書云」と云ふ文句が屢々出て參ります。

奧書は圖版には試みに第一卷の分の一部を掲げて置きましたが、文明十四年、仝十九年、延德二年、明應五年、文龜三年、永正三年、永正八年と七ケの異つた年のものを存して居ります。最後に永正八年秋九月十五日、前關老人の署名と花押とを留めて居ります。之れは書寫の年代を示すものと信じます。此の本に相當する古今集の註釋書を可成調べて見ましたが、判りませんでした。學界未知のものではないかと存じます。圖版第十六號參照


明應五丙辰七月上中旬之間以祇公東常縁奧書在之加筆也 (花押)

文亀三癸亥孟春從十日至仲春二日

祇公加筆 爲源朝則讀之時也 肖柏之重見合

永正三丙寅八月五日九月廿八爲玄清法印 同加

讀之

僧有胸兎一說間於閑窓寫之訖

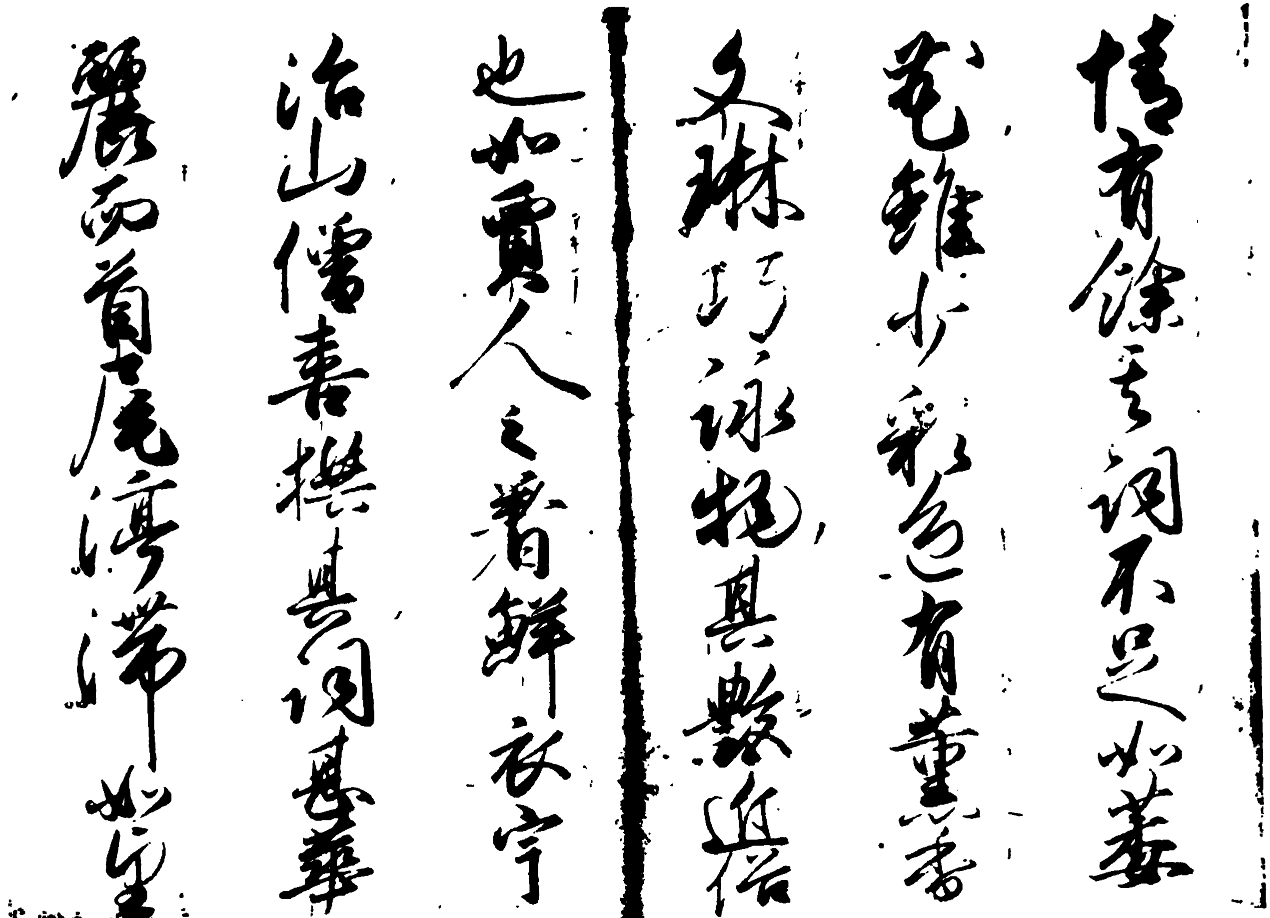
最可謂二条家秘說不可有外見者也

以件本加朱點校合了

永正八年夏六月十八日

前開老人 (花押)

第十六圖　永正本　古今集聞書　第一卷　奥書の一部


情有餘而詞不足如萎
花雖少彩色有薰香
文琳巧詠物其體近俗
也如賈人之著鮮衣宇
治山僧喜撰其詞華
麗而首尾停滞如望

第十五圖　傳尊道法親王筆　古　今　序

(12)

古今序

傳尊道法親王筆
古寫本

全一冊　金三十圓

縱七寸二分、橫四寸六分。胡蝶裝。表紙は無地の紙を用ひて居るが、時代の手摺れで革の樣になつて居ります。其の上に青蓮院殿尊道御と云ふ古筆の極札を貼付け、それと並んで「此冊承應四年二月晦日より了雪押也」と書いた紙が貼り付けてあります。

中は極めて厚い楮紙に古今和歌集の眞名序と假名序を、前者は半葉に三行、後者は五行に大きく書いて居ります。眞名の序には朱で送假名と返點を付して居ります。卷首に鼎の樣な形をした約一寸四方の古い黒印を押して居りますが、印面がハッキリせぬため讀み取れません。黒付三十葉。尊道筆と云ふ明證は存しませんが、時代は略々其の頃のものでございませう。古い桐の二重箱に入つて居ります。

圖版第十五號參照

(11) 古今和歌集　古寫本　全一帖　金十八圓

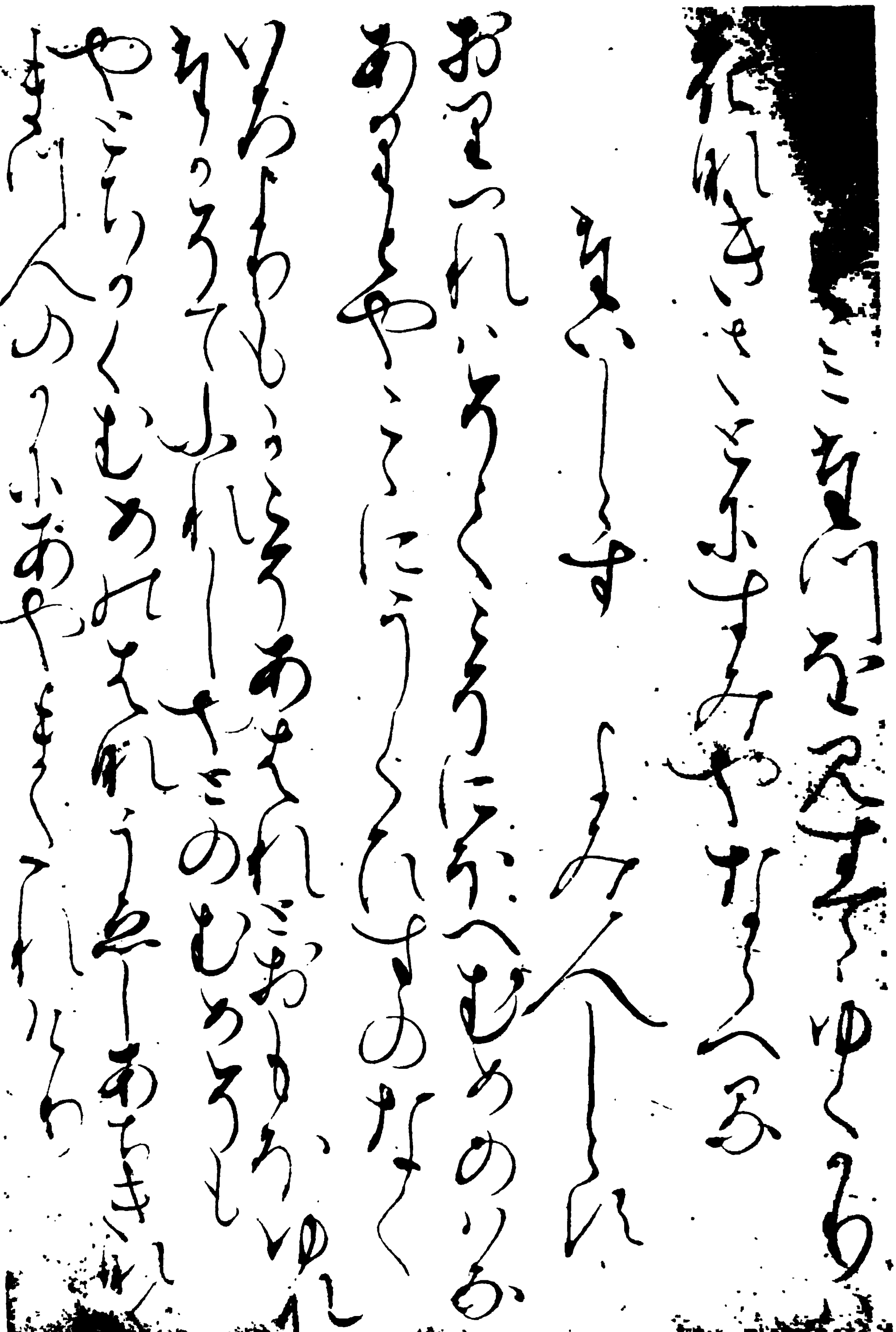
縱八寸二分、橫六寸一分。絹表紙、胡蝶裝。

鳥の子紙の裏表に達筆にて和歌を一行に書す。假名序を卷頭に、眞名序を卷尾に、終始一貫筆のたゆみもなく、墨色極めて鮮かに筆致宛轉健放に書き流したり。書寫の年代は明證を存ぜざるも近世中期なるべきか。桐箱入。

圖版第十四號參照

第十四圖　古寫本古今和歌集卷頭





第十三圖　爲家本古今和歌集　内容の一部

ても似つかぬものです。下卷は墨附百三十七葉、其の終つた所に餘白を一葉置いてさて其の次に、

「此古今和歌集上卷者古賢之墨痕而妙絶可愛下卷者不知在何處也所持之人勸進多方以補其闕第十一十二者聖護院宮道寛親王　十三十四者日野前大納言 弘資卿 十六者烏丸前大納言 資慶卿 十七十八者白河二位 雅喬王 十九二十者照高院宮道晃親王之筆也　可謂溫故知新者歟

寛文第十一仲秋　　雅章

とあります。即ち萬治寛文頃の所有者が下卷の欠けたるを惜み聖護院道晃親王をはじめ當時の五人の能筆者に依囑して書寫し其の由來を飛鳥井雅章に書いて貰つて跋としたものです。

此の外明治廿一年四月中浣の古谷日新氏の識辭二葉と同年五月に大光山傳法の横偕止雷叟の書いた爲家傳六葉を附して居ります。

本文の内容は定家系統の嘉錄本、貞應本と異つて居ります。眞名の序を卷頭に存する點、古註を一字下げて一行に書しだる點等は俊成本と一致しますが、墨滅の歌を全然持たない點は異つて居ります。又歌の左側に作者又は異本を註したものは、多く俊成本と一致し定家本と異つて居りますが、前者と一致しない點も全然なくはありません。靜嘉堂文庫藏の傳爲家筆の古今集の古寫本は上卷一冊で卷十までしか存せぬため、本書との一致が想像されますが、同書は卷十の墨滅歌五首の中最初の二首を書き込んである點、又第五卷の末に「もみぢばは袖にこきいれてもていなん」の歌を欠く點が、本書と異り、又卷一の中程の「仁和のみかどのみこにおはしましける時云々」の詞書の前に「あすよりはわかなつまんとかたをかのあしたのはらはけふややくらん」と云ふ俊成本以外定家本淸輔本寂恵本其の他諸本に全然見られない歌を含んで居る點が靜嘉堂本との一致を否定して居ります。

爲家の自筆であると云ふ確證はどこにも存しませんが、紙質、墨色、書風よりして鎌倉期の書寫にかゝる事は疑を容れる餘地はありません。古筆として尊重すべきは勿論、學問上から見ても最も注意すべき新資料です。

圖版第十二、十三號參照

古今和歌集

傳藤原爲家筆
古寫本

全二冊　金七百五拾圓

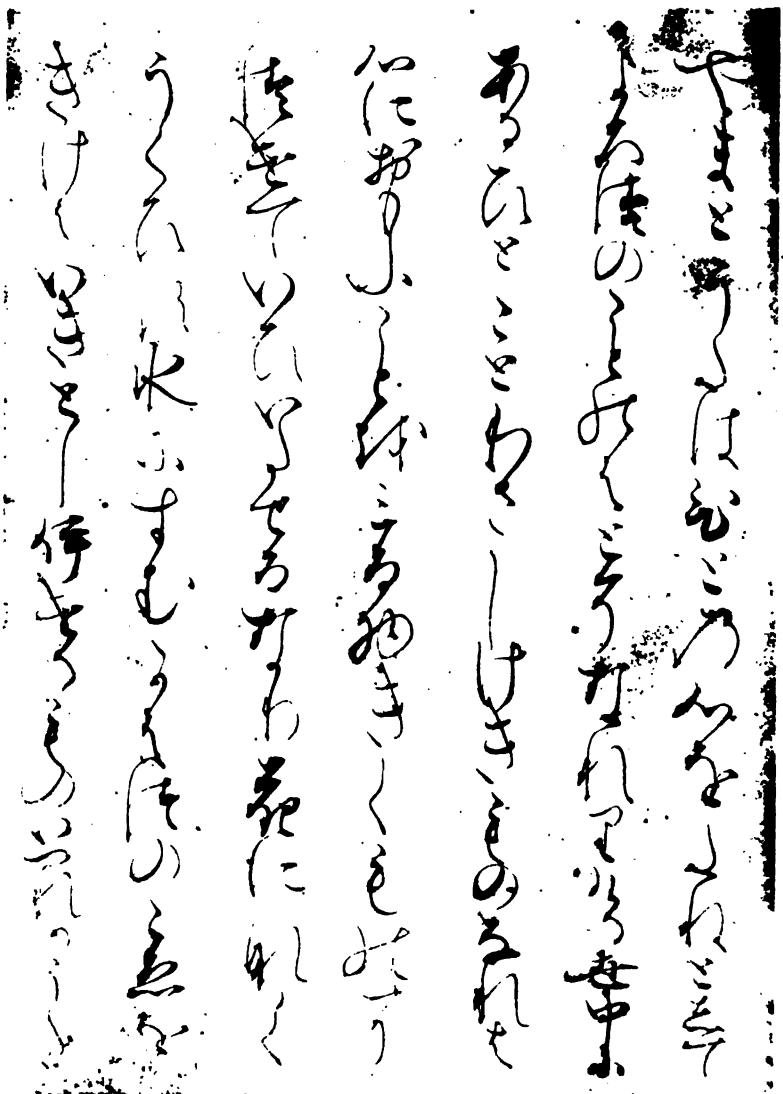
此の本の特色の第一としては先づ其の假名の上代様の美しさを擧げねばなりますまい。それは優麗にして温雅です鎌倉期以後のものでは見られぬ大らかな美しさがどの一葉どの一行にもにじみわたつて居ります。第二は保存のよさでせう。余程大切にされて居たものと見えて見事な柾目の二重の桐箱(しかも其の内側には全部絹を貼つてある)に入り更に、綺麗な古裂でつくつた立派な帙に入つて居た此の本には虫損一つありません。全體に六七百年の歳月が醸し出した落ちついた時代の味ひが表紙にも中にもユツタリと溢れて居ります。表紙、見返し題簽共に此の中味にふさはしい典雅な申分のないものです。古香滿紙と云つた趣きは手にとるとすぐに感じられます。縦七寸七分横五寸、程よい大きさと云へませう。厚い一枚の紙の表裏に半葉七行に歌を二行に書いて居ります。何時の頃か下巻を欠いたと見えて今存する處は上巻のみです。上巻の墨附は百二十八枚、それの終つた所に三枚の餘白を置き第四枚目に

道古今和歌集上巻者
爲家卿眞跡無疑應御所望證之而已
萬治二暦正月廿五日　　古筆(印)
了佐(花押)

と古筆の極め書が一頁に書いてあります。

此處に存する所の下巻は此の欠を補ふために萬治から寛文の頃に五人の能筆者に囑して新しく書寫したものです。装釘は全く同じですが用紙も墨色も近世に入つてからのものですから能筆ではありますが鎌倉期書寫の上巻とは似

第十二圖　爲家本古今和歌集　假名序卷頭

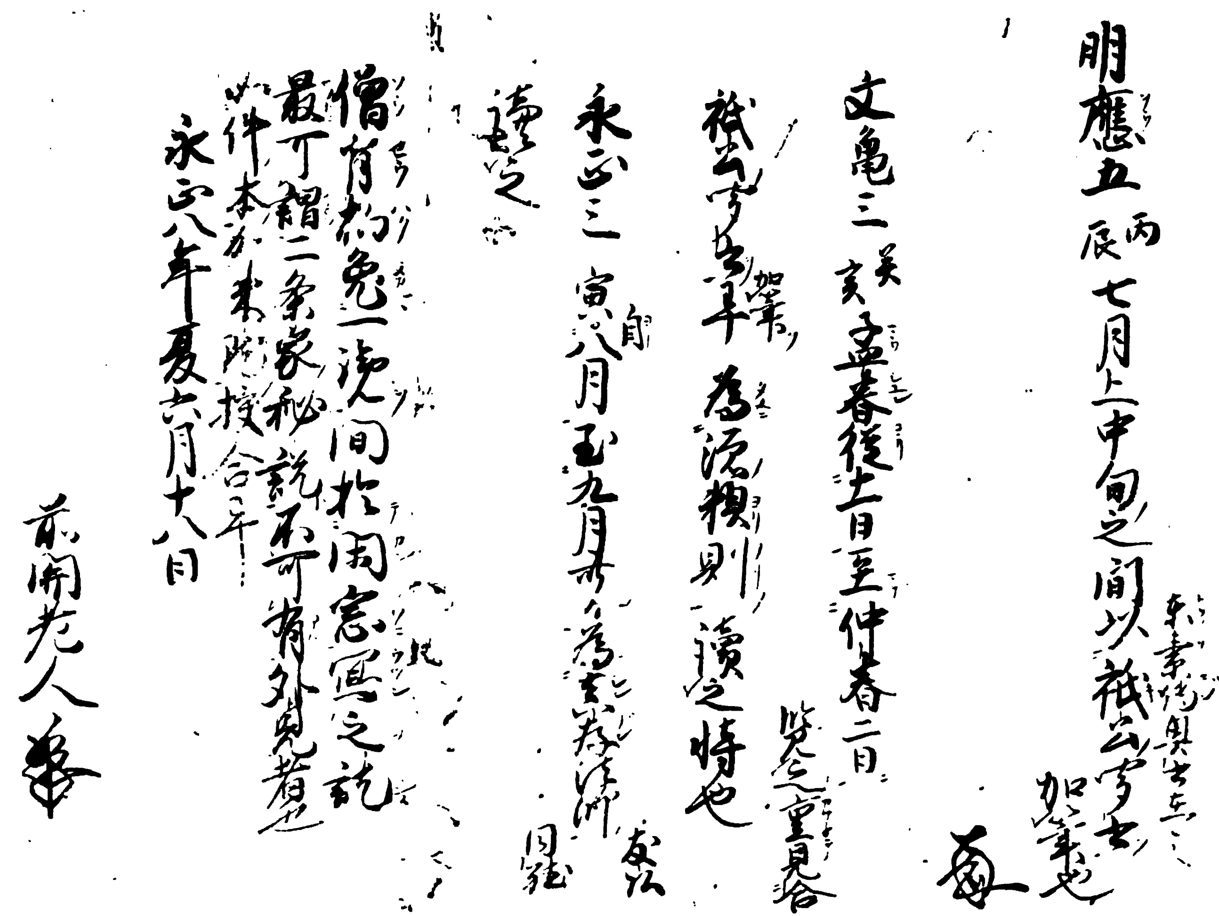

やまと哥はひとつこゝろをたねとし
てよろつのことのはとそなれりける世中に
あるひとことわさしけきものなれは
心におもふことをみるものきくものに
つけていひいたせるなり花になく
うくひす水にすむかはつのこゑを
きけはいきとし生るものいつれかうたを

古今集聞書　古寫本　全三冊　金百八十圓

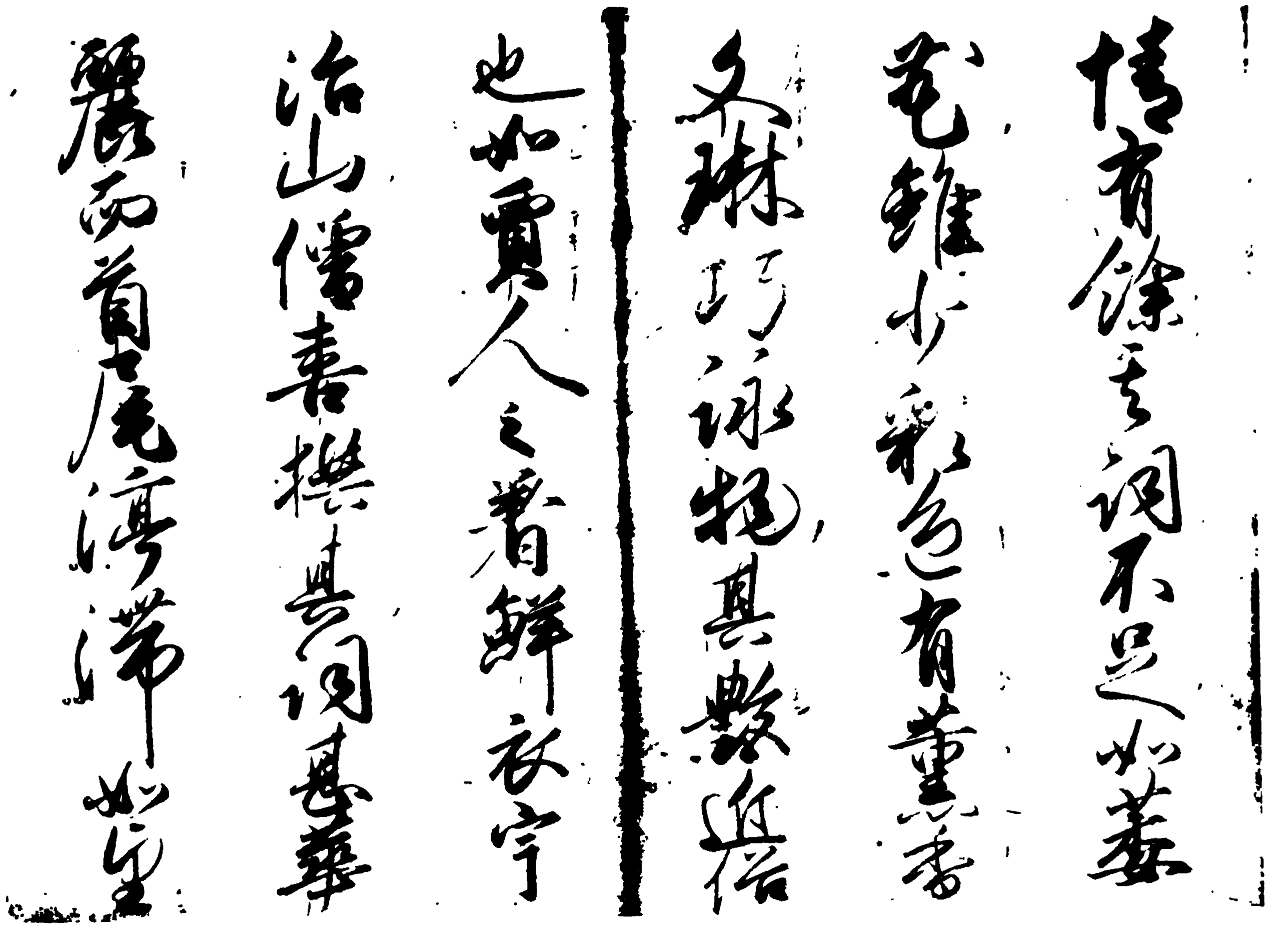
多分宗祇説の聞書であらうと思はれますが、何人の作であるかわかりません。奧書は非常に復雜で一寸私の樣な者には判らないのです。大体をありのまゝに記して置くに留めます。

全部で三冊です。縦八寸、横六寸六分。青い紙表紙のついた大桝形本で各冊が百葉乃至百五六十葉楮紙を袋綴じにした大冊です。第一卷の卷頭に「文明十三辛丑八月十八日於種玉庵受之宗祇禪師」と朱で誌して居ります。第一卷では古今集の卷一から卷十までを八月十八日から九月三日までに講釋したものを書き留め、最後に可成長い奧書があります。第二卷は仝じ九月三日から仝廿四日までに卷十一から卷二十までを講じたものも誌し、奧に矢張長い奧書を存します。第三卷は仝年九月廿六日から十月三日までは假名序、眞名序を講じた要領を記し、最後に約三頁の奧書を記して居ます。即ち約四十五日間に古今の講義を終つたものらしく、殆んど連日講じて居り此の間に休んだ日は三四日に過ぎぬ樣です。内容は宗祇の講義そのまゝではないらしく、一句を擧げては數行づつ解釋をのべて居ますが、所々に「御師説」「裏書云」と云ふ文句が屢々出て參ります。

奧書は圖版には試みに第一卷の分の一部を掲げて置きましたが、文明十四年、仝十九年、延德二年、明應五年、文龜三年、永正三年、永正八年と七ヶの異つた年のものを存して居ります。最後に永正八年秋九月十五日、前關老人の署名と花押とを留めて居ります。之れは書寫の年代を示すものと信じます。此の本に相當する古今集の註釋書を可成調べて見ましたが、判りませんでした。學界未知のものではないかと存じます。圖版第十六號參照



第十六圖　永正本　古今集聞書　第一卷　奥書の一部



第十五圖　傳尊道法親王筆　古　今　序

(12) 古今序

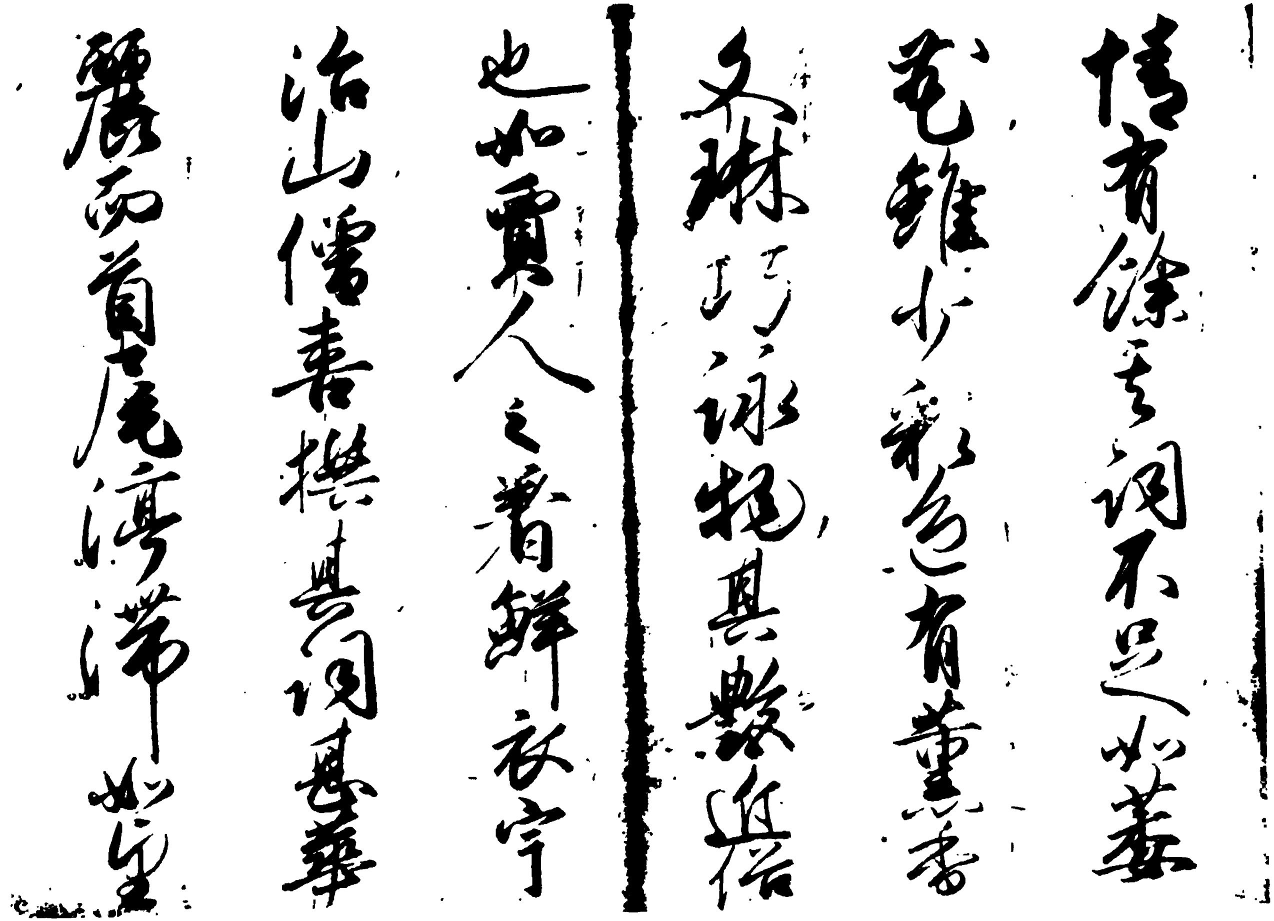
傳尊道法親王筆
古寫本

全一冊　金三十圓

縱七寸二分、橫四寸六分。胡蝶裝。表紙は無地の紙を用ひて居るが、時代の手摺れで革の樣になつて居ります。其の上に靑蓮院殿尊道印と云ふ古筆の極札を貼付け、それと並んで「此冊承應四年二月晦日より了雪押也」と書いた紙が貼り付けてあります。

中は極めて厚い楮紙に古今和歌集の眞名序と假名序を、前者は半葉に三行、後者は五行に大きく書いて居ります。眞名の序には朱で送假名と返點を付して居ります。卷首に鼎の樣な形をした約一寸四方の古い黑印を押して居りますが、印面がハッキリせぬため讀み取れません。墨付三十葉。尊道筆と云ふ明證は存しませんが、時代は略々其の頃のものでございませう。古い桐の二重箱に入つて居ります。

圖版第十五號參照


情有餘而詞不足如萎
花雖少彩色有薫香
文琳巧詠物其體近俗
也如賈人之著鮮衣宇
治山僧喜撰其詞華
麗而首尾停滯如望

第十五圖　傳尊道法親王筆　古今序

(12)

古今序

傳尊道法親王筆
古寫本

全一冊　金三十圓

縱七寸二分、横四寸六分。胡蝶裝。表紙は無地の紙を用ひて居るが、時代の手摺れで革の様になつて居ります。其の上に青蓮院殿尊道㊞と云ふ古筆の極札を貼付け、それと並んで「此冊承應四年二月晦日より了雪押也」と書いた紙が貼り付けてあります。

中は極めて厚い楮紙に古今和歌集の眞名序と假名序を、前者は半葉に三行、後者は五行に大きく書いて居ります。眞名の序には朱で送假名と返點を付して居ります。卷首に鼎の様な形をした約一寸四方の古い黒印を押して居りますが、印面がハッキリせぬため讀み取れません。黒付三十葉。尊道筆と云ふ明證は存しませんが、時代は略々其の頃のものでございませう。古い桐の二重箱に入つて居ります。

圖版第十五號參照

(11) 古今和歌集　古寫本　全一帖　金十八圓

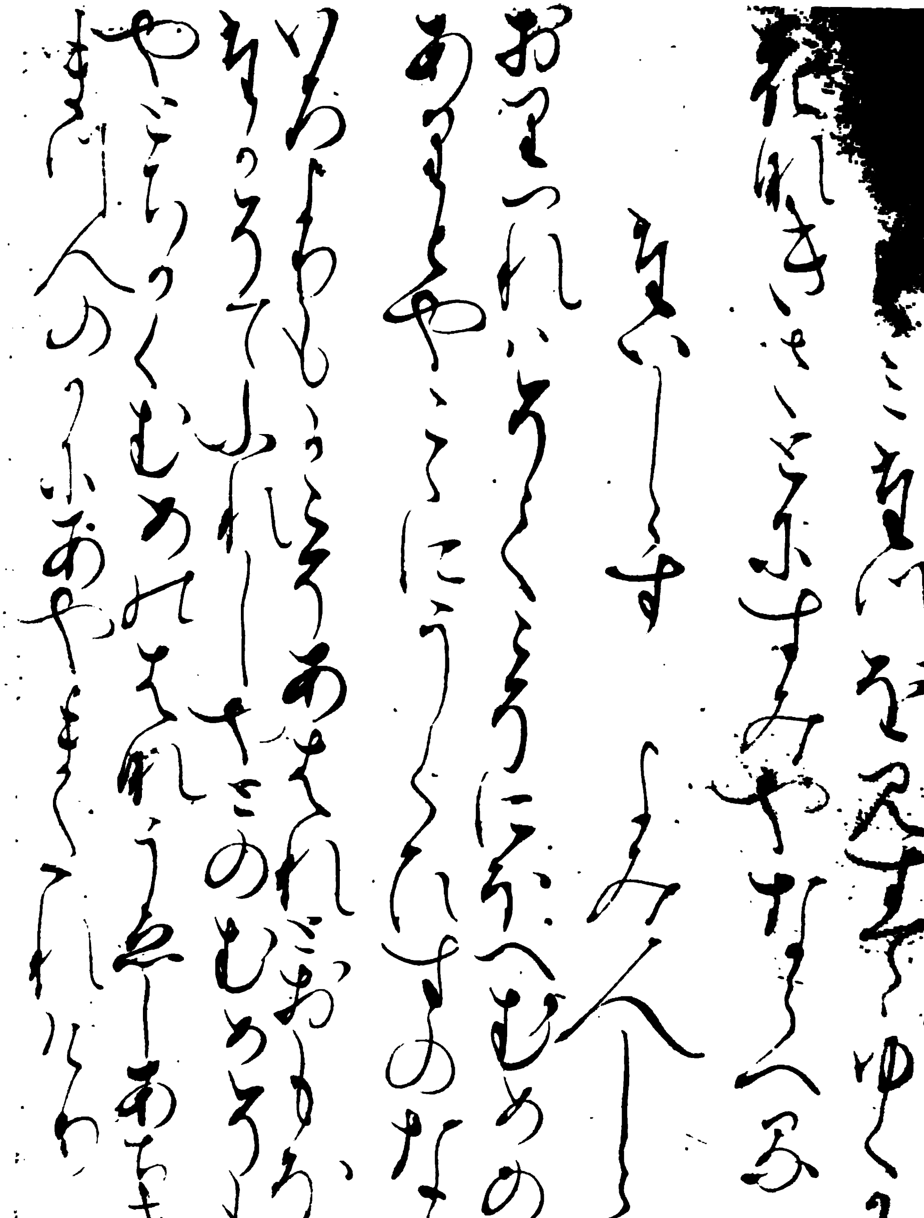
縦八寸二分、横六寸一分。絹表紙、胡蝶裝。

鳥の子紙の裏表に達筆にて和歌を一行に書す。假名序を卷頭に、眞名序を卷尾に、終始一貫筆のたゆみもなく、墨色極めて鮮かに筆致宛轉健放に書き流したり。書寫の年代は明證を存せざるも近世中期なるべきか。桐箱入。

圖版第十四號參照

第十四圖　古寫本古今和歌集卷頭


やまと哥は人の心をたねとしてよろつの
ことの葉とそなれりける世中にある人
ことわさしけきものなれは心に思ことを
見るものきくものにつけていひいたせる
なり花になく鶯水にすむかはつの聲を
きけはいきとしいけるものいつれか哥を
よまさりけるちからをもいれすしてあめ
つちをうこかしめにみえぬ鬼神をもあはれ
とおもはせをとこをむなの中をもやはらけ
たけきものゝふの心をもなくさむるは哥なり


たつをみすてゝゆくかりは
はなゝきさとにすみやならへる
たいしらす　よみ人しらす
をりつれはそてこそにほへむめのはな
ありとやこゝにうくひすのなく
いろよりもかこそあはれとおもほゆれ
たかそてふれしやとのむめそも
やとちかくむめのはなうへしあちきなく
まつ人のかにあやまたれけり

第十三圖　爲家本古今和歌集　内容の一部

ても似つかぬものです。下卷は墨附百三十七葉、其の終つた所に餘白を一葉置いてさて其の次に、

「此古今和歌集上卷者古賢之墨痕而妙絶可愛下卷者不知在何處也所持之人勸進多方以補其闕第十一十二者聖護院宮道寬親王　十三十四者日野前大納言 弘資卿 十六者烏丸前大納言 資慶卿 十七十八者白河二位 雅喬王 十九二十者照高院宮道晃親王之筆也　可謂溫故知新者歟

寬文第十一仲秋　雅章

とあります。即ち萬治寬文頃の所有者が下卷の欠けたるを惜み聖護院道晃親王をはじめ當時の五人の能筆者に依囑して書寫し其の由來を飛鳥井雅章に書いて貰つて跋としたものです。

此の外明治廿一年四月中浣の古谷日新氏の識語二葉と同年五月に大光山傳法の權僧正雷霎の書いた爲家傳六葉を附して居ります。

本文の内容は定家系統の嘉錄本、貞應本と異つて居ります。眞名の序を卷頭に存する點、古註を一字下げて一行に書しだる點等は俊成本と一致しますが、墨滅の歌を全然持たない點は異つて居ります。又歌の左側に作者又は異本を註したものは、多く俊成本と一致し定家本と異つて居りますが、前者と一致しない點も全然なくはありません。

靜嘉堂文庫藏の傳爲家筆の古今集の古寫本は上卷一册で卷十までしか存せぬため、本書との一致が想像されますが、同書は卷十の墨滅歌五首の中最初の二首を書き込んである點、又第五卷の末に「もみぢばは袖にこきいれてもていなん」の歌を欠く點が、本書と異り、又卷一の中程の「仁和のみかどのみこにおはしまける時云々」の詞書の前に「あすよりはわかなつまんとかたをかのあしたのはらはけふややくらん」と云ふ俊成本以外定家本清輔本寂恵本其の他諸本に全然見られない歌を含んで居る點が靜嘉堂本との一致を否定して居ります。

爲家の自筆であると云ふ確證はどこにも存しませんが、紙質、墨色、書風よりして鎌倉期の書寫にかゝる事は疑を容れる餘地はありません。古筆として尊重すべきは勿論、學問上から見ても最も注意すべき新資料です。

圖版第十二、十三號參照

古今和歌集

傳藤原爲家筆
古寫本　全二冊　金七百五拾圓

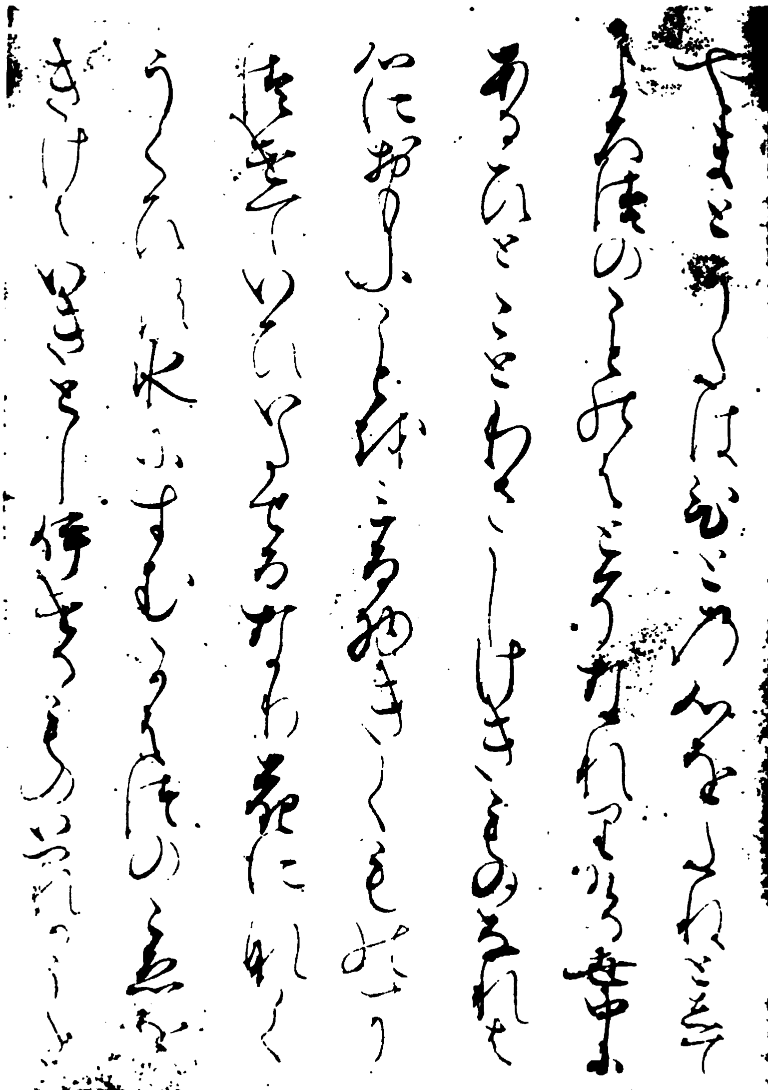
此の本の特色の第一としては先づ其の假名の上代樣の美しさを擧げねばなりますまい。それは優麗にして溫雅です鎌倉期以後のものでは見られぬ大らかな美しさがどの一葉どの一行にもにじみわたつて居ります。第二は保存のよさでせう。余程大切にされて居たものと見えて見事な柾目の二重の桐箱（しかも其の內側には全部絹を貼つてある）に入り更に、綺麗な古裂でつくつた立派な帙に入つて居た此の本には虫損一つありません。全體に六七百年の歲月が醸し出した落ちついた時代の味ひが表紙にも中にもユッタリと溢れて居ります。表紙、見返し題簽共に此の中味にふさはしい典雅な申分のないものです。古香滿紙と云つた趣きは手にとるとすぐに感じられます。縱七寸七分橫五寸、程よい大きさと云へませう。厚い一枚の紙の表裏に半葉七行に歌を二行に書いて居ります。何時の頃か下卷を欠いたと見えて今存する處は上卷のみです。上卷の墨附は百二十八枚、それの終つた所に三枚の餘白を置き第四枚目に

　這古今和歌集上卷者
　爲家卿眞跡無疑應御所望證之而已　　古筆（印）
　萬治二暦正月廿五日　　了佐（花押）

と古筆の極め書が一頁に書いてあります。

此處に存する所の下卷は此の欠を補ふために萬治から寛文の頃に五人の能筆者に囑して新しく書寫したものです。裝釘は全く同じですが用紙も墨色も近世に入つてからのものですから能筆ではありますが鎌倉期書寫の上卷とは似

第十二圖　爲家本古今和歌集假名序卷頭


やまとうたはひとのこゝろをたねとして
よろづのことのはとぞなれりける世中に
あるひとことわざしげきものなれば
心におもふことを見るものきくものにつ
けていひいだせるなり花になく
うぐひす水にすむかはづのこゑを
きけばいきとしいけるものいづれか

[illegible]れ御製とし本に悖りて。あらぬよこし道に方よりいれる人々も。
[illegible]ならしなるべし。大かた誰もかく学びのはじめより歌に乱
調あ。されはいふもあやしけれハ見るまゝきくまゝにつけて。心
のうつり安かるものになむある。故萬葉集を見る程よりよめる哥ハ。即
て萬葉風になりてき。源氏物語を見るほどハくにかくるふみハ。やがてこれ
氏ぶりまつくら移て。見てそれと知る書どもにはよるやうなり。さ
それ猶よみ出る志ある人なからしとも。その猶新き世にハなるなむ。
おのれしわざも若かりし時を顧て。いちじるしさばかりなる人移
にかゝめあやしきまなびきて。めづらしき歌ならで。やうつりし世
ざらん人を。無身ハ幸にふとおもひきるとおもひえて。よろしき方
に方どもし入まじきにもあらばこそなれ。西りんぢと去らはに語に。

(9) 短歌撰格　橘守部著 版下本　全二冊　金四十圓

前記長歌撰格と共に守部の主著の一であり紀記の歌及び萬葉集の歌を後代の歌と比較して修辞的特質とも云ふべき方面から研究したる劃紀的な名著の版下本である。

体裁は既記長歌撰格の版下本と全く同じい、巻頭に「桐生吉田氏圖書之記」の大きな蔵印がある。本文は版本とは著るしく異つて分量にしても殆んど二倍近くある。例へば上巻の巻頭を比較すると明治十八年刊の木版本及び全部全集本は共に「歌之初」として古事記上巻の伊邪那岐伊邪那美命の御語をあげ「此の御語を古註に歌の初めと云ひ又いまだ歌といふばかりは、あらずともいひたれど、今按に」云々として居るが、本版下本には全くかゝる語なく巻頭最初の一節ば「雲井にちかき御あたりには、いかに貴き御ゆゑよしかおはすらん、そは卑き身のうかがひしるべきにあらざれば、すべてきは異なる御うへの事は申さず」云々ではじまり以下も全く版本と異つた順序形式で述べて居る。

四周に黒界を刷り柱に「短歌撰格」と書いた用紙に正しく書き、誤記ある個所は切り抜き新しい紙を貼りつけて其の上に書き改めて居る。参照すべき版下本である。

圖版第十一號参照

長歌撰格　橘守部著 版下本　全二冊　金四十圓

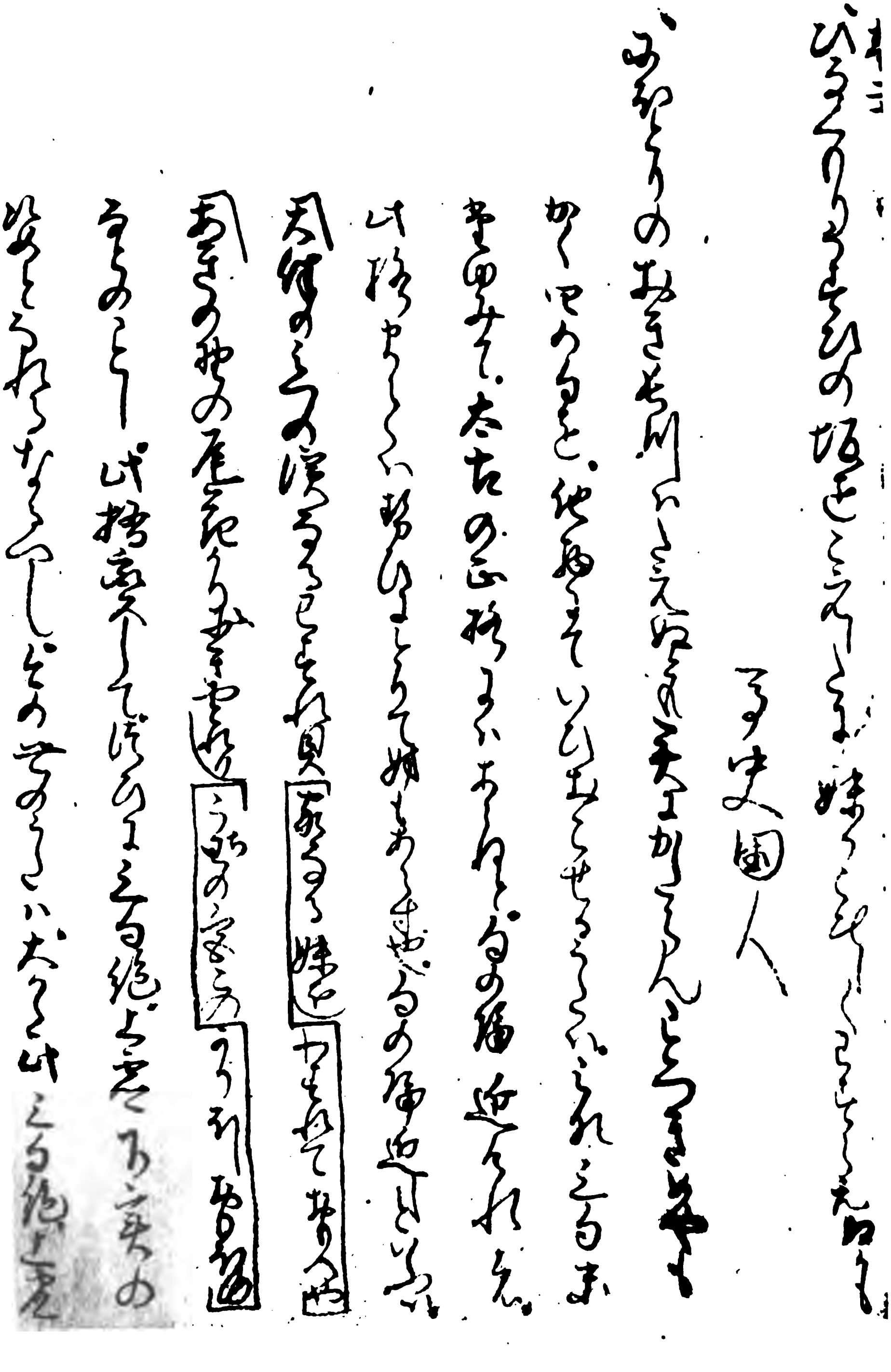
縱八寸七分、横六寸。美濃版上卷六十一葉、下卷四十九葉。「長歌撰格」と柱書せる薄様の紙に美しく書き明かに版下本と認めらる。題簽には「錦所叢書 長歌撰格 版下本 池庵守部先生自書也可愛玩也」とあり。此の書の守部自筆稿本は今橘家に藏せらる。明治六年橘家藏版にて刊行の木版本は門人橋本直香の筆になる版下によつて刻せられたり。ついて本寫本と對比するに筆致酷似するを以つて或ひは全じく直香の手になるものなるべきか。但し內容は現行の木版本或ひは橘守部全集所收本と異り、分量も多く又記事に出入甚だ多し。或ひは本書が初稿本として稿成りしを何等かの事情にて中止し後に大に增減を加へて現在の版本となせしなるべきか。「守部全集」首卷の中に橘純一氏の述べられたる如く、本書の成立年代につきては今日種々疑問あるものなれば此の版下本の出現によつて此の問題の解決に多少の寄與はあらんかとも考へらる。

圖版第十號參照

長歌撰格巻上

橘守部撰述

いにしへいかなるものゝ中に人だちの歌はよまれ出たし真
人れ體をいはゞ歌詞のまれしそれはもはら言ぞそ
はしくまことなく取もなく影ぶまえてあらざれば国に
そのえばそのそこら語らひわが物としてあられるもの
うそぶるその事あるを只書きおくへ耳に觸るゝ音の行末
むあはけるを音なれちら言葉なはなれば又言
乃葉だちの貴きその書あらざるなの故に知いの
いの詞るなのはそれ音ぞてるいふをそれふの志
ごめるはあはれて音きそ又などみその心れうまふるる
をとらぶ真音そるるきれんそれ心のまろふぞ
そのは音と伝るよろこびて即て言まなるあるそれ



第九圖　萬葉摘翠集　内容の一部

(7) 萬葉摘翠集　橘守部著　寫本　全一冊　金二十圓

縱八寸七分、横六寸。美濃版三十一葉。

はじめに文政元年三月の蓬壺主人（即ち守部）の序あり、終に、文政元年戊寅冬十月廿有五日付の豊國海部郡千葉常文茂人の跋文あり。前者は著述の由來を記し、後者は此の著の成るを賀し、守部の功を眞淵宣長に比して尙高しと讃す。

内容は萬葉集中の佳句三百を選びて短歌の歌格を論じ、萬葉集の美なる所以を明かにす、蓋し萬葉の短格を論ずるは守部にはじまり、守部の歌格論は此の著にはじまるとさるる記念すべき一小著なり。

本書は橘守部全集未收。佐々木信綱博士は著者稿本一部を藏せらるる由。本書と比するに書体酷似せるが如し。或ひは著者淸書本たるべきか。

圖版第九號參照

(6) 金澤文庫本　萬葉集切　古寫二葉　金壹百圓

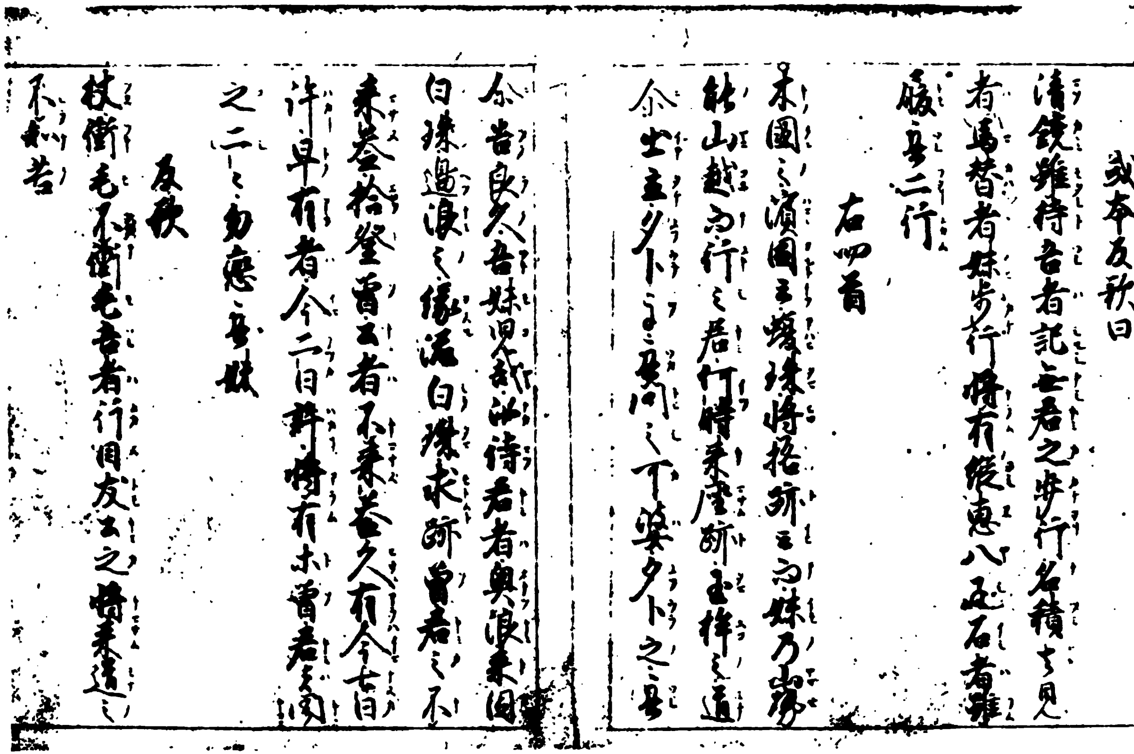
縱一尺六分、橫八寸三分。罫内縱九寸一分、橫七寸五分。桐箱入。

厚い鳥の子の表に書し、四周に金罫を引いて居ります。此の四周の金罫が金澤文庫本萬葉集の著るしい特徴であるとされて居ります。

此の書は金澤文庫の舊藏であつたと云ふので此の名があるのですが、書寫の年代筆者等については明證を存じません。書風は雄勁、莊重で、萬葉集にふさはしいものであります。片假名で訓を附して居ります。書寫の年代は鎌倉中期を下らぬものであらうと存じます。

校本萬葉集所收のものは、上下にのみ金罫を存し、左右の金罫を切り捨てゝ卷子本に改裝した不完本らしく思はれます。弊莊在庫の卷十六の二葉は四周の金罫をそのまゝに存し、袋綴りだつたと推測される原本のおもかげを最も忠實に存して居る唯一の傳本であらうと思ひます。古筆として鑑賞に値すると共に、古寫本としても重要な一資料だと信じます。

圖版第八號參照


或本歌曰
清鏡雖待吾者記無君之歩行名積去見人
者馮替者妹歩行将有後悪八五石者有雖
勝哉三行
右四首
木國之濱因云鰒珠將拾跡云而妹乃山勢
能山越而行之吾行將來屋跡玉梓之道
尒出立夕卜乎吾問之夕卜之吾
尒告良久吾妹兒哉汝待君者奥浪來因
白珠邊浪之緑流白珠求跡曾君之不
來益拾登曾公者不來益久有今七日
許早有者今二日許將有亦曾君者名四
之二二戀恵吾妹
反歌
杖衝毛不衝毛吾者行目友公之將來道之
不知苦

第八圖 金澤文庫本萬葉集切

(6) 金澤文庫本　萬葉集切　古寫二葉　金壹百圓

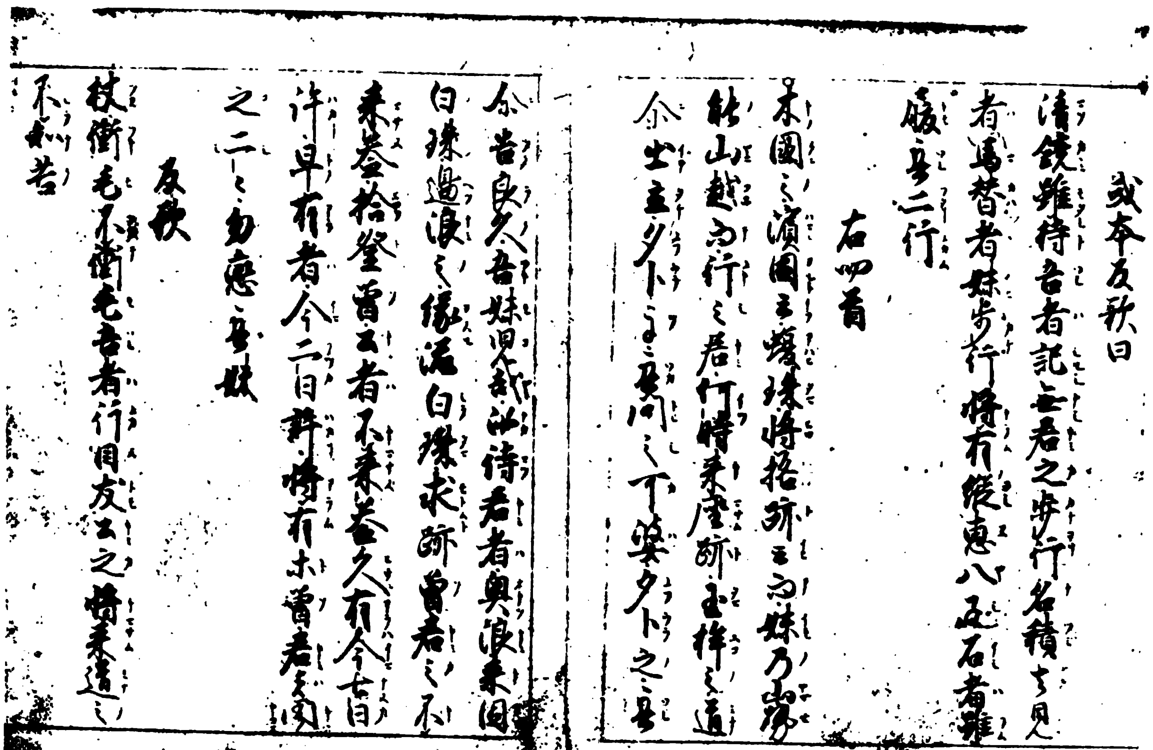
縱一尺六分、横八寸三分。罫内縱九寸一分、横七寸五分。桐箱入。

厚い鳥の子の表に書し、四周に金罫を引いて居ります。此の四周の金罫が金澤文庫本萬葉集の著るしい特徴であるとされて居ります。

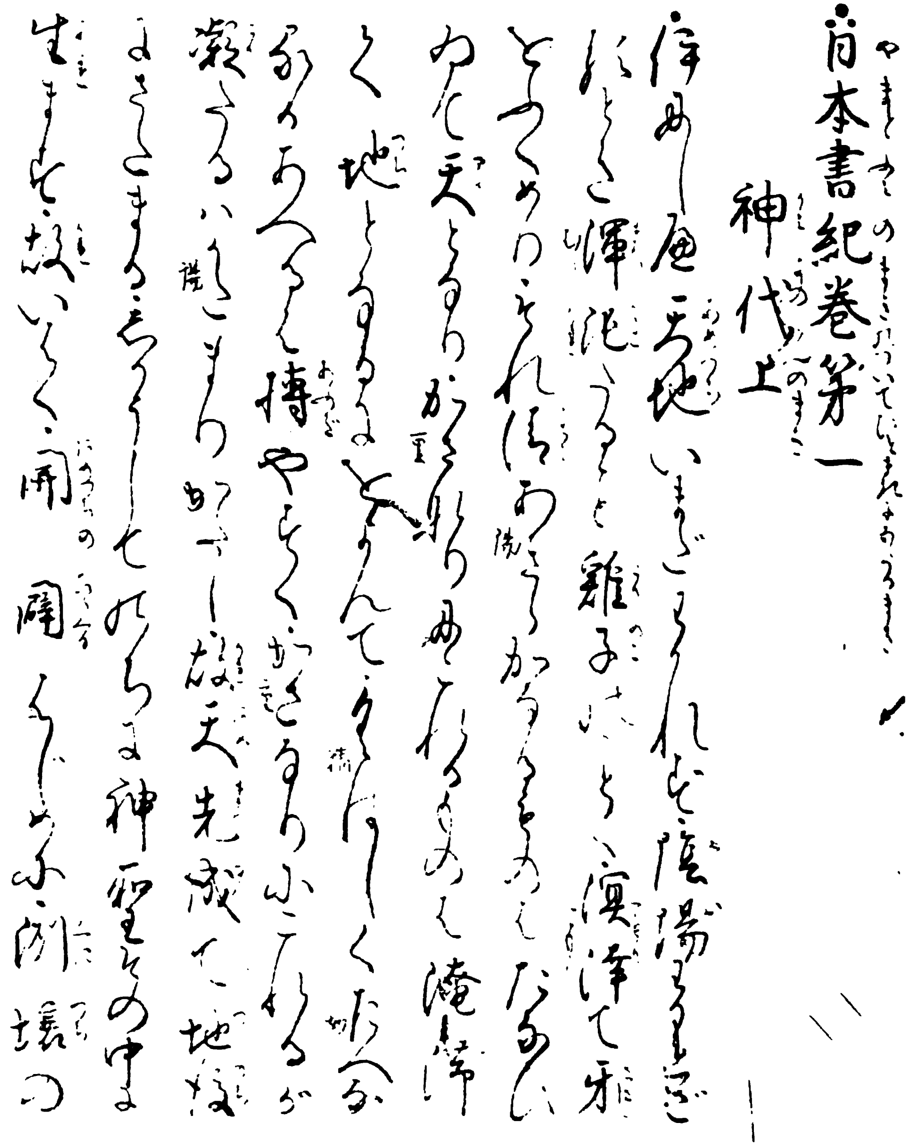
此の書は金澤文庫の舊藏であつたと云ふので此の名があるのですが、書寫の年代筆者等については明證を存じません。書風は雄勁、莊重で、萬葉集にふさはしいものであります。片假名で訓を附して居ります。書寫の年代は鎌倉中期を下らぬものであらうと存じます。

校本萬葉集所收のものは、上下にのみ金罫を存し、左右の金罫を切り捨てゝ卷子本に改裝した不完本らしく思はれます。弊莊在庫の卷十六の二葉は四周の金罫をそのまゝに存し、袋綴りだつたと推測される原本のおもかげを最も忠實に存して居る唯一の傳本であらうと思ひます。古筆として鑑賞に値すると共に、古寫本としても重要な一資料だと信じます。

圖版第八號參照


或本反歌曰
清鏡雖待吉者託無君之歩行名積吉見人
有焉替者有妹歩行將有從惠八丞石者雖
履吾二行
右四首
木國之濱因云鰒珠將拾跡云而妹乃嶋
從山越而行之君待將來座跡玉桙之道
尒出立夕卜乎吾問之下案夕卜之吾
尒告良久吾妹兒哉汝待君者奥浪來因
白珠邊浪之緣流白珠求跡曾君之不
來益拾登曾云者不來益久有今七日
許早有者今二日許將有赤曾君之勿
之二二勿戀吾妹
反歌
杖衝毛不衝毛吾者行目友公之將來道之
不知吉

第八圖　金澤文庫本萬葉集切


やまとふみのまきのついてのはしめのまき
日本書紀巻第一
神代上
伊にしへ天地いまたわかれす陰陽わかれさりしとき
渾沌としてまろかれたる事雞子のことく
ほのかにしてきさしをふくめり。それすみあきらかなるものは
たなひきて天となり、おもくにこれるものはつゝゐて淹滞
て地となるにおよひて、くはしくたへなるが
あつまれるは博やすく、おもくにこれるがかたまる
凝するはかたし。故天先成て地後
に定まる。しかうしてのちに神聖その中に
生ます。故いはく開闢る初に洲壌の

第七圖　古寫本假名日本紀卷頭

(5) 假名日本書紀　寫本　十冊　金三十圓

縦九寸、横六寸五分、大本。題簽なく打ちつけに「日本書紀」とのみ書きたり。袋綴じ。
薄手の紙に半葉九行漢字交りに書す。本文三十卷の外に「日本書紀目錄」として二冊あり。奥書は第三十卷末にのみありて

「右此日本紀ハ少納言清原朝臣國賢卿の假名書の御本、山田氏所持のところ世にたぐひ稀なるによつてまた一部をうつして後世に殘さんとして予に是をうつさしむ、余老年素筆はゞかりありといへども望にしたがひ全部三十卷紙狀すべて千百九十三丁一字のあやまりをたゞしてすでに享保戌の年はる書寫しおはんぬよむ人手跡の裂にかゝはらずして一字もちがひなきを勝とすべし。

享保三戊戌のとし初春上旬

泰氏末流　香河景號書寫　年五十餘歳

とあり、更に其の奥に

「此一卷三手文庫本闕卷　享保九年以類本書寫補之」

とあり。內閣文庫藏の「假名日本書紀」の古寫本と略々一致す。惜むらくは第二卷を欠く。

圖版第七號參照

(4) 日本文徳實錄　古寫本　全四冊　金百二十圓

八雲軒本

此の書全じく脇坂安元舊藏本の一に屬し、体裁殆んど前掲古事記及び舊事本紀に同じけれど縱少く長く一尺を超え横少しく短く、七寸を切る點及び本文の四周に黑界を存せざる點を異にす。且、緋表紙は之れを存するも帙は存せず。書寫の年代は略々前二者と同じと思はる、全八卷を四冊に合冊す。

本文は大体に於て國史大系本の底本たる小中村清矩校する所の書に近似せるが如しと雖、差違も少なからず。例へば序文中の「從二位行右近衛大將臣藤原朝臣基經」の「從二位」は諸本かくの如くつくり、類從國史及び菅家文草の二書のみ從三位に作るに、八雲軒本は從三位と書き其の右側に朱書にて「二イ」と校合のあとを示せり。又其の前の「貞觀十三年」を十二年とし傍らに朱にて(三イ)とせるが如し。又序の終りの元慶二年十二月十三日云々の記を欠く。流布本と異る系統に屬すべきものか。可考。

圖版第六號參照

日本文德天皇實錄序

臣基經等竊惟自古人君王者莫不用天度以敍
憲章立日官而平暦數故姫漢之千餘載善惡呈
理於掌中郡翔之百許年皆明析於眼下者也
伏惟太上天皇孝治有日文思垂風夢想先皇之
起居庶幾聖主之言動去貞觀十二年詔右大臣
從三位行右近衛大將臣藤原朝臣基經中納言



第六圖　八雲軒本日本文德實錄　序

第五圖　八雲軒本舊事本紀第九卷々末奥書

貞永元年閏九月十四日重合佗本畢　判

裏書云抄畢　正議大夫兼頼在判

一見畢　通議大夫兼方在判

大永二年正月七日書寫畢

正三位卜部兼永

勅本云　抄畢　兼文

一見畢　兼方

文永七年六月十一日雨中天照大神御事抄出畢了○兼文石上神事抄了○同十二日高皇彦靈神皇産靈御事抄出了大已貴神事抄出畢○事代主神御事抄出了○建御名方神御事抄出畢○同十三日天稚彦并味耜高彦根神事抄出畢○天穗日命事抄出畢○鹿島香取事抄出了○同十四日天兒屋根命事抄出了○天太玉命事抄出畢○天鈿賣命事抄出了○十八日天思兼命事抄出了○羽明玉神事抄出畢　兼文

貞治二年二月廿日　點之不可出門者也　兼前

大永元年九月十五日書寫畢　正三位兼永

又八雲軒本には第九卷帝皇本紀の末に左の如し。

安貞二年二月十九日夜及曉更於燈下書寫之印比校畢

貞永元年閏九月十四日重合佗本畢　判　兼頼

裏書云抄畢　正議大夫兼頼在判

一見畢　通議大夫兼方在判

大永二年正月七日書寫畢　正三位卜部兼永

とあり。前田家本には全く同じ奥書を第十卷末に存し、且つ「正議大夫」の議を儀に譌る。案ずるに國史大系傳ふる所の前田家藏の安貞年間古寫本は實は安貞書寫本にあらずして、そを大永に寫せしもの或は大永本の再寫本なるべきか。八雲軒本亦此の系統に屬する事上記によつて明かなるべしと雖、間々小異を存す。學者の參稽を怠るべからざる一傳本なり。

國史上、古事記、日本書紀に次ぎて貴重なる古傳を存する「先代舊事本紀」の此の好新資料の出現は學界に貢獻する事尠少ならざるべきを信じて疑はず。

圖版第四號及び五號參照

舊事本紀　古寫本　全五冊　金五百圓

八雲軒本

八雲軒本「先代舊事本紀」十卷五冊、前掲「古事記」と同じく元脇坂安元の藏本にして体裁諸事「古事記」に仝じ四印を捺す事、緋表紙を付し絹帙に入る事、大本なる事、四周を黑界を施して半葉八行に楷書にて記する事、など皆然り。書寫の年代亦同一なるべし。

舊事本紀の舊鈔本現存するもの同じく稀少にして、國史大系に傳ふる所前田家尊經閣藏の安貞年間古寫本を以つて最古となすべきが如し。他に紅葉山文庫本船橋家本等を善本と數へ得るも、八雲軒本は尊經閣本に類似の點多し。例へば第一卷の「神代本紀」のはじめに、「天狹霧國禪月國狹霧尊」の「月」の字は諸本皆「月」に作り、前田家本と本書のみ「日」に作る。又仝じ卷の神代系紀に「二代俱生天神」の「俱」は諸本「俱」にして前田家本と本書のみ「化」に作れり。更に又第二卷末の「大日孁貴亦名天照大神」以下百二十六字は流布本に存せずして前田家本紅葉山文庫本等に存し、本書にも亦存するが如し。

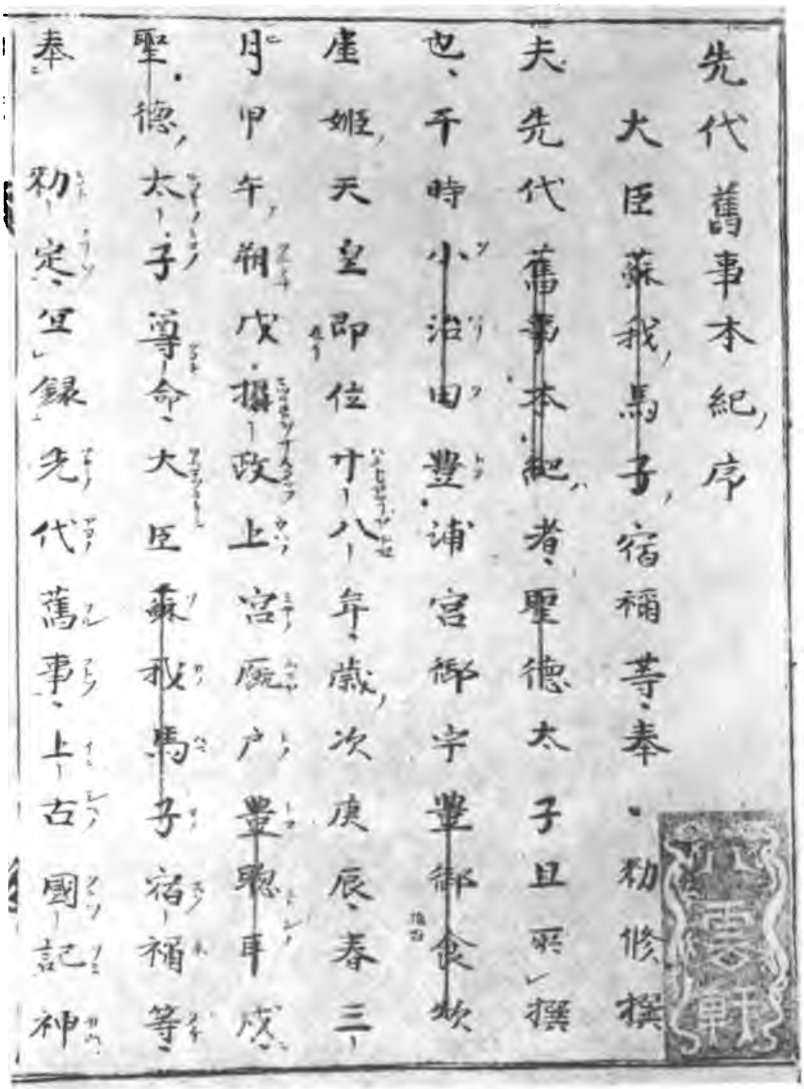
諸本各卷末に奧書なしと雖、前田家本及び八雲軒本にのみ各二個所に之れを存す。第三卷天神本紀の末の前田家本奧書左の如し。

貞永元後九月十三日
合二他本一　判
勅本云　抄畢
一見畢

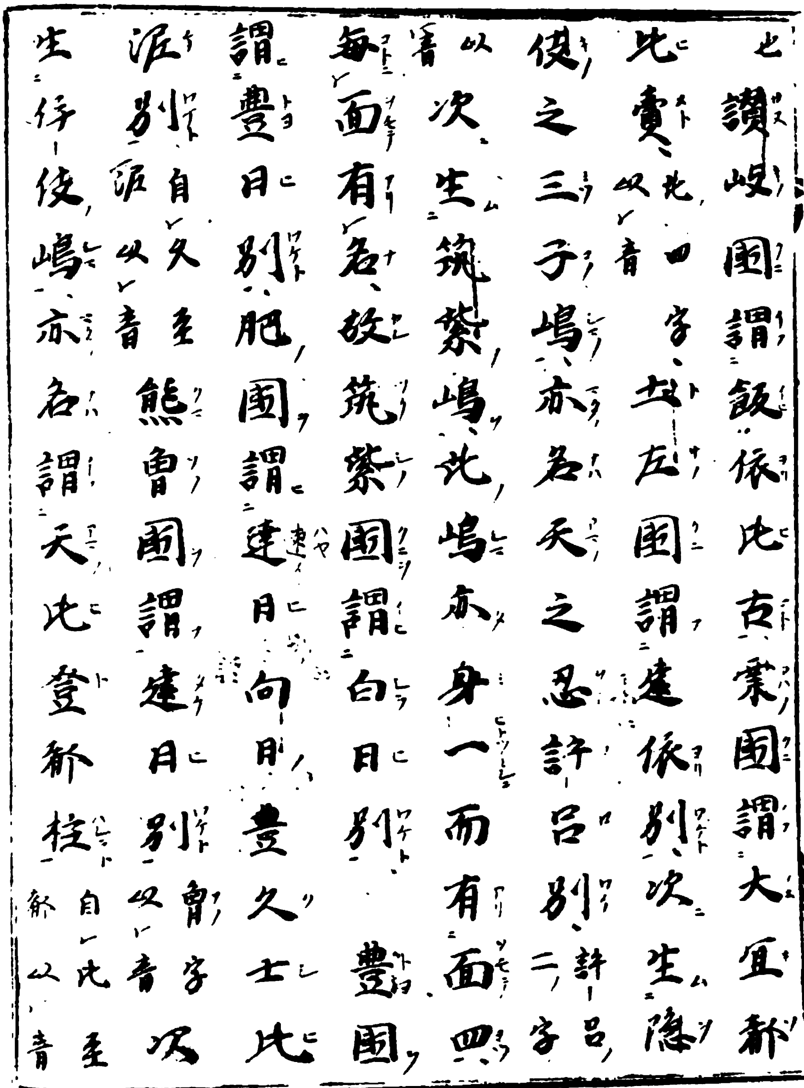
仝じ個所の八雲軒本の奧書は左の如く甚だ詳密を極めたり。

書寫畢　衆賴
貞永元後九月十三日合他本　判

(以下次頁へ)


先代舊事本紀序
大臣蘇我馬子宿禰等奉　勅修撰
夫先代舊事本紀者聖德太子且所撰
也于時小治田豐浦宮御宇豐御食炊
屋姬天皇即位卅八年歲次庚辰春三
月甲午朔戊戌攝政上宮廐戸豐聰耳
聖德太子尊命大臣蘇我馬子宿禰等
奉　勅定宜錄先代舊事上古國記神

第四圖　八雲軒本舊事本紀序


也讃岐國謂飯依比古粟國謂大宜都
比賣此四字以音土左國謂建依別次生隱
伎之三子嶋亦名天之忍許呂別許呂二字
以音次生筑紫嶋此嶋亦身一而有面四
毎面有名故筑紫國謂白日別豊國
謂豊日別肥國謂建日向日豊久士比
泥別自久至泥以音熊曾國謂建日別曾字以音次
生伊伎嶋亦名謂天比登都柱自比至都以音

第三圖 八雲軒本 古事記 第一卷内部の一部

本文は大形の楮紙を袋綴じにし、四周に黒界を施し楷書を以つて半葉八行に書す。眞名の右側に訓讀み片假名を以つて附する事甚だ多し。筆致多く謹直なり。奥書を欠くを以つて書寫の年代について明證は存せざれども紙質、訓讀の片假名中に異體のものを存する（例へばマをヽとし、ミをアとし、アをヤとするが如し）又漢字にも異體のもの多き事、脇坂安元の藏書なる事等より慶長以前の書寫たる事を信ぜんとす。所々に頭註を加へ、又日本紀、舊事記との校合あり。

本文の内容を諸本に比校して檢するに、眞福寺本、伊勢本（零本一冊）秘閣本等とそれ〴〵差違を存す。例へば上卷々首の「次國稚如浮脂而」の條の「脂」は諸本多く「脂」に作り、此の書とト部家本及び寛永版本のみ「胎」につくり「ウカベルハラゴモリ」と訓じたり。又同じ卷の中程の「與生弓矢及其天沼琴」の「沼琴」は諸本多く「沼琴」とし、諸本を對校したりと稱する國史大系本（經濟雜誌社版）も亦然りにて眞福寺本のみ「沼琴」と傳へたるが、八雲軒本は諸本と同じく沼琴と謬りたり。又八千矛の歌の件の「伊麻陀登加泥婆（イマダトカネバ）」の婆は眞福寺本に脱し、伊勢本及び此の本に存し、第二の八千矛の歌の中「迦微能美許等（カミノミコト）、怒延久佐能（ヌエクサノ）」の「怒」は眞福寺本、伊勢本共に「奴」と誤り、此の本は「怒」と正しく書したり。其の他此の種の差違一々擧ぐるの紙幅を有せざれ共、以上によつて八雲軒本が既知の諸傳本と異りたる系統に屬する古寫本にして、本文校勘上も重要なる價値を有するものなる事の一斑略々明かなるべしと信ず。

上は天地開闢の神話に始まり、下は推古天皇の御事に終る壯大にして崇高なる此の神典三卷よ、仰ぎ願はくは此の一新資料を加ふるにより稗田阿禮誦習の原姿に一字と雖もより近づけかし。

圖版第二號及び第三號參照

(2)

古事記　古寫本　全三册　金壹千貳百圓

八雲軒本

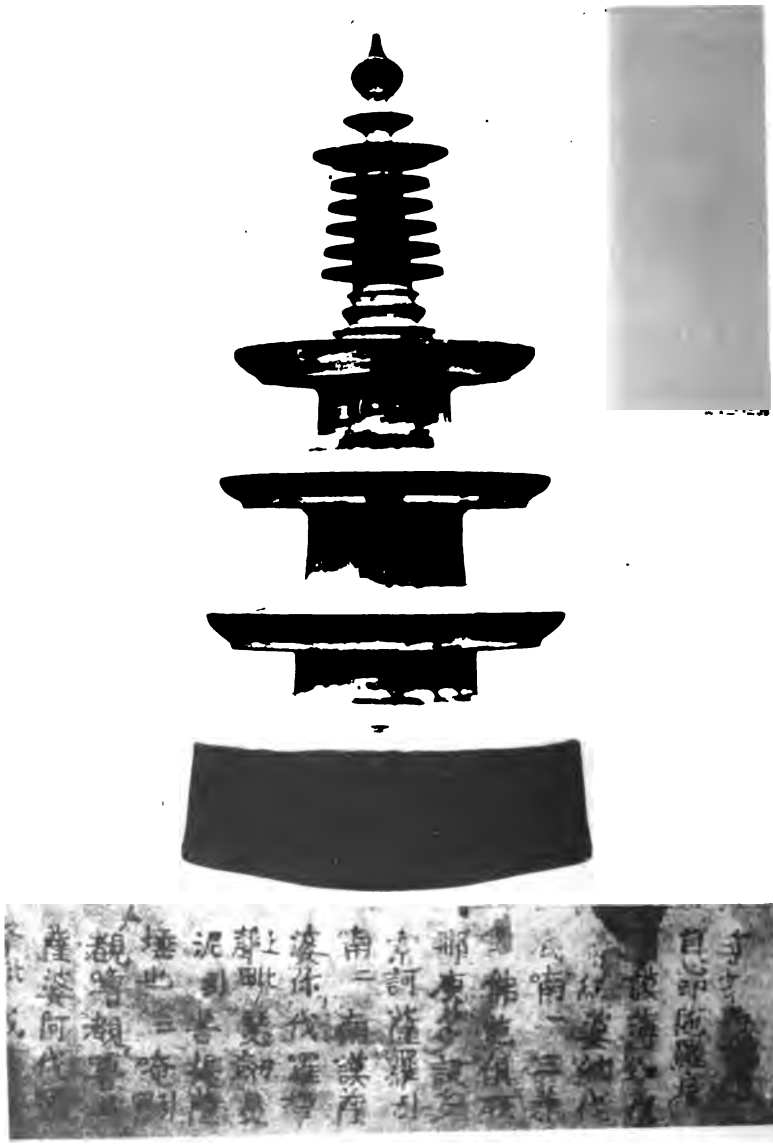
古事記は皇國第一の神典、千古不磨の寶籍たり。そは啻に最古の史籍にして兼ねて最初の國文學書たるに留らず、我が國人によつて著されし書籍の嚆矢として限りなき價値を有する一大古典たり。しかも其の寫本の現存するもの極めて稀れにして、彼の日本書紀が古く奈良朝期書寫のものをさへも現存し、寫本稀なりとさるる萬葉集の如きも平安朝期のもの數本を數へ得るに對し、古事記は鎌倉期に遡り得る寫本だも存せざるなり。其の最古の寫本として知られたるは、南北朝時代の書寫になる眞福寺本古事記三册にして夙に國寶に指定せらる。右の外、完本としては前田家に一本を藏するものの外、他は何れも慶長以後の寫本に屬し、しかも其の數僅かに十指を以つて屈し得べきが如し。玆に此の稀覯中の稀覯たる古事記の寫本の慶長以前の書寫たるべき一本の新しき發見を、我が學界に報告し得るは筆者の最も光榮とする所ならずんばあらず。

此の傳本は私に名付けて八雲軒本と云ふ。各册卷首卷尾に「八雲軒」「脇坂氏淡路守」「藤亨」「安元」の四印を捺すを以つてなり。（脇坂安元は即ち信州飯田の城主、慶長五年五月任官して淡路守を稱せし武人にして、生來文を嗜み蓄ふる所の藏書數千卷近世劈頭の大藏書家なり其藏書は今日散逸し、偶々二三の諸家に秘藏せらるゝを見る）縱約一尺。橫約七寸の大本、緋色のすぐれて見事なる表紙をつけ、更に濃綠地に黃にて文樣を織り出したる古絹の帙に入る。表紙、帙共に舊のものなるべし。

（以下次頁へ）

古事記上巻　并序

臣安萬侶言夫混元既凝氣象未效無名無為誰知其形然乾坤初分參神作造化之首陰陽斯開二靈為群品之祖所以出入幽顯日月彰於洗目浮沈海水神祇呈於滌身故太素杳冥因本教而識孕土產嶋之時元始綿邈頼先聖而察生神立人之世寔知懸鏡吐珠而



第一圖 百萬塔陀羅尼

(1) 百萬塔陀羅尼　自心印陀羅尼　一基一卷　金壹百圓

塔の高さ七寸二分、台の周圍一尺一寸。經卷は用紙麻黄紙、幅一寸九分、全長約一尺四寸。全行數三十一行各行五字詰。

日本最古の、否現存世界最古の印刷物として世に名高き百萬塔陀羅尼即ち之なり。印行は神護景雲四年、奈良朝末期に當り、彼の惠美押勝の亂平ぎしを賀し稱德天皇の發願によつて印摺し十大寺に分置せられしものゝ一部にかゝる。現今法隆寺にのみ之れを傳へ命によつて國寶に指定せられたれ共、その以前流出のもの稀に坊間に流布し、弊莊藏する所の一本亦その一に屬す。塔の形は寫眞の如く、もと全部に胡粉を塗り防腐を期せしも、長年月の經過せしため多く剝落せり。上部の九輪は櫻材を用ひ、塔身は檜材を用ふ。露盤の中心に深さ約二寸の空虚あり。刷印の陀羅尼一卷を藏し、玆に存するものは即ち自心印陀羅尼なり。一千一百年前の印刷なるを以つて版式稚拙、摺刷蕪雜なるを免れ難しと雖、なほすぐれたる當時の書風を傳へ頗る愛翫に堪えたり。

寶塔と共の内に藏する一卷、日本文化史上に永久に記念すべき此の好史料は、古香掬すべく、古雅愛すべく、書を愛する人士の机上に、床上に、限りなき輝きと榮えとを添えん。

挿繪第一號參照

第一　和漢書

念のために

此の目錄に收めました古書の寫眞版は、整版の都合上、原本の印刷面又は字面を示すを主とし、四周の余白は多く取り除きましたが、原本にはそれ〴〵相應の余白を存して居ります事を御記憶願ひたう存じます。

（原品の大さにつきましては記事中に一書毎に記してございます）

内容目次

御註文の栞

□ 記載品は性質上全部一部づつしか持ち合せて居りませんので、なるべく早く御用命を願ひます。御送本は嚴密に先着順に致します。

□ 市内の御註文は電話「小石川六四一〇番」を御利用願ひたう存じます。地方の御急ぎのものは電報で書名と御名前だけを御知らせ下されば其の書を保留して置きます。

□ 御註文はなるべく前金又は代金引換小包にして戴きたう存じます。但し圖書館、學校、官廳の捺印ある御註文は此の限りではありません。

□ 御送金は振替口座「東京一一〇二番」へ御拂ひ込み下さるのが便利で且安全で御座います。

□ 送本料は特に無料で奉仕させて戴きます。

以下につけてあるのもございますが、それには皆相當な理由も根據もあるのでございます。此の「合理的な値段付」と云ふ事については聊か卑見がございますが長くなりますから他の機會に讓る事と致します。

七、三四の例外を除いては此の目錄所收の古書の大部分は、未だどなたにも御眼にかけた事のない品のみでございます。どうか其の新鮮味を買つて戴きたう存じます

八、小店の目錄は略々此の體裁で、一年春秋二回に刊行する豫定です。臨時に出しますものは此の限りではありません。刷印の部數は多くはありませんので引續き御入用の向は御通知願ひたう存じます。

九、目錄の此の拙い試作につきまして御氣付の點をお漏らし願へましたら幸甚に存じます。

昭和八年五月二十五日

弘文莊主　反町茂雄

謹識

いては、私はどこまでも責任を持たせて戴きます。「著者自筆」と書きましたものがそうでなかつた場合、又鎌倉期の書寫としるしましたものが足利期でした場合などは、何年後に御戻し下さいましても快く御引取致します。但し書寫の年代等に關する善意の多少の見損ひ（例へば足利末期と申しましたのが織豊時代であつた場合など）は御容赦願ひたう存じます。

四、文体は時に文語体に時に口語体に致しましたのは千篇一律になるのを避ける意に基くものでございます。筆者の心の遲緩によるものではございません。

五、一書毎に一葉二葉の圖版を附しました。相當金高の書物を、目錄によつて御註文を願はうとするのですから、現品を御眼にかける事の不可能な遠隔の地の御客様には、實物の一部をせめて寫眞でゞも御覧を願つて、安心をして御註文を願ひたいと云ふ微意に外なりません。

六、所載の古書の價格は公正であり合理的でありたいと云ふ念願の下に定めました。中には百圓で買つたものを二百圓の賣値をつけ、又百五十圓で買つたものを半分

凡例

一、此の目錄は古寫本、古版本、自筆本を主とした和漢書と東洋關係及び文學稀書を中心とした洋書からなり立つ小店の在庫古書目錄でございますから、所收の書は昭和八年五月二十五日現在で全部持ち合せて居ります。

二、所載の古書については、必要なる範圍内で其の裝釘、版式、紙質、製作年代、内容汚損の程度等を記する事につとめました。此の記事は寡聞な私が平素書き留めて居ります備忘錄を整理し、多少の加筆をした程度のものですから、孟浪杜撰で到底識者の一顧にも値するものではありません。要は大体を知つて戴くよすがに留ります。數多い誤解謬記につきましては、御叱正を仰ぎたう存じます。

三、記事の内容は能ふ限り良心的でありたいと心掛けました。「賣らんかな」主義一天張の出駄羅目や、はなはだしい誇張は絶無と申し上げられると思ひます。調査も現在の私の能力で及ぶ限り正確を期しました。ですから、此の目錄の記事につ

御挨拶

一、弘文荘は和漢洋の善本の賣買を營んで居ります。微力ではございますが稀覯書、珍籍專門の特殊書肆でございますので、普通圖書は新古を問はず特別の御註文以外一切お取扱ひ致しません。

一、弘文荘は同時に書誌學、國文學を中心とした良書の出版に從事して居ります。出版致しますものについては、充分なる存在理由を持つもの以外には安んじて梓には上せぬ事に致したく存じて居ります。

一、弘文荘は古書肆として又出版者として、充分に御信賴願へるものたらうと撓まぬ努力を拂つて居ります。勤勉に、堅實に、眞面目に、と云ふのが不斷のモットーでございます。幾久しく御引立を御願ひ申し上げます。

東京・本郷　弘文莊

弘文莊待賈古書目

第一號